

博士論文 2018 年度（平成 30 年度）

地域の協働プラットフォームの設計と参加主体の相互作用に関する研究

地域の居場所における「つながり」と「活動」の創出過程



# 主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	坂倉杏介
<p>主論文題目： 地域の協働プラットフォームの設計と参加主体の相互作用に関する研究 地域の居場所における「つながり」と「活動」の創出過程</p>			
<p>地域を支えるコミュニティ形成のためには、市民の自発的・主体的な地域参加が不可欠だが、どのようにすればその動機付けが高まるかは明らかではない。地域の居場所では、多様な人が自由に出入りし交流するなかから様々なつながりと活発な活動が生まれ、地域参加のきっかけとして有効な手段の一つと考えられる。これまで十分に研究されてこなかった居場所の効果的な設計手法と参加者が自発的に行動をはじめ過程が解明されることで、効果的な地域づくりが可能となる。</p> <p>本研究では、地域の居場所を協働プラットフォームとして捉え、そこで参加者同士の相互作用の中で参加者がどのような経験をしているか、プラットフォームアーキテクトであるキーパーソンがどのような設計の工夫をしているか、という二つの視点から質的な調査を行い、参加者の相互作用を通じて居場所が形成され、つながりと活動が創出される過程を明らかにする。</p> <p>このため全国4カ所「芝の家」（東京都港区）、津屋崎ランチ（福岡県福津市）、うちの実家（新潟市）、リタクラブ（富山市）を事例に、合計40名の参加者とキーパーソンに対する聞き取り調査、参与観察によって得られたデータに基づき検証を行った。</p> <p>調査の結果、参加者の変化については、信じられる人間関係の拡大、交流によって生じる自己の探求、活動に向けた試行錯誤の3要素が重要であり、探求や試行をゆるし相互に助け合う規範を持つコミュニティが参加と活動継続の動機付けになることが明らかになった。また、協働プラットフォームの設計要件は地域の居場所にも適応できることが確かめられたが、ビジネスプラットフォームに対してコミュニティプラットフォームではキーパーソンの哲学が不可欠であり、それをデザインとして具体化することが重要であること、そして参加者コミュニティを見守り成長に伴走する内部変化や関係性のマネジメントが重要であることがわかった。</p> <p>二つの研究課題の結果から、地域の居場所において参加者とプラットフォームはどちらも動的であり、参加者の相互作用によってプラットフォームが創発されるという視点が得られた。こうした過程は個人にとってより自分らしい状態に変化していくための移行であり、その変化と相互作用の結果としてより望ましい地域が生成するという新しい地域活性の見方が得られるようになる。</p> <p>キーワード： 地域の居場所、協働プラットフォーム、社会的相互作用、コミュニティ形成、住民参加のまちづくり</p>			







博士論文

# 地域の協働プラットフォームの設計と参加主体の相互作用に関する研究 地域の居場所における「つながり」と「活動」の創出過程

坂倉杏介

目次

第1章 序論	1
1-1 研究の背景	
1-2 研究の目的	
1-3 本論文の構成	
第2章 課題の整理 : 地域の居場所の位置付けと研究フレームの設定	5
2-1 地域の居場所	
・地域コミュニティの定義	
・地域の居場所の多様性	
・前提とするコミュニティ概念	
・コミュニティ拠点の歴史的な文脈	
2-2 地域の居場所研究の動向	
・建築・福祉分野での地域の居場所研究	
・創発装置としての〈場〉と〈プラットフォーム〉	
・地域政策における〈場所〉と社会理論における〈居場所〉	
2-3 本研究の研究課題	
・協働プラットフォームとしての居場所	
・仮説分析モデルの構築	
・つながりと活動の生成過程への注目	
・効果的なプラットフォーム設計要件	
第3章 研究の方法 : 社会的創発プロセスのデータ収集と分析	25
3-1 研究方法の検討	
・社会的創発プロセス研究の視座	
・質的研究法	
・質的研究法の歴史	
・質的研究過程の5局面	
・構成主義的研究の理論的立場	
・質的研究の長所と短所	
3-2 研究の基本方針	
・現場に寄り添った研究	
・社会的相互作用論に基づく理論化	
・複数事例を通じた仮説構築型の事例研究	
・インタビューと質的データ分析	
・トライアングレーションによる現場への接続	
3-3 調査計画	
・研究戦略の全体像	

- ・フィールドへのアクセス
- ・データコレクション：聞き取り調査、参与観察、実測調査
- ・データ分析手法

## 第4章 研究対象：地域の居場所の事例 . . . . . 43

### 4-1 事例の選定

- ・「居場所型」と「活動拠点型」
- ・「地縁コミュニティ」と「テーマコミュニティ」
- ・本研究で取り上げる事例

### 4-2 事例の概要

- ・事例1 芝の家
- ・事例2 うちの実家
- ・事例3 リタクラブ
- ・事例4 津屋崎ランチ

### 4-3 芝の家の取り組み

- ・芝の家の概況
- ・居場所としての成熟過程
- ・参加者に対するアンケート調査
- ・芝の家の実践による予備的仮定と仮説分析モデル

## 第5章 調査結果1：参加主体の意識・行動変化の過程 . . . . . 67

### 5-1 調査の結果

- ・インフォーマントの情報
- ・聞き取り調査の結果
- ・コードと概念
- ・理論的飽和

### 5-2 参加者の意識・行動変化の過程

- ・抽出された概念
- ・ストーリーラインの構築
- ・事例ごとの特徴

### 5-3 つながりと活動の創出モデル

- ・参加者の変化の鍵となる概念
- ・探求と試行がゆるされる過渡的な場
- ・人生の転機としての活動参加
- ・創発を促す場の規範
- ・関係性が創発するプラットフォーム設計

## 第6章 調査結果2：プラットフォームの設計と効果 . . . . . 131

### 6-1 調査の結果

- ・調査結果のまとめ方
- ・事例1 芝の家
- ・事例2 うちの実家
- ・事例3 リタクラブ
- ・事例4 津屋崎ランチ



6-2	地域の居場所のプラットフォーム設計要件	
	・プラットフォームの5変数	
	・物理的要素と運営要素	
	・前提要因と促進要因	
	・環境要因：先行的ネットワークと外部資源のコーディネート	
	・キーパーソンの哲学	
	・見守り：内部変化のマネジメント	
	・プラットフォーム設計変数の拡張	
第7章	考察：居場所の創発とそのマネジメント	165
7-1	創発的な現象としての居場所	
	・参加者とプラットフォームがともに作りあう現象としての居場所	
	・成長のためのプラットフォーム	
7-2	プラットフォーム創発の〈マネジメント〉	
	・コミュニケーションパターンの設計：ネットワーク構造の変化による可能性の増大	
	・役割の設計：新たな役割取得による参加者の成長	
	・信頼形成メカニズム：支援されることで生じる信頼関係	
	・インセンティブ設計：コミュニティの自己生成による動機付け	
	・内部変化のマネジメント：キーパーソンの見守りによる個人の成長とプラットフォーム生成	
7-3	ビジネスプラットフォームと地域の居場所の違い	
	・地域の居場所に特有の難しさ	
	・芝の家にみる不確実性とキーパーソンの継承	
	・一般的なマネジメントの捉え方では見えにくい居場所コミュニティの形成ポイント	
7-4	つながりと活動の創出過程の捉え直し	
	・個人的経験としての居場所 トランジションの場	
	・地域における居場所 地域主体の培養器としての居場所とその課題	
第8章	結論	187
8-1	研究の結果	
8-2	研究の成果	
8-3	本研究の限界と今後の展望	
参考文献		192
謝辞		208



# 第1章 序論

## 1-1 研究の背景

安全で暮らしやすい地域社会を実現するためには、市民の支え合いや主体的な課題解決の基盤となる地域コミュニティが不可欠である。福祉コストの増大や地方財政の停滞、「平成の大合併」による区域の拡大は、市民の公的サービスの担い手としての参画や住民主体の自治組織の拡大など地域協働型の地域経営への転換を促し<sup>2</sup>、また近隣づきあいの希薄化や個人主義化に伴う社会的孤立、児童虐待や孤立死の増加、地域の災害対応力の低下といった問題は、市民同士のネットワークや互助的な関係の（再）構築、すなわち社会関係資本（ソーシャルキャピタル）の培養を通じた地域再生の必要性を明るみに出している<sup>3</sup>。本格的な少子高齢社会に向かい、大幅な経済成長の見込めない定常化社会を迎えつつある現在、市民同士のつながりを基盤に創造される新しい地域社会像が求められているとあってよい。

こうした現状を背景に、小規模多機能型の住民自治組織や地域包括ケアシステムの構築など、国や自治体によるコミュニティ組織の拡充が進められている。また、住民参加型による基本計画の策定や地域活動の担い手育成など、行政と市民の協働を広げる取り組みも多く行われるようになった。

しかし、政策的期待がひろがる一方、新たな地域コミュニティが形成されていく過程を、地域に暮らす市民一人ひとりのミクロな視点から想像するならば、他人と新しい関係を結んだり、地域の住民活動に参加したりするためには、それぞれに異なる内的な動機付けが不可欠であると考えられる。総務省「コミュニティ研究会中間とりまとめ」でも指摘されているとおり、住民の組織化や地縁団体への経済的支援だけではなく、地域への参加意欲をかきたてる「ドライビング・フォース」<sup>4</sup>が必要なのである。ライフスタイルや価値観が多様化している現在、地域に参加する動機は一様ではないはずである。そのなかで、地域の多様な関係性の増加する状況をどのように生み出すことができるか、その方法論が問われているとあってよい。これまでの

---

<sup>1</sup> 「コミュニティ」は多義的な概念だが（Hillery1955、Delanty 2003）、ここでは、MacIver（1917）による地域生活の基礎的共同性（コミュニティ）とそれを基盤とする多様なネットワーク（アソシエーション）が共存し相互に関係する状態の全体を「地域コミュニティ」と捉え、これを、行政を含めた日常的な互惠関係の動的なネットワークの集積（柴山 2009）かつ人間の生活の基本的必要であるという視点から考察する。したがって、コミュニティの「形成」は、地域活動の諸団体の組織化や伝統的共同性への回帰ではなく、社会関係資本の増加に資する変化全般を言う。また、ネットワークコミュニティなどの区別の必要から、地域を縁にしたコミュニティを「地域コミュニティ」と表記する。さらに、本論では地域の居場所を考察対象として取り上げるが、こうした特定の拠点に参加する来場者や関係者のネットワークを「居場所のコミュニティ」と呼ぶ。

<sup>2</sup> 総務省「地方公共団体における行政改革推進のための新たな指針の策定について」、2005年。

<sup>3</sup> 内閣府「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書」、内閣府経済社会総合研究所、2005年、<http://www.esri.go.jp/jp/archive/hou/hou020/hou015.html>（閲覧日：2012年4月19日）

<sup>4</sup> 総務省「コミュニティ研究会中間とりまとめ」、2007年。

地域社会の研究では、どのようにして新たな共同性を地域に育てていくかという方策については答えがだされていない<sup>5</sup>。

こうした個人レベルのソーシャルキャピタルの増加を促す仕組みとして、「ふれあいの居場所<sup>6</sup>」、「コミュニティカフェ<sup>7</sup>」、「地域の茶の間<sup>8</sup>」、「まちの縁側<sup>9</sup>」などと呼ばれる地域コミュニティの拠点（ここでは「地域の居場所」と総称する）は注目に値する。全国で自然発生的に増加しているこうした地域の居場所の多くは、市民の手で運営されている。高齢者の介護予防や生き甲斐づくり、子育て支援や青少年の学習・就労支援、住民同士のつながり形成、地域活性化など、目的や形態は多様だが、共通するのは、様々な人が気軽に出入りし自由に交流できる小規模・多機能な空間である。非常設型の居場所、社会福祉協議会のサロン事業を含めると、その総数は全国で数万件に上るともいわれ、しかも開設件数は増加傾向にある（大分大学福祉科学研究センター 2011）。空間的な仕組みを通じて市民の自発的創発を生み出すこうした拠点は、自治体やNPOの協働の仕組みとして、また公的サービスを補完する高齢者の生き甲斐づくり<sup>10</sup>や地域の支え合い活動の基盤として期待されている。

地域の居場所では、地域の多様な人々が集まり、そこから様々なレベルのつながりが形成されている。さらに、住民が主体的に課題解決に取り組む拠点として機能しているケースも多い。すなわち、市民同士の自発的つながりと主体的活動を生み出し、地域にソーシャルキャピタルを蓄積していく具体的な装置として機能しているのである。地域の居場所は、政策的につくられる公共施設や住民自治組織ではないが、多様な人々の個人的動機からはじまる地域参加の機会であるといつてよい。

市民同士のつながりを基盤にした新しい地域社会を創出するためには、多様な市民のつながりと活動を誘発する地域の居場所のような仕組みを地域社会に増やしていく必要がある。しかし、地域の居場所でどのようにつながりと活動が生まれるのか、そのメカニズムはまだ十分に明らかになっていない。地域の居場所の参加者は、そもそもどのような経緯で居場所に出会ったのだろうか。そして、どのように他者との関係をつくり、どのようなきっかけで自分らしい活動をはじめたのだろうか。こうした参加主体の主観的な体験と相互作用の具体的な過程の解明が求められているのである。

---

<sup>5</sup> 田中重好『地域から生まれる公共性 公共性と共同性の交点』ミネルヴァ書房、2010年、86頁。

<sup>6</sup> さわやか福祉財団による総称。

<sup>7</sup> 長寿社会文化協会による総称。

<sup>8</sup> 新潟市の河田瑠子によって創始され、新潟県、新潟市社会福祉協議会の事業として展開している。

<sup>9</sup> 丹羽邦子による「まちの縁側クニハウス」（名古屋市）を契機に、「つながる KYOTO プロジェクト」、浜松市市民協働センター、NPO 法人まちの縁側育み隊などが展開されている。

<sup>10</sup> 内閣府『平成 22 年版高齢社会白書』、佐伯印刷、2010年、68・70 頁。

## 1-2 研究の目的

本研究では、地域の居場所を、地域のソーシャルキャピタルを醸成する具体的な空間装置と位置づけ、そこで市民同士の自発的なつながりと主体的な活動が生じる過程を分析し、地域の居場所を設計・運営するための方法論を明らかにする。

地域を支えるコミュニティ形成のためには、地域の担い手の増加、すなわち個人の自発的・主体的な地域参加が不可欠だが、どのようにすればその動機付けが高まるかは明らかではない。地域の居場所では、多様な人が自由に入出入りし交流するなかから様々なつながりと活発な活動が生まれており、地域参加のきっかけとして有効な手段の一つと考えられる。しかし、地域の居場所の必要性と有効性についての一般的な認知はひろがり、実態調査も進んでいるものの、それが実際にどのようなメカニズムで機能しているのかは、あいまいな印象論にとどまっているのが現状である。また、地域の居場所を効果的に運営するためにはどのような点に配慮すべきなのかについても、実践者の体験談や個人的ノウハウが語られることが多い。これまで十分に研究されてこなかった居場所の効果的な設計手法と参加者が自発的に行動をはじめ過程が解明されることで、効果的な地域づくりが可能となると考えられる。

そこで本研究は、地域の居場所を「協働プラットフォーム」(國領他 2011) と捉え、そこで参加者<sup>11</sup>同士の相互作用<sup>12</sup>の中で参加者がどのような経験をしているか、プラットフォームアーキテクトであるキーパーソンがどのような設計の工夫をしているか、という二つの視点から質的な調査を行い、つながりと活動が創出<sup>13</sup>される過程を参加者の相互作用に着目して明らかにする。研究課題は以下の通りである。

### 研究課題 1 地域の居場所における参加者の「つながり」と「活動」の生成過程

参加者は、地域の居場所に参加することで、どのように意識や行動を変化させていくのか。主体的な活動をはじめると同時に、他者とのどのような出会いがあり、それによって自己概念や思考がどのように変化したのか、地域の居場所における他者との社会的相互作用に注目して分析する。

### 研究課題 2 つながりと活動を創出するためのプラットフォームの設計要件

参加者が安心して他の参加者と関わり、信頼関係をひろげ、新たな活動を起こす場をどのようにつくることができるか。地域協働の場づくりは、キーパーソンの暗黙知に頼ることが多い。

---

<sup>11</sup> 参加者とは、地域の居場所を訪れる人で、居場所を最初に立ち上げたキーパーソン以外の関係者・利用者という範囲で用いる。いわゆる社会参加とされるボランティアや市民活動(武川 1997)のような形で居場所のスタッフや地域活動を行う人だけではなく、場を利用するだけの人も含める。

<sup>12</sup> 相互作用については第3章で詳述するが、参加者のコミュニケーションの有無や量だけではなく、相互に関わり合うことで意味を見出したり、それを通じて意識や行動を変えたりしていく一連の関係を指す。

<sup>13</sup> 上記の社会構成主義的な相互作用の視点で、ここではつながりを顔見知りや知人が増えていく主観的な経験として見ていく。活動の創出とは、参加者の関係変化や意識変容の結果、それ以前にはなかった定期的な行動や地域活動をはじめたり、新しい事業を始めたという行動変容全般を指す。

プラットフォーム設計の視点から、キーパーソンの思想や無意識的なふるまいを含めた設計要件を抽出する。

本研究は、協働プラットフォームの設計に関する研究である。協働プラットフォーム設計については多様な分野での理論構築や事例研究が進んでいるが、本研究の新規性は、それを地域の交流拠点に応用し、ユーザーへの詳細なインタビューによって、実証的にその設計要件を検証する点にある。また本研究を通じた実務的な貢献は、仮説構築型の研究として、地域の担い手養成という社会課題に対して、市民の主体性獲得がどのように地域へ接続されるかという過程とそれを生み出す協働プラットフォームの視点からの設計論を提示することである。これによって、多様な地域の取り組みに応用可能な知見を提供することができると考えられる。

本研究では、地域の居場所という協働プラットフォームの分析にあたり、そこで生じている相互作用に着目する。ここでは具体的な施設を事例として取り上げるが、通常地域の施設（たとえば喫茶店や図書館）が、特定のサービスを提供することを目的としているのに対して、地域の居場所は、居場所というサービス提供ではなく、参加者同士の相互作用の結果として、それぞれの参加者にとっての居場所となっていると考えられる。主体間の相互作用によって創発が起きることで、主体と場が創出されるということである。このように見ると、従来の施設計画や課題解決型のまちづくりの設計論から居場所の創出プロセスを分析することはできない。協働プラットフォームにおける社会的創発プロセスと捉えることで地域の居場所の本質的な創出過程を解明することが可能となる。

### 1-3 本論文の構成

第 1 章序論では、研究の背景、目的を示す。第 2 章では課題の整理として本研究が対象とする地域の居場所の現状を整理し、コミュニティと居場所に関する研究フレームの設定を行う。つづく第 3 章では、つながりと活動を創発するプラットフォーム設計に関する研究方法について、社会的創発プロセス研究の視座、質的研究方法の概略を整理し、本研究にふさわしい研究方法を述べる。第 4 章では、本研究の対象として取り上げる地域コミュニティ居場所の事例の概要を示す。また事例選定のための類型、特に先行的に実施した「芝の家」の取り組みについて詳細に事例を述べる。第 5 章では、研究課題 1 の調査結果を示し、参加主体の意識・行動変化の過程について報告する。第 6 章は調査課題 2 の結果を提示しプラットフォームの設計と効果について明らかにする。第 7 章では、第 5 章・6 章の結果を受けて考察を行い、つながりと活動の創出過程に関して総合的な分析を試みる。第 8 章では、本研究の結論を示すとともに、今後に向けた展望を議論する。

## 第2章 課題の整理：地域の居場所の位置付けと研究フレームの設定

### 2-1 地域の居場所

#### 地域の居場所の定義

ここでは、本研究で扱う「地域の居場所」の定義を確認する。地域の居場所は、「ふれあいの居場所」、「コミュニティカフェ」、「地域の茶の間」、「まちの縁側」など様々な呼び方をされる、多様な人が気軽に出入りし自由に交流できる地域拠点の総称である。後に整理するが、いくつかの団体によって異なる呼び名が提唱され、それぞれに少しずつ異なった特徴に力点が置かれているため、本論文では特定の意味に偏らない「地域の居場所」という呼び方を採用する。こうした地域の交流拠点は、大分大学福祉科学研究センターが2011年に行った全国のコミュニティカフェに対するアンケート調査によれば、2000年代以降に開設された事例が多く、さらに年々増加しているという。

地域の居場所というと、高齢者のサロンや障害者の地域作業所のように、スタッフが参加者をケアし、またメンバーがある程度固定しているために、参加者が安心して過ごすことのできる居場所も含まれるが、本研究では（そうした拠点も含めながらも）、「多様な人々が出会い、関わりあうことで、自分らしく生きることができるようになり、さらにその交流から新しい活動が生み出されていく場」という、より活動的な側面を特に重要視する。本研究でとりあげる地域の居場所を定義するため、まずは、これまで様々な団体が提唱してきた定義を確認する。

2008年ごろから「ふれあいの居場所」という名称で地域の居場所づくりを支援してきた公益財団法人さわやか福祉財団は、「ふれあいの居場所」を「地域に住む多世代の人々が自由に参加でき、主体的に関わることにより、自分を生かしながら過ごせる場所。そこでのふれあいが、地域で助け合うきっかけにつながる場所<sup>14</sup>」としている。理事長である堀田力は、個人の努力だけで幸せを掴み取る時代から、共助によって得られる幸福感が希求される社会への移行のなか、「ふれあいといきがいを生み出す場所」（堀田 2014）と居場所を表現している。単に居心地がよいだけでなく、「ふれあい」が「いきがい」につながっていく交流の活動的な側面に着目した定義といえる。

全国社会福祉協議会が発行する「ふれあい・いきいきサロン」のガイドブック『あなたもまちもいきいき！『ふれあい・いきいきサロン』のすすめ～寝たきり・痴呆予防にも～』<sup>15</sup>では、

<sup>14</sup> さわやか福祉財団「ふれあいの居場所とは」、

<http://www.sawayakazaidan.or.jp/ibasyo/about/index.html>（閲覧日：2018年4月5日）

<sup>15</sup> 全国社会福祉協議会『あなたもまちもいきいき！『ふれあい・いきいきサロン』のすすめ～寝たきり・痴呆予防にも～』、2000年。

サロンが、高齢者の会話や外出機会を提供し、生活習慣の改善を通じて、寝たきり、痴呆を予防するという効果に重きが置かれている。人に触れ、行動する社会参加が心身の健康維持に有効であるという立場が示されているが、居場所が新しい活動の創出拠点になりうるというところまでは視野に入っていない。

公益社団法人長寿社会文化協会は、全国コミュニティカフェ・ネットワークを主宰し、コミュニティカフェの普及に取り組むとともに、運営者の情報交流やネットワークづくりを行っている。同団体のウェブサイトでは、コミュニティカフェを「地域社会の中で『たまり場』『居場所』になっているところの総称」としており、比較的広く定義付けている。実際、同財団が調査したリストには、高齢者のサロンやデイサービスのほか、オーガニックカフェや公共施設なども混在している。広範な事例をコミュニティカフェとすることで多様性を認める一方で、商業ベースの飲食店や公共サービスとの境界が曖昧である。

このように、全国に多様な形で点在する交流空間のうち、どのような拠点を対象とするかという範囲は、そのムーブメントを支援する団体ごとに微妙に異なる。デイサービスや地域作業所といった専門サービスを基盤にそれをコミュニティに開いていくタイプから、オーガニックカフェ、バーなど、飲食店という形態をベースに利用客のサードプレイスとして地域の交流機会になっている事例まであり、公共と民間の間の多様な共の空間が存在するということがわかる。

日本建築学会編『まちの居場所 まちの居場所をみつける／つくる』<sup>16</sup>では、高齢福祉施設や若者の居場所のほか、団地の集会室や公園といったさらに幅広い居場所の事例を取り上げている。多くの事例のなかから、まちの居場所の 11 の特徴を次のとおり挙げている。1) 訪れやすいこと、2) 多様な過ごし方ができること、3) 多機能であること、4) 多様な人の多様な活動に触れられること、5) 自分らしく居られること、6) 社会的関係が作り出されること、7) 参加できる場があること、8) キーパーソンがいること、9) 柔軟であること、10) 地域との接点をもたらされること、11) 物語が蓄積されていること、である。また、従来の公共施設が一定の公共サービスを平等に分配する「official」な性格を基礎としているのに対して、居場所は、地域住民が主体的に設立し自分たちが必要とする公共の場を運営者が自ら作り出すという性格の違いがあるという。居場所は、広域的にサービス提供は行わないかわりに、自分たちに共通する関心や課題（「common」）の領域で、利用の仕方や運営方法の柔軟さ（「open」）が確保されている場ということである（図 2-1）<sup>17</sup>。完全には私的でも公的でもなく、ゆるやかな運営がなされており、それが地域の活動や土地の文化に結びついているような場所が、従来の施設計画では実現しにくい草の根の市民活動によって実現されている現象として位置づけられている。

<sup>16</sup> 日本建築学会編『まちの居場所—まちの居場所をみつける／つくる』、東洋書店、2010年、180-194頁。

<sup>17</sup> 前掲書、175頁。



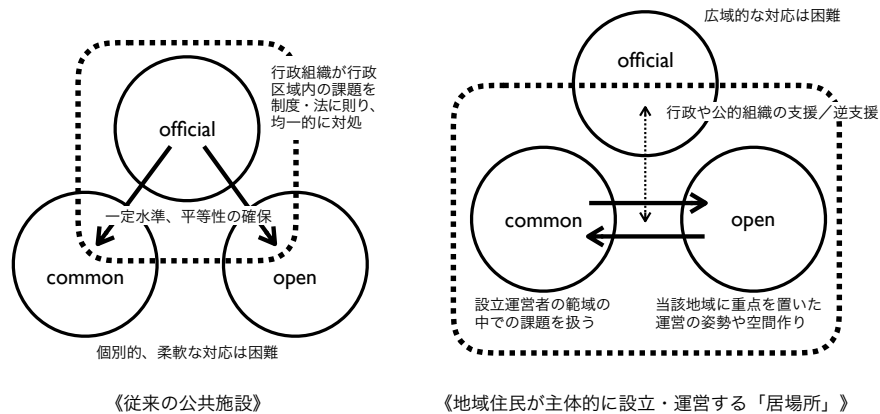


図 2-1 従来 of 公共施設と住民主体 of 「居場所」 of の違い

(日本建築学会編『まち of 居場所—まち of 居場所をみつける/つくる』を参考に筆者作成)

以上 of ような議論を踏まえて、ここでは地域 of 居場所を、対象 or 提供サービス of 非限定性・柔軟性、そこに集った人 by よってつくられる共同性、また新しい社会 or 地域をつくっていく創造性を本質的な特徴であると考へ、以下 of ような特徴を持つ拠点と定義する。すなわち、1) 様々な人が気軽に出入りし自由に交流できる小規模・多機能な空間的装置であり、2) そこでは、多様な人々との出会い or 関わりあいを通じて、心身 of 健康 or 自分らしい生き方、地域とのつながりが得られる。3) さらに、そこでの相互作用から新しい活動が生み出されていく社会的創発 of 場である。換言すれば、つながり or 活動を創発する地域 of コミュニケーション基盤となっている居場所とすることができる。

### 地域 of 居場所 of 多様性

前節では、本研究で対象とする地域 of 居場所を定義付けた。だが、「ふれあいの居場所」、「コミュニティカフェ」、「地域 of 茶の間」、「まち of 縁側」などと呼ばれる交流拠点には、実際にどのようなバリエーションがあるのだろうか。後述するように本研究では4つの事例を対象に調査を行うが、その事例選択 of 前提として、ここで地域 of 居場所がいかに多様なあり方を取りうるかを整理しておく。

田所 (2014) は、関東 of コミュニティカフェ 111 件に対する調査から、そのタイプ (活動分野) が、子育て支援、高齢者 of 交流・福祉、コミュニティスペース、まちづくり、ギャラリーカフェ、若者・子ども of 居場所、障がい者福祉、スロウカフェ、その他 of 順に多いとしている。

それぞれ of タイプ of 事例をあげると<sup>18</sup>、子育て支援 of 場は、親子で集える民設民営 of 居場所として、例えば、代表的な事例としてせたがや子育てネットが運営する「コミュニティカフェぶりっじ」(東京都世田谷区) などがあるほか、一時預かりなども含む公設 of 多様な子育て支援施

<sup>18</sup> 田所 (2014) では具体的なサンプル事例は示されていないため、ここでは各タイプ of 代表例を列挙している。

設が含まれる。厚生労働省の支援で地域子育て支援拠点事業として実施される子育てひろばも多い。高齢者の交流・福祉は、社会福祉協議会のふれあい・いきいきサロン事業として行われる非常設型の高齢者サロンを中心に、デイサービスを地域にひらいて運営している「地域の寄り合い所また明日」（東京都小金井市）、健康な食の提供するレストラン型の居場所「福祉亭」（東京都多摩市）といった拠点がある。コミュニティスペースは、子育て層や子ども、または高齢者といった世代に特化しない地域の多世代の住民に開かれた場で、自宅を海保して地域の人々の多様な活動拠点として運営されている「シェア奥沢」（東京都世田谷区）、広くコミュニティにひらかれたカフェ「クルミドコーヒー」（東京都国分寺市）など多様な形態の拠点が含まれている。まちづくりとして分類されているのは、福祉やコミュニティというより都市整備や商店街活性化などの流れのなかで設立された場で、代表例としては「港南台タウンカフェ」（横浜市港南区）、「ほっとカフェ中川」（横浜市都筑区）などがある。

こうした区分は、典型的な類型に関するいくつかのパターンを示すものではあるが、この分類では、対象者、活動テーマ、運営形態といった区分の仕方が混在しており、地域の居場所の多様性全体をカバーしているとは言い難い。

そこで、前述の『まちの居場所』で示されている設立主体、主なサービス内容、立地情報、建物情報の4点の分類に加えて、ここでは次の9つの点から、それぞれにどのようなバリエーションがあるかを挙げる。9つの点とは、1) 対象者、2) テーマ、3) 施設用途、4) 活動内容、5) 設立主体、6) 運営形態、7) 立地、8) 対象地域の範囲、9) 建物である。地域の居場所は、対象者やテーマの広さだけでなく、施設用途や運営形態なども多種多様であり、それが地域の居場所に特有の多様なありようをもたらす要因になっている。

1) 対象者：高齢者、子育てする親、障害者、若者、子どもなど様々である。若者や子どもといっても、ひきこもりの若者、居場所のない中高生、家庭に問題をかかえる小学生、障害児など対象が限定された居場所もある。特定の障害や病気を共有する自助グループ、介護などケアする人が対象の活動もある。また地域をテーマにした活動では、地域の多世代の住民全般が対象であったり、地縁団体やNPOといったまちづくり関係者がメインの場合もあつたりする。

2) テーマ：対象者と重なるが、テーマについても、医療福祉、教育、地域活性化、地域コミュニティ形成から、創業支援などのビジネスやソーシャルイノベーションまで多様である。より詳細なテーマ設定をしている事例としては、ホームレスや生活困窮者支援など貧困問題、障害者の就労、国際交流や外国人支援、外国人家庭の教育、母子家庭や子育て中の母親の就業支援などが挙げられる。また、コミュニティづくりを軸にしながら、多様なサブテーマによる活動が共存している場合もある。

3) 施設用途：その拠点の主な施設用途である。カフェやレストランの形態をとる飲食店、交流が目的のサロンやラウンジ空間、コワーキングスペースやオフィス、ギャラリーやレンタルスペースといったフリースペースを基本機能とする事例がある。多くは、いずれかを基本機能として他の用途としても使えるような運営をしている。飲食店には、オーガニックカフェや手

づくりカフェといったテーマを絞り込んだ施設タイプもある。また、グループホーム、デイサービス、助産施設といった専門サービスが中心で、そこに多様な人の自由な出入りが生まれているという空間もある。公園や菜園といった屋外のスペースがコミュニティの居場所になる場合もある。

4) 活動内容：その拠点で行われる活動である。対価を払って喫茶、食事をするという活動は、飲食店ベースの拠点には多く見られる。また、食べるという活動でも、持ち寄りで食事をしたりと一緒に料理をして食卓を囲んだりというケースもある。各種のイベントも多様である。発表会やワークショップ、創作や料理の教室、ビジネスや教養のセミナーなどがある。また創作を共にする活動、手作りの小物の販売や作品の展示会などが行われる拠点も多い。介護、学習などの支援や、生活上のなんでも相談といった支援を行っている場もある。

5) 設立主体：NPO、任意団体、個人、株式会社、地縁組織など多様である。行政が事業として行っているケースや、それをNPOなどの運営組織が受託しているというケースもある。公設民営で運営されている拠点もある。また、大学など教育機関との連携によって運営されていることもある。

6) 運営形態：飲食などによって収益を得ている事業型運営、補助金や寄付金などによる寄付型運営、行政が運営費を負担する公共サービス型運営などがある。収入は、補助金のほかにも、来場者から利用料、会費などでまかなわれることが多い。また、たとえばNPOなどの設立主体が管理する施設の一角で、本業を補完する形でカフェが開かれているようなケースもある。運営形態は、どのようなビジネスモデルで継続的に運営していくかという工夫であり、各主体の活動内容や経営環境によって多様な手段が取られている。

7) 立地：どこにあるかという条件である。大都市の中心部、地方都市の市街地、大都市郊外、住宅地、商店街、ニュータウン・団地、農村、過疎地、被災地など、立地によって居場所の意味や運営条件が変化する。

8) 対象地域の範囲：どの範囲から主に来場者が集まるかという対象地域の範囲も、様々なスケールがある。人口密度の高い地域で近隣の高齢者を対象にしていたり、特定の地域のまちづくりを対象としていたりする場合は比較的狭い範囲からの来場者が多い。一方、テーマ型の居場所の場合は県内全域から来場者が集まるというケースもある。小規模の地縁的関係を重視する場合は地域づくりに近くなり、テーマが明確になるほど対象地域は県レベルなどに拡大する。

9) 建物：どのような建物を利用しているかという点も様々なケースが挙げられる。『まちの居場所』では、利用している建物の種類として住宅・集合住宅、公共施設・ビル、店舗に分けている。また、建て方について、その居場所のために仮設・新築する場合もあれば、既存の住居や店舗を転用するケースもある。また、公園・屋外スペースが活動の場になっていることもある。

以上のように、地域の居場所の取り得る形態は限りなくあるとあってよい。本研究で主に着目するのは、このうち、つながりや活動を創発する地域の「協働プラットフォーム」となって

いる居場所とする。

### コミュニティ拠点の歴史的な文脈

こうした多様な形態の地域の居場所は 2000 年代以降にその数と多様性を増しているが、地域コミュニティの持続的な運営のために機能する地域の集会・交流拠点は、会所、ムラヤ、茶堂、若者宿などといった形で、近世以前から様々な形で存在してきた。明治以降は、そうした近代以前の集会施設の再編をともしないながら、さらに多様な形態が生まれるようになり、欧米のクラブを模倣した倶楽部建築、地方改良運動のなかで広まった農村公会堂、地域青年会の活動場所としての青年集会所、増加する都市問題の解消のために整備された市民館・隣保館、昭和初期の経済更生運動の一環である全村学校や塾風教育などが広がった<sup>19</sup>。各集落の自治のために地域ごとに必要に応じて確保されていた地域拠点が、近代国家としての統合の流れや近代化に伴う様々な社会問題への対応のなかで徐々にトップダウンの政策に代替されてきたのである。

戦後以降に整備された地域集会施設の代表的なものに、公民館がある。公民館は、戦後民主主義の復活と定着に向けた公民教育の必要性から生まれた。文部省社会教育局公民教育課長であった寺中作雄の発案によって 1946 年から整備が始まり、住民が文化的教養を身につけ主体的に地域を運営していく拠点となることが想定された。1949 年に制定された社会教育法のなかに位置づけられ、市町村が設置することが明記された。地域のニーズにあわせて多様な形態が許されており、1958 年には 88% の市町村に公民館が設置され、34,650 館にのぼるようになった。

全国的にさらに都市化の進んだ 1960～70 年代になると、国民生活審議会による答申（1969）などを経て、各自治体の条例に根拠づけられたコミュニティセンターが設置されるようになり、新しい公民館像の見直しが起こる。1974 年に提唱された「三多摩テーゼ」<sup>20</sup>によれば、公民館の役割は、自由なたまり場、集団活動の拠点、「私の大学」、文化創造のひろばの 4 つであり、社会教育機能に加えて「たまり場」、「活動拠点」としての役割が強調されることになる。また現在では、地域福祉センターや市民活動支援センターといった新しい機能を持つ地域コミュニティ拠点も増加しており、公民館の使命や運営、地域のなかでの役割分担については試行錯誤が続いているとあってよい。

公民館の社会教育機能よりもコミュニティ機能が求められるようになってきた背景には、高度経済成長期を通じた個人主義化、合理主義化のなかで、地域の交流を生み出す場がなくなってきたこと、地方分権と財政の逼迫が進むなか地域自治のための組織や担い手が必要とされてきたということがコミュニティ政策の視点から挙げられる。1970 年代から整備の進んだコミュニティ政策は、コミュニティ街区の整備、コミュニティセンターの設置、住民団体の設立という「三点セット」で進められ、全国の地域自治という面でのコミュニティ機能の一定の底上げ

<sup>19</sup> 日本公民館学会編『公民館・コミュニティ施設ハンドブック』、エイデル研究所、2006 年、71-73 頁。

<sup>20</sup> 東京都公民館資料作成委員会編「新しい公民館像をめざして」、福尾武彦、千野陽一編『公民館入門』、日本図書センター、2001 年。

に寄与したといえるが、しかし、その後 2000 年代以降、草の根で立ち上げられる地域の居場所の増加は、こうした官製のコミュニティスペースではカバーできないニーズが生じてきたことを示しているといえるだろう。

広井 (2010) は、「地域における拠点的な意味をもち、人々が気軽に集まりそこで様々なコミュニケーションや交流が生まれるような場所」を「コミュニティの中心」と呼び、地域コミュニティの形成と持続に不可欠だとしている。こうした機能はこれまで、神社・お寺などの宗教施設、学校など教育機関、市場や商店街、自然関係、福祉・医療関係施設などが果たしてきたが、今後ますます必要となる福祉を中心にした定常化時代の地域づくりのために、これからますますその役割が期待されるはずだという。広井の主張で興味深いのは、「コミュニティの中心」が、地域内に閉じるのではなく、外部との交流の契機となることによって、特定の地域の縁を作り出す機能を果たしていたという点である。たとえば宗教施設はこの世ではい彼岸や異世界との、学校は新しい知識との、市場は他の共同体や文化との、自然関係は人間社会の外にある自然環境との、福祉・医療関連施設は病や障害というある種の非日常性との接点であり、そうした外部へ開かれた「窓」であることが、地域コミュニティの拠点として不可欠だという。ここで重要なのは、現代の公民館やコミュニティセンターのように必ずしも共同体の結束のために明示的につくられた拠点ではなく、寺や学校がその役を果たしていたということである。久田 (2010) は、現代のコミュニティカフェと中国四国地方に残る茶堂の類似性を比較している。茶堂とは、集落の境界に置かれた小さなお堂であり、そこで集落の者が交代で旅人にお茶を接待したり、行商の者が市を立てたりということが行われ外部との接点を果たすとともに、集落内の冠婚葬祭など宗教的な儀礼の場として彼岸とのつながりの場でもあった。こうした完全に共同体の内部ではなく、外部と交わる縁側のような機能を果たす空間装置のほかにも、都市部のコミュニティにおける井戸端や銭湯などインフォーマルなつながりの維持のための空間が都市や集落には埋め込まれており、結や講といった互助のしくみ、祭りや葬儀の風習などと織り合わされて地域社会が構成されていたといえる。

2000 年代以降の地域の居場所の増加は、公的サービスでは埋められないニーズを市民の手で作りあげようという動きであるといえてよい。こうした動きは、2000 年代になって様々な試行錯誤が始まり、2010 年代に本格的に広がったと言える。図 2-2 は、1990 年前後から 2010 年代にかけての地域の居場所の動向に影響を与えたと考えられる事例を時系列にあげたものである。拠点の形態として、カフェ型、活動拠点型、居場所型、福祉施設型と 4 つの類型にわけている。ここでは必ずしも包括的にすべての事例を取り上げてはいないが、最近 30 年ほどの大きな流れについては整理できると考えられる。

1990 年以前から 90 年代にかけて、青少年支援、高齢者福祉、まちづくり分野と異なる領域で萌芽的な取り組みがはじまった。青少年分野では、子どもの急増や受験競争の加熱などを背景に、校内暴力やいじめの問題が深刻化し登校拒否児童の問題が顕在化しはじめた 80 年代中頃から、フリースクールや子どもの居場所づくりが始まった。学校教育制度では解消できない子

どもたちの居場所を、父母や地域が中心になってつくってきた場である。その草分け的存在である「東京シュール」のスタートは、1985年である。公共施設のなかにも、中高校生と一緒に計画し運営する児童青少年センター「ゆう杉並」90年代半ばに設立される。「ゆう杉並」は、中高生の意見を取り入れた運営や自由な交流の場であるロビースペースを持つことが特徴で、利用する人がつくるという自主性と自由な居場所という要素を持つ施設である。地域の中での居場所的な場としては、1999年に名古屋市で開設された「クニハウス」が代表的な事例といえる。

高齢者分野では、90年代に全国社会福祉協議会がふれあい・いきいきサロンを提唱、高齢者の居場所やいきがづくりを推進してきた。また、福岡市では、認知症の高齢者を地域で支える「宅老所よりあい」が、富山市では、民家を利用したデイケアハウス「このゆびと一まれ」が90年代前半にスタートし、その後の高齢者を対象とした地域の居場所のモデルケースとなっていく。

まちづくりや市民活動支援の分野では、80年代後半に「谷中学校」が開設されたほか、90年代に入ると、公民館やコミュニティセンターなどそれまでは登録団体に対する会議室や教室の貸し出しを主としていた施設において、より活動支援や交流の要素が求められるようになり、ミーティングスペースやロビースペースの充実が進められた。公設民営で運営される仙台市市民活動サポートセンターなどが代表例であり、市民活動の場としてのコミュニティカフェにつながる動きとなっていく。このほか、京都を拠点に世界的に活躍していたダムタイプがHIV問題の啓発活動を行ったことから、市民活動の場としての「バザールカフェ」が生まれる。カフェという形態を利用し、市民活動や地域づくりにつなげる萌芽的動きの一つとなった。

こうした活動に影響を受けて、2000年代には様々な試行錯誤が行われるようになる。福祉施設が居場所的な場として地域に開かれることで、多様な利用者やボランティアが関わる場になったり、それまでは飲食店としてのみ考えられていたカフェと活動拠点が一体化した新しい形態の拠点がうまれたりした。また、コワーキングスペースなどの新しいタイプの施設も定着しはじめたのが00年代である。この時期を通じて、テーマと施設形態の多様な組み合わせが試行錯誤されたといつてよい。そうした活動の蓄積を踏まえて、2010年代にはさらに多くの多様な地域の居場所がうまれることになる。

これらの流れは、自由な交流ができる居場所空間を市民の手でつくる動きの広がりであり、そうした専門サービスの享受では得難い関係性の場のニーズが、子育て・若者支援、高齢者福祉、まちづくりなどのジャンルの違いを超えて呼応してきた。

地域の居場所の増加は、地域コミュニティの大きな質的変換のなかで、公的サービスや従来から地域にあった交流拠点では賄えないニーズを市民自らが補完しようとする動きである。現在では、自由に過ごすことができる居場所的なカフェ、多様な活動を実現できるフリースペース、様々な働き方を実現するコワーキングスペース、共有することで新たな価値を生み出すシェアハウスなど、交流・集会機能を持つ様々な形態の施設が一般化している。新しいタイプの関係性を生み出すこうしたコミュニティの居場所は、必要なサービスを提供する社会システム

の想像であると同時に、どのように他者と関わり合いたいかという人間関係の新しいニーズの反映でもある。もとめられる新しい関係の規範を現実のものにしていくという空間である。社会の新たな価値観を創出していく現象であるともいってよいだろう。

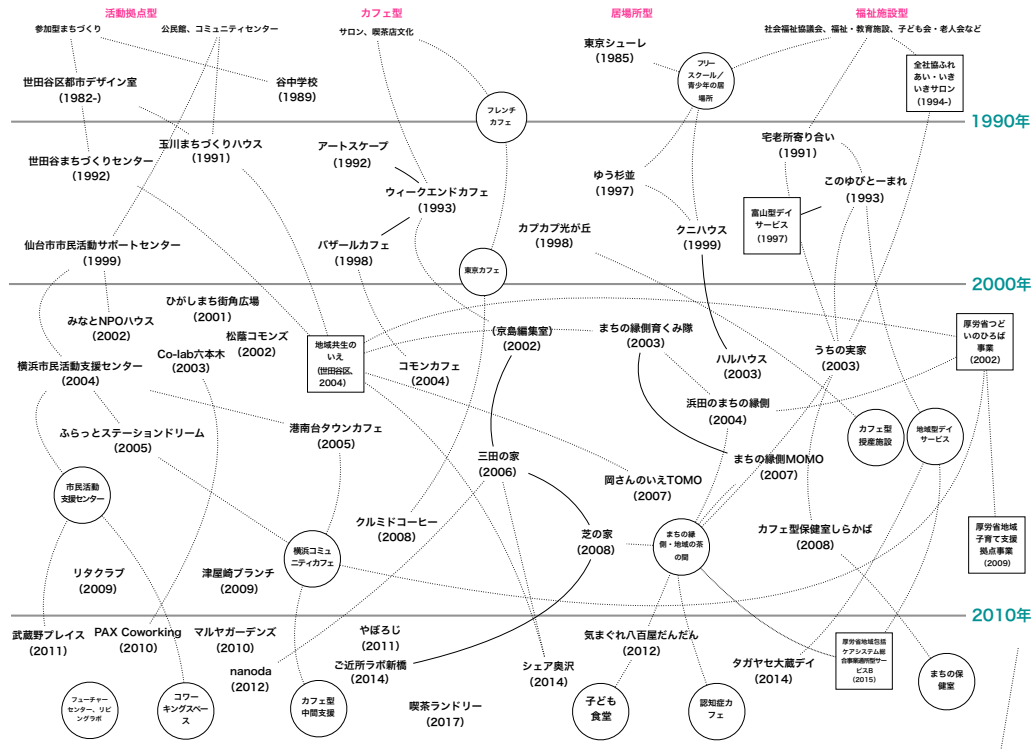


図 2-2 地域の居場所の系譜

### 前提とするコミュニティ概念

地域の居場所を取り扱う際に、背景となるコミュニティをどのような概念として捉えるかについて整理する。

コミュニティ概念の多義性については改めて述べるまでもないが (Hillery 1955、Delanty 2003)、ここでは、多様なコミュニティが存在し、多角的に問題を設定できることを前提としながらも、まずは広範に地域で暮らし活動する個人や組織の関係性の全体を地域コミュニティと捉える。MacIver (1917) の古典的な問題系に沿えば、地域生活の基礎的共同性 (コミュニティ) とそれを基盤とする多様なネットワーク (アソシエーション) の区分が存在したとして、それらが共存し相互に関係する状態の全体として地域コミュニティを考えるということである。それゆえ、町内会やコミュニティ協議会、NPO やボランティアなまちづくりや地域福祉の団体といった、地域を運営する特定の集団を中心に考える地域コミュニティではなく、そうした活動や

行政も含む関係性の集合を前提にする。同様に、近代化に応じて変質する地域集団の特性の二元論的類型であるゲマインシャフト／ゲゼルシャフト（Tönnies 1887）、コミュニティ／ソサエティ（Park 1925）、第一次集団／第二次集団（Cooley 1928）といった区分のどちらかを中心的に取り上げることにはしない。地域に伝統的に根ざしたコミュニティか広域に広がる新興のテーマ型コミュニティかは問わず、また一人ひとりの人格を構成してきた継時的に重層するコミュニティのいずれかのみを対象とすることはせず、むしろ個々人がこうした多様なコミュニティを横断しながらどのように関係性を広げ、行動や人生観を変えていくかという点を重視する。それゆえ、選択縁（上野 1987）、第三次的関係（Castells 2001）といった関係性も含めて、地域コミュニティとして扱う。

コミュニティ論はこれまで、伝統的共同性の衰退論を基調に、コミュニティかアソシエーションかといった二元論による分析枠組みの構築（奥田 1983 等）もしくは、理想像の構築である「社会目標としてのコミュニティ」（倉沢 2008）といった期待論のいずれかが中心的課題であった。近年は、社会関係資本（Putnam 1993）の視点を取り入れ、よりフラットに地域コミュニティの全体を互惠的ネットワークの集積として定義する（柴山 2009）など、これまでの議論の捉え直しが進んでいる。こうした議論を受けて、ここではコミュニティを単に個人から広がる関係性や本来あるべきコミュニティ像と比較するのではなく、個人、民間組織、行政といったセクターを超えた日常的な互惠関係の動的なネットワークの集積として捉え、かつそれが人間の生活の基本的必要であると考え。したがって、ここでコミュニティが「形成」されるというときは、地域活動の諸団体の組織化や伝統的共同性への回帰ではなく、社会関係資本の増加に資する変化全般を言う。また、ネットワークコミュニティなどとの区別の必要から、地域を縁にしたコミュニティを「地域コミュニティ」と表記する。

普遍的・理念的コミュニティ論ではない個別の事例調査の水準では、国内に限っても市民活動の動因や過程に注目した多角的なコミュニティ研究が行われている。こうした研究の多くは基本的に自治組織としてのコミュニティを扱っている。戦前に整備された町内会が戦後にかけて解体されさらに新たな位置付けを得て再生してきたなか、高度経済成長期の人口流動を経て 1970 年代に新たなコミュニティ組織が必要となってきたが、さらに現在では自治体の合併と都市内分権の流れのなか、最適な制度設計や組織化の過程の研究が進んでいる。地域活動の実践可能性や成立要件（谷 2006）、首長を含めた政策過程のなかで自治組織が形成される過程（佐藤 2008）の研究、また社会構成主義の立場から集団力学として捉える研究（杉万 2006）、住民運動や地域活動を主体的に担う市民の意識など主体の内面に焦点を当てる研究（似貝田 2005、小谷他 2004）などがある。これらの研究と本研究との違いは、自治組織としての地域コミュニティではなく、地域の居場所における来場者のつながりと活動の創出過程に焦点を当てる点にある。地域を支える個人や組織ではなく、地域のなかでどのように自分らしい生き方を得ていくかという個人的過程に光を当てることで、地域コミュニティの現代的なあり方を明らかにできると考えられる。



コミュニティ政策の分野の議論では、日本では、国民生活審議会による答申（1969）を嚆矢に、以降政策論とコミュニティ論を中心に研究が行われてきた。政策論では、初期の自治省モデルコミュニティ事業など中央主導型政策について「官製コミュニティ」、「ハコモノ行政」といった批判（江上 2002 等）があり、政策科学としての実践的提案の必要性（松原 1978）が指摘されてきた。地方分権を背景に協働概念が地域政策に導入（荒木 1990）された 90 年代以降は、市民主体の地域共同管理（中田 1993）、近隣政府（日本都市センター 2004）など新たな社会システムが提案され、地縁団体と市民活動組織が協働して地域課題を解決するという考え方（山崎 2009）が現在一般的といえよう。しかし政治学の視点からは、行政が被統治者の能動的同意を調達してしまうという政治性を視野に入れていないという批判（広原 2011）もあり、政策でありながら市民の主体性を活かすという矛盾を理論・手法の両面でいかに乗り越え得るかという点がコミュニティ政策の内包する根本的な課題といえる。本研究が自治組織からの視点ではなく、まずは個人が地域においてどのようにコミュニティに接し、どのような変化の経験をしているかというミクロな部分に焦点をあわせるのはこうした問題意識に基づく。

## 2-2 地域の居場所研究の動向

次に、地域の居場所に関連する先行研究をまとめる。主に建築や福祉分野で行われている地域の新しい施設タイプとしての居場所研究、イノベーションや価値創造における場の働きについての研究、現象学的地理学を背景にした地域計画に関する研究、そして社会理論におけるコミュニティの意味に関する研究である。

### 建築・福祉分野での地域の居場所研究

地域の居場所に関する研究は、2000 年代後半以降、各分野で進んでいる。

建築分野では、住民が主体的につくりあげていく新たなタイプの地域交流施設として注目され（建築学会 2010）、実態調査などが行われている。小松他（2007ab）は、中京圏の地域の居場所の包括的な調査を行い、その運営・支援体制や、設立経緯、空間の使用方法などの実態を明らかにした。ふれあい・いきいきサロン、チャレンジショップ、宅老所、子どもの居場所づくり新プランなど、高齢者福祉、子育て支援、商業振興など既存の複数の支援策にまたがる現象であり、かつ住民が主体的につくる施設であるという視点から調査が行われている。同様のスタンスで、高齢者の居場所の実態・交流（國上他 2010、余他 2012 など）といった点から実態調査が行われている。定量的な調査としては、大分大学福祉科学研究センター（2011）が、全国 478 カ所のコミュニティカフェを対象としたアンケート調査を実施し、コミュニティカフェの現状と課題を明らかにした。

高齢者福祉の文脈からは、ふれあい・いきいきサロンやコミュニティカフェがどのような機能を果たすのかについて、参加者の視点からふれあい・いきいきサロンの意義を明らかにし（豊

田 2008)、地域につながる機能が利用者となる高齢者にとっての積極的な評価が行われている(中村 2009)。また、倉持(2010、2014)は、コミュニティカフェの交流促進機能がコミュニティソーシャルワークの観点から価値が高いとして福祉コミュニティの形成拠点の意義を主張している。

地域の居場所は、来場者の行動に与える空間の影響という環境行動の側面からの研究も多い。大阪「ひがしまち広場」の場のしつらえを考察した研究(田中他 2007)、外国人支援を目的としたコミュニティカフェの「場の許容性」の研究(寛他 2014)などである。

利用者に注目した研究では、ふれあいリビングの利用者にとっての場所の意味合い(片山他 2008)、利用者の調査データから利用者にとっての居場所の役割や重要性を明確にする研究(東野 2015)などがある。また非常設型コミュニティカフェを通じて地域への愛着や協力意向が高まるという研究もある(小林他 2015)。来場者が居場所を通じてパーソナルネットワークを変化させていくこと(田所 2015)、ふれあい・いきいきサロンの運営者や参加者のソーシャルキャピタルと運営の困難さとの相関を分析する(山村 2013)といった、ネットワーク論からの研究もある。

本研究では、こうした先行研究を踏まえ、地域の居場所の来場者の主体的経験に注目し、その経験のなかで起こった変化に、他の来場者や運営者との関係、空間やプログラムがどのように影響を与えたかという視点からの分析を行う。

### 創発装置としての〈場〉と〈プラットフォーム〉

本研究では、地域の居場所でのつながりと活動の創発に注目するが、場と文化や知識の創発については多方面の先行研究がある。

歴史的研究としては、17~18世紀の情報拠点として市民革命や保険ビジネス、新聞などの発祥地となったロンドンのコーヒーハウスに関する研究(Ellis 1956、小林 2000 他)や、パリ、ウィーン、フィレンツェなどで芸術運動や思想を生んだサロンやカフェの研究(Lemaire 1997、菊盛 1979 他)などがある。社会変革のなかで特定の場所に特定の人々が集まることによって、新たな文化やビジネスが生まれたという事実は一般的に知られている。飯田(2009)は、19世紀末から20世紀初頭のパリのカフェを画家や詩人がどのように利用し、無名の若者がどのように有力者との関係を結び、そこでの議論からインスピレーションを得たり作品を創作したりしたかというカフェにおける芸術家の相互作用に着目し考察している。

組織の知識創造における「場」への注目もある。清水他(2000)は、西田幾多郎の述語的認識論である場の論理を哲学的根拠におく共創理論を構築し、企業経営などへの応用を試みている。また、組織的知識創造プロセス(野中 1990)の実践的応用として、経営における場のマネジメント手法(伊丹 1999)、組織的知識創造のため「よい場」の条件の研究(遠山他 2000)など、複数の人が効果的な協働を行うための条件づくりについての研究がある。

國領他(2011)は、情報社会においてはコミュニケーションの基盤となるプロトコルの共有

が、トップダウンではなく自律・分散・協調型の価値創造の仕組みだという視点から、協働、創発のための「プラットフォーム」概念を提唱している。情報産業における製品やソフトウェア開発の共有の基盤技術という意味で多く使われはじめたプラットフォームという用語を、それ以外の分野でも生じている価値創造の基盤装置として拡大し、「多様な主体が協働する際に、協働を促進するコミュニケーションの基盤となる道具や仕組み」と定義している。ここにはブラウザや SNS といった情報サービスだけではなく、地域の高齢者のケアのための交流の仕組みや、多様なステークホルダーが関わる法制度といった社会システムも含まれる。

場の概念がある組織やプロジェクトを前提に協働的な知識創造が行われる場を示す概念であるのに対し、プラットフォーム概念はそれを生み出すための道具であり、ここで創出される価値は結果的に生じる現象も含む。また、場が実践のなかで生じる暗黙知 (Polanyi 1967) と形式知の往復により新しい知識を創出する循環を主にしているのに対して、プラットフォーム概念の鍵概念は創発である。創発 (emergence) は、「あるシステムにおいて、その部分の総和とは異なる性質、特徴が、システムの全体において現れる現象」(Luisi 2006) を指し、個別の関係性に還元できない機能や意味が全体的に生じたり、主体間の相互作用があらかじめ想定されないものを生み出したりするという現象をいう。生命論の概念では還元の対義語であり、システム的には科学的分析が進めば全て還元になり得るという主張もあるが (Malaterre 2010)、協働の結果は偶発的であるという点で社会的な創発として捉える視点は有効であろう。

こうした新たな価値を生む場やプラットフォームの議論を背景に、多様な主体が関わる場をつくることによって地域の協働や新しい事業を起こすべきだという主張はより実践的な領域でも行われている。まちづくりや自治組織の活動推進のために多様な人が集まり多機能な役割を果たすタウンカフェのようなコミュニティプラットフォーム (名和田 2008)、地域経営の文脈から必要となるマネジメントプラットフォーム (海野 2009)、地域内外の人材を結びつけ新たな活動や課題解決につなげる中間システムとしての地域プラットフォーム (敷田 2012)、自治体・NPO の協働という多セクターの連携の場 (山浦 2010) などである。こうした共通の基盤づくりによって多様なステークホルダーを結びつけ、地域の課題解決や新たな価値創造を行おうという期待は高い。

### 地域政策における〈場所〉と社会理論における〈居場所〉

新たな価値を生じさせるフェイストゥフェイスの、あるいは情報システムを利用した関係性の場という視点のほか、地域における場所性や、社会理論における居場所という概念の再評価がみられる。本研究で直接議論される領域ではないが、人々の関わりあいによって生まれ愛着を持てる場所が単なる制度的・経済的につくられる空間とは異なる質を持ち、それが生活環境を向上させること、他者の存在を認め合うような寛容な関係性が共通の善を保ちにくくなった社会に求められていることなど、居場所的な場や関係性が、地域づくりや社会理論の領域でも議論されるようになっていく。

背景には、20 世紀後半になり、空間はもはや人間の社会活動の透明な容器ではなく政治経済的な巨大な力によって生産される空間となっているという問題提起がある (Lefebvre 1974)。時間-空間の圧縮が進行する社会において、従来の計量的な地理学だけではなく資本の圧力や記号の氾濫によって再生産される空間自体を問題化すべきだという考え方である (Harvey 1990 他)。

都市計画、地域政策の領域においても、こうしたポストモダン地理学との共振関係は、ジェイコブスの近代都市計画批判 (Jacobs 1961, 1969) を嚆矢として、現象学的な地理学のアプローチ (Tuan 1974) やレルフの没場所性の批判や場所性の構造化 (Relph 1976) に影響を受けつつ、都市空間の多様性と多重・多層の交流から生まれる創造性 (Florida 2005、細谷 2008) を見直し、交通や金融のための「空間」ではなく人間のための「場所」を生成するプレイスメイキングへの関心の高まりに至っている (たとえば Gehl 2010、Healey 2010)。地域づくりの文脈でも、地域にどのような場が必要かという視点で、インフォーマルな公共的な人付き合いのできるサードプレイス (Oldenburg 1989)、コミュニティの核となる都市の場所づくり (Graz 1989) の必要性への関心が高まっている。

より抽象的な社会理論の水準でも、善き居場所の喪失と必要性が指摘されている。「アトム化」する社会における多様性の承認の必要 (Taylor 1994)、権利的な平等のみが重視される「手続きの共和国」への批判 (Sandel 1984) といったコミュニタリアンの思想を背景に、同じ場所に生きることや共通の善という価値共有の「場」が注目されている。「自己の存在を確信し、そこに集う人々の紐帯を取り戻し、人々が共に力を出しあって善き生活を築く場所」の必要性 (真鍋 2011) である。もちろん、美的コミュニティと倫理的コミュニティが共存し得ないという批判 (Bauman 2001) や、特定の地域に根ざした共同性から対話的な帰属感覚へのコミュニティのニーズの変容 (Delanty 2003) があり、従来型の愛着の持てる場所が問題を解決するとは思えないが、それでも、Delanty (2003) は、場所性の再獲得が今後のコミュニティの可能性を左右すると示唆する。

こうしたあらゆる水準における空間から場所への視点の移動、場所を考えることが世界を理解する方法となりうるような (Cresswell 2015) 認識の変化の全体を、空間論的転回 (Soja 1996) と呼びうるだろう。

## 2-3 本研究の研究課題

### 協働プラットフォームとしての地域の居場所

本研究の目的は、地域のソーシャルキャピタルを醸成する具体的な空間装置として地域の居場所を位置づけ、そこから市民同士の自発的なつながりと主体的な活動が生じる過程を分析し、地域の居場所を設計・運営するための方法論を明らかにすることである。そのためここでは、

地域の居場所を地域の協働プラットフォームとして捉える。協働プラットフォームは、多様な主体が協働し社会的創発を生み出すための「道具や仕組み」という概念である。こうした概念を用いることで、福祉やまちづくりといった多様なテーマを持ち、飲食店やワーキングスペースなど多様な施設形態を取りうる地域の居場所を考察する上で、特定のテーマや形態だけをとらえて効果や機能性を分析するのではなく、人々が集まりつながり活動を生み出していくという、より普遍的な水準で、共通の特質を解明することができるだろう。また、「道具や仕組み」であるプラットフォーム概念を用いることで、それをどのように生み出すことができるかという設計論を検証することが可能になる。本研究が焦点を当てるのは、拠点があることで人々が集まり、相互作用を行うことを通じて、結果として人々のつながりが生まれ、活動がはじまっていくというプロセスである。本研究の特徴は、まずは参加主体が地域の居場所における他の参加者との相互作用のなかで、なぜどのような動機で活動を行うようになったのかという経験にフォーカスし、その視点から協働プラットフォームの設計と機能を明らかにするという点である。これにより、プラットフォーム設計論、組織づくりや創発の場の理論に新たな貢献を果たすことができるだろう。

#### 仮説分析モデルの構築

地域コミュニティを協働プラットフォームとして捉えると、そこで生じる主体間の相互作用およびつながりや活動の創出は、図 2-3 のように概念化できる。参加主体がプラットフォームに参加し、他の参加者との相互作用が起こる。その結果、面識や信頼関係が生まれ、結果的にそれ以前にはなかった活動が生じる。この活動は参加者だけではなく地域にとっても新たな価値を持つものである。そして、プラットフォームが設計可能な道具であるという考え方から、こうした相互作用はたまたまある時、ある場で偶然発生したのではなく、(何が生まれるかをあらかじめ決定することはできないものの) そうした社会的創発の起きやすい環境をどのように設計可能かという分析が可能となるはずだ。

こうした現象をとらえるために、参加者の主観的な体験を通じてその変化を解明するとともに、プラットフォームを設計しコーディネートしているキーパーソンの意図や現地での参与観察・実測調査によってプラットフォームの設計を明らかにし、この二つの観点から解明する。図 2-3 のなかに本研究の研究課題 1) 地域の居場所における参加者の「つながり」と「活動」の生成過程、2) つながりと活動を創出するためのプラットフォームの設計要件を位置付けると、それぞれ左下と右上に記したように、参加者の変化の体験と居場所のキーパーソン（プラットフォームアーキテクト）の設計内容を明らかにすることとなる。以下、これら 2 つの研究課題について詳細を述べる。

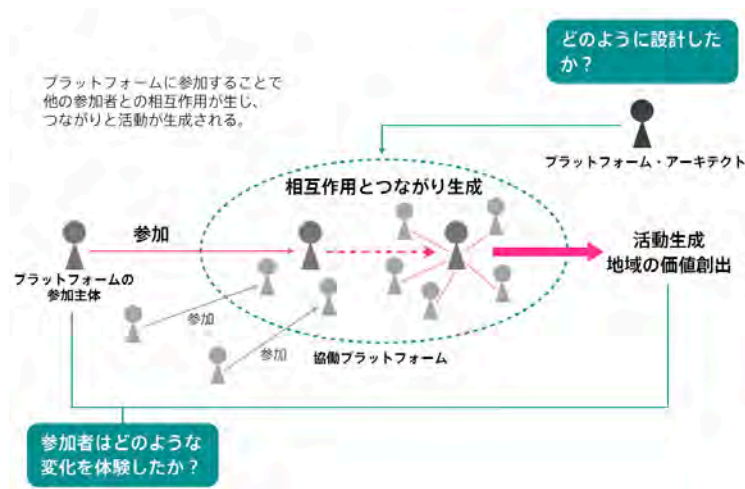


図 2-3. 協働プラットフォームにおける参加から活動生成までの概念図

### つながりと活動の生成過程への注目

#### ・研究課題 1 地域の居場所における参加者の「つながり」と「活動」の生成過程

一つ目の研究課題は、地域の居場所における参加者の「つながり」と「活動」の生成過程の解明である。参加者は、プラットフォームに参加することで、どのように意識や行動を変化させていくのか。主体的な活動をはじめるまでに、他者とのどのような出会いがあり、それによって自己概念や思考がどのように変化したのか、プラットフォームにおける他者との社会的相互作用に注目して分析する。

#### ・本研究に先立つ予備調査

地域の居場所の代表事例のひとつである芝の家では、来場者による地域活動が多く行われ、その発展に応じてさらにつながりが広がっている（坂倉 2010）。その活動の生じる過程を分析するため、坂倉他（2013、2015）は、来場者の内在的な動機づけ（Maslow 1954）と共同性の段階的な進展（田中 2010）から説明した「共同行為における自己実現の段階モデル」（図 2-4）を提案した。

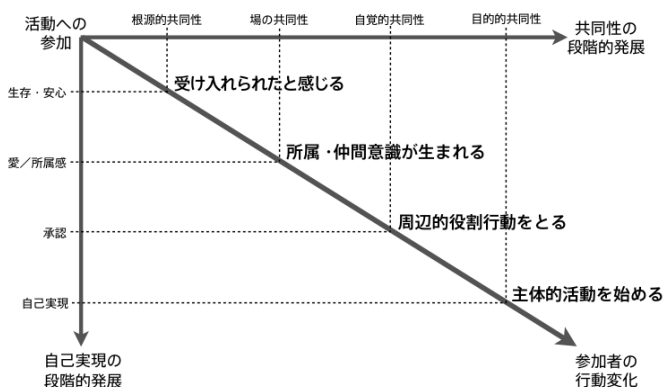


図 2-4. 共同行為と自己実現の段階モデル

芝の家の参加者に対するアンケートやインタビューから、運営参加や活動に積極的である人ほど自己肯定感や自己実現といった高次の価値を得ていることがわかるが、芝の家にはじめて参加した時からそのような積極的な参加をしていたわけではない。このモデルでは、積極的な活動に至るまでには他者との関係性と自己の意識の変化の過程があると考え、その段階をモデル化している。その過程とは、まず他者との関係性のなかで感じられる安心感が居場所への所属感をもたらし、それが自身の存在意義を感じられる運営協力等の行動の誘因となり、さらに自分らしい活動を始める意欲を生じさせるという、意識や行動の段階的な変化である。また、来場者が得る所属感や自己実現といった価値は、他者との関係性によってもたらされており、活動の発展とともにさらに新しい関係性と価値が生じる。こうした有機的な構造が、つながり形成と自発的活動が継続していく要因であると考えられる。

#### ・本研究での仮説分析モデル

本研究では、こうした予備的調査をふまえて、協働プラットフォームへの参加がつながりと活動を創出するまでの過程には、参加者同士の相互作用のなかで、他者関係の変化、自己の意識変化、行動の変化が生じ、結果的に参加以前には想定していなかった新たな活動が生まれると過程する。以下にその仮説モデルを示す。

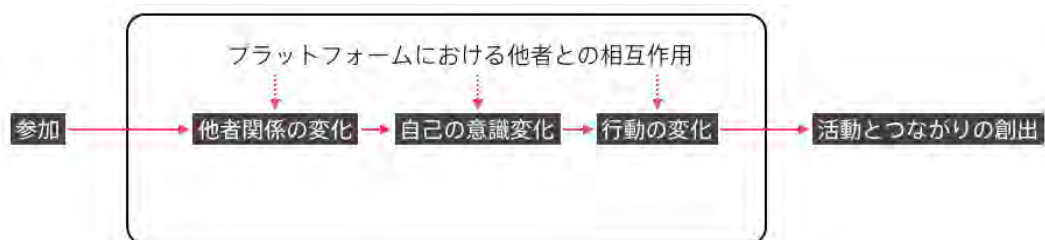


図 2-5. 活動創出までの過程についての仮説分析モデル

#### 効果的なプラットフォーム設計要件

##### ・研究課題 2 つながりと活動を創出するためのプラットフォームの設計要件

もう一つの研究課題は、つながりと活動を創出するためのプラットフォームの設計要件である。参加者が安心して他の参加者と関わり、信頼関係をひろげ、新たな活動を起こす場をどのようにつくることができるか。一般的に地域の居場所づくりは、キーパーソンの暗黙知に頼ったり、またカリスマ的なキーパーソンの人格に結論づけられたりすることが多い。方法論にしても、経験的なコツにとどまることも多く、一般的に応用可能な知見がまとめられることは少ない。ここでは、プラットフォーム設計の視点から分析することで、キーパーソンの考え方や無意識的なふるまいを含めて、具体的にどのようなファクターを設計しているのか、その要件

を抽出する。

#### ・本研究での仮説分析モデル

地域の居場所がこうした機能を果たすためにはどのような要件を満たすことが必要だろうか。地域の居場所は、一般企業や公共施設には見られない独特の約束事や組織形態を持つ事例が多い。また運営者の人柄に左右される比重も大きい。そして、運営者自身が直感的・暗黙知的にそれらを設計・調整しており、一般化して説明することが当事者にとっても難しい場合が多い。

ここでは、國領他（2011）によるプラットフォーム設計の変数（コミュニケーション・パターン、役割、インセンティブ、信頼形成メカニズム、参加者の内部変化のマネジメント）の評価軸を参考に、内的動機づけや中間支援を果たすための空間・ツール設計、運営者によるコーディネートなど人的要因、周辺環境の条件などを明らかにする。

仮説検証モデルの構築にあたっては、まず前提として、地域の居場所の主宰者は、たとえ暗黙知的ではあっても何かしらの意図や狙いを持ってプラットフォーム設計を行っており、偶然に頼った場当たり的な運営はしていないと考える。そして、情報プラットフォームやビジネスプラットフォームと比較して地域の具体的な居場所は、来場者の関係性をゆるやかに規定し、意識や行動変化に柔軟に対応するための人的コーディネーションの重要度が高いと考える。

その上で、協働プラットフォームの設計変数を、以下二つの観点から改変し仮説検証モデルとする。第一に、地域の居場所では、はじめに参加者がその拠点のを知り、参加するまでの段階と、その場での参加者同士の関係をつくり、相互作用を促進する段階では、プラットフォームに求められる要件が異なると考えられることから、一次的な主体を集める前提要因と二次的な相互作用の促進要因を区別して考える。第二に、特定の地域に立地する拠点であるため、プラットフォーム設計に直接関係する運営や空間など居場所そのものについての設計のほかに、地域の様々なステークホルダーとの関係性や他の事業との関係など、外的な環境要因についても、プラットフォーム内部の相互作用のありように大きく影響すると考えられる。この二点を加味し、5つの設計要件を前提要因／促進要因の二段階と、内的要因／環境要因の二重の構造にわけ、図2-6のような協働プラットフォーム設計要件抽出のための仮説分析モデルを構築する。



	前提（一次的）要因 主体を集める要因	促進（二次的）要因 相互作用を促進する要因
<b>内的要因</b> プラットフォーム の設計に直接関わ る要因	<input type="checkbox"/> コミュニケーション・パターンの設計 <input type="checkbox"/> 役割の設計 <input type="checkbox"/> 信頼形成メカニズムの設計 <input type="checkbox"/> インセンティブ設計 <input type="checkbox"/> 参加者の内部変化のマネジメント	<input type="checkbox"/> コミュニケーション・パターンの設計 <input type="checkbox"/> 役割の設計 <input type="checkbox"/> 信頼形成メカニズムの設計 <input type="checkbox"/> インセンティブ設計 <input type="checkbox"/> 参加者の内部変化のマネジメント
<b>環境要因</b> プラットフォーム 設計以外の周辺環 境からの影響要因	<input type="checkbox"/> 立地条件や周辺環境 <input type="checkbox"/> 実施主体の先行活動や他事業との関連 <input type="checkbox"/> 行政や近隣の社会資源との連携状況など	

図 2-6. 協働プラットフォーム設計要件抽出のための仮説分析モデル



## 第3章 研究の方法：社会的創発プロセスのデータ収集と分析

### 3-1 研究方法の検討

#### 社会的創発プロセス研究の視座

前章で示した通り、本研究では、地域の居場所における社会的創発プロセスに注目し、そこでのつながりと活動の創出過程、およびそれを生み出すプラットフォームの設計要因を考察する。このうち調査の中心的対象となるのが、協働プラットフォームに参加し主体的に地域に関わるようになった参加者の変化と地域の居場所の主宰者のプラットフォーム設計の工夫であるが、こうしたデータを適切に収集し、妥当な分析を行うためにどのような研究方法が取りうるだろうか。

そもそも、地域の居場所における参加者の行動や意識変化を調査するにあたっては、いくつかの障壁が存在する。地域の居場所は、社会的な現象であるといえるが、まだまだ萌芽的であり、サンプルとして取り上げられる事例は限定的にすぎない。地域の居場所の量的な調査は数百件の規模で前例があるが（大分大学福祉科学研究センター 2011）、こうした形の調査は運営形態や事業内容といった施設の特徴の傾向分析が主たる目的であり、本研究で焦点を当てる社会的創発プロセスを考察するデータの収集には不向きである。また、こうした統計的調査は、運営形態や活動テーマが多岐にわたる地域の居場所の形態的多様性から考えるなら、統一された調査指標による比較がどれだけ有効かという点で問題がないとはいえない。

一方、参加主体を調査の対象にしようとする、直接的に個人にアクセスすることが難しいため、統計的に十分な量のサンプリングを行うのはきわめて困難である。そして、調査課題が社会的創発プロセスであることから、参加主体相互の関係性の動的な変化に注目する必要がある。経時的な変化を構造化するための厚みのあるデータが不可欠である。一人一人の人生は複合的な文脈のなかで様々な要因の影響を受けながら進行していく、非常に複雑なプロセスである。そこでは原因と結果を明確に切り分けて測定することはほぼ不可能であるといっていよう。

こうした点から本研究では、統計的に十分な量のサンプルを集めようとするのではなく、少人数の参加主体に焦点を当て、そのぶん彼／彼女らの主観的な体験を深く考察することを通して社会的創発プロセスという現象を明らかにする質的研究のアプローチをとる。

質的研究は、アンケート調査や実験などからできるだけ多くの数値化されたデータを集め、社会的現象を統計的に分析する手法とは異なり、特定の経験を有する人や組織を対象にインタビューや参与観察などを通じて、その現象に特有の構造や意味を洞察することによって社会を理解しようとする研究手法である。マリノフスキーのエスノグラフィやシカゴ派のモノグラムなどを嚆矢として、近年では方法論的・理論的洗練が進んでいる。また、複雑性が増して社会

的分断の進行した多元化した現代社会においては、既存の一般的理論が通用しづらくなっており、こうしたなかで社会の変動や個人の体験を理解しようとした時、ローカルな知や行為に注目した限定的なナラティブ（Geertz 1991）への評価、質的なアプローチによって社会を理解しようという動きが改めて高まっているといえる。

しかし、質的研究は、主観を排して量的に社会現象を測定しようとする定量的調査と比較して、研究者の判断や経験に左右されるというデメリットがある。サンプルの選択やデータの収集・分析方法などを調査課題と対象の実態にあわせて的確に設計しなければ、単なる冗長なデータ羅列や根拠のない著者の主観的な主張に終わり、科学的な調査とはいえないものになってしまう。研究計画の立案にあたっては、細心の注意を払って設計しなければならない。

そのためにも、本章ではまず、質的研究法についての概要および歴史的展開と理論的前提を概観し、手法のバリエーションを整理した上で、本研究における最適な研究方法を選択し、調査計画をまとめる。

## 質的研究法

現在、社会学では統計的サーベイ調査が、心理学では実験が研究手法の主流となっているが、こうした量的研究手法では研究対象を捉えきれない場合や、明らかにしたい課題に答えられないといった場合—サンプルが十分に確保できない、対象となる事象が複雑で数量化しにくいなど—に有効となるのが、質的研究法である。すなわち、質的調査とは、数量的データを用いて現実社会の事象を実証する量的研究の限界から出発する研究スタイルといえよう。

質的研究は、一つの研究領域ではあるが、諸々の学問、分野、主題をまたいで横断的に行われ、用語や概念に関しても様々な関連し合う学問的系統が絡み合っており<sup>21</sup>、一概に定義することは難しい。主には、研究対象となる実際のフィールドでの実態調査、参与観察、インタビューなどを通じてデータを集め、そうした質的データを客観的で妥当な手法を用いて分析し、理論化する形がとられる。質的研究の品質は、実証的な資料に基づいているかどうか、方法は研究対象の特性に照らして適切に選ばれ、用いられたかどうかで評価される。またこれに加えて「研究結果は現場や日常生活との関連性が高いかどうか、および研究のやり方に関して十分省察が加えられているかどうか」についても、量的なアプローチでは扱えない質的研究に独特な研究課題と成果として重視される<sup>22</sup>。

用いるデータの種類や分析手法の違いのほかにも、質的研究と量的研究では、明らかにしようとする研究課題が異なる。すなわち、それぞれにふさわしい問いの立て方があり、逆にいえば、どのような問いを立てるかによって、量的研究か質的研究のどちらが妥当なアプローチかが変わってくるということだ。量的研究は、ある社会的事象やサンプルの傾向が「どの程度」分散しているか、また、二つの現象に「どの程度」相関関係があるかどうかという問いに答え

<sup>21</sup> N. K. デンジン、Y. S. リンカン『質的研究ハンドブック』、北大路書房、2006年、2頁。

<sup>22</sup> U. フリック『質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論』春秋社、2011年、19頁。

るために、できるだけ多くのサンプルを統計的に分析して明らかにする研究方法である。これに対して質的研究は、「なぜ」「どのように」という問いに答えるのにふさわしいアプローチで、量的研究と比較してより限定的な対象を深く調べ、個別の事例を深く理解することを通じて、普遍的な社会構造や理論を立ち上げようとする研究方法である。質的研究はミクロな社会科学の問題に答えるために適しており、量的方法はマクロな社会学的問題に答えるのに適しているともいわれる（Cicourel 1981）。近年の議論では、質的・量的研究のどちらがより優れた研究方法かという議論ではなく、研究の対象や設問への適切性によってどの方法を選ぶかを定めるべきだという論調が強い<sup>23</sup>。実際には、量的データと質的データの両方を組み合わせた研究計画もあり、厳密に二つの独立した系統が別々に存在しているわけではない。

質的研究方法は、様々な研究スタイル、データ取得の手法が混在し、必ずしも統一された体系的整理がされているわけではない。岸（2016）は、質的研究の代表的な種類として、フィールドワーク（様々なデータを用いた総合的な実態調査）、参与観察（より限定的な地域や組織の研究）、生活史調査（一人一人の深いライフヒストリーを聞き取ることを通じた調査）をあげているが、これは現在の日本の社会学研究のなかで多く見られるアウトプットの形態である。そのほかに、地域や組織など固有の事例を取り上げて分析する事例研究や、用意された実験室ではなく日常の場に介入して実証していくアクションリサーチといった研究スタイルもある。

多様なアプローチに共通するのは、質的データを扱うという点だが、質的データの種類も多岐にわたる。まず代表的なのは、インタビューなど様々な形で聞き取った口頭データや会話の記録、そして、フィールドで観察されたフィールドノーツ、エスノグラフィと呼ばれる記録である。これらは、フィールドワークによるデータ収集の基本として挙げられることの多い、インタビューと参与観察で得られる資料である。また、フィールドワークで記録されるデータの形式も多様で、写真、イラスト、音声、動画で記録された資料も扱われる。さらに、新聞記事、行政資料や組織の内部資料、歴史資料といった文献、記録映像、映画や広告などの文化的資料も質的データとなり得る。もちろん、研究全体の中ではこのほかに統計データや独自に取得した質問紙調査のデータなどをあわせて分析することもある。質的研究方法のさまざまな手法は大きく分けて、こうしたデータをどのように取得するか、そのデータをどのように分析するかという方法論、そして、それらを組み合わせた研究戦略のバリエーションとして理解できる。

## 質的研究法の歴史

個別の手法については追って整理するが、その前に、質的研究法の歴史的経緯を辿る。現在では研究手法の一分野として確立し、（問題を孕みながらも）手法的洗練も進んでいる質的研究だが、そこに至るまでは「長く輝かしい、しかし時には苦痛に満ちた歴史を綴ってきた」<sup>24</sup>といわれるように、毀誉褒貶の歴史があった。こうした各時代における批判や検証を通じて、手法

---

<sup>23</sup> フリック、前掲書、41頁。

<sup>24</sup> デンジン、前掲書、1頁。

的・理論的な精査と蓄積が重ねられてきたともいえる。現在でも、様々な視点から問題点を指摘されることがあるが、それらの問題の本質を正しく理解するためにも、どのような経緯で批判と乗り越えが繰り返されてきたか、歴史的な展開を振り返ることには意味がある。

ここでは、デンジンとリンカーンによる区分を参照しながら、流れを俯瞰する。デンジンらは、質的研究の歴史的経過を、7つの時期に区分している。伝統の時期、モダニズムの局面、薄れゆくジャンルの時期、表象の危機、伝統的なエスノグラフィ的著述によるポストモダンの時期、ポスト実験主義の時期、未来の時期である。

まず伝統の時期だが、これは1900年代初頭から第二次世界大戦までの時期にあたり、この時期の質的研究者の多くは植民地という西欧にとって異質な文化的フィールドや、都市のアウトサイダーを「客観的に」記述しようとした。代表的な業績として、マリノフスキーによるニューギニアとトロブリアンド諸島のエスノグラフィや、シカゴ学派によるモノグラムがある。こうした初期のエスノグラフィは現在でも古典として参照されており、フィールドワーク手法の基本としてしばしば立ち返られるものの、客観性と対象に対する態度については問題点が指摘されている。客観性については、この時期の研究者は、無意識に実証科学のパラダイムに基づき、自ら見聞きしたことの記述には妥当性や信頼性があり、客観的に解釈できるはずだと暗黙のうちに考えていた。マリノフスキーは実際、混沌とした事実は科学的な事実ではありえず、法則や一般化が科学的な事実であると記している<sup>25</sup>。しかし、こうした手法における客観性が疑わしいことはその後批判されることになる。また、1970年代以降になると、対象に対する態度についての批判が起こる。その後のポストコロニアルの状況においては、西欧社会から見て物珍しいフィールドに入り、苦労を重ねてエスノグラフィを書き上げる男性科学者のストーリーは、あまりにも帝国主義的であるとみなされるようになる (Rosaldo 1989)。

続くモダニズムの局面は、戦後から1970年までの時期である。実証主義の立場から質的研究は妥当性や信頼性に欠点があるとされ (Allport 1942)、1950年代 までには、統計的手法に比べて非科学的だと考えられるようになった (Easthope 1974)。この時期の質的研究者は、こうした批判に 대응するかたちで、質的研究に科学的で厳密な研究法をあてはめ、形式化しようとした。たとえば、グレイザーとストラウスによるグラウンデッドセオリーアプローチ (Glaser & Strauss 1967) などが代表的である。また、エスノメソドロジー、現象学、批判理論、フェミニズムなど新しい解釈理論が多く生み出され、これらがポスト実証主義の認識論として多様なアプローチの創造につながるとともに、Campbell (1963) の内的妥当性・外的妥当性のモデルを構築主義的・相互行為論的な研究行為に応用するなど、手法的な洗練が進んだ。この時期に提唱された手法は、現代でも一般的な手法となっている。この時期は厳格な質的研究の「黄金時代」とも呼ばれるように数々の業績が生まれたが一方で、社会のアウトサイダーに光を当てる文化ロマン主義者としての質的研究者という像が定着した。

---

<sup>25</sup> Bronislaw Malinowski, "Magic, Science And Religion And Other Essays", Beacon Press, 1948, P328.

第3の時期（1970～1986年）をデンジンらは「薄れゆくジャンル」と呼んでいる。この時期までに、質的研究のための多くの理論や手法が揃っていた。シンボリック相互作用論をはじめとした多様な理論を前提にして、グラウンデッドセオリー、事例研究、歴史研究、個人誌研究、エスノグラフィ、アクションリサーチ、臨床研究など多様な研究戦略や研究報告形式が確立した。資料収集と分析の手法も、質的インタビュー法、観察、映像分析、会話分析などが利用できるようになったほか、質的データ分析のためにコンピュータも用いられるようになった。こうしたなか、機能主義、実証主義、行動主義などの全体論的アプローチは、より多元主義的で解釈的で開放的な視座に取って代われ、厚い記述によってローカルな意味を理解することが理論の中心的課題になる（Geertz 1973）。そして新しい理論を記号学や解釈学といった人文学に求めることで、次第に社会科学と人文学の境界が霞むという事態が訪れるようになった。

表象の危機の時期（第4の時期）は、1986年に相次いでエスノグラフィや解釈人類学に対する批判が起こったことにはじまる（Marcus & Fischer 1986、Clifford & Marcus 1986など）。他者を書くことに内包される、西欧中心の視線や権力性が問題とされるようになり、質的研究全般もこれに影響を受けるようになった。研究結果そのものと、それをどう書くかを切り離して考えることができないことに自覚的になり、フェミニズムや有色人種の認識論などからの批判が盛んに行われた。この時期を通じて、質的研究そのものがそもそも持っていた実証主義的な視点に立って他者を扱う態度が問題化され、因果的・線形的理論に対抗する定型的で解釈的な理論が一般的になっていく。さらに、書き手を削除してエスノグラフィを綴るのではなく、書き手のストーリーを通して他者を表象するといった実験（Stoller & Olkes 1987）などが行われ、こうした議論や実践を通じて、フィールドワークと著述との違いを厳密に考える態度が定着していった。

第5の時期は、1990年代、実験的なエスノグラフィ的著述によるポストモダンの時期である。それまでの時期において質的研究は、社会的なテキストの文脈の中でつくられるものにすぎないのだから、研究者は生きられた経験を直接とらえることはできないという「表象の危機」、ポスト構造主義のなかでテキストの妥当性や一般可能性がどう確保されるかという「正当性の危機」、そして、質的研究がテキストにすぎないとすれば、社会に変化をもたらすことは可能かという「実践の危機」という3つの危機にさらされるようになった。こうした危機を乗り越えるため、90年代はエスノグラフィを書く新しい方法が探求された時期である。このなかで、物語はフィールドのナラティブとして読まれるようになり、超然とした観察者という概念は棄却され、行動的で参加型の実践志向の研究があらわれるようになっていく。こうして、大きな物語から、地域的で小規模な理論へのシフトが起こってきたのである。

デンジンらは、この後の時期については詳述していないが、6番目の時期はポスト実験的時期、7番目を未来の時期としている。現在では、多様なエスノグラフィのあり方はあたりまえになり、多くの研究者が自由な民主主義の要求のもと、道徳的で神聖な質的社会科学の創造のための条件を模索している。

質的研究への批判は、戦後から 70 年代までは客観性に対する批判、その後は書き手と対象の関係性やテキストの表象についての批判が中心を占めてきたといえる。いまでは、調査を行う研究者も被観察者も、観察するという行為において生ずる様々な立場の違いや権力関係のなかに状況付けられているのであって、客観的な観察といったものはそもそもありえないという認識が共有されている。しかしそれと同時に、そうした社会的に状況付けられたなかで記述することを通してしか捉えられない問題もあるのであり、質的研究は、研究対象の現実世界を理解できる手法を絶えず追求しなければならない。複雑化していく社会のなかでは、全体論的研究では扱えないローカルなものを扱い得るという質的研究の特質に対する再評価も進んできている。口述されるものへの回帰、特殊なものへの回帰、ローカルなものへの回帰、時間的なものへの回帰 (Toulmin 1990) という流れのなかで、質的研究の重要性はむしろ高まっているといえるだろう。

### 質的研究過程の 5 局面

前説でまとめたように、質的研究に対しては歴史的に様々な批判や手法の実験が繰り返されてきた。その結果、現在では質的研究の様々な立場、方法論が並存するようになっている。デンジンらは、質的研究の過程のバリエーションを、多文化主体としての研究者、理論的パラダイムとパースペクティブ、研究の戦略、収集と分析の方法、解釈と表現の技法・実践・政治性の 5 つの局面で整理している (表 3-1) <sup>26</sup>。質的研究において研究計画を立案する際に、研究者の位置付けやデータ収集・分析の方法、さらにそれがまとう政治性など基本的なアスペクトを整理し、どのような立場からどのように研究を進めるか、自覚的であることは非常に重要である。

---

<sup>26</sup> デンジン、前掲書、22 頁。



表 3-1. 研究の局面

局面 1 多文化主体としての研究者	歴史と研究伝統 自己と他者の概念 研究の倫理性と政治性
局面 2 理論的パラダイムとパースペクティブ	実証主義、ポスト実証主義 解釈主義、構成主義、解釈学 フェミニズム 人種論的ディスコース 批判理論とマルクス主義モデル カルチュラル・スタディーズ・モデル クイア理論
局面 3 研究の戦略	研究計画 事例研究 エスノグラフィ、参与観察、パフォーマンス・エスノグラフィ 現象学、エスノメソドロジー グラウンデッド・セオリー ライフ・ヒストリー、証言 (testimonio) 歴史的方法 アクション・リサーチ、応用研究 臨床研究
局面 4 収集と分析の方法	インタビュー 観察 人工物、ドキュメント、記録 映像的方法 自伝 データ管理 コンピュータ支援による分析法 テキスト分析 フォーカス・グループ 応用エスノグラフィ
局面 5 解釈と表現の技法・実践・政治性	適切性判断の基準 解釈の実践と政治性 解釈としての著述 政策分析 評価の伝統 応用研究

(デンジンら p22 を元に筆者作成)

局面 1 の多文化主体としての研究者については、これまで述べてきたとおり、研究者は、マリノフスキーやシカゴ派の社会学者のように対象を客観的に観察し真実を理論的に語り得るといふ特権的な存在ではもはやありえない。社会的に状況づけられたなかで、他者とどのように関わり、どのように倫理性を確保するのか、そして限りある手立てのなかでどのように分析し、理論化するのかを十分に慎重に検討しなければならない。フェミニズム研究や民族研究などは特に、出自や性差など研究者の個性によって、対象が語るストーリーや分析の視点が異なってくるが、こうした問題は、実はどのようなフィールドの研究にも当てはまる。その研究者だからこそ取り扱える研究課題は何か、どのような研究戦略をとるのがふさわしいのか、そして、研究を発表した後どのような政治性を持つかといった点を、研究者が、自身が多文化主体としての存在であることを前提に、検討しなければならない。

局面 2 の解釈パラダイムは、「世界をどのように捉え、どのようにはたらきかけるか」を方向付ける理論的な立場である。表 3-2 では 7 種類に分けられているが、完全に並列というわけでは

ない。まず、伝統的な実証主義・ポスト実証主義があり、それに続いて構成主義・解釈主義的なパラダイムが生まれた。その後、批判理論・マルクス主義、フェミニズム・ポスト構造主義などが、様々な視点からの批判を通じて確立してきた。

表 3-2. 解釈パラダイム

パラダイム／理論	規準	理論形式	語りのタイプ
実証主義／ポスト実証主義	内的・外的妥当性	論理的－演繹的、基礎づけられた (grounded)	科学レポート
構成主義	信用性、信憑性、転用可能性、確証性	実質的－形式的	解釈的事例研究、エスノグラフィ的フィクション
フェミニズム	アフロセントリック、生きられた経験、対話、ケア、説明責任、人種、階級、ジェンダー、再帰性、実践、感情、具体性による基礎づけ	批判的、立場性	エッセイ、ストーリー、実験的著述
民族研究	アフロセントリック、生きられた経験、対話、ケア、説明責任、人種、階級、ジェンダー	立場性、批判的、歴史的	エッセイ、寓話、劇
マルクス主義	解放理論、反証可能性、人種、階級、ジェンダー	批判的、歴史的、経済的	歴史的、経済的、社会文化的批判
カルチュラル・スタディーズ	文化的慣行、実践、社会的テキスト、主観性	社会批判	批判としての文化理論
クイア理論	再帰性、脱構築	社会批判、歴史分析	批判としての社会理論、自伝

(デンジンら p24 を元に筆者作成)

実証主義・ポスト実証主義は、实在論や客観的認識論の枠組みに基づいて、実験、サーベイ調査、厳密に定義した質的方法論に信頼を置いている。これに対して構成主義は、多様な現実が存在するという相対主義的な存在論、認識者と対象者の共同によって理解が生じるという主観的認識論に立つ。それ以降の立場は、唯物論的实在論、すなわち人種や階級、ジェンダーによって現実世界の差異をつくりあげているという存在論に基づく。そしてポスト構造主義のいくつかの立場では、さらにそうした差異を語るテキスト自体の限界を問題化する。

また、実証主義で基準となるのは、内的・外的妥当性や信頼性、客観性だが、構成主義の立場では、信憑性や転用可能性に重きが置かれるようになる。以降のパラダイムでは、それらの前提に立ちながらも、研究成果が様々な解放のために意味をもつか、ジェンダーや人種といった差異に対する配慮がなされているかどうか基準となる。

局面 3 の研究の戦略は、研究課題や研究目的を明確化し、その設問に答えるためにふさわしいフィールドや情報、効果的な戦略を選ぶという研究計画を立案する局面である。この戦略は、研究者がフィールドに入る際の「技術や前提や慣行の総体」であり、これにより研究者はフィ

ールドと結び付けられ、具体的に扱う資料やそれを分析する方法論が定まる。方法論には、事例研究、エスノメソドロジー、グランドデッドセオリー、アクションリサーチなどがあり、それぞれの戦略ごとに固有の手法が展開されている。

局面4は、収集と分析の方法である。研究戦略を実行するための具体的な手法である。インタビュー法、観察法、人工物やドキュメントなどの分析法、映像など視覚資料の分析法、個人史や会話の分析法などがある。このなかには、コンピュータを利用したデータ管理やテキスト分析といった手法も含まれる。

第5の局面は、解釈と表現の技法・政治性である。研究者は、フィールドで収集したデータを解釈し、暫定的なドキュメントを経て最終的に公表するテキストを作成する。解釈の実践は、「芸術的でもあり政治的でもある」が、唯一の解釈上の真理はあり得ず、成果を公表する多様な共同体それぞれに独自の基準がある。また質的研究の主要な舞台には政策評価があり、研究を通じて社会政策に大きな影響を与えることができる。

#### 構成主義的研究の理論的立場

質的研究は、これまでに見てきた通り、その存在論的、認識論的立場に対する議論が歴史的に重ねられてきた。現在でも最終的な結論が出たとは言い難いが、ある程度共通の理解として通用するようになっていていると考えられる。ここでは、前節の表3-2における構成主義的パラダイムにおける理論的な立場をさらに詳細に整理する。

質的研究は、社会的現象を内側から理解することを目指し、個別事例の再構成を通じてそれを行う。そして、実証的分析には数値ではなくテキストを用いる。この時、「現象が相互行為的につくりだされ、それを通じて現実が構築される」<sup>27</sup>という社会構成主義の理論的立場から社会を理解しようとする点が、実証主義の立場との大きな違いである。フリックによれば、こうした理論的立場には、次の3つの視点があるという<sup>28</sup>。すなわち、シンボリック相互作用論の流れにもとづき個人の主観的なものの見方に重きを置く視点、エスノメソドロジーなどに代表されるように社会的秩序がどのようにつくりだされるかを分析する視点、そして客観的解釈学を用いて行為や意味を生成する深層構造を再構成する構造主義的視点である。

シンボリック相互作用論は、プラグマティズムの哲学的伝統を引き継ぎ、ブルーマーによって命名、研究手法としてまとめられた理論である。個人が自分の行為や周囲の環境に対して持つ主観的意味に焦点を当てるが、その意味は社会的相互作用の結果生じるものであり、また、行動主義的に原因と結果が固定的であるのではなく、個人の解釈過程のなかで変化していくものとして捉えられる。ブルーマーは、シンボリック作用論の前提を次の3点に集約している。1) 人間は、ものごとが自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為する。2) このようなものごとの意味は、個人がその仲間とともに参加する社会的相互行為から導き出さ

---

<sup>27</sup> フリック、前掲書、79-80頁。

<sup>28</sup> フリック、前掲書、67-68頁。

れ、発生する。3) このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする (Blumer 1969)。

主観的に意味に焦点をあげるシンボリック相互作用論の立場は、現在では質的研究のスタンダードのひとつになっている。近年では、現象学や構造主義はじめ様々な思考を織り込んだ解釈的相互行為論、心理学において一般の人たちが日常生活の行為に対してそれぞれ構築している法則に注目する主観的理論といった研究にも発展している。

理論的前提の第二の立場、エスノメソドロジーは、相互行為における主観的視点ではなく、その相互行為を通じてどのように人々は社会的現実を生み出すのかという過程に焦点を当てる。1967年、ガーフィンケルが確立したアプローチで、主に会話分析の手法が用いられる。たとえばガーフィンケルは陪審員の審判の過程を分析しているが、そこで陪審員たちは、公正さや事実に迫るために相互の知識を用いながら、判断していく方法自体を会話のなかからつくりあげていく。これは、あらかじめその会話の秩序が与えられていて、それに適合するように現実的な場面がつくられるのではなく、秩序そのものが会話のなかから立ち上がり、その枠組みによって日常的相互行為が成り立つという過程である。こうした過程は特殊なことではなく、日常的な行為によって社会的現実がつくりだされる過程そのものである。シンボリック相互作用論が個人の主観に焦点を当てていたのに対して、エスノメソドロジーは、日常的な社会的秩序がどのようにつくられるかに関心を向ける。

第三番目の立場である構造主義的モデルは、エスノメソドロジーが注目する日常的社会秩序の創出よりさらに広い視点で、そうした相互行為が前提する枠組みとしての文化的意味のシステムを仮定する。このアプローチでは「経験および行為の表象と、行為の深層構造とが区別される」<sup>29</sup>。行為を産出する深層構造は、文化的モデル、解釈パターンと意味の潜在的構造、精神分析的な無意識の構造などが想定される。代表的なアプローチが、客観的社会学である。この立場では、テキストやその他の資料をできるかぎり客観的に分析し、その背景にある規則や構造を再構成しようとする。

図 3-1 は、質的研究における 3つの視角を図式化したモデルである。シンボリック相互作用論が相互行為における主体の主観を理解しようとし (図中の①)、エスノメソドロジーが主体間のあいだの相互行為から生み出される秩序に着目する (②) のに対して、構造主義的モデルはそのさらに背景にある社会構造を明らかにしようとするアプローチ (③) である。フリックによれば、これらの視角は、お互いに排除し合うのではなく、組み合わせたり補完したりする「視角のトライアングレーション」が可能だという。

---

<sup>29</sup> フリック、前掲書、75頁。

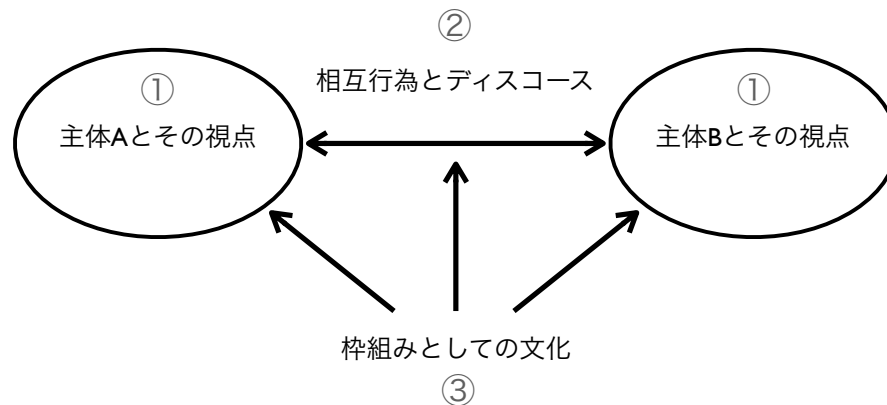


図 3-1. 質的研究における3つの視角  
(フリック p78 を元に筆者作成)

### 質的研究の長所と短所

最後に、質的研究の長所と短所についてまとめる。研究計画の立案にあたっては、質的研究の陥穽に十分に注意して、研究課題にふさわしい実証的な資料を収集し、適切な分析方法を選択することが不可欠である。

甲南大学がまとめた社会調査工房オンラインには、質的研究の長所と短所が、次のように整理されている。まず長所については、次の通りである。

- 1) 少数の被調査者の体験をインテンシヴ（集中的かつ徹底的）に探究することによって調査者がその体験を追体験して、その体験や事象の深層まで理解することが可能であること。
- 2) 形式的かつ画一的な、通り一遍の質問や限定された回答の選択肢を用いてのアンケート調査ではなしに、調査対象となっている事象や事実の多くの側面を多面的に、そして全体関連的に把握することが可能であること。
- 3) 調査者の主観的かつ価値判断的な認識や洞察力をとおして事象のより根源的な把握がなされ、ときに平坦で平凡な分析になりがちな事象の分析をより洞察的かつ普遍的に一般化することが可能であること。
- 4) 時間を遡って順を追って質問することができるため、事象の移り変わりなど変化のプロセスと変化の因果関係をダイナミックに把握することが可能であること。

本研究の調査課題は、地域の居場所の参加者の意識や行動の変化を、彼／彼女らの主観を通じて明らかにすることである。したがって、これまで見てきた通り、質的アプローチはふさわしい研究手法といえる。しかし一方で、質的研究には特有の短所がある。

- 1) 被調査者（調査対象者）が具体的にいかなる母集団を代表しているのかを理論的に検討することができないこと。
- 2) 調査データの収集の成否が調査者（あるいは調査員）の調査能力や調査経験に大きく左右されてしまうこと。
- 3) 調査活動を実施するにあたって、より多くの時間と多くの費用がかかり、得られたデータの分析においても計量的処理が困難であること。
- 4) 質的調査によって一般化された理論的説明を反復して検証し、客観的に普遍化させる手続きには多くの困難が伴い、不可能に近いこと。

ここで示されているのは、質的研究が構造上持たざるを得ない理論面と調査実施面での制約、限界であり、こうした短所を明確に理解した上で適切な課題設定、データのサンプリング、分析手法の選択をしなければならないということである。調査対象者と母集団の関係については、研究課題に即した理論的なサンプリングを行う必要があり、研究者のスキルに左右されないよう調査手続きの妥当性に配慮することも重要である。また、多くの時間と労力のかかる研究手法であることから、扱うことが可能な適切なデータ量の設定や効果的な調査対象の選択も求められる。そして、ここで導き出される知見が、実証主義的な一般理論ではなく、ローカルな理論（杉万 2006）であるという限界を前提に課題は設定されるべきで、逆にいえば、一般理論では扱えない社会的現象を理解するための調査でなければならない。

### 3-2 研究の基本方針

前節で概観した質的研究の特徴や歴史的変遷を踏まえて、研究の方針をまとめる。本研究は構成主義的な立場に基づく質的研究であり、複数事例から現場で生じている現象の理論化を試みる仮説構築型研究である。以下、デンジンによる質的研究の5つの局面を参照しながら、基本方針を整理する。

#### 現場に寄り添った研究

まず、研究及び研究対象に対する姿勢だが、筆者自身が実践家という側面を持っていることをあらかじめ自覚しなければならない。可能な限り客観的で妥当なデータを収集する必要があるが、現場を運営する人々の気持ちにそぐわない形式的な聞き取り調査ではなく、実践家の立場から共感的に現場の声を聴き、そこから知見を導出するというアプローチを心がける。もちろん、過度に自分の経験にあてはめるといことがないよう十分に配慮する。そのため、対象者の選定や調査項目の設定、インタビューの計画などの妥当性や信頼性にはもちろん配慮し、

得られたデータの分析は論理的、客観的に行う。その前提として、調査対象者と研究者の対話は厳密には相対的なデータであり、普遍的な資料にはなり得ない。そうした限界を自覚した上で、複数の参加者、立場の違う人々の主観的体験から浮き彫りになる現象を可能な限り構造化し、理論化するという立場をとる。

### 社会的相互作用論に基づく理論化

本研究で注目するのは、「なぜ、参加者は新しい活動をはじめなのか」、「どのように、それをはじめなのか」、「その人にとって、どんな意味がある行動なのか」といった参加者の個人的経験である。こうした視点から地域の居場所で起こっている現象を明らかにするには、調査対象者の内的視点を通じて相互作用をみていく質的研究のアプローチが適している。そのため本研究は、構成主義の理論に立脚し、地域におけるつながりの形成と活動の創出を、協働プラットフォームにおける参加者同士の社会的相互作用として捉える (Blumer 1969、Mills 1965)。前節でとりあげたフリックによる構成主義の理論的立場の分類 (図 3-1) に則して整理すると、本研究の立場は、相互行為のありようを主体の視点を通じて分析するシンボリック相互作用論の立場になる。ただし、後述する通り、一人の主観だけを扱うのではなく、複数の参加者に対するインタビューの複数の事例をとりあげるため、参加者同士がどのように関係性や活動を構成していくのかという主体間に生じる現象を分析するエスノメソドロジ的な視点や、協創プラットフォームというフレームワークによる構造主義的な見方も含まれる。研究成果についての考え方としては、普遍的理論ではなくインターローカルに応用可能な生成的理論を探索する (杉万 2006)。

### 複数事例を通じた仮説構築型の事例研究

研究の戦略については、本研究の軸は、4つの事例を対象とした仮説構築型研究である。事例研究は、古典的には、個別事例が本質的である限り他の事例にも類似すると推測する「分析的帰納法」(Znaniecki 1934)を根拠とするが、妥当性や信頼性の確保など研究手法の具体的手続きとしてはインの事例研究法 (Yin 2009)を参照する。本研究では、4事例は完全に並列に扱われるのではなく、まず筆者が自身で手がけた事例芝の家が先行する事例となる。この事例は、単体としてみても都市型コミュニティの形成手法を探るアクションリサーチでもあるが、本研究では、芝の家の成果を本研究全体の予備調査として位置付け、ここから、続く3事例の調査の前提となる予備的仮定を導き出す。予備的仮定に基づいて4事例の総合的な調査を行い、相互に参照しながら仮説を組み立てることにより、他の事例にも転用可能なより精度の高い理論を構築する。オーソドックスな質的研究のアプローチに則りながら、筆者自身の経験と実証的な研究構造によって確からしさを高める混合型の研究といえる。

## インタビューと質的データ分析

資料の収集と分析についてであるが、まず本研究で中心となる資料は、インタビューである。それぞれの事例において、参加者と地域の居場所との関わりをライフストーリーのインタビューとして取材する。個人に照準した質的調査（ライフストーリー研究、ナラティブ研究、個人誌的研究など）は、人間の行為や役割を社会の要素として扱うのではなく、個人の人生やその一部に焦点をあわせ、「その人自身の経験から社会や文化の諸相や変動を読み解く」アプローチ（桜井 2002）であり、「個人の生活史と歴史、および社会構造内におけるそれらの相互浸透を考察対象とする」（Mills 1959）。

また分析の手法としては、佐藤（2008）による質的データ分析手法に準じて行う。佐藤は、質の低い質的研究が陥りやすいパターンをまとめた上で、端的に質的研究が満たす条件を5点挙げている<sup>30</sup>。

- 1) 一つひとつの記述や分析が、単なる個人的な印象や感想だけではないデータを含む、しっかりした実証的根拠にもとづいてなされている。
- 2) 複数のタイプの資料やデータによって議論の裏付けがなされている。
- 3) 具体的なデータと抽象的な概念ないし用語とのあいだに明確な対応関係が存在する。
- 4) 複数の概念的カテゴリーを組み合わせた概念モデルと具体的なデータのあいだにしっかりした対応関係が存在しているだけでなく、それについて論文のなかできちんとした解説がなされている。
- 5) 議論や主張の根拠となる具体的なデータが論文や報告書の叙述のなかに過不足なく盛り込まれている。

本研究でも、これらの基準に留意して計画の立案、分析を行う。資料については、インタビューだけではなく、参与観察、実測調査、内部資料など複数のデータ収集によって分析を行う。

## トライアングレーションによる現場への接続

解釈と表現の技法については、まず形式については論文というアウトプットとなるが、本研究のテーマは、単に地域の居場所における参加者同士の相互作用を解き明かすだけではなく、協働プラットフォーム設計、すなわち、実践に役立つ知見を導出する点にある。このため、主体の視点を通じた現象の理解に加えて、主体間の相互作用やプラットフォームという構造からみた分析を含めた複数の視点からのデータを用いるトライアングレーションによって、応用可能な知見としてまとめる（Flick 2011、Creswell & Clark 2007）。現場に寄り添いながら、最終的には現場に再接続されるような実践的理論の構築を目指す。

---

<sup>30</sup> 佐藤郁哉『質的データ分析法—原理・方法・実践質的分析』新曜社、2008年、11頁。



### 3-3 調査計画

#### 研究戦略の全体像

本節では、具体的な研究計画を述べる。研究の全体像は、下図の通りである。まず実践と参与観察を含む先行的な取り組みとして芝の家があり、その実践的経験のなかから本研究の仮説分析モデルを構築する。そして、芝の家を含む4事例の調査を通じた検証を行うという流れである。それぞれの事例のなかで、参加者と主宰者（プラットフォームアーキテクト）に対する聞き取り調査を実施し、そこで得られたテキストを分析することによって、2つの研究課題、「地域の居場所における参加者の『つながり』と『活動』の生成過程」（研究課題1）と、「つながりと活動を創出するためのプラットフォームの設計要件」（研究課題2）について検証し、理論を生成する。第2章で述べた仮説的分析モデルは、これらの調査課題を明らかにするため、芝の家における先行的取り組み（参与観察、運営資料調査など）および、参加者に対する質問紙調査／聞き取り調査による予備的調査の結果から構築されたモデルである。

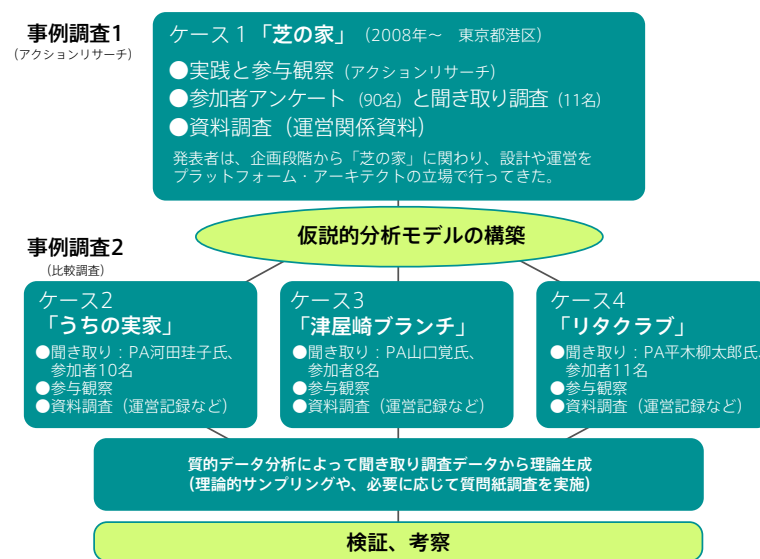


図 3-2. 研究の手順

質的研究であることから、厳密には、あらかじめ完全に確立した仮説を実証的なデータによって検証するという直線的な形で研究が進むわけではない。本研究でも、芝の家での先行的取り組みにおいては特に、調査課題の設定、実践のなかでの検証、仮説分析モデルの構築の過程はシークエンシャルに進むのではなく、往還を繰り返しながら次第に確からしいものとして明らかになった。ただし、研究全体としては、完全に資料から理論を構築していくグラウンデッドなアプローチを取るのではなく、先行的取り組みを通じて調査課題の絞り込みと予備的仮定の構築を行い、それを検証するというハイブリッドな構造とする (図 3-2)。地域の居場所とい

うこれまであまり取り上げられていない萌芽的な場で生じている参加者それぞれの生活のなかに埋め込まれた体験にフォーカスするため、ある程度分析の構図を絞り込む必要があるためである（木下 2003）。

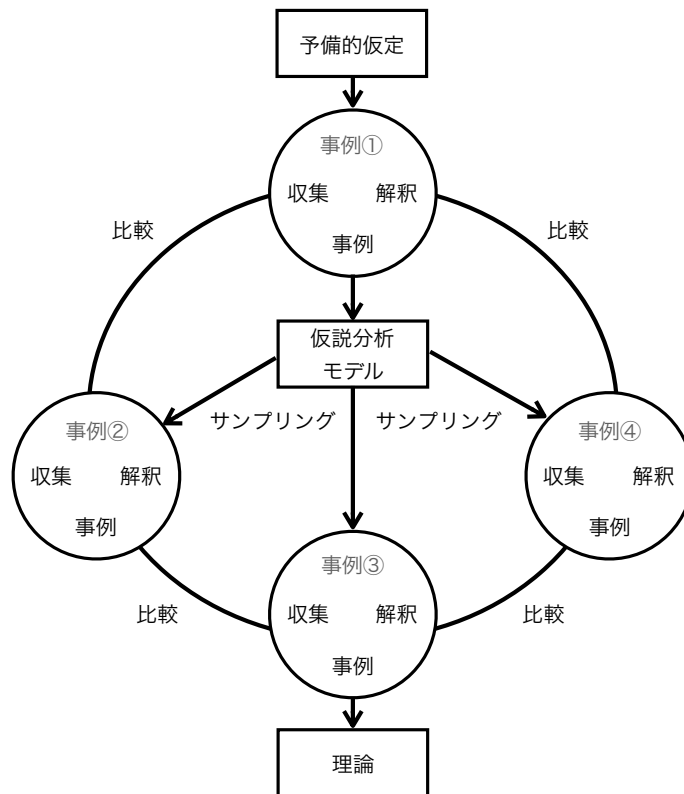


図 3-3. プロセスモデル

フリック p113 を元に筆者作成

### フィールドへのアクセス

事例選択の経緯や各事例の詳細は次章で述べるが、全国の地域の居場所のうち、一定程度成功を収めており、かつ多様なテーマを持つ3つの事例を取り上げる。そして、各事例10名程度の参加者とプラットフォームアーキテクトである主宰者に対する聞き取り調査を行う。

研究課題1についての参加者に対する聞き取り調査については、トランスクリプトを作成し、質的データ分析の手法を用いて、参加者が他者との相互作用によってどのように意識や行動を変化させてきたかを構造化する。この分析過程においては、それぞれの居場所の固有な要素と共通する要素が存在すると考えられるが、固有性と普遍性を洗い出すことによって、より協働プラットフォームにおいて一般的に見られると考えられる参加者同士の相互作用プロセスを抽出する。

協働プラットフォーム設計の要件（研究課題2）については、各プラットフォームアーキテク

トへの聞き取り、参与観察、資料調査、実測調査に基づいて、事例ごとにプラットフォーム設計の5要件にわけてまとめ、研究課題1との関連を考察する。

こうした事例研究では、フィールドへのアクセスが大きな課題となる。地域の居場所に対する調査の場合、代表者へのヒアリングには応じてもらえる可能性はあるが、居場所の参加者へのインタビューを行う場合、直接参加者へアプローチすることは難しいことから、代表者や運営スタッフに紹介してもらう必要がある。しかし、相応の信頼関係を築けなければ、参加者の紹介は望めない。筆者は、芝の家の実践を通じて、コミュニティカフェ全国連絡会の共同代表を務めるなど、各地の地域の居場所の運営者との関係があった。こうした信頼関係に基づいて、調査協力を依頼することにした。とはいえ、フィールドに入ることは、状況への介入であり、調査の意図を事前に理解してもらうとともに、研究者の振る舞いが居場所の人間関係に影響を及ぼす可能性があることに十分配慮して調査を進めることとした。また、参加者個別のインタビューにあたっては、事前に調査趣旨を説明し、個人情報取り扱いなどについて同意を得るようにした。

#### データコレクション：聞き取り調査、参与観察、実測調査

調査の対象となる母集団のなかからランダムサンプリングするのがサーベイ調査では一般的だが、質的研究の場合は、理論的サンプリングを行う。本研究では、各事例につき10名程度の参加者に対するインタビューを実施するが、対象者は、その地域の居場所に参加するようになって主体的に活動を行うようになった参加者とする。実際には、すべての来場者が繰り返し居場所に足を運び、活発な活動をはじめたわけではない。本研究における研究課題から、全来場者のなかで、まずは、つながりを得ることで活動をはじめた典型的な参加者を選び、そのメカニズムを解明する。こうした参加者は、居場所の主催者にリストアップしていただき、紹介を依頼する。

実際の調査では、各対象者1時間ほどの半構造化インタビューを実施し、居場所に出会ってから現在までを振り返り、その過程のなかでどのような体験をしたか、特に他者との関係変化、自己の意識変化、行動の変化を中心に聞く。インタビューは、短期間のライフストーリーの形式となる。また居場所の主催者（プラットフォームアーキテクト）に対しては、調査課題2の仮説的分析モデルにもとづき、プラットフォーム構築のためにどのような工夫を行っているか、詳細にインタビューを行う。

また、地域の居場所の空間的資料として簡便な実測調査を行う。また、参与観察、取材記事や取得可能な場合は報告書など内部資料もあわせて収集する。

#### データ分析手法

インタビューによって得られたデータは、質的データ分析法（佐藤 2008）を用いて分析する。具体的な手順としては、図3-4のように、まずインタビューデータのトランスクリプト（逐語

記録)を作成し、コーディングを行う。40名分のトランスクリプトからコードのセグメントを作成し、概念化を行う。複数の概念から、参加者のストーリーラインを作成する。必要に応じて理論的サンプリングを行い、理論的飽和が起きるまで継続した後、各事例に共通するプロセスと特殊要因を峻別し、協働プラットフォームの多くに適用できる「つながり」と「活動」の生成過程を構造化する。こうした手続きをとることで、個人に固有の人生の転機の主観的体験を、過度に一般化することなく、また定性的データを恣意的に解釈する危険を極力回避しながら、自己認識と他者関係の変化およびそれらの相互作用として比較検証可能な形で提示することが可能となる。

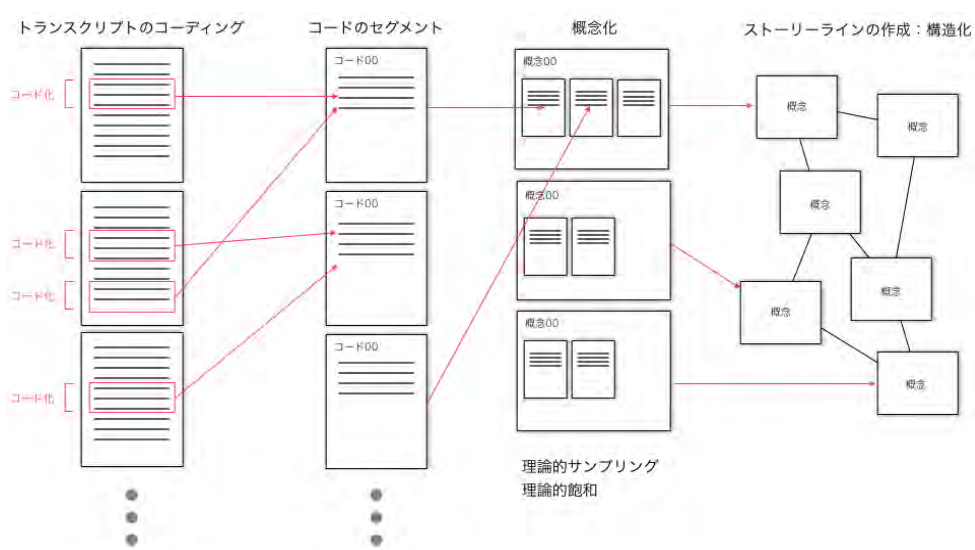


図 3-4. 質的データ分析法による聞き取り調査資料の分析手順

## 第4章 研究対象：地域の居場所の事例

### 4-1 事例の選定

ここでは、研究対象となる事例の選択理由と各事例の概要をまとめる。第一事例は筆者が企画、実践を手掛けた芝の家である。ここでのアクションリサーチはプレ調査としても位置付けられる。その他の事例については、様々な事例のなかでも多くの人々が利用する成功事例を取り上げるとともに、多様な形態の事例を比較検証する。第2章で述べたように、地域の居場所にも様々なタイプが存在するため、偏りのないサンプリングが必要と考えられるからだ。

選定にあたっては、利用タイプとコミュニティの形態の二つの視点から区分し、合計4つの類型を定義、それぞれの代表例を選んだ。利用タイプは、交流を主なアクティビティとする居場所型とつながりをベースにした活動を目指す活動拠点型に分けられ、コミュニティの形態は、来場者の集まり方として近隣住民を主な対象としているか（地域コミュニティ重視）、特定のテーマにもとづいて比較的広い範囲から人が集まっているか（テーマコミュニティ重視）という類型に分けられる。さらに、活動テーマに偏りがないように、地域の居場所の代表的テーマであるコミュニティ形成支援、地域福祉、コミュニティビジネス、まちづくりを中心に活動する4事例を選択した。

#### 「居場所型」と「活動拠点型」

地域の居場所はいずれも参加者同士の交流が可能な空間であるものの、そのような状況を生み出すための施設タイプには異なるアプローチがある。ここでは、大きく分けて来場者の交流を主な目的とする居場所型と、来場者がなんらかの活動を行うことを目的とする活動拠点型に区分する。居場所タイプには、サロンやラウンジなど純粹に交流を目的につくられた空間、コミュニティカフェなど飲食店をベースに交流環境をつくっているケースがある。具体例としては、本研究で取り上げる芝の家や、オーナーの遺志を継いで一軒家を地域の交流サロンとして運営している世田谷区上北沢の「岡さんの家 TOMO」など挙げられる。子どもやひきこもりなどの若者の居場所である「まちの学び舎ハルハウス」（京都市）は、飲食店をベースにした拠点である。この類型には地域に開かれた形のデイサービスや青少年の居場所も含めることができるだろう。活動拠点型としては、「港南台タウンカフェ」は喫茶店という形式を基本にしながら、まちづくりのネットワークや活動の拠点になっている。「Impact Hub Kyoto」（京都市）、「リタクラブ」（富山市）などは、コワーキングスペースとして地域活動や社会起業を行うことを目的とした拠点で、こうした拠点に集まる人同士のつながりが結果的に生じている。また、助産施設や作業場のうち地域の交流拠点となっている例もここに含まれる。

### 「地縁コミュニティ」と「テーマコミュニティ」

もう一つの類型の軸として、立地する地域の地縁コミュニティの形成そのものを重視するケースと、福祉や子育て、地域活性化や自助グループの活動など特定のテーマコミュニティを重視する2つの対象の違いがある。ベースとなるコミュニティが地縁型かテーマ型か(広井 2008)という区分であるが、もちろん地域福祉や子育て支援などは地域に根ざした生活コミュニティであるため一定の地域的近接性が鍵となるが、それでも、前者では参加者が集まる範囲が比較的狭い地域になるのに対して、後者は市域全体や全県から来場者が集まるなど圏域が広がる傾向がある。具体例としては、被災地の地域コミュニティを取り戻す拠点として設置・運営されている「居場所ハウス」(大船渡市)や、団地の交流拠点であり様々な活動の舞台にもなっている「ひがしまち街角広場」は、比較的狭い地域から参加者が集まり、地域性の高いコミュニティの形成につながっている。本研究で取り上げる「うちの実家」では、子どもから高齢者までが民家に集まりあたたかい交流を行われており、生活コミュニティの場として近隣の人も参加しているが、広くは訪問介護や地域包括システムなど県全域から地域福祉の関係者が集まる広範囲のネットワークが生まれている。長野県上田市の「HanaLab」はコワーキングスペースという形態で、上田市全域および隣接市からの利用者が集まるコミュニティ拠点となっている。

表 4-1. 地域の居場所の類型

	地縁コミュニティ重視	テーマコミュニティ重視
居場所型	比較的狭い地域のコミュニティ形成を主眼とする場。 例:「芝の家」(港区)、「岡さんの家 TOMO」(世田谷区)、「居場所ハウス」(大船渡市)など	子育てサロンや認知症カフェなど特定のテーマを持つ場で、対象地域は比較的広い。 例:「ふれあいの家おばちゃんち」(品川区)、「まちの学び舎ハルハウス」(京都市)、「うちの実家」(新潟市)など
活動拠点型	まちづくり活動の拠点としての性格を持つ場。 例:「ひがしまち街角広場」(豊中市)、「港南台タウンカフェ」(横浜市)、「津屋崎ブランチ」(福津市)など	社会起業やコミュニティビジネスを通じた地域活性化を目指す場。 「HanaLab」(上田市)、「Impact Hub Kyoto」(京都市)、「リタクラブ」(富山市)など

表 4-1 は、4 類型の整理と代表的な事例を挙げた表である。居場所型で地縁コミュニティ重視の場は、比較的狭い地域のコミュニティ形成を主眼とする居場所である。居場所型でテーマコミュニティ重視の場は、子育てサロンや認知症カフェなど特定のテーマを持つ場で、対象地域は比較的広い。また、活動拠点型で地縁コミュニティ重視の場は、まちづくり活動の拠点としての性格を持つ拠点である。そして、活動拠点型でテーマコミュニティ重視の場は、社会起業

やコミュニティビジネスを通じた地域活性化を目指す拠点である。もちろん、完全にどこか一つに分類できず象限をまたぐ事例も考えられるが、多様な形態の地域の居場所の多くはこの類型に含まれると考えられる。

#### 本研究で取り上げる事例

本研究では、表 4-1 の類型のうちから 1 例ずつを研究対象とする。1 事例目が芝の家だが、これは居場所型・地縁コミュニティ重視の事例である。その他の事例については、芝の家が区役所と大学の協働事業であるため、任意団体や株式会社などを含めた様々な運営主体から選択すること、また、活動テーマについては、地域の居場所のテーマは多岐にわたるが、その代表的な領域である、地域福祉、コミュニティビジネス、まちづくりの分野から一事例ずつを選定した。事例は、表 4-2 の通りである。「うちの実家」は、常設型の地域の茶の間の先駆けとして地域福祉の領域ではモデルケースとなる居場所である。「リタクラブ」は、コミュニティビジネスや生涯学習というテーマを掲げ、参加者同士のコミュニティ形成を重視した富山県有数のコワーキングスペースである。「津屋崎ランチ」は、まちづくりや移住促進などを目的に地縁コミュニティを基盤とした活動拠点型の場であり、数々の実績を上げている。いずれも各分野における成功例といえる事例であること、最低 3 年間継続している持続性の高い事例であることを基準とした。

表 4-2. 比較対象とする事例

	地縁コミュニティ重視	テーマコミュニティ重視
居場所型	「芝の家」 (東京都港区)	「うちの実家」 (新潟市)
活動拠点型	「津屋崎ランチ」 (福津市)	「リタクラブ」 (富山市)

各事例の詳細は追って記述するが、表 4-3 が基本情報をまとめた一覧である。

表 4-3. 調査対象の基本情報

	芝の家	うちの実家	リタクラブ	津屋崎ランチ
所在地	東京都港区	新潟市	富山市	福津市
類型	居場所／地縁コミュニティ重視	居場所／テーマコミュニティ重視	活動拠点型／テーマコミュニティ重視	活動拠点型／地縁コミュニティ重視
テーマ	地域コミュニティ	地域福祉	コミュニティビジネス/生涯学習	まちづくり/移住
代表者	坂倉杏介	河田瑠子	平木柳太郎	山口覚
事業主体	行政+大学	民間(個人)	民間(株式会社)	行政 → 民間(NPO)
設立年	2008年	2003年	2009年	2009年
開室時間	火～土曜日 12時～17時	火・金曜日 10時～15時 (毎月第三金曜日 18時～「夜の茶の間」)	月～木曜日10～22時 金～日曜日10～20時 (定休日:第2、4日曜日)	必要に応じていつでも
利用形態	無料 (喫茶コーナー利用:100円)	会員制 入会費 2000円、参加費300円、食事代300円	会員制 入会金 3000円+月額 2500円～4500円	とくになし

## 4-2 事例の概要

対象となる4事例の概要は以下の通りである。

### 事例1 芝の家

芝の家は、芝地区総合支所の地域事業「地域をつなぐ！交流の場づくり事業」の拠点として、2008年10月、芝三丁目に開設された。事業の目的は、都市部で薄くなりがち近隣同士のつながりをつくり、子どもから高齢者まで安心して暮らしていける環境づくりの支援である。そのために、近隣の人が気軽に立ち寄り、交流できる拠点をまず設置し、そこから住民同士の関係性や活動を育んでいくという事業で、慶應義塾大学との連携で実施されている。

芝三丁目の周囲には東京タワーや増上寺といった観光名所があり、再開発によって建てられた高層ビルも多いが、芝の家のある一角は旧来の木造家屋も多く、細い路地が縦横に走る下町的な雰囲気を残した区画である。かつてはこのあたりも商店街の賑わいを見せていたそうだが、いまは住民や近隣の会社員の他にはそれほど人通りは多くない。芝の家の外観は、周囲の木造店舗と馴染むように古い建具や古材によってリフォームされ、通りに向かって玄関と縁側が開かれている。軒先に置かれた手書きの看板やポスター、植木鉢などが手づくりのあたたかみを醸し出している。室内は、ちゃぶ台やソファが置かれ、どこか懐かしい家のような雰囲気である。また、駄菓子や喫茶コーナー、遊び道具やピアノなどもあり、お茶を飲んだり、けん玉やベーゴマで遊んだり、ソファでくつろいだり、ちゃぶ台でおしゃべりしたりと、自由に過ごすことができる。



現在芝の家は、月曜日から土曜日まで週 5 日間オープンし、赤ちゃんから 80 代のお年寄りまで多様な世代が訪れては、おしゃべりをしたりお茶を飲んだり、好き好きに過ごしている。年間の来場者は約 1 万人（1 日平均約 38 人<sup>31</sup>）、うち約 30%が子ども、15%が高齢者である。来場者は、散歩や買い物のついでによる近隣の人たち、仲間と遊びにくる小学生たち、赤ちゃん連れのお母さん、おしゃべりにくるお年寄り、お弁当を食べにくる会社員、授業の空き時間をつぶしにくる大学生など多様で、近隣の人もいれば、地域外から通う人もいる。しかも、そのいろいろな人たちが、年齢や立場の違いを超えて、ここではともに同じ場を共有し、分け隔てなく関わりあっている。芝の家で出会った人同士が、菜園づくりや子育て支援などの地域活動をはじめめることも多い。開設以来 9 年が経ち、いまではすっかり地域の居場所として溶け込んでいる。芝の家がどのような経緯で設立され、地域の居場所として定着してきたかという過程については、4-3 で詳述する。



図 4-1. 芝の家

## 事例 2 うちの実家

二つ目の事例は、有償ボランティアによる在宅福祉サービス「まごころヘルプ」を 1990 年に新潟市で設立した河田圭子が代表を勤める常設型地域の茶の間「うちの実家」である。「誰かに会いたい、誰かと話したい、誰かと一緒にお茶のみしたい、行くところがほしいという人々の願い」に応える居場所として、住宅地の空き家を借り受けて 2003 年に始まった（2013 年閉所）。月～金曜日と第三日曜日、10 時から 15 時までオープンし、「誰でも、いつ来てもいいし、いつ帰ってもいい」居場所として、高齢者を中心に、子どもや障害を持つ人など多様な来場者で賑わい、年間 4、000 人以上の利用者があった。

「うちの実家」の利用者やその過ごした方は、多様である。赤ちゃんからお年寄りまで、障害があってもなくても、どんな人でも訪れることができる。昼食をとることもできるし、疲れた人は奥の部屋で休憩することもできる。おしゃべりに講じることも、一人であることもでき、望むなら、昼食のメニューづくりやさおり織など、様々な作業に取り組んでみることもできる。

<sup>31</sup> 「芝の家：地域をつなぐ！交流の場づくりプロジェクト実施報告書 2016 年度」

また、家に帰りたくないという人がいれば、短期の宿泊も受け容れる。多種多様なニーズに応える場である。しかし一方で、できることは自分でする、何をするかは自分で決めるという、自主性を尊重した場でもある。

この居場所の主宰者は、新潟県では初となる有償ボランティアによる在宅福祉サービスを設立した河田圭子氏である。高齢者や障害者など誰でも利用できる居場所の草分け的存在で、地域の居場所の全県普及のきっかけにもなる。2010年からは、「夜の茶の間」と銘打って、月に1回、第二金曜日の18時から、ともに飲み語らう場をはじめた。市や県の職員、近隣市区町村の社会福祉協議会の職員、福祉関係の事業者、学生や研究者などが全国から集まり、多い時には60名を超える人々で賑わうようになった。施設や組織の壁を越えた異業種間のネットワークづくりの場として定着している。



図 4-2. 「うちの実家」

### 事例 3 リタクラブ

事例 3 は、富山県富山市に所在するコワーキングスペースである。主宰者の平木柳太郎氏の「地元・富山を元気にしたい」という思いから設立された、「学びたい大人のための自習室」をコンセプトとしたスペースで、設立は 2010 年である（活動は 2015 年まで）。1 階は、主にフリーアドレスのワークスペース、2 階に固定デスクのシェアオフィススペースと講座などに利用できる会議室がある。会員制でオフィス機器などのサービス提供をするほか、各種の講座等を開催している。

主な利用者は、20 代から 50 代のフリーランスのワーカーだが、証券会社の会社員や印刷会社のオーナーなども利用している。ここで資料づくりや事務作業を終日する人もあれば、営業先のアポイントの間の空き時間に立ち寄るといった利用もある。10 数台の駐車場が用意されているため、県内一円から多くの人が集まっている。

特徴的なのは、単にワークスペースを貸しているのではなく、向上心を持ち自分の可能性を広げていこうと努力している人たちのゆるやかなコミュニティをつくり、様々なチャレンジをしやすい環境を提供している点である。入会時にはどんなことを実現したいのか、得意なことは何かなどをヒアリングし、適宜、関心の重なる人やお互いの持っているスキルを活かしあえ

るような人を紹介したり、自分の特技を活かしたセミナーを開くことを支援したりしている。その結果、ここで出会った人が共同で事業を請け負ったり、起業したりということが生まれている。また、株式会社で運営され、採算ベースに乗っている事例でもある。



図 4-3. リタクラブ

#### 事例 4 津屋崎ランチ

事例 4 は、福岡県福津市にある、まちづくりや移住支援を行う組織のオフィスとしても使われる拠点である。「津屋崎ランチ」のある津屋崎千軒と呼ばれる地区は、かつては漁村として、戦後は海水浴などで賑わった港町だが、近年は鉄道の廃線などの影響もあり衰退しつつあった。2009 年、この地区の活性化のために全国から公募で集まった若者 4 人（代表の山口覚氏を含む）によって、この拠点がつくられた。地区の中心部近くの大きな民家を借り受け、共同のオフィススペースにするほか、広いリビングを地域の様々な人が集まるスペースとして開放している。ここを拠点に、地域内外の人による様々な起業が起こり、これまで 100 人以上が移住している。

リビングは「未来会議室」と名づけられ、様々なイベントを実施したり、ワークショップや会議が行われたりしている。こうした交流事業は津屋崎ランチで行われる企画のほかにも、中学校でのワールドカフェ、手づくり市、浜辺で開催される映画祭など多様なかたちで行われ、地域内外の交流人口の増加につながっている。そのほか、移住支援事業として地域の暮らしを紹介するツアーや、小さな起業を支援する講座、さらには空き家再生の事業なども行っている。居場所に入出入りする人だけではなく、この拠点が展開する多彩な活動が地域に関わる様々な立場の人をゆるやかに結びつけるプラットフォームになっている。



図 4-4. 津屋崎ランチ

### 4-3 芝の家の取り組み

芝の家は、2008年より港区と慶應義塾大学の協働で実施されているコミュニティ形成事業の拠点であり、筆者は開設準備段階から計画立案や空間設計、スタッフのコーディネートや来場者の対応などの運営まで携わってきた。それ自体が、都心部におけるコミュニティ形成手法を探るアクションリサーチを用いた調査研究でもあるが、本研究においても対象事例の一つであり、また研究課題と仮説分析モデルの構築は、芝の家における実践や参与観察から導き出されたものである。本節では、芝の家の概況や設立背景、そしてそこでのプラットフォーム設計をどのような考えで行ってきたか、その結果どのようなことが起こってきたのか、概略をまとめる。

#### 芝の家の概況

##### ・開室日数

芝の家の概況を、2015年度の報告書にもとづき整理する。まず開室状況は、年間合計240日であった。オープン日は、火曜～土曜日で、日曜日と月曜日は定休日である。開室時間帯は、火・木曜日が11時～16時、水・金・土曜日は12時～17時である。定休日のほか、5月の連休、夏期休暇、年末年始に長期の休みがある。

火曜～土曜日の開室は、曜日ごとに異なるテーマで運営されている。芝の家は、多様で多世代の人が集える交流拠点として、年代や地域、立場などを問わずに自由に出入りし、過ごせる場であるが、たとえば子どもたちが元気に遊んでいると、子どもを対象とした施設と捉えられ大人の方は遠慮されてしまうということも起こる。このため、曜日によって室内の設えやスタッフの意識を変え、多様な人が利用しやすいよう空している。具体的には、大人がゆったり過ごせる時間（火・木曜日：コミュニティ喫茶）と子どもがにぎやかに遊べる時間（水・金曜日：駄菓子と昔遊びのオープンスペース）、そして土曜日は「誰でもようこそ」と迎え入れられる雰囲気運営している。

##### ・来場者数

年間来場者数は、9168人であった。前年度は8842人なので微増である。年間開室日数は240日であるから、1日辺りの平均来場者数は、38.2人となる。イベントが行われ60人以上の来場者で賑わう日もあれば、20人程度でゆっくり静かに過ごす日もある。しかし、来場者が20名を下回ることはほとんどない。

飲食をともしない地域の居場所で、しかも常設型で運営されている事例で、1日平均40人近くが訪れる例は、全国的に見ても稀有である。設置から8年以上が経ち、芝の家への立ち寄りが日常の習慣になっている人の数が一定数以上いることが、絶えず人の出入りする状況を生み出している。

またスタッフも、事務局を担うメンバーと「お当番」として日々の場づくりを共にするボランティアスタッフのうち継続的に関わっている者も多く、それが安定した運営につながっている。芝の家では、日々をオープンする「お当番」スタッフ同士のコミュニケーションを大切にしながら、来場者を受け入れることを心がけており、朝晩のスタッフミーティングや日誌の共有などの工夫によって、お当番スタッフの顔ぶれが日毎に少しずつ変わっても、芝の家全体として一体感のある連続的な場づくりをすることができている要因である。

年度ごとの年間来場者のべ人数と1日あたり来場者数を示したグラフが図5である。2013年から開室日が週5日に減少したこと、中心となるスタッフの交代など運営が不安定になった影響もあり一時的に来場者数の落ち込みはあったが、以降は、来場者数は2012年の水準まで戻り、むしろ1日あたり来場者数は増加している。図中には、2014年に開設されたご近所ラボ新橋の来場者数の推移も併記してある。こちらはまだオープン後2年分のデータしかないが、1年で3倍以上に来場者が増えるなど、着実に発展している。参考までに芝の家とご近所ラボ新橋の合計来場者数を示すと、2014年度は9,456人、2015年度は11,152人にのぼる。芝の家とご近所ラボ新橋の両方に通う人も存在するが、2つの拠点を持つことで来場者が分散するのではなく、着実に多くの人の来場機会を増やしているといえる。数値はのべ人数であり、実人数のデータはないが、少なくとも数百人の規模で、芝の家やご近所ラボ新橋を利用している人がいると推測することができる。

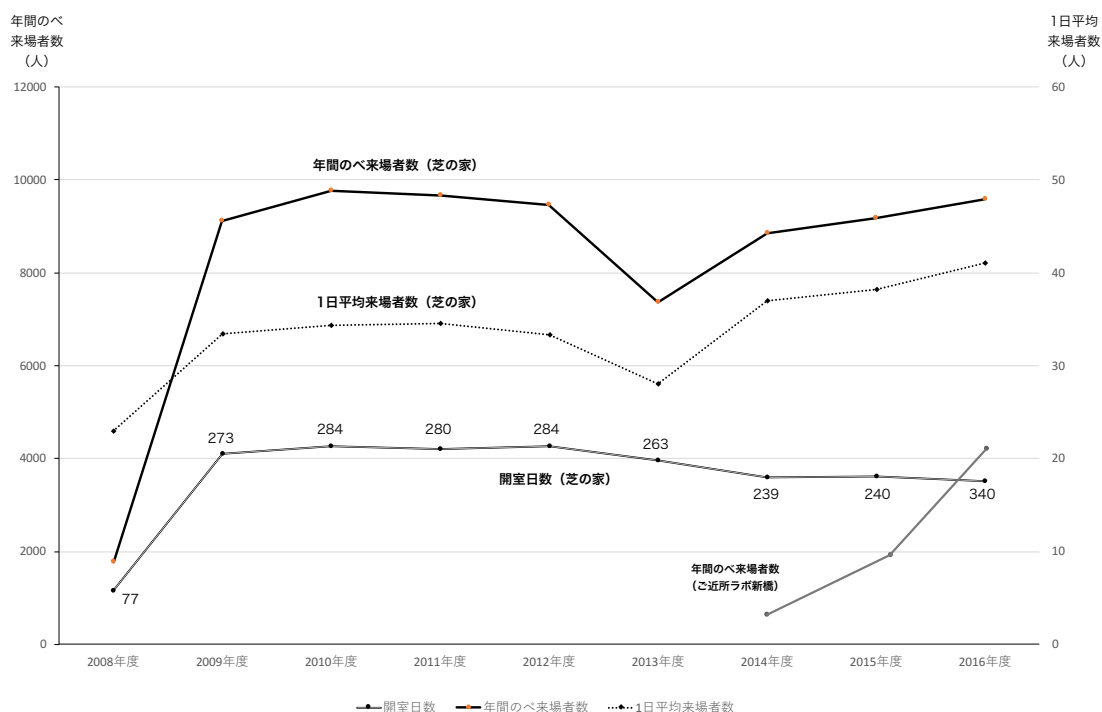


図 4-5. 芝の家の来場者数の推移

#### ・来場者の年代別比率と特徴

芝の家は、子どもから高齢者まで多世代の人々は自由に入出りできる場所である。世代別の来場者の割合は、高齢者 15% (65 歳～、1368 人/年、5.7 人/日)、大人 51% (18 歳～65 歳 4368 人/年、19.3 人/日)、子ども 34% (0 歳～18 歳、3162 人/年、13.2 人/日) である。男女比の集計はとっていないが、印象としては女性の割合が多い。特に高齢者の世代は、その傾向が顕著である。子どもや高齢者は、近隣からの来場が多く、大人は在勤者や在学者が多くなる。

高齢者は多くが近隣に住む女性で、お昼をみんなで持ち寄ってにぎやかにおしゃべりしながら食べたり、お茶を用意して、おしゃべりや手しごとを楽しんだりするような集まりが定着している。70 代のお当番スタッフが運営する木曜日は、高齢者が多い。同世代であると、お年寄り（高齢者）世代の人も自分も入って良い場所なのだと認識してくださり入りやすくなるようである。

子どもの来場者は、乳幼児が母親と一緒に訪れる場合と、小学生以上で自分の意思で訪れるケースに分けられる。高齢者と同様、事務局スタッフに 2 児（0 歳、2 歳）の母親がおり、子どもと共に過ごしながらか働くことを実践していることで、子づれでの来場がしやすい雰囲気が生まれている。来場する小学生の顔ぶれは、スタッフや来場者など大人と遊ぶことが楽しい低学年を中心に、友人を誘って来場する中・高学年の女の子達、そして中・高学年男の子達が友達同士でゲームを楽しみながら気ままに過ごす場所としても活用されている。中学生・高校生の来場は多く無いが、小学生時代より来場していた子どもが数名、ふらりと時々立ち寄ったり、おまつりで屋台のお手伝ったりしている。

「大人」の来場者（大学生以上 65 歳未満）の在住/在勤の別は、集計をとっていないためあくまでも印象ではあるが、近隣在住・在勤者と遠方からの来場/見学者の比は、半々くらいといえそうである。属性や過ごし方は多様である。赤ちゃん連れのお母さん、お弁当を食べにくる会社員、授業の空き時間をつぶしにくる大学生のほか、見学や取材に訪れる人も少なくない。2015 年度は、大学生が授業での見学や卒論の調査対象として、延べ約 320 人訪れた。また、大学生の企画で始まった週 1 回の夜のオープン「よるしば」には、近隣在住の会社員など平日の昼間は来場できない大人の来場者の増加にもつながっている。

#### ・運営体制

芝の家が、多様な人が集まり安心して過ごせる場になっているのは、スタッフの力が大きい。運営は、事務局常勤スタッフとボランティアスタッフが担っている。

事務局常勤スタッフは 3 名で、日々の場づくりおよび、事務的な作業全般（企画運営、広報や渉外活動など）を担当している。2つの拠点（芝の家、ご近所ラボ新橋）のそれぞれの現場を担当する 2 人と、両拠点および事業全体のコーディネイトを行う事務局長が 1 人という体制である。

ボランティアスタッフは、主に日々の「お当番」を担当するスタッフ（13人）と、部活動やイベントの企画者・サポート役として主体的に関わるメンバー（約40人）からなる。年齢は、20歳代の学生から70歳代までと幅広い。芝の家が毎日安定してオープンされていること、レコードコンサート、アロマ部、とん活部、持ち寄り昼食会もぐもぐはじめ多くの継続的な活動が行われていることは、こうしたボランティアスタッフの力が大きい。

#### ・スタッフミーティング

様々な形で関わる50名以上で運営されている芝の家だが、全員が集まる上意下達の指示系統があるわけではない。主なスタッフ間コミュニケーションの仕組みは、日々のオープン時間の前後に、その日のスタッフで行うミーティングと、スタッフMLで共有される日誌である。ミーティングでは、その日の場づくりでの工夫や困ったこと、よかったこと、嬉しかったことなどを共有し、それが暗黙的に共有される芝の家の価値観として蓄積されている。また、事業主体である芝地区総合支所協働推進課の担当職員との定例ミーティングも月に2回程度行い、運営に関わる報告、相談、様々な決定を行っている。

#### ・プロジェクトやイベントなど参加者の主体的活動

芝の家の運営において、来場者数以上に増加した点は、来場者の主体的活動の増加である。坂倉（2013）では、2008年～2011年度までの芝の家で開催されたイベントのうち、運営スタッフが企画・制作したイベントと来場者が主体的に企画したものを比較し、後者が徐々に増えていることを指摘している。2012年度以降もこの傾向は続いており、2015年度は実に150回以上のイベントが開催され（複数回開催されるイベントも含む）、その85%以上は来場者主導のイベントとなっている。

表4-4は、2008年度、2011年度、2015年度に行われたイベントを比較した一覧である。2008年度に開催されたイベントは17種類で、うち4つのみが来場者や近隣住民が発案し主体的に実施したイベントであった。2011年度になると、13イベントのうち8件が来場者主体の開催になる。これに加えて、一回限りのイベントではなく継続的なプロジェクトが生まれており、その数は代表的なものだけで9件を数えた。いずれも来場者や近隣住民が中心となって進める活動である。2015年度は、16イベントのうち11が来場者主体で、その他に12の部活やプロジェクトが行われている。定期的に行われるイベントやプロジェクトも増加していることから、総合すると150回以上のイベントが開催されるという状況になっている。

表 4-4. 芝の家で開催されているイベント（2008、2011、2015 年度の比較）

2008年度		2011年度		2015年度	
来場者主体	イベント名称	来場者主体	イベント名称	来場者主体	イベント名称
イ ベ ン ト	● イベント「えんにち」	イ ベ ン ト	● 春のスタッフ募集説明会	イ ベ ン ト	● 書を楽しむ時間
	● キックオフ・ミーティング 説明会&懇談会		● アロマテラピーハンドマッサージ		● 床塗り・壁ぬりワークショップ
	● 港区と慶應義塾との連携協力に関する基本協定締結式		● 芝の家コミュニティ講座「花づくりで広がる地域の見守り」		● 公開講座「社会学特講X: コミュニティ・プラットフォーム論」
	● 昭和の地域力再発見事業拠点「芝の家」オープニングイベント		● レコードで聴くジャズの名演奏		● うちわ作り
	● 隣人まつり もくもく/Peeper		● 絵手紙教室		● マジック塾
	● スポーツチャンバラ教室		● 持ち寄り昼食会「もくもく」		● 如聴妄想がるた
	● 芝会議 地域コミュニティ部会		● ミニ茶会 気軽にお抹茶（点茶体験もあり）		● 出張ふわカフェ
	● 音で発見、芝のまち 親子で参加するサウンド・エデュケーション・ワークショップ		● おやつづくり		● とうきょうプレイヤー
	● 大学地域連携シンポジウム 慶應義塾大学三田キャンパス周辺での大学地域連携の取り組み		● 世間遺産を探そう！ワークショップ		● 芝の家7周年記念 いるはにほへつと芝まつり
	● うたの住む家ミニコンサートin芝の家		● 芝の家3周年記念 いるはにほへつと芝まつり		● 出張@コードモテウナイカイ
	● アートをみて、話そう！ アメリア・アレナスの対話型美術鑑賞ワークショップ		● 書遊び 書き初め編		● 落語会
	● まちの語り部養成講座修了式		● 芝の家コミュニティ講座「認知症の人と共に生きる -人間中心ケアを知る- 認知症の人ではなく、認知症の人」		● 芝でこそ・茶話会
	● 認知症サポーター養成講座		● 芝の家プロジェクト発表会「3人寄せれば、地域がうごく？」		● 木に名前をつけよう
	● 芝塾：コミュニティ講座 遊びあふれる豊かなコミュニティをめざして		● 芝の家コミュニティ菜園プロジェクト		● 卒論発表会
	● 港区は落語の宝庫		● 縁をつなげるすこやかプロジェクト『えんす〜Connecting Neighborhood Project』		● 『誕生学』おはなし会 からだであそぶ芝の家
● アンサンブルULALA 春のうららの空想旅行	● 『芝でこそ』芝で子育てしたくなるまちづくりプロジェクト	● アロマ部			
● レコードで聴くジャズの名演奏	● 芝んちRadio	● とん活部（肩タタキ）			
	● 芝にコレグティブハウスがあったらいいなプロジェクト	● ふらっと芝の家〜リヴァイヴ・クラブ〜			
	● プロジェクト	● レコードで聴くジャズの名演奏			
	● 早起き夜寝クラブ	● 持ち寄り昼食会「もくもく」			
	● さんさんプロジェクト芝の家	● おやつづくり			
		● 音遊び実験室			
		● よるしば			
		● リユース・for・きっず			
		● 芝でこそ・手しごとの時間			
		● 芝でこそ・しばこうえんあそび隊！			
		● 東京迂回路研究 もやもやフィールドワーク			
		● 朝市切符			

### 居場所としての成熟過程

2015 年における芝の家の概況をまとめたが、こうした状況は運営形態を思考錯誤するなかで徐々にできあがってきたのであり、2008 年の開設時当初からできたわけでない。とりわけ、参加者同士のつながりや主体的な活動は、運営を重ねるなかで次第に成熟してきた。2011 年に発行された報告書（慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所 2011）には、開設後 3 年間の場の成立過程が記述されており、最初の 3 年間で定着した芝の家の運営スタイルが、4 年目以降現在に至るまで継続している。ここでは、前述の報告書から経緯を抜粋するとともに、筆者が運営上の課題をどう受け止め、どのような対応をしてきたかを振り返りながら、開設後の 3 年間で芝の家の運営形態や参加者の活動の変化を整理する。

#### ・開設準備

芝の家の発端は、2008 年初頭に港区芝地区総合支所から慶應義塾大学に、コミュニティ形成事業の協力が打診されたことに始まる。約半年間の企画調整のあと、芝 3-26-10、いろは通りに面したハイツ猿田 1F 開所することが決まり、同年 8 月より改装工事が始まった。

設計士と相談しながら、元々オフィスとして使われていた室内の改装方針を検討し、来場者がくつろげるよう、また事業コンセプトを表現するため、古材、古建具を使用した懐かしさのある空間とした。外部から見通しがよく、街路の視認性を確保するため、二面の開口部を用意、とりわけ南面には、通りがかりの人々とのコミュニケーションをはかりやすいよう縁側を設置



した。室内は、60 m<sup>2</sup>弱。フローリングのオープンスペースと玄関、給湯室とトイレのほか、北西面の車庫を改装した事務スペースを設置。遊び道具や文具類を収納する棚、移動式の黒板、プロジェクターなどを設えた。外装は、古材を張り巡らせ、近隣に残る旧来の木造家屋との連続性をつくることで、地区のランドマークとなる雰囲気演出している。

並行して、7月には昭和をテーマにしたプレイベント、行政担当者と筆者による近隣町会への挨拶まわりを行い、またオープニングの3週間前には地元のキーパーソンを集め、事業紹介や大学・行政関係者との顔合わせを目的とするキックオフイベントを行った。芝の家という名称も、このキックオフの場で決定した。10月4日には、オープニングイベントを開催し、同時に港区と慶應義塾の地域連携に関する協定の調印式も実施した。

オープン後の運営については、当面のあいだは試験的な運用とすることとし、週3日（水・金・土曜日）をオープン日とし、毎週、行政担当者ととの定例ミーティングを行うことにした。

#### ・2008年度：垂直的關係から水平的關係への変化

開設から半年、まずは多くの近隣子どもたちが集まることで通りに賑わいが生まれた。こうした変化から、近隣の住民が徐々に芝の家を認知し、事業が次第に地域に受け入れられていった。事業の意義を理解してくれる人がいる一方で、当初は港区の事業ということで、貸し室として利用したいという要望や騒音や深夜まで学生が居残っていることに対するクレームなどもあり、近隣住民と芝の家の関係には、公共セクターと受益者という垂直的な緊張関係が散見された。しかし、スタッフの多くが若い学生であったこと、日々の運営における親切な対応や行き交う人への挨拶などを通じて、徐々にお互いが協力しあう水平的な関係が生まれていった。

2008年度報告書では、芝の家の運営を通じて多くの時間を地域で過ごしたスタッフによって観察された地域のコミュニケーションの質や量、信頼関係の規範の課題についての考察がなされている。芝地区では、昔ながらの人間関係が多く残されており、こうした点では、コミュニティ形成の潜在力は大きい。しかし一方で、現代社会一般にみられるコミュニケーション不全の傾向（住民同士のコミュニケーション機会の不足、援助的コミュニケーションに対する警戒心、他者理解の画一化、個人的コミュニケーションと組織的コミュニケーションの齟齬、安全・安心に対する漠然とした不安感、自助的活動へのサポートの必要性）も強く見られ、これが潜在的な地域力の発揮を妨げている。将来的なコミュニティ形成に向けて「あたたかい人と人とのつながり」を再生するためには、こうした身近なコミュニケーションの実体的な課題を把握し、改善していくことは重要であるということが明らかになった。

こうした現状認識に立つことで、地域コミュニティ形成とは、「地域住民自身が、地域内の問題や出来事、ふだんは出会うチャンスの少ない人々の活動に関心を持つとともに、そこに発見される様々な課題を解決し、また機会を実現する活動を協力して起こしていく力を高めていくこと」であるという視点が改めて確認された。芝の家を、多様な人々の想いや専門性が相乗効果を生み出し、地域文化を発展させるための出発点と位置づけるという、後のありようにつな

がる運営方針が生まれたのである。

とはいえ、「住民が主役」の事業を実現するためには、一人ひとりの来場者を尊重し、自由に行動できる場を提供することが必要である。住民中心の場を実現するためには、芝の家スタッフひとりひとりがロールモデルとなって、訪れる人々とあいだに信頼関係を築き、芝の家の雰囲気をつくっていかねばならない。そのため、まずはスタッフ同士が、次にスタッフと顔見知りの近隣の住民が、立場の違いを越えて相手の感情や意志を尊重し合うよう行動する。その場を運営する者同士が「あたたかい人と人とのつながり」を体現するような寛容で創造的なコミュニケーションを行ってれば、自然と場の雰囲気も寛いだ親密さを持つようになり、訪れた人のコミュニケーションスタイルにも影響を及ぼすはずだ。半年間の試行錯誤のなかで、こうした方向性が確立したのが、芝の家の初年度の成果であった。

#### ・2009年度：芝の家らしい運営形態の確立

初年度の経験を活かし、毎日のスタッフミーティングの導入など芝の家らしい運営形態が確立され、本格的に導入されたのが、2009年度である。それまで水・金・土曜日の3日のみだった開室日を拡大し、火・木・金曜日にはコミュニティ喫茶を開始、大人や高齢者がくつろげる場づくりに本格的に取り組むようになった。イベントの企画などは、これまで以上にスタッフの自発性や主体性が活かされ、オープン一周年を記念する「いろはにほへっと芝まつり」の開催、近隣住民と学生とが共同で取り組む継続的な活動としての「コミュニティ菜園プロジェクト」の開始などを通じて、自発的な活動が広がるとともに、近隣の人がお互いの持つ資源を提供しあうことで実現する共助コミュニティの芽生えがみられ、また、近隣施設との関係の構築も進んだ。利用者数は着実に増加し、地域内外での認知度も高まった。

2年度目は、芝の家が地域に受け入れられ、地域への波及効果が少しずつ見られるようになった年であった。地域コミュニティへの波及効果の確認できる指標として、2009年度報告書では次の三点が挙げられている。1) 共助型コミュニティ形成の萌芽がみられること、2) 利用者層が多様化し利用形態も多様化していること、3) 事業の認知度が上がるにつれて様々な組織・施設間の連携がはじまっていることである。

まず共助型コミュニティの形成について、初年度の地域課題として、地域住民同士の交流機会の不足や、「他者と関わりあうことで面倒なことになるのでは」という不安感が、本来芝地域に保存されている「近隣同士の温かい支え合い」を疎外する要因として挙げられていたが、芝の家の存在が間接的に影響を及ぼし、近隣同士が気軽に関わりあい、助けあう土壌は徐々に形成されていると感じられるようになった。こうした変化の実感は、日々の近隣住民との関わり方にもとづく印象が大きな割合を占めるが、それを端的に示す事例として、2009年10月に実施した「芝の家一周年記念 いろはにほへっと芝まつり（以下「ほへっとまつり」と呼ぶ）がある。

ほへっとまつりは、芝の家開設1周年の節目として企画されたイベントである。このイベン

トは、実施主体の多様性と近隣住民の協力による会場確保のふたつの面で、芝の家と近隣住民との関係が大きく変化したことを示す事例といえる。イベントを準備したのは、芝の家スタッフ17名のほか、北四国町会、芝寿会、近隣の小学生とそのお母さんたちなどである。準備にあたった人数は、合計約60名を数える。町会による屋台、芝寿会による綿菓子、小学生によるネイルサロンやミニFM局、そして小学生のお母さんたちは、駄菓子屋やフェイスペイントの店を出店し、さらに近隣住民や戸板女子短期大学の学生による雑貨やお菓子のお店もイベントを盛り上げた。また、近隣のバー「クラシック」ではイベントにあわせて特別に開店し、アルコール類の販売が行われた。これまで単発的なイベントでは、「レコードコンサート」や「スポーツチャンバラ教室」など、近隣住民との協働によって実施した事例もある。しかし、それらは特定の住民の特技や趣味を活かし、芝の家と連携してくみ上げられた事業であった。ほへっとまったりは、こうした連携形態を一步進め、町会やお母さんたちなどがイベントの主催者側として、それぞれ独自の企画を持ち寄り、力をあわせてつくりあげる事業となった。芝の家の一周年という節目を契機にこうした協働が実現した理由として、1年間のあいだに地域に定着し、芝の家スタッフとの個人的信頼関係が生じてきたことだけではなく、地域住民のあいだにそれぞれの資源を持ち寄り共助的に楽しむ風土が生じてきたことや、地域に対する関心や貢献する気持ちが高まったことが挙げられよう。

次に、利用者と利用形態の多様化だが、開設初年度に比較して芝の家の利用者は、ほぼ倍増し、特に、大人、高齢者の利用人数が大きく増えた。大人、高齢者の利用拡大は、第一に芝の家という交流拠点が、多様な世代の人々に対して価値を提供しているということを示している。利用者拡大の示す第二の点は、利用者層の多様化である。地域コミュニティの形成にとってより重要なのは、利用者の量的増加にも増して、利用者層の多様化であるといつてよい。なぜなら、利用者層の多様化は、利用形態と利用者同士の関係の多様化につながり、こうした多世代多文化の人々のネットワークが複合的に編み上げられていくことこそが、コミュニティの形成であると考えられるからである。

さらに、港区内の複数の支所から視察を受けるなど、行政セクターのなかでも、芝の家の認知度は向上した。また、町会や老人会、他大学や近隣のNPOに対する認知も高まっている。この結果として、多様な組織・施設とのネットワーク化が進んでいる。認知の拡大は事業のPRという側面もあるが、様々な組織・施設との連携による事業展開の多様化が、地域コミュニティに対する波及効果を促進するという点がより重要である。こうした組織・施設間のネットワーク化が進むことで、芝の家と利用者という関係だけではなく、一人ひとりの生活者を後方から支援する行政・民間の様々なサービスとの連携が可能となる。これによって、さらに多様な利用形態と利用者にとっての価値創出が生じているといえる。具体的に始まった取り組み例として、芝公園保育園からのお散歩受け入れ、港区教育委員会の推進する「子ども110番」の登録、町会のお祭りや餅つき大会、「まちぐるみ運動会」やサマーキャンプなどへの参加などがある。さらに、福祉関連では、港区高齢者在宅センターの利用者によるお散歩の立寄り、芝の家で展

開する地域の健康づくりプロジェクト「えんす〜ぷ」による高齢者在宅センターへの「ハーブ喫茶」の出張といった連携準備もはじまった。施設間の連携に加えて、福祉、子育て支援、教育といった多領域の研究者、実践者、メディア関係者の視察、取材も大幅に増加し、地域コミュニティ形成のユニークな事例として、外部からの評価が高まったのも、この年の特徴といえる。

#### ・2010年度：「つながり」から「小さい地域活動」への発展

3年目、芝の家の来場者数はさらに増加し、特に大人や高齢者層の割合が増えた。また、運営するスタッフに学生以外の地域住民や社会人が多く加わることによって、芝の家が地域コミュニティの中の多様な生活者の交流拠点としてさらに存在感を増してきたといえる。地域コミュニティの形成という視点からの大きな変化として、複数の「小さい地域活動」の開始により、来場者やスタッフによる自発的な活動が活性化し、それに応じて近隣住民や地域外の様々な人とのネットワーク、施設間のネットワークなどがさらに拡大したことが挙げられる。「小さい地域活動」は、イベントの企画などと比較してより継続的で、行政からの要請でもなく、また私的利益の追求でもないという点で公私の「中間」の活動であり、芝の家を縁に出会った3名から10名ほどの小規模なグループによって担われている。旧来の地縁組織内の活動ではないが、そうした組織とゆるやかな連携を保ち、地域に根ざしながらも地域外の参加者の関心や知識を活かして発展している。テーマは、子育て環境づくり、近所づきあいを育むソーシャルメディア、ミニFM局など幅広く、しかも地域住民や学生など多様な立場の人々が協力しあい自発的に取り組みはじめた活動である。

芝の家はそれまで、まずは近隣との信頼関係を構築し、子どもから高齢者までより多くの人々が利用できる環境を整えることを初期段階の目標としてきたが、「小さい地域活動」の広がりや、そこからさらに一歩前進し、本事業の最終的な目的である「近隣同士のあたたかい人間関係の創出による地域力の向上」の実現に向けたひとつの形を示す現象だといってよい。すなわち、地域コミュニティの拠点があることで、近隣同士の互助的關係、来場者層と利用形態の多様化、近隣施設間の連携が質量ともに拡大し、この結果、様々な水準でスタッフや近隣住民、来場者同士、近隣組織や施設スタッフの「つながり」が生まれ、そこから小さい地域活動が自然発生的起りこりはじめたのである。「小さい地域活動」がはじまることで、さらに互助的關係、利用形態の多様化、施設間の連携が促進され、活動が発展するとともに、地域に社会関係資本が蓄積されるという循環が生じる。地域のつながりと活動の関連から見ると、地縁組織やNPOがそれぞれ単独で行う大規模な事業よりも、むしろ「小さい地域活動」が数多く生じる地域環境こそ、本質的な意味での地域力が高いと考えられる。

開設後3年間で、芝の家は、運営スタッフと来場者や各種団体メンバーの交流をもとに、数多くの「小さい地域活動」を生み出す孵化器としての役割を担いはじめた。地域の多様な市民を受け容れる運営体制の模索からはじまり、そこに多世代多文化の人々が集まるようになり、

さらにそこでの出会いを通じて様々な「小さい地域活動」が生まれる。こうした活動が網の目のように発展していく過程で、さらなるつながりが生じ、信頼し助け合える関係がひろがり、施設や組織間のネットワークも深まる。こうした芝の家らしい各種の地域活動の創発と地域のつながりのひろがり、公（public）とは異なる共（common）の領域に関心を持つ人々の、緩やかで（weakly tied）開かれた（open）なつながりと信頼（社会関係資本）が基盤となっている。また、そこでの活動は、メンバーの創意工夫のもとに地域の特性が活かされたユニークな内容のものが多く、参加するメンバーにとっても無理なく楽しみながら継続できるものとなっている。それは地域の問題解決への取り組みという切迫した意識や義務感よりも、むしろ地域の共の利益に資する新たな価値創造への参加の喜びという動機に支えられている。スタッフによる地道な場づくりの結果、地域特性に見合った芝地区らしいコミュニティ拠点のあり方と地域コミュニティ形成に向けた道筋が、具体的な形をともなってみえてきた。開設 3 年間の大きな成果であるといつてよい。

#### 参加者に対するアンケート調査

##### ・調査方法

2010 年度末に、参加者およびスタッフを中心としたアンケート調査を実施した。調査は、来場者とスタッフに対する比較的詳細なアンケート調査を中心に、来場者の家族や近隣施設へのアンケート調査、周辺の住民に対するポスティングによるアンケート調査を補足的に行った（本論では参加者およびスタッフのデータを中心に報告する）。

調査項目についてだが、地域コミュニティがどの程度形成されたかという調査は、それが個人の関係性の変化の総和であるため、調査によって直接確認することは困難である。そこで、ここでは、アウトカム評価の仮説論理モデルと社会関係資本の指標の二つの視点から調査項目を設計した。

まずアウトカム評価の仮説論理モデルについて、芝の家の設置、スタッフの配置と開室、広報活動などを直接的なアウトプットとし、来場や来場者同士が生み出すつながりや活動、健康状態や意識の変化などをアウトカムと見立てる。アウトプットとは、事業が直接生み出すものであり、アウトカムは事業の実施の結果得られる価値である。つまり、芝の家の設置と運営（アウトプット）の結果として、多様な来場者が訪れ、その来場者同士のつくる価値が来場者同士のつながりを生じさせ、意識や身体的な変化に発展し、さらに地域活動や対人関係などの行動変化をひき起す（アウトカム）。この連鎖を通じて地域コミュニティが変化しているという視点から、仮説的に事業のアウトカムを設定し、調査項目を作成した。

また、その際には、社会関係資本の指標を取り入れ、ネットワーク量、社会的信頼の度合い、互酬性の規範（行動変化）を訪ねることで、芝の家が生み出す価値が、社会関係資本の増加にどのようにつながっているかを測定することにした。図 4-6 は、アウトカムの仮説モデルである。

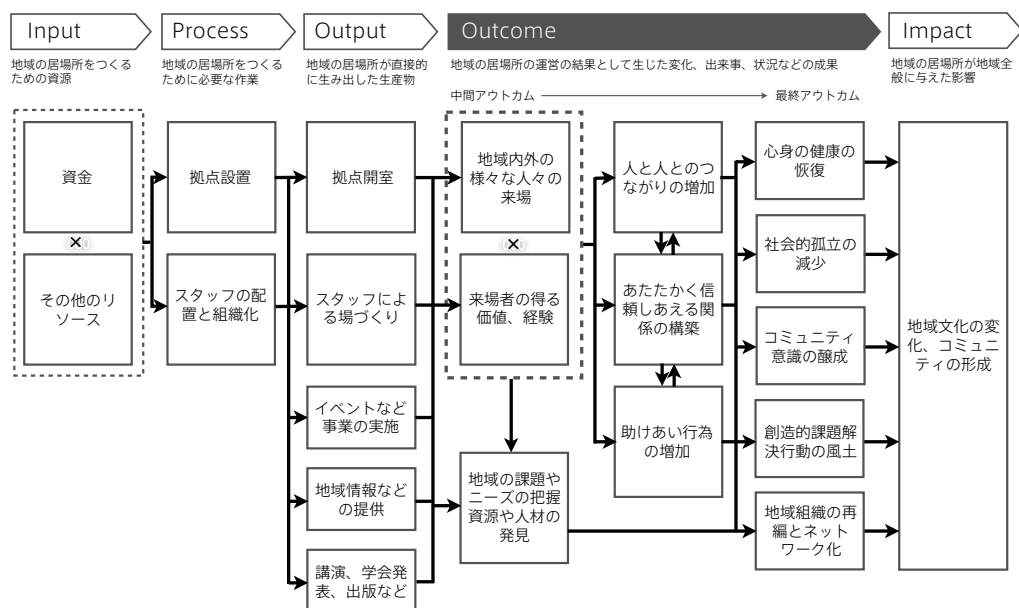


図 4-6. アウトカムの仮説モデル

調査対象と範囲については前述の通り、来場者とスタッフに対する比較的詳細なアンケート調査が中心だが、そのほかに、ブロンフェンブレナーのコミュニティ・エンパワーメントの分析枠組み (Bronfenbrenner 1979) から来場者の家族や近隣施設へのアンケート調査、周辺の住民に対するポスティングによるアンケート調査を補足的に行った。コミュニティ・エンパワーメントは、コミュニティ形成を、単に来場者の満足や変化だけではなく、芝の家のスタッフを含めた施設内の関係性の変化や、来場者の別の生活場面 (家族や職場、学校での関係) での変化、さらに芝の家を支える行政機関や近隣組織・施設との関係といった異なるレベルの相互作用の変化を通じて全体的な地域環境の変化が起こるという考え方である。ここでは、G1~5 までの属性を設定し、それぞれに対してアンケート調査を行った。属性は以下の通りである。

- G1 : 来場者
- G2 : スタッフ
- G3 : 来場者の家族
- G4 : 近隣の組織、施設
- G5 : 近隣の一般住民

配布方法は、来場者とスタッフについては、手渡しで依頼。来場者の家族については、近隣の場合は手渡し、遠方に居住されている場合は郵送で依頼した。近隣施設・組織については郵送で依頼し、一般住民は返信用封筒を添付しポスティングで調査協力を依頼した。

・調査結果

有効回答の総数は、148 件。その内訳は、次の通りであった。ここでは参加者、スタッフの調査結果を中心に述べる。

G1：来場者	60 件
G2：スタッフ	30 件
G3：来場者の家族	15 件
G4：近隣の組織、施設	20 件
G5：近隣の一般住民	21 件

・利用実態

まず、アンケート調査の結果から、来場者の利用実態を俯瞰する。サンプルは、20 代から 90 代までの男女 60 人で、男女比は男性 4 割、女性 6 割であった。

芝の家を訪れる頻度は、「ほぼ毎日」から「用事のあるとき不定期に訪れる」まで、様々である。2 週間に一度は訪れるという人が半数を超えており、生活サイクルのなかで一定の時間を過ごす「居場所」になっている人が多いことがわかる。滞在時間も、15 分以下と短時間の場合もあれば、2 時間以上滞在するという人まで多様である。ここでも、30 分以上過ごす人が過半数である。他の飲食店や図書館といった施設では、来場頻度も滞在時間もまちまちということは考えにくく、芝の家に特徴的な利用スタイルがあることがわかる。

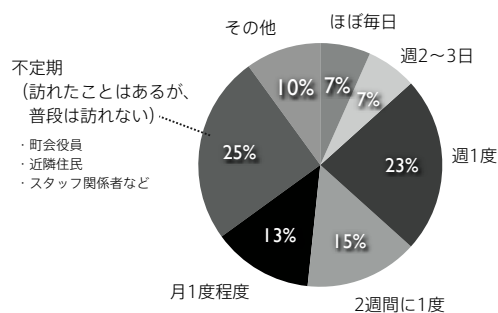


図 4-7. 芝の家を訪れる頻度

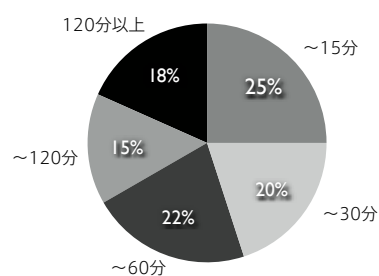


図 4-8. 滞在時間

次に交通手段と所用時間だが、徒歩で訪れる人が 69%と最も高く、5 分以内で芝の家に到着するという人が 60%を超えている。一方で、鉄道を使用し 1 時間以上かけて来場するという人も一定数存在する。ここから、近隣の人も多いが、地域外から訪れる人も混在するという来場者層の二重性が、芝の家の特徴であるといえる。

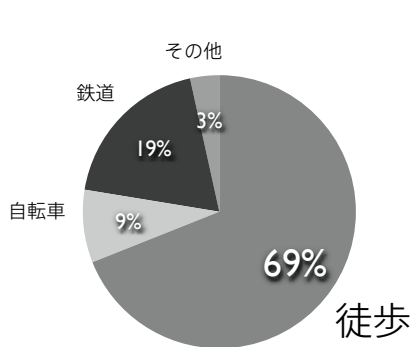


図 4-9. 芝の家までの交通手段

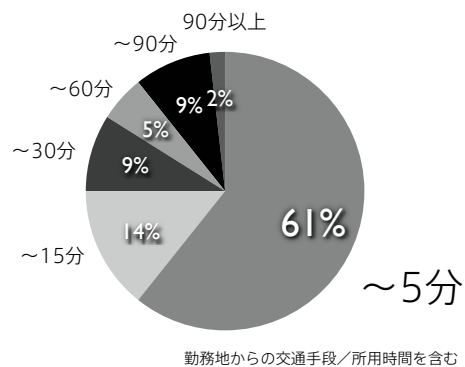


図 4-10. 所要時間

続いて、芝の家で何をして過ごすかについてだが、この項目は非常に多様であった。大きく、気分転換や散歩の途中の休憩、雑談や交流、特に目的はないといった「休憩や交流」、イベント準備や地域活動のお知らせといった業務目的を主とした「打ち合わせ」、イベントへの参加者としての来場や趣味の活動のための来場という「イベントや趣味」の3つに分類すると、「休憩や交流」といった無目的性の高い来場の仕方が最も多いことがわかる。こうした傾向も、特定の目的のために利用される施設との大きな違いであり、芝の家が、それぞれに合わせて自由に過ごせる地域の居場所として定着していることを示しているといえる。

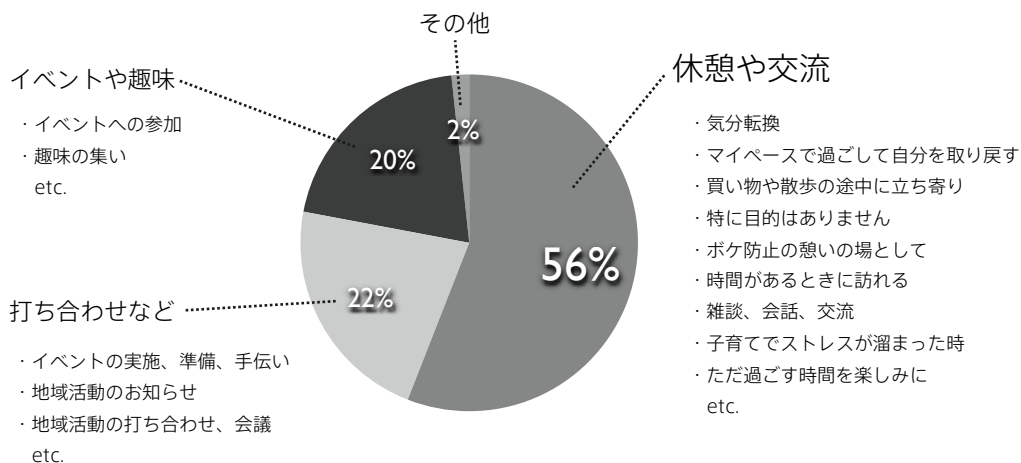


図 4-11. 芝の家での過ごし方

#### ・ 芝の家による変化

芝の家を訪れるようになって、あるいは芝の家ができてからの変化の意識は次の通りである。ネットワーク、一般的信頼、互酬性の規範という、社会関係資本の指標を訪ねる項目につい



て、まずネットワークに関しては、来場者の 95%が、芝の家で知り合った人がいると回答し、ネットワーク形成に非常に大きな効果があることがわかる。「いない」と回答した人は高齢の来場者で、スタッフと会話は行っているが、個人として知り合ったという実感がまだないというケースのようである。

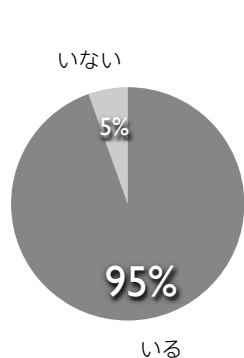


図 4-12. 芝の家ではじめて知り合った人がいるか？

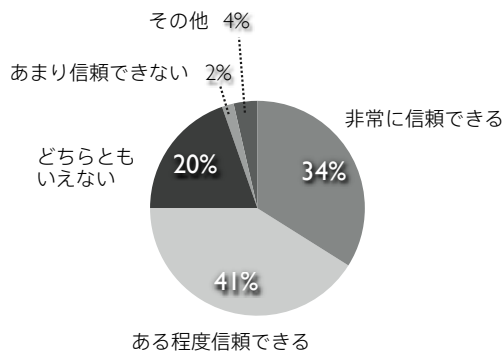


図 4-13. 信頼できる関係か？

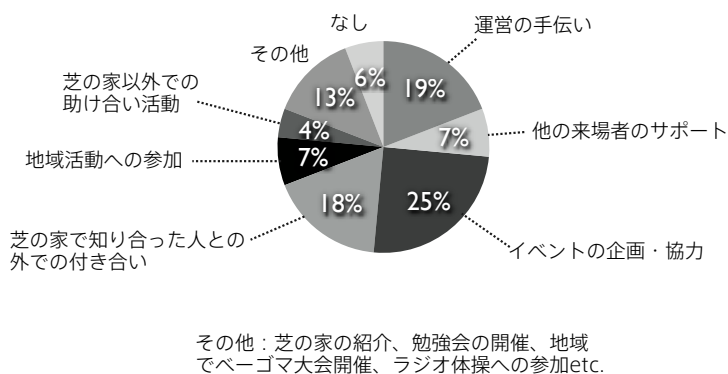
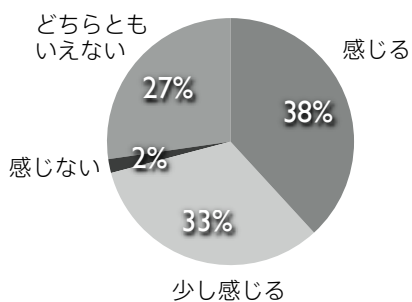


図 4-14. 芝の家がきっかけとなって行ったことは？

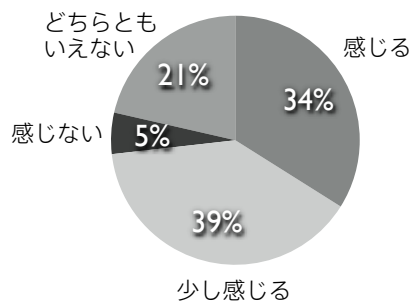
知り合った人との信頼関係については、「非常に信頼できる」、「ある程度信頼できる」の合計は 75%と、非常に高い割合で信頼が形成されていることがわかる。

芝の家がきっかけとなって行ったことがあるかどうか、それはどのような行動かという質問に対しては、94%が何らかの形でこれまでにない行動を起こしており、運営の手伝いや他の来場者とのサポートという身近な互恵的な行動から、イベントの企画や地域活動への参加、また芝の家で出会った人との芝の家外での付き合い、芝の家意外での助け合いの活動など、多岐に渡っている。とりわけ、芝の家の外で、ネットワークが広がること、助け合いの行動を起こしているという点は、単に芝の家の中で閉じた関係だけではなく、地域全体に個々人の関係や行動が広がっていくということを示す行動変化であり、貴重であるといえる。



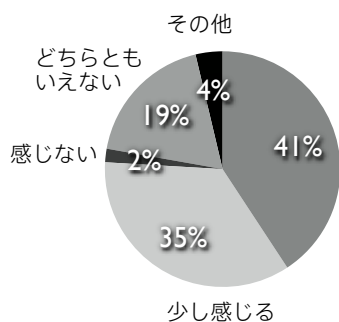
感じる、少し感じるの合計：71%

図 4-15. 元気がなくなったと感じる



感じる、少し感じるの合計：73%

図 4-16. 地域のつながりが得られた

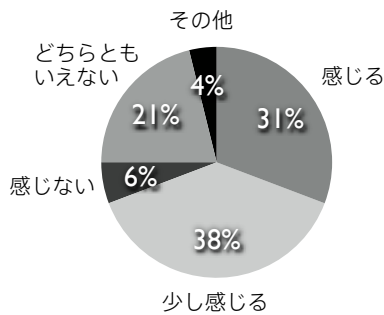


感じる、少し感じるの合計：76%

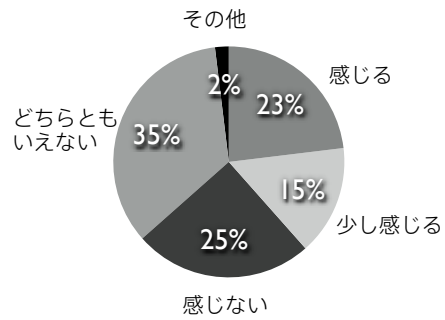
図 4-17. 地域への関心が高まった

さらに、自身の心身の健康状態、地域とのつながり、地域への関心、地域づくり活動への参加意欲に関する意識変化については、いずれも70%以上が変化を感じている。

芝の家周辺の雰囲気が変わったと感じる人も60%を超える。どちらともいえないと応えた人の多くは、芝の家を契機に訪れた人で、それ以前の雰囲気を知らないからと理由を述べている。区役所や周辺施設との関わりといったブリッジング型のネットワークの深まりについては、他の項目と比較して低い。この項目は、積極的に活動をしている人ほど高い値を示しており、近隣関係や顔見知りの増加といったボンディング型ネットワークがまず形成され、主体的な行動を起こすに従ってブリッジング型のネットワークが増加する傾向があると考えられる。



感じる、少し感じるの合計：79%



感じる、少し感じるの合計：38%

図 4-18.地域づくりに参加したいと思うようになった 図 4-19.区役所や周辺施設と関わりが深くなった

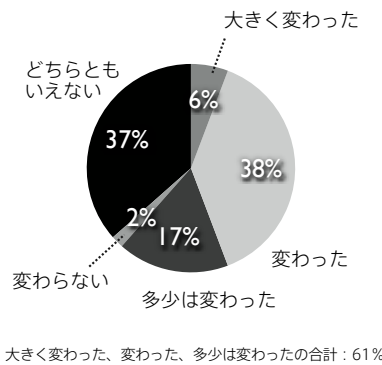


図 20. 芝の家周辺の雰囲気や様子が変わった

サンプル数が 60 と少ないため地域コミュニティ全体の変化と言うことはできないが、少なくとも芝の家に来場している人の多くは、ネットワーク、社会的信頼、互酬性の規範に変化が見られ、芝の家が社会関係資本の培養のきっかけになり得ているということが出来る。それを通じて、心身の快復、孤立の減少、コミュニティ意識、課題解決の風土、組織間ネットワークもポジティブな影響があると考えられ、こうした一人ひとりの変化を通じて地域の規範や風土が変わっていくという可能性が確かめられた。

#### 芝の家の実践による予備的仮定と仮説分析モデル

運営上の試行錯誤の結果、芝の家は、地域に受け入れられ、住民同士のつながりを生み出すとともに小さな地域活動がはじまる拠点の役割を果たすようになった。第 2 章で挙げた本研究の仮説分析モデルは、芝の家の実践によって得られた知見に基づいて構築された。

まず、第一の調査課題である地域の居場所における参加者の「つながり」と「活動」の生成過程に関して、前節の来場者アンケートより、芝の家で参加者は他者とのつながりを得たり、

そこで心身とも健康になったりという実感を得るとともに、新しい活動を始めるきっかけも得ている。年を追うごとに、参加者の主体的な活動も増えている。しかし、図4-11では、芝の家の来場者の半数以上は特定の活動を目的にしているのではなく、休憩や交流を目的に過ごしているという、一見主体的活動の増加とは相反するデータもある。ここから、参加者ははじめから活動をする決めていたのではなく、芝の家で他の参加者との関係ができることによって、行動が変わるのではないかという仮説が立てられた。参加者が一定程度増えると活動がはじまりやすくなるということ、他者との関係や自己意識の変化が自分らしい行動につながっているという事実も、この仮説を支持しているように見える。一般的な施設においては、その施設の目的はあらかじめ明確であり、来場者は自身のニーズを満たすためにその施設を利用する。したがって、来場者が施設の利用を重ねるにともなって、行動や意識を変化させていくという現象は基本的に念頭においていない。こうした来場者の変化を惹き起こす場であるという点が、地域の居場所の大きな特徴である可能性が高い。

また第2の研究課題である、つながりと活動を創出するためのプラットフォームの設計要件については、筆者自ら芝の家の運営上の改良・工夫を主導してきた経験が、仮説モデルの構築につながっている。地域の居場所を実際につくりあげていく現場では、まず居場所をつくり、完成した場を来場者が利用するという形で、設計段階と実施段階を分けることができない。これは、商業施設やインターネット上のサービスの提供の仕方と大きく異なる点である。地域の居場所の価値は、運営する店員やそこに置かれた商品あるいはサービスが生み出すのではなく、そこに集まる人の振る舞いや関係性そのものがその場の価値をつくるからである。それゆえ、どのような人が集まり、どのように関わり合っていくか、という流動的な人の行動やコミュニケーションの適切なマネジメントが必要になる。芝の家では、縁側のあることが来場する人の間口を広げ、スタッフのあり方が場の雰囲気を生み出していた。さらに、スタッフが適切な見守りや相談を続けることで、参加者同士の信頼関係や新しい活動が生み出され、それが再び多くの人の芝の家に足を運ぶきっかけにもつながるといった循環が見られた。プラットフォームとして育てていくためには、人が集まる入り口づくりのアクションと、関わる人同士の相互作用を促進する伴走のアクションは異なり、設計要因は二段階のフェーズに分けることが妥当なのではないか、という仮説が立てられた。また内的な設計だけではなく、周辺環境との関係のマネジメントも大きなファクターと感じられた。その場がどのような人的ネットワークを持っているか、行政や地縁団体など地域の様々なステークホルダーとどのような関係にあるかが、地域の居場所に来る人の範囲や多様性、そこで起こることの質や周辺組織・施設との連携の形態に影響を与える。企業経営やサービス運用は競合分析を通じた競争力の維持が重要であるが、地域の居場所の運営は、場のネットワークや地域のステークホルダーとの関係性が、プラットフォームとして生み出す価値を大きく左右するのではないだろうか。こうした実践知を踏まえて、本研究の仮説分析モデルが構築された。

## 第5章 調査結果 1 : 参加主体の意識・行動変化の過程

### 5-1 調査の結果

#### インフォーマントの情報

4事例の参加者、合計40名から聞き取り調査を行った。調査対象者は表5-1の通りである。

表5-1. 聞き取り調査対象者リスト

芝の家の参加者

名前	名前	性別	年代	職業
1	Aさん	女性	60歳代	主婦
2	Bさん	女性	20歳代	会社員
3	Cさん	女性	30歳代	非営利団体職員
4	Dさん	男性	50歳代	自営業
5	Eさん	女性	50歳代	主婦
6	Fさん	女性	20歳代	幼稚園職員
7	Gさん	男性	50歳代	会社員
8	Hさん	女性	40歳代	主婦
9	Iさん	女性	30歳代	フリーランス
10	Jさん	女性	30歳代	フリーランス
11	Kさん	女性	30歳代	芝の家スタッフ

うちの実家の参加者

番号	名前	性別	年代	職業
1	Aさん	男性	30歳代	社会福祉協議会職員
2	Bさん	女性	60歳代	主婦
3	Cさん	男性	30歳代	市職員
4	Dさん	女性	60歳代	主婦
5	Eさん	女性	60歳代	主婦
6	Fさん	女性	60歳代	主婦
7	Gさん	女性	60歳代	主婦
8	Hさん	男性	40歳代	自営業
9	Iさん	男性	60歳代	元市職員
10	Kさん	男性	30歳代	社会福祉協議会職員

リタクラブの参加者

名前	名前	性別	年代	職業
1	Aさん	女性	20歳代	カイロプラクター
2	Bさん	女性	30歳代	ビジネスコーチ
3	Cさん	男性	40歳代	会社経営
4	Dさん	男性	30歳代	会社員
5	Eさん	男性	40歳代	ビジネスコーチ
6	Fさん	女性	40歳代	人材開発トレーナー
7	Gさん	女性	40歳代	詩人
8	Hさん	男性	40歳代	会社員
9	Iさん	女性	40歳代	ビジネスコーチ
10	Jさん	女性	30歳代	キッチンライフアドバイザー
11	Kさん	男性	30歳代	証券会社経営

津屋崎ランチの参加者

名前	名前	性別	年代	職業
1	Aさん	女性	40歳代	主婦、カフェ店主
2	Bさん	男性	20歳代	学生
3	Cさん	女性	50歳代	民宿経営
4	Dさん	男性	30歳代	自営業、カフェ店主
5	Eさん	女性	20歳代	公務員
6	Fさん	女性	70歳代	地域活動家
7	Gさん	男性	30歳代	会社員、建設業
8	Hさん	男性	60歳代	会社役員、建設業

#### 聞き取り調査の結果

インタビューでは、それぞれが居場所できつながり活動を得るまでの経緯を語ってもらった。以下は、40名の聞き取り調査の結果の概要である。

##### ・「芝の家」

インタビューを行った芝の家の参加者対象者の多くはスタッフ的なかわりをしてはいるが、もともとは来場者として訪れ、その後スタッフとして運営に参加するようになった人が多い。年齢は、20歳代から60歳代と幅広い。芝の家は地域コミュニティ形成のための行政の事業だが、ここに集まる人たちはまちづくりや地域課題の解決に関心があるというより、お茶を飲みながらゆっくり過ごしたり、近隣の気の合う仲間とともに関心のある活動を行ったりすることから、

徐々に地域への関心を広げている。以下、芝の家でインタビューを行った 11 名のプロフィールをまとめる。

#### 芝の家 ケース 1 A さん (70 歳代女性) /S-01

70 歳代の主婦 A さんは、港区高輪地区に在住で、港区が実施する明治学院大学のシニア向け講座「チャレンジコミュニティ大学」の修了生である。ちょうど修了者の活動の取りまとめ役を終えたとき、芝の家が開設され、近隣の人に誘われイベントに参加した。当時は、若い人達が主ではあったが、自分が居ても違和感がなかった。とても楽しいので、何度も訪れるようになったことからスタッフの顔見知りになり、お当番に誘ってもらったことで、スタッフに加わった。たまたまかなり時間がある時期でもあり、誘われて「ああ、とってもうれしい」と思ったという。

それ以降、週に 2 回、芝の家に来ることが自分の生活のなかに定着している。若い人スタッフは自分の孫とほぼ同年代なのに、自然に接することができることが印象的だと言い、来れば 1 日あっという間に終わっているというくらい、そのなかに溶け込んでいると感じられるという。最近、ほとんど自分の居場所としてここちよく思うようになった。芝の家に来ると、元気になるから、身体が動く限りは続けたい。芝の家で様々な人と触れあうことを通じて、自宅は芝の家から少し離れているが、自分の地域の人達とも同じような気持ちで接していることに気づいた。

#### 芝の家 ケース 2 B さん (20 歳代女性) /S-02

慶應義塾大学出身で 20 歳代の会社員 B さんは、スタッフ募集のポスターを見かけ、会社とは違うコミュニティとラジオに関心があったこともあって説明会に参加した。最初の印象は、仕切りがほとんどない空間が自由な印象で、受け容れてくれている感じがしたという。その後は、平日は仕事があるため週末に月 2 回ほどスタッフとして参加するようになり、お当番に入る土曜日が楽しみになった。小学生の女の子と一緒に手芸などをしつつ、大人の来場者の方と話しをすることが日課になった。乱暴な言葉を使う子どもや、自分より芝の家について詳しい常連の来場者との接し方にとまどうこともあったが、スタッフミーティングでの他のスタッフの言葉から「私は私」、「会社の営業と違って、ここでは自分の個性を出してよい」といった自分のあり方への気づきを得る。

半年ほど経ち、芝の家の他の参加者に誘われて、「いろはにほへっと芝まつり」のラジオ班に加わることになった。ミニ FM を使ってイベントを盛り上げる放送局のプロジェクトである。最初は企画や準備など裏方でよいと思っていたが、自分も DJ をやることになる。マイクを通して話し、番組を進行してみたところ、聴いていた人に褒められる。褒められたこと自体は嬉しかったが、自分をもっとうまくなりたいと思い、続けることになった。いまでは、芝の家以外でも、地域や施設のイベントに呼ばれてミニ FM のラジオ

局を開く活動を続けている。自分のしゃべりはまだまだだが、新しい方法や可能性が広がり続けている感覚があるという。活動を通じて知らない人と交流ができ、人に喜んでもらえるのが嬉しい。

Bさんが芝の家を訪れたのは、新卒で入社した不動産会社を辞め、法律関係の事務の仕事に転職した頃だった。会社の仕事と違って、芝の家の活動は自分の判断で動ける楽しさがある。会社を辞めるつもりはないが、両方がることでバランスがとれている。一人だったら、ラジオの活動をはじめるとはできなかった。他の参加者の巻き込みや、「やってもいいんだよ」と挑戦を後押ししてくれる芝の家の雰囲気が大きかったという。

### 芝の家 ケース 3 Cさん (30歳代女性) /S-03

Cさん(女性、30歳代)は、芝の家でスタッフをしながら、地域の子育てに様々な立場の人が参加できる活動「芝で子育てしたくなるまちづくりプロジェクト」を行っている。開設時は幼稚園教諭であったが、新しい形の交流拠点になりそうな芝の家に関心を持ち、関わり始めた。芝の家における立場を異にする人たちとの交流のなかで、自分らしさや幼児教育の現場に対する違和感、自分のやりたいことが次第に明確になる。そして、芝の家で活動する他の人たちの動きに刺激を受け、相談をしたり、東京都の助成金の情報を聞いたりしたことが引き金になって、自分の活動を始めることになる。

芝の家に通うようになった初期の段階では、それまで「子どもがいっぱいて子どもと接してる時間がすごく長かった」こともあり、普段は関わる異のない近所の80歳代のお年寄りとの交流が印象的だったという。普段関わることのなかった高齢者との交流によって、自分の幼い時のことが思い出され、そこから想像される幼い子どもの視線や、芝の家のような場で多様な世代の人が集まる様子から、「同じ世代の人とか同じ目的とかのばっかりが集まってる場所」としての幼稚園に対して無意識に持っていた違和感が明らかになっていった。そして、自分と異なるふるまいが明確になることで、自分の意思が自覚化されることにもつながっている。

自分自身の見方に対する変化と、他者と違いに自覚的になることによって、自分の実現したい思いが明確になっている。しかし、こうした関わりを通じて、自分と異なる立場の人にも声をかけることができるようになったという。

それまでは、価値観や立場の違いそうな人とは、話が合わなかったら嫌なので、積極的に声をかけることは躊躇していたが、いまでは、自分が自分の価値観や立場に固執していることで生じていたことだということがわかり、あまり気にならなくなった。よい意味で、マイペースでニュートラルな関わりができるようになった。

### 芝の家 ケース 4 Dさん (50歳代男性) /S-04

Dさんは、2年前から芝の家のはす向かいのアパートで暮らしている。引っ越し前後に

初めて見た芝の家は、建物の優しい雰囲気とスタッフの気さくな感じが強かに印象に残ったが、その後は一度立ち寄ったきり、スタッフと挨拶をする程度になっていた。狭いアパートだからリビング替わりになるかと 100 円のコーヒーを飲みに行ったこともあるが、いろいろな人がいて所在なかった。その後、芝の家のことは、知人の高校生になる子どもが日中昼寝をしても許される場所でもとても助かっていると聞いていて、ありがたいなと思っていたが、足を運ぶ機会はなかった。

次に芝の家を訪れたのは 2011 年 3 月、東日本大震災の晩だった。日中会社に行って帰ってくると、居候していた友人がおらず、パソコンなども見当たらない。古い木造アパートでは危険だと、芝の家に避難していた。芝の家に顔を出すと、今後の対策を考える会議をしており、そこに参加した。その後は、会社の休みである第一第三土曜日は必ず行くようになり、近隣の人たちとの面識が増えていく。知り合いは 100 人以上増えたという。町内会の役員になったり、お年寄りの知り合いが増えたりしていく。その中で、芝の家のレコードコンサートや持ち寄り食事会の手伝いを行うようになり、連休中は寂しいという常連のお年寄りの声を聞いて芝の家の臨時オープンを担当もした。行政の場だと思っていたため、自分が何か主体的にやっていたのか、最初は戸惑ったが、定例のミーティングでぜひやって欲しいと言われて嬉しかった。何か手伝いを始めるのには、スタッフがちょっと肩を押してくれる感じがあって、気楽にできる。またオープンしたいというのも、自分から言い出すというより、他の来場者の声があったから、自然にそういう流れになった。

これまでは全く高齢者福祉に関心はなかったが、芝の家では高齢者の方と多く知り合いになり、話し相手になったり世話を焼いたりということしている。お年寄りの役に立つことをしてみたいと感じているようだ。勤めていた印刷会社を退職し、今は次の仕事を探しながら芝の家のスタッフもしている。

#### 芝の家 ケース 5 E さん (60 歳代女性) /S-05

芝の家のスタッフをしている 60 代の E さんは、例えば会社を辞めた後の男性が人と関わられるような場がないというような問題など、地域の居場所の必要性を 20 年くらい前から考えていた。そして、自分もいつまでも会社勤めをしていないで始めてみようと思いつく。いろいろ模索しながら、採算が合うような方法や、人を集めたりイベントの内容を考えたりという大変さがあることがわかってきた。また、利己的な人は自分の欲しいものばかりを求めたり、不平不満を述べたり、居場所の運営の難しさを感じるようになり、本当に必要なことなのかと迷うようにもなっていた。

芝の家は、コミュニティカフェのインターネットで見て、土地勘もなかったが興味を惹かれて説明会に参加した。まずスタッフを試してみることにしたが、「いたいようにいる」ということがわからず、はじめは戸惑った。自分の居場所を求めているのではなく役目



でいるのだし、どうすれば良いのかよくわからなかったのである。これまで自分を見直すということも考えなかったが、私はどのように居たかったのだろうと考えながら過ごすうちに少しずつその大切さがわかったような気がしてきた。おそらく自分と同じように、「居たいように」と言われても、勝手にしていいと言われているようで身の置き場がなく感じる人もいて、そういう人に自分の体験を話すと、何か気持ちに触れるものがあるのか、不思議なことに、みんながいろいろな思いを話してくれる。特に団塊の世代は、会社のため、家族のためと思って自分の行動を決めているから、たまにこういう話ができることが貴重なようだ。

Eさんが気づいた自分の気持ちは、サービスを受けるのではなくとにかく役に立ちたい、ということ。だから自発的になれる。芝の家は若いスタッフが多いから、若い人の作りたいものを応援できると良いと考えている。経験あるシニアも役に立ちたいはずだから、若い人をサポートして、若い人がやりたいことを実現できたら、また下の世代を支援するという循環ができたなら理想。それから、芝の家の一つでも、自分がやったということを残していきたい。その時に初めて自分の居場所ができるのかなとも思う。

芝の家で出会ったお年寄りに頼まれて、個人的に家の片付けを手伝うという関係性も生まれた。芝の家のスタッフをしていて、鉢植えの手入れや日常的な挨拶などの信頼関係があるからこそできることだと感じている。また最近、芝の家に来ているシニアの女性5人と、お年寄り同士で話し合う場を始めた。今後も少しずつ、こうした活動を発信していきたいと思っている。

#### 芝の家 ケース6 Fさん(20歳代女性) /S-06

大学を卒業後、保育園の臨時職員として働いているFさんが初めて芝の家に来たのは、スタッフとして働いていたサークルの先輩に会うため。その時、懐かしい雰囲気でもおもしろい場所だと思い、もう少し詳しく知りたいとスタッフ募集説明会に参加した。カンボジアでボランティアをした経験があり、現地の子どもにとっても喜んでもらえたが、言葉の問題もありコーディネイターに作ってもらった場でもあったので、日本で自分の力でやってみたいという気持ちでスタッフになった。

芝の家は、みんなが自分や相手の気持ちを丁寧に感じようとしているので、他では言えないことも話せるし聞いてもらえるという信頼感がある。また、地元意識が生まれ、芝の家にいる時以外でもご近所さんと挨拶を交わすようになった。知らない人に話しかけることに対する抵抗感が薄くなったり、お節介を焼きやすくなったりという変化も感じている。

特に、自分の気持ちの確かめ方を教えてもらったことが大きい。なんだかしんどいけど自分で気づかないままいて、急に悲しくなったりすることがあったが、丁寧に振り返ることをそれまで全然してこなくていたからだった。なぜそう思うかを立ち止まって考

えられるようになった。話の聞き方も、自分の先入観とか思い込み相手の話を遮っていることがあることに気づき、芝の家以外でも気をつけることで、思い込みの先を少し気づけるようになった。

これまで子どもたちと関わることはほとんどなかったが、芝の家で初めて小学生と遊んだり赤ちゃん連れのお母さんと会ったりするうち、小さな子は得意じゃないと思いついていたが、自分にとってじっくりくると感じられた。気持ちを大事にしていると接し方次第ですごく変わる子どもたちを見ていて、成長していく瞬間に立ち会える仕事っていいよなって思うようになった。「えんすーぷ」の活動への参加がきっかけになって、赤羽幼稚園でワークショップをすることになり、その縁で臨時職員として働くことになった。

四大を卒業したら会社に入るのが当たり前で、これまでは家族の希望や周りがどう思うかを優先させてきたが、自分がどうしたいかを大事にすることが、生きてく上で大事なんだと考えるようになった。自分らしさって何だろう、私の持ち味はどこなんだろうと考えるようになった。芝の家には、いろんな生き方をしてる人がいて、世の中の常識とか家族の希望を優先しなくても、自分がやりたいことを頑張れば人生開けてくるんじゃないかなって思うようになった。母親は「せっかく順調に来てたのに」と感じてもあるようだが、Fさん自身は充実した社会への一歩を踏み出せたようだ。

#### 芝の家 ケース7 Gさん (50歳代男性) /S-07

近隣の企業で会社員をしているGさんは、通勤中に見つけた芝の家に興味を持って、数日後に訪れる。社会福祉士の資格を取得していたので、コミュニティで何か活かせるかもしれないと思った。初日はスタッフが説明などしてくれてすごく楽しかったが、2日目以降は、長居していいのかわ、おしゃべりしなければいけないのか戸惑った。何度か顔を出すが、1ヶ月ほどして鬱病が再発し、入院を含めて5ヶ月間療養することになった。この期間は生きてるのが精一杯みたいな酷い状態だった。

久しぶりに顔を出すと名前を覚えていてくれて、体調を崩していたというそのまま受け入れてくれた。この頃は、薬を飲んでいたので、楽しく感じるものがなくなってしまい、会社も負荷のかからない仕事を担当していたので退屈だった。何か楽しみを見つけないかと感じていた。上の子ども二人が大学に入り、少し肩の荷が降りたこともあって、こどもの城のボランティアに少し力を入れて関わったところ、盛り上げるキャラが受けて「楽しいな」って思えるようになった。終わった後でみんなで飲みに行くのも楽しかった。

芝の家は、土曜日や午後に度々顔を出していた。他の来場者というより、スタッフと話すことが多かった。ある日、スタッフにラジオに誘われて、すぐに「出る」と答えた。10月のイベントで行うミニFMだが、体調が悪くて来られなかったらどうしよう、自分

の喋りや企画がおもしろくなかったらどうしようと心配になる。それで、こどもの城のボランティアの女子学生などに声をかけて応援を頼んだ。当日は、なんとか放送することができて、町の人やスタッフから「声がいい」とか「おもしろかったですよ」って言われて、「やったぞ」と思い、自分のなかでまたやろうという感じで心が躍った。

その後は、メンバーが増えたり、逆にグループ作業の難しさを感じたりと活動が停滞する時期もあったが、コアメンバーが二人になって動きが早くなったこと、芝の家以外からも開催の誘いを受けるようになったことで、活動が加速するようになった。三田の家で知り合った塩尻市の職員から誘われ、市の広報事業として開催するというようなこともあった。ネットワークが広がっていく実感があるし、ラジオに出てくれる人が喜んでくれるのが楽しい。そして、ラジオの電波を飛ばして遠くの人たちまで広い範囲で場が繋がってくという醍醐味がある。

なかなか進まない時期は、芝の家の他の参加者の姿勢が励みになった。他の参加者のプロジェクトに参加して、その人がリーダーとして、周りのサポートがあまりない中でも突き進む様子を見て、自分もラジオを進めようという動機になった。色々声をかけてもらうような機会を逃してはいけないと思い、自分でも機材を買って、おもしろさも深まっていた。

芝の家に来ていろいろな人とのつながりができて、ラジオの活動を始めて、楽しくなった。中野の地元でも「Gさんは人を盛り上げるのが上手」と言われて変化を実感した。会社だとどうすればいいのか考えすぎて閉塞感を感じるが、こういう思いで突っ走りたいというのは、少年の時に帰ったようで楽しい。競争社会とは違う価値観に舵を切ろうとしている時期で、この変化には奥様も驚いているという。

## 芝の家 ケース 8 Hさん (40歳代女性) /S-08

近隣で子育てをしながら芝の家スタッフをしている Hさんが初めて芝の家に来たのは、2011年5月のスタッフ説明会だった。当時は職を探していたところだったがなかなか決まらず、震災も起こり、幼稚園のPTAで人間関係に悩むこともあり、何かを考えなければいけないと感じていた。芝の家の存在やどのように場をつくっているかに関心があったが、利用者の立場だとなかなか分からないのではないかと考え、スタッフを希望した。読書や講演会は、知識は得られてもその先に続いていくものがないが、芝の家ずっと存在するから、継続的に話を聞いたり、相談できたりするのではないかと、という期待感もあった。

スタッフになって見た初日は、チェックインミーティングで体調と気分の確認をしたり、「何もしない」でいるように言われたりすることに驚いた。スタッフとして過ごし、日々の振り返りを重ねることで、自分のあり方について他の人からの見え方を知ったり、感情を出しても悪いことにはならないということに気づいたりしていった。無理をする

こともないし、したくなったらすればいいという考え方があると知れたのは一番大きかったと思う。場のなかにおいて人に接している時、自分の中から自然に生まれてくる感情や行動に向き合う意識が出てきた。これまで感じてきた場を共有することの難しさから、別の形につなげていける道が見えてくるような気がしたという。

今は、スタッフとして慣れてきたことで、少し離れてもまた芝の家に戻れるという安心感が生まれているが、スタッフとして場をつくる難しさも感じているという。

### 芝の家 ケース9 Iさん (30歳代女性) /S-09

Iさんは、三田の家のイベントに参加し洗い物をしていたところ、芝の家のスタッフ募集をしていることを教えてもらい、面接に行くことにした。芝の家には「うたの住む家」という活動のコンサート観るために1度行ったことがあり、とんがった学生が多い三田の家より敷居が低くて入りやすそうだなという印象があった。ちょうど勤め先の契約が終わり失業保険を受けるタイミングでもあった。以前からイギリスにあるような劇場が日本にもあればいいのにと思っていて、みんなで共有できる文化とか、みんなで芸術を作って非日常的な空間をつくる手伝いがしたいなと思った。ちょうどタイミングが合ったので「よし、飛び込んでみよう」と思ったという。

初めての面接では、理由は覚えていなかったが、優しかったので泣き出してしまった。その後、スタッフとして関わるなかで、いろいろな変化を体験する。人を肩書きで見なくなった、子どもやお年寄りとも積極的に自然に話せるようになったなど。小学生にお母さんに間違えられたことも、嬉しい思い出だという。

バザーやレコードコンサートなど様々な活動も担当した。以前だったら面倒でやらなかったとことだが、どちらもスタッフの手伝いをしたいと思ったからだった。バザーでは、

あんなにたくさん応援が来てくれ、たくさん応援が来てくれるとは思わなかった。物が多くて大変で、二度とやりたくないと思う。しかし、ご近所の方の好意やパワーで助けてもらえて、多くの人とつながれたのは本当にうれしかった。レコードコンサートも、いつまで経っても慣れないし、やめたいのだが、うまくいったと思った一瞬にはまたやろうと思う。だから、面倒くさくてやめたい気持ちと半々だという。バザーをやってみたのは、フラダンスの教室で衣装や小物などを売って2日間で数十万の利益をあげているのをみたり、カナダの小学校時代にチャリティーバザーを体験したりしていたのを、自分で真似してみようという気持ちもあった。

芝の家の活動は、年齢制限のある求人もあるので、あまりのんびりしていても仕方ないと思う。しかし、芝の家に関わったことは決して無駄にはならない、むしろプラスになるだろうと思っている。

## 芝の家 ケース10 Jさん (30歳代女性) /S-10

Jさんは、3ヶ月勤めた会計事務所を退職し落ち込んでいたところ、芝の家で開催する「いろはにほへっと芝まつりに出たら？」と友人に誘われた。その後、何度か来場者として足を運ぶようになり、知り合った女性に誘われて港区が主催している「語り部講座」に参加した。その時はあまり人生の状態も良くなかったし、他にやることもないし、やってみようという感じだった。その講座が終わった後、芝の家を起点にまちあるきを行う「芝ぶら」という活動を始めた。ただなんとなくみんなでぶらぶら歩く活動で、何になるか、何の意味があるかはわからないが、意外と楽しいということに気づく。

芝の家では、振り返りも良かったという。人の話をじっくり聞ける場はあまりなく、言葉にしてしまえばよくある話だとしても、「同じように悩んでるのは私だけじゃない」と思える。ずっと勤めていた会社を病気で退職して、そのあとうまく軌道に乗れずに焦っていた。世の中、肩書きがあると楽だと思ふし、所属先がなくて本当に怖かったが、「まあいいか」と思えるようになった。芝の家には、肩書きのない人もたくさんいるということも、そう思えた要因の一つだった。

Jさんは、どうせ芝の家で活動をするのだからと、スタッフも買って出ることにした。居心地が良かったから来たいと思ったし、来流には交通費がかかる、であればスタッフになろうという気持ちもあった。現在は、病気になってから一番いい状況だと思う。まわりのスタッフが自分の状況を理解してくれるし、おこづかいも貰える。幸せだと思う、という。

## 芝の家 ケース11 Kさん (30歳代女性) /S-11

慶應義塾大学の通信講座に通っていたKさんは、キャンパス内のポスターを見かけて、芝の家を知った。道に迷ってたどり着くのに苦労したが、スタッフのたたずまいに安心感を受け、その場の雰囲気自体が居心地良く、初めての場所なのにそんな気がしないような感覚があり、ここに関わっていきたくと思ったという。

スタッフとして、芝の家で知り合った人たちと時間をかけて知り合っていくなかで相手に対する安心感が生まれ、自然と信頼できる関係が築けてきた。芝の家に来て変わったことは、笑うようになったこと。芝の家にいる人が、自然体で楽しそうにいた、体調が悪かったとしても、その人たちがその人らしく、今ここにいると感じられた時に、これは幸せなことだなと思う。それを外側からただ見ている観客ではなく、自分もその一部だと感じられて、そこからエネルギーをもらえる。生きていてよかったと思う、という。

大きな出来事としては、ある高齢男性の来場者との関係だった。その男性の振る舞いが最初は非常に苦手で、でも、同族嫌悪というか自分を見ているようで、すごい気になる存在だった。ある日、そうした気持ちを思い切って打ち明けて見た。その人は、きっ

と聞きにくいこともあったと思うが、しっかり受け止めてくれて、最後まで聞いてくれた。そのことで、同時に自分自身との付き合い方も変化したかもしれないとも思うという。そんなふうに感じて振る舞うのも自分なんだと気が楽になった。そして、その時には芝の家の別スタッフが二人の会話を見守ってくれていて、人の話を聞くということ、その場を見守るといふことの大事さを実感し、スタッフとしての意識が芽生えた。

はじめは雰囲気に入るだけだったが、今は、芝の家の雰囲気を作っているのが自分たちだっという意識があり、芝の家の土台づくりやサポート体制に関心がある。今後も、「一人の人間として」関わっていききたいし、その人らしくいられるような芝の家という場所をつくっていききたいと思っている。

#### ・「うちの実家」

うちの実家で活動する参加者は、60代の主婦が多く、自身が介護を経験したり、まごころヘルプの有償ボランティアを行っていたりする人が多い。一方、社会福祉協議会や市役所の20代～30代の職員も多く、夜の茶の間ネットワークなど新しい地域福祉の活動を行っている。いずれの参加者も、主宰者である河田氏の哲学に触発され、「うちの実家」での他の参加者とのあたたかいふれあいを通じて、コミュニティに対する意識やふるまいを変化させている。また、「うちの実家」で他者への援助的行為やイベントの手伝いといった役割を担うなかで、様々な活動に主体的に取り組むようになっている。

#### うちの実家 ケース1 Aさん(30歳代男性) /U-01

新潟県社会福祉協議会の職員をしているAさんは、有償の在宅サービスの研修に関する相談を河田さんとするために、うちの実家を訪れた。ごく自然に人が集まり、「楽しそうで、笑顔で、なんかすごい、こんな空間があるのかな」と思ったという。そして自分も過ごしやすさを感じた。

その後もうちの実家に足を運んだのは、半分は仕事で、半分は個人的であった。個人的な部分は、居心地がいいと感じたため、仕事の部分はさまざまなつながりができ、新しい事業のヒントが得られたからだった。うちの実家での関係性や県内外の人とのつながりから、地域と切り離された福祉サービスのあり方についての気づきを得たり、さまざまな社会資源をつなげる新しい事業をスタートさせたりということにつながった。

はじめは仕事で来ているから、気を使ったりとか、失敗してはいけないと思ったりしていたが、次第に、「自然体でいいや」という感覚になっていったという。うちの実家に来ると、話を聞いてくれるし、モチベーションが上がる。自己肯定感が得られ、あまり否定的なことを言わなくなったと感じている。たとえば、妻からカフェを開きたいと相談された時も、「やったらええやん」と後押しすることができた。以前の自分なら、無理だよ、絶対ダメだっと言っていたかもしれない。

## うちの実家 ケース2 Bさん(60歳代女性) /U-02

河田さんの新聞の連載記事を読んでいたこともあり、うちの実家の前身の事業である有償の介護サービス「まごころヘルプ」が市の事業となった時、提供会員として登録した。子どもは独立し、ご主人も亡くなり、勤めをやめて家にいる時だった。自分1人の生活になり、これからどのように生活していけばいいかと考えていたタイミングだったという。こうした時に河田さんに出会ったことで、現在の私がいられる、と感じている。

まごころヘルプの事務所では、部屋の中にいろいろな人が来て、自分の好きな手芸をしたり、お茶を飲んだりしていた。そこでみんなにあたたかく迎えてもらい、一緒にお話をしたことを思い出す。またそこでいろんな相談ができたり、教えてもらったりできたので、なんとかやってこられたと思う。

その後にできたうちの実家では、いろいろな人が自分のしたいことを自由に伸び伸びとやっていること、大勢のお年寄りが来ているのにびっくりしたという。すんなり入っていけるし、迎えてもらえたというのがやっぱり一番嬉しかった。そこで、次年度のお当番として手を挙げたことで、スタッフになった。学ぶことがたくさんあり、みんなとお話できるというのが「私にとってはものすごく嬉しいこと」だった。

またこれを機会に、デイサービスの職を紹介してもらい、65歳の定年まで勤めることができた。その後はふたたび、本格的にうちの実家や夜の茶の間のスタッフをしている。夜の茶の間では、若い人や様々な事業を行っている人がいて、最初はちょっと場違いかなとも思ったが、本当に聞いていて楽しいし、またそこでいろんなことを学ばせてもらった。普段だったらとても近づけない方でも、そこにいけば本当に普通にお話ができる、というのがものすごく嬉しかった。まだ自分が必要とされているというか、できることがあると思うと、嬉しいし、張り合いになる。個人的にも本当に河田さんから助けていただいたり、いろんなお話を聞いてくださったので、今こうしていられることに感謝している。

## うちの実家 ケース3 Cさん(30歳代男性) /U-03

市役所職員のCさんは、広報誌の取材のために「うちの実家」に訪れ、今では夜の茶の間ネットワーク中心人物の一人である。もともと市役所に勤めたのは、三国志に憧れ仁政がしたいと思ったからだった。「新潟市に住んでよかったと思える人々を増やそう」と勉強会をはじめますが、そのうち、仕事だけでいいのかと思うようになったという。「うちの実家」の初めての印象は、「落ち着くっていうか、まさに実家という感じ」だった。その後、「うちの実家」で同世代の仲間ができ、運営の手伝いをするなかで、地域福祉の計画づくりにも関わるようになり、市役所職員という自身の職務に、これまでも増して高いやりがいをもって取り組んでいる。

当初は業務として訪れたが、初めての来場時に落ち着ける雰囲気を感じ、興味を持つ。何度も足を運ぶようになることで同世代の仲間ができ、役割を得ることで、自覚が生まれ、意識が変わっていく。また、異動によって「うちの実家」の社会的意義の理解が深まり、同時に「優しくなった」と性格の変化も感じるようになる。以降、他者との関わり方が変わるにつれてネットワークも豊かになり、市政の一部に関われたというやりがいを感じられ、また家族との関係も変化してきた。他者との関係変化と自己の意識変化が相互に影響を与えあいながら行動の変化につながっている。

#### うちの実家 ケース 4 Dさん（60歳代女性）／U-04

Dさんは、社会福祉協議会で働いていた時期に、講演会などで河田さんと知り合いになった。はじめてあったのはそれ以前に病気になった時、患者会の集まりで話を聞いた。その後社協の仕事で河田さんの考えに触れているうち、高齢者に対する見方などが次第に変わってきた。また、両親の介護に直面していた時期でもあり、河田さんは、その悩みをしっかりと聞いてくれた。実父の最期は、高齢者施設であらゆる治療を施され、苦しみながら延命されていた。それを見ているのがすごくつらかったが、河田さんには、心のリハビリが必要、と言ってもらう。

うちの実家を最初に訪れたのは、その後転職した公営住宅の仕事を辞めたあと、忘年会が行われている日だった。親切に迎えてもらい、当番に誘ってもらう。印象的だったのは、来場者した50代くらいの男性もコートを掛けてあげようとしたら、自分のことは自分でするんだよと教えられたこと。そして、初めての人も楽々と話せたこと。うちの実家は、気を使わないでいい。何をしなくてもいい。こうしてああしなきゃならないっていうか、気を使わなくても、ここにいれば楽々していただける場。

でも、お当番の役は全体をみるのがなかなかできず、難しかった。他の当番や来場者に助けられながらなんとかやっていたが、でも楽しかった。それまでも福祉の仕事をしてきたが、これまでは上目線だったと気づく。

いろいろあったが、一番変わったのは、夫の親に優しくなれたということ。「お年寄りほどそんなに優しくしても、優しくしすぎることはないよ」という河田さんの言葉は心に残っている。お当番として丸4年通い、うちの実家に来ていろいろな人たちと接したり、河田さんのお年寄りとの接し方を学んだりすることで、お母さんに優しくなれる。だから家族から行くなどは絶対に言われない。それは本当に私自身もありがたいこと。

#### うちの実家 ケース 5 Eさん（60歳代女性）／U-05

勤めていた会社を60歳で定年退職したEさんは、職業安定所で見かけた介護ヘルパーの講座に応募した。試験に受かり、6ヶ月間500時間というハードな講座を受講することになったが、そこで講師である河田さんに会い、うちの実家を知る。自宅の近所だった



こともあり、講座を修了したあとに、遊びに行くようになった。外見がすごくオンボロだったので心配になったが、入ってみたら、あらよく来たわね、と迎えられた。受け入れてくれたというのが印象に残っている。また、家族構成や年齢などをあれこれ詮索されないことが、気持ち的には楽だった。

2、3回、顔を出した時に、暇だったら手伝いなさいと、河田さんに誘われ、お当番を始めることになった。お当番は、はじめはわからないことばかりで、来る人来る人にお茶の注文を聞いてしまったり、絵を描いている人に「私より上手」と褒めてしまったり、そのたび河田さんに呼ばれて、それがなぜうちの実家にそぐわないか教えてもらうことになった。河田さんは後ろに目が付いているのではないかと思うほど場の全体にこころくばりをしているし、本当に相手の立場を考えているのだと感心した。

うちの実家でお当番を続けているうちに、近所の人との関係も変わってきた。高齢者が増えているのだが、自分を頼りにしてくれる人が増えてきたのを実感している。自分でもわからないが、自然にお年寄りとの関わり方が変化しているのだと思う。また、自分の価値観についても、以前は損得を考えて行動していたが、うちの実家でみなさんの世話をするうちに、お金を払ってでも、参加しているのが楽しく感じられるようになった。

介護の資格とる前に認知症の母を亡くしたので、うまく世話をあげられなかったのが悔しかった。しかし、夫の母のときはうまく世話をすることができた。河田さんから教えられたり、勉強したりした甲斐があった。最初は対応できなかったダウン症の女の子との関わりも、最後は本当に懐いてくれて嬉しかった。続けているうちに、いろいろな人のことがわかるようになってくる。

ここにずっと関わってきて、いまは1ヶ月に1回の茶の間だが、ここに来てみんなに会えることが楽しい。

#### うちの実家 ケース6 Fさん(60歳代女性) /U-06

自営業をしていたFさんは、40歳で乳がんを患い、42歳で仕事を辞めた。弟と一緒に別に住んでいた父も体調が悪くなり、自分も精神的に落ち込んでしまったためだった。そのまま家にいると鬱状態が酷くなる感じがしたので、とりあえずは出ようということで、「まごころヘルプ」の事務所を訪ねた。当時は福祉公社のなかに茶の間を始めた頃で、最初に行った時にはあまり人もおらず、「私ここ来ていいのかな」という印象だった。

なんだか通ううち、そこにいる人も同じような悩みを抱えていることがわかってきた。父親を特養に入れて後ろめたかったのと、それでも元気にならない状況に思い悩んでいたが、河田さんに、「あなたの問題だよ」と言われて、すごく救われた。短い言葉だったが、いつ亡くなったとしても後悔しないようにしなさい、ということだったと思う。なかなか理科してもらえず相談するほど傷ついていたが、勇気出して「まごころヘルプ」

に通ったというのは、自分にとって大きな転機になった。

それから提供会員としてヘルパーを始めた。そこではきちんと理由の示されたガイドブックがあり、いろいろな人との関わりの持ち方を学ぶ。その後ヘルパーの2級もり、デイサービスの臨時職員となる。半年くらいで社員になるが、「まごころヘルプ」で学んだことが自分のなかで生きているという実感を得る。

その頃、河田さんが山二ツに最初の茶の間を開いたのを知る。介護保険の枠の中ではなかなか踏み込んだ柔軟なサービスができないという思いがあった頃だったので、喜んで茶の間でお当番をさせてもらうことにした。栗山にうちの実家ができた時も継続することになる。仕事もお当番もして大変ねと言われるが、いろいろな人から教えてもらい、自分の身に付くことだからすごく楽しい。

2年くらい前にストレスで心臓が痛くなったりしたこともあり、仕事を思い切って辞め、うちの実家のお当番を主体的にさせてもらうようになった。私にとっては人生が180度変わったと過言でないかもしれない。無理しなくても自然と、関わる人たちと関わりをもちながら力をもらっている。いろんなことがあっても常に前向きに思うような気持ちになれるのは、こういう関わりをもっているからだと思う。

60歳前くらいまではつらいことが多く、なぜ自分だけがこんな目にあってと思っていたけれども、ここ2、3年すごく幸せだと感じるようになった。自分も老後に向かっていくが、死を恐れてじゃなくて、自分が楽しんで、病気をせずに動けて、いろいろな関わりもっていくのが一番いいんだろうな、と思う。そうするとまた夢が出てくると感じている。

#### うちの実家 ケース7 Gさん(60歳代女性) /U-07

うちの実家の事務局を担当しているNさんは、「まごころヘルプ」の説明会に、友達に誘われて参加した。そこで出会った河田さんの考え方に衝撃を受ける。たとえば、配食サービスなど地域でボランティアをやっていて、そこでは自分の代わりを探すくらいの責任感を持ってやるよう言われていたが、河田さんの考えは正反対で、自分の都合の悪いときは遠慮なく言って欲しいという。しかし、手助けをを必要としている人が困るようなことには絶対ならないようにする、という。その考えに驚き、提供会員になった。

登録をしたものの、やったことがなかったこともあり、半年間一歩が踏み出せなかった。事務所から何度も誘いの電話が来るが、そのたび、「うーん、ちょっと」と断っていた。おどろくほどあっさり納得してもらえたが、しかし、同時に、なんのために入会したのか考える。断ったほうが負担にならない仕組み、急かさないで誘い続けるのはすごいと思う。

家事が嫌いな自分だが、ヘルパーは相手に聞いてやるわけで、自分が得意なことを提供するのではないから手伝える。精神障害の人の担当が多かったが、河田さんが責任者

としている安心感があるから、なんの心配もいらなかった。そのうちコーディネイターとなり、会計も任されるようになった。河田さんが60歳になるのを機にまごころヘルプを辞め、うちの実家を立ち上げるときも一緒に参加した。

普通の状態では地域にいたら出会わないような人に山ほど出会った。病気の人や精神的な障害がある人には、専業主婦だけやっていたら出会わなかったと思う。出会っていないければきっと避けていたと思うし、自分の住んでいる町内でも目の不自由な人がいらして、その人たちとも普通におつきあいできている。非常に感謝している。ご近所の方々からの相談を受けるが、相談してもらえてというのがすごく嬉しい。

うちの実家が終わって、月一回の茶の間になって、自宅にいる時間が増えた。今までお茶飲みできなかった人たちと地域でお茶飲みしている。また、夫が地域にデビューするのもサポートできた。ゴミ出しをお願いして近隣の主婦の方々と顔見知りになるようにしたり、地域の付き合いの中での打ち合わせなどを自宅でできるようにしたり。そういうときは私はノータッチで、夫が人を招きやすいようにしている。

県庁を辞めてからも行政相談員やサッポロビールの販売など社会との接点を探していたが、まごころヘルプに出会って、「これだ」と思い、一本化した。人との出会いはすごいと感じる。河田さんに出会い、まごころヘルプやうちの実家を通じていろいろな出会いがあった。そういう人との出会いは、ものすごく楽しい。

#### うちの実家 ケース8 Hさん(40歳代男性) /U-08

自営業を営むHさんは、何年か前に河田さんの話を聞いたことはあったが、昨年9月に行われたシンポジウムの帰りに声を掛けられ懇親会に参加したのがきっかけで、夜の茶の間に参加することになった。最初は、本音では面倒くさいなと思っていたのだが、参加してみたら、楽しそうなところなのかなと思ったという。いいなと思った点は、いろいろな人たちが来ていること、お当番のあ人たちが裏方に回ってサポートしていること。商売のネタを探すような人とは違う人がいることが、すごくよかった。その後も誘われ、結局毎月参加することになった。

以前は建設関係の会社に勤めていたが、神奈川への転勤を命じられたことを機に退職した。震災が大きなきっかけだった。内部や取引先との話のなかで、地震によって儲かるというような話が頻繁にされ、嫌気が刺していた。会社員時代、居場所づくりにチャレンジしたり、まちづくりの勉強会に参加したりしており、仲間がいたということもあった。

独立して、商店街をなんとかしたいという思いで会社を設立したが、独立して、等身大の自分と付き合ってもらえる人がどれだけいるかと恐ろしくなった。その後は、厳しい経営環境のなか、他の経営者に助けられたり、講演会で格好つけるのをやめ本音で語ることで楽になったりという経験をかさねてきた。

そんななか、河田さんの茶の間に参加した。河田さんに話を聞いてもらって泣いたりする人がある。話をして楽になったというその人の気持ちが、いまはよくわかる。河田さんは、人をバカにしない人で、どんなに自分恥さらしても大丈夫だとわかった。だから、河田さんと昨年 9 月のタイミングで会えてよかった。ちょっと前だったらば、私も会わなかったし、河田さんもそうだったと思う。助けてもらったと感じている。

私はまだ事業をはじめて 2 年ちょっと、河田さんは 20 何年。私もそれまでしぶとくやるしかないと思う。以前は、本当にプライドのかたまりで、惨めな姿は見せたくないと思っていた。今はもういいやって感じになったという。このままで終わりたいくないし、人の役に立ちたいという気持ちがある。人の喜ぶ顔が好きだ、と H さんは笑った。

### うちの実家 ケース 9 I さん (60 歳代男性) /U-09

河田さんが大阪から戻ってきた頃、I さんは県庁で高齢福祉の仕事をしており、ゴールドプランの策定などに携わっていた。まごころヘルプの活動を見守ったり、講演を依頼したりという関係だったが、健康づくりセンターのセンター長をしている時に、脳梗塞で倒れた。仕事を辞めなくてはいけなくなり、ショックだった。寝たきりになるのではないかという人もいて、病気をしているあいだに離婚し、家もなくなり、再起不能だと思ったという。

その後、平成 21 年ごろ、河田さんに誘われて、うちの実家に出入りするようになる。その時は、脳梗塞で麻痺が残り、歩くにも不自由、座るのも大変だった。当時は一人暮らしだったため、一人でいると何も話さないで 1 日終わってしまうような状態だった。うちの実家の印象は、初めてでも初めてじゃないって感じで、来た人は誰でも入りやすい雰囲気だった。また、自分の関心ある話題もできたのがよかったという。夜の茶の間もネットワークがはじまり、最初は夜を中心に参加していたが、昼間も居心地がよいので週 2 回ほど顔を出すようになる。バスで 30 分位かけて通っているが、自分の居場所があるという感じになった。

自分の居場所という意味のほか、以前に事務所を借りて、居場所みたいな事業を行っていたことがあった。いつ来てもいい場所で、電球の取替えとか買い物などの何でも屋でもあった。高齢者のボランティアが働くスキームはつくったのだが、うまくいかなかった。だから、どうしたら河田さんのようにできるか、という関心もあった。

夜の茶の間には、毎回かさかさ出るようにしてる。そして、河田さんに頼まれれば何とかお手伝いしようと考えている。うちの実家に行くのは、張り合いになる。しかも、行けばいろいろな人と話でき、いろいろな情報も入ってくる。そして、自分の知っていることをみんなに教えてあげられることで、自分の存在価値も感じられる。社会に役立つというのは生意気だが、何か貢献できるという喜びを感じている。1 日終わった時にお酒を飲んでいると、生きてるなど実感できる。今から癌になっても構わないが、まだ新

しいことを学びたいし、ぜひもう一度オリンピックを見たいと思っている。

#### うちの実家 ケース10 Kさん(30歳代男性) /U-10

社会福祉協議会の職員であるKさんは、もともと地域の茶の間をつくりたいと思ってこの職を選んだ。平成13年ぐらいに、合併する前の旧吉田町時代、ふれあいサロンを進めるために山二ツの地域の茶の間を地域の人たちと訪れたのが、関わりの始まりになった。

初めて訪れた時、門を開けるまでは緊張したが、入った瞬間に変な先入観はなくなり、ほんとに実家に来たというか懐かしいところに帰ってきたというイメージだった。誰が来てもよそ者扱いしない雰囲気があり、気さくに受け入れてもらった。世間話をしていると、「ちょっと手伝ってよ」と声が掛かり、いつのまにか運営者の一員みたいになっていた。役割があると、お客さまでいられないし、役割があるからこそ来月も来ようと思える。

その後は、地元のふれあいサロン、地域の茶の間を増やすという仕事を手がけ、何度か見学に訪れたり、河田さんに講演をしてもらったりしているなかで、吉田町にも地域の茶の間が増えていった。

夜の茶の間が始まった頃は、福祉業界の人や河田さんのつながりの人が多かったが、人が人を呼び、どんどん輪が広がってきた。その司会は、バトンリレー式になっていて、急に振られるのだが、その役割あることが、自分を振り返るよい機会になっていると感じる。今は仕事として来ているわけではないが、みなさんに会えるのが一番楽しい。自然と足が向かう居場所になっている。ストレス解消の場所でもあり、異業種のつながりの機会でもあり、自分にとってプラスになっている。

もともと自分から何かをしようという性格ではなかったが、夜の茶の間で人前に出て司会ができるようになった時、自分が変わったと感じた。あとは人とのつながりを苦痛に思わなくなったところも、自分が変わった点と感じている。

最近では地域に出歩くことが多くなり、また逆に何かあったときは相談のために地域に呼ばれることも多くなってきた。そんななか、今後は地域福祉を進めていくために、言葉がいいのか悪いのかわからないが「歩く出会い系サイト」になりたいと思っているという。その先輩は河田さん。最初は、ふれあいサロンをどうつくるか、どう運営できるかしか考えていなかったが、地域のネットワークや橋渡しをすることが大事だと思うようになった。これからも、社協のKではなく地域の中に住んでるKとして、地域の茶の間をどんどん増やしていきたい。自分にとって河田さんとのつながりは、大きな宝物だと感じている。

## ・「リタクラブ」

大人のための自習室を謳う「リタクラブ」は、キャリアアップや起業を望む人たちが多く集まっている。単なるシェアオフィスというより、ともに学び合う会員同士の交流を重視した運営を行っている点が特徴である。

### リタクラブ ケース 1 Aさん(20歳代女性) /L-01

Aさんは、会社勤めをしていた6年前からカイロプラティックの勉強を始めた。半年くらいで会社を辞め、店で働くようになる。2年間ほど手伝いをしていたが、店以外の場所で身体の歪みを整える体操を教えるような教室ができないかと、会場を探そうになった。このまま店の手伝いだけを続けていたら自分は変わらないし、将来自分の店を持てたら楽しいかなと思うと、自分のお客さんを持てるようにならなくてはいけないと感じるようになったからだった。

リタクラブに初めて来たのは2年前。場所の存在は知人から聞いていたが、たまたま時間のある時に立ち寄った。しかし、その時は受付の人と少し話をするだけで、すぐに活動をはじめることにはならなかった。その後、高山や射水で個人的な施術を始め、少し慣れてきた頃、リタクラブでの活動を始めた。会員のKに誘われたことがきっかけだった。富山から射水に店が移り、いろいろなネットワークを広げようと考えていた頃でもあった。

最初は、とりあえずお試しデーみたいな感じで気軽に始めたが、その後も、Kさんがフェイスブックの活用など提案してくれたり、受付を手伝ったりしてくれるなど、積極的にサポートをしてくれた。いまではリタクラブの会員にもなり、月2回ほど活動している。

リタクラブでは、もともとここで仕事をしている方もいて、たまたま寄ってくれる人や口コミで紹介してくれる人がいてありがたい。また、カイロプラティックの仕事が続けていくためにはどうすればいいか、といった経営の話をしてくれる人がいて、仕事として自分でしっかり考えられるようになったと感じている。また、経営者やフリーランスで働いている人に出会えることが刺激になっている。

個人的な施術をはじめ、いろいろな人に会うようになった。もともとすごい人見知りだったため、接客業は向かないと思っていた。カイロプラティックの面白さを感じ、悩みながらも仕事にしてみても、人と会うことで成長できるんだと思うようになった。今ではいろいろな人に会うのが楽しいと思えるし、自分の知らないことを教えていただいただけなのが嬉しいを感じるようになった。何に対しても自信がないほうだったが、心の持ち方が変わった。知らないところに行くのは勇気が必要だったが、思い切って行動することで得られるものがある。

今後は、まだどのような形にするかは決まっていない状態。焦って決めるようなこと

ではないが、店を持ってみたいという気持ちは徐々に高まっている。

### リタクラブ ケース 2 Bさん (30歳代女性) /L-02

平木さんと最初に出会ったのは、2009年ごろ、あるセミナーに参加したところ、その場にいた知り合いが紹介してくれた。若くて、すごく面白そうな人だな、という印象だった。平木さんはその頃リタクラブの前身であるポエシアブランカを準備している時期で、図面などを見せられ、ぜひセミナーをやるように誘われた。

Bさんは、パソコンのインストラクターからコーチングの仕事にシフトしようとしている頃で、セミナーを開催できる場合は魅力的だったが、子どもがいたため夜や週末は家を空けることができない。平木さんの提案で、毎週金曜日の朝7時からセミナーを開催することになった。「朝活コーチング」と名付けて、入社前に一週間の振り返りと来週の計画を立てるという内容だった。

最初はとにかく、参加者が来ても来なくても、1年間やってみようって思った。それが、結果的に3年間続けることになった。平木さんも毎週朝7時に会場を開けてくれ、また参加料の設定や広報もサポートしてくれた。平木さんが声をかけてくれたことによって実現できた。

この活動は、Bさんにとっても転機になったという。一つは、セミナー開催の告知を100人から200人に送った。自分にとっては初めてのことだった。さらに、毎週開催するために、セミナーの準備をしなければならない。結果的に自分の訓練になった。そして、百何十回と開催することで、コーチングといえばBさんという認識を広めることができた。

リタクラブでは、子育てコーチングを昨年夏から開催している。リタクラブの利点は、何か変えたい、成長したいと考えている普通のサラリーマンとかOLに出会えるところ。そういう人たちに、コーチングの良さを伝えたいと思っている。同時に、一般的な会社員ではない、変わった人、多くの人脈を持っている人や行動力のある人にも出会え、刺激をえられることもよい。困ったことがあっても、たいがいのことは誰かに相談できる安心感がある。スタッフの方も、広報も積極的にしてくれるし、すごく応援してくれる。事務的な応援ではなくエッセンスを入れてくれるし、ふらりと立ち寄った時に他の利用者を紹介してくれるなど、細やかな気遣いがある。

ポエシアブランカ時代からコーチングのセミナーの舞台として利用することで、ネットワークが広がり、また自分の仕事のアイデンティティが明確になってきた。

### リタクラブ ケース 3 Cさん (40歳代男性) /L-03

平木さんとは、ポエシアブランカが立ち上がった頃に出会った。もともとはTwitterを通じて知っていた。「富山を愛する男」などと熱い気持ちをつぶやいていて、異質な存

在だった。ポエシアブランカで Twitter 交流会があると知って、参加した。その会で行われたのがワールドカフェだった。今でこそ普通になっているが、当時は Y さんが経験もしたことがなく、30 人～40 人の知らない人が集まって交流し、それを明らかに若い平木さんが進行しているという不思議な空間だった。

C さん自身は富山出身で、親の印刷会社を立て直すために大阪から通っていた。今後の成長の見込めない会社だが、C さんはそれを続けることを決意。目先の利益を求めめるのではなく、地元の人と人をつなぐコミュニケーションツールを提供するのが印刷の仕事の本質と捉え直し、地元の店を紹介する冊子を印刷し配布したり、ありがとうを集めて SNS 上に公開するといった活動を続けてきた。そうしたことを通じて、売り上げが徐々に上がっていった。

その後、ポエシアブランカにも通うようになったが、大阪から富山に戻ったばかりの C さんにとっては、様々なつながりが広がるきっかけとなった。Twitter 交流会で知り合った人から印刷物を頼まれたり、知り合った 3 人で EC サイトのビジネスを立ち上げたりということが起こっていった。仲間を集めて地元のお祭りに参加するということがあった。

ポエシアブランカは、高い志を持つ大人が集まっている。普通は、自分の職場の周りには夢を語り合えるような仲間はいない。そういう人たちと関われる、オープンでフラットな場になっているのが大事だという。3 人ではじめたビジネスでも、4 人目が現れる可能性があって、しかもその 4 人目のポテンシャルが高いような場所。

小矢部では、ELABO という場の運営も手がけるようになった。リタクラブにいるような元気な大人たちだけではなく、生きづらさを感じている若者やどうしていいかわからない人たちにも使ってもらえる空間にしようと考えている。どちらの立場の人も、まずアクションを起こす、一歩目を踏み出すということが大事だと Y さんは考えている。

こうした活動のなかで、自分は信念を持って突き進んできたが、最近に家族が次第に理解してくれるようになった。妻が寄り添ってくれたっていうのが、大きな強みになった。

来ることによって変わったのは、人脈が広がったこと。また、セミナーや研修会といった情報がここはたくさんある。自分でも勉強会を主催するのだが、そうしたことをやってみようという気になった。やってみようとしたときに、すぐやれる。そそで、すぐ手伝ってくれる人もいる。そういう人に出会えたのがリタクラブだという。

#### リタクラブ ケース 4 D さん (30 歳代男性) /L-04

保険会社で採用の担当をしている D さんは、東京にある人材教育コンサルティング会社の研修に参加するため、リタクラブを訪れた。その後、平木さんの経歴に興味を覚えたこと、一人で集中して自分の目標やアクションプランを整理する時間を週に一回くらい欲しいと考え、会員になった。



一人での作戦会議は現在も続けているが、リタクラブで通うようになって、勉強会を主催するようになる。他のメンバーが開催しているのを見て、自分で開催することを考えるようになったからだ。最初に実施したのは、自身がヘッドハンティングを仕事にしているため優秀な人材を集めたいという、自分の都合による企画であった。開催してみても、純粋に人に喜んでもらえるような企画でなくてはいけないということ、また、会社と違い主催者になって勉強会を開催するにはゼロからゴールまで自分でやってみないといけないという事実に気づいた。こうした経験を通じて、それまではどうやって自分の売り上げを上げようかという思考回路だったのだが、人の役に立たないと売り上げは立たないということがわかり、働き方や商談の質が変わってきた。

一人の時間を確保しようとして加入したリタクラブだったが、行動に起こすことで、新しい人脈が増えたり、情報が入ってくるようになった。Facebook 上での友人は数百人も増え、自分の仕事についても多くの人に知ってもらえているので、優秀な人材を紹介してもらえるとということもある。

またリタクラブでは、自分より年下の若手経営者が熱く語り合っている様子が耳に入ってくる。すると、自分も負けていられないと思える。なりたい自分を見つけるには、一人で考えているのではなく、いいモデルをたくさん見ないと思いつかないのだと思う。リタクラブは自分にとって、そういう人に出会いふれあえる場所。最近では、自分の目標に近づくため、毎晩飲みに行くということもなくなり、生活習慣も変わってきた。

#### リタクラブ ケース 5 E さん (40 歳代男性) /L-05

企業の研修と経営者のコーチングの仕事をしている E さんは、平木さんが以前居酒屋で開催していた「フェディス」という勉強会に講師として招かれたのがきっかけ。ポエシアブランカの計画中で、「おもしろいやつだな」という第一印象だった。

その後オープンしたポエシアブランカに行き、まず富山にない空間だとびっくりした。ずっと自宅で仕事していたが、こういうところでセミナーをするのもいいのではないかと考え、借りるようになった。

よく分からない場所だからか、いろんな人が集まり、新しい出会いがあった。20 代で組織に入らず独立して働いている人にも出会い、情報としては知っていたが富山で会うのははじめてだった。世の中変わってきているなどということを実感する。

リタクラブに移る際には、事前に 2 階のシェアオフィスの話聞いており、すぐ借りることにした。ちょうどオフィスを外に借りようと思っていたのだが、一人で借りるのは躊躇していたタイミングだったからだ。借りてみると、家でやるより集中できるし、少人数のセミナーも開催できてよい。また、ネットで購入したものの受け取りをしてくれるのが便利で、気分転換に下のコワーキングでおしゃべりできるのもよい。

ここで出会った人と新しい仕事を始めることもあり、共同で進めるプロジェクトが増

えた。普段からリタクラブに出入りしているメンバーは何度見ているし、何が得意なのかわかっている。「彼なら大丈夫だ」という信頼があらかじめあるので、新しいプロジェクトをすぐにスタートすることができる。「一緒にセミナーやろう」と誘った若者が、その後育って、大きなセミナーをやるようになったということもあった。

リタクラブでは、利用者の一人という立場で、多くの若者の支援をしている N さんだが、もともと部下に厳しい指導をする上司だった。その仕事のスタイルがうまくいかなかった時にコーチングに出会い、価値観が反転したという。そして、自分の仕事に誇りを持って生き生きと働いている人に出会い、自分もコーチングを仕事にするようになった。平木さんと出会った時、学ぶ姿勢を持つかっこいい大人が増え、そういう人たちに子どもが触れる機会が増えたら社会が変わるという話に非常に共感したという。

#### リタクラブ ケース 6 F さん (40 歳代女性) /L-06

接遇の講師をしている 40 代の F さんは、Facebook で知ったセミナーに参加するためにリタクラブを訪れた。昨年会社を辞めフリーランスになっていたこともあり、仕事のあいまはファミリーレストランなどで仕事をしていたが、ちょうどオフィスを探していたこともあり、シェアオフィスを借りることになった。駆け出しで続けられるか心配だったが、続かなければ解約すればいいと決めた。常に行く場所があることで安心感が得られたし、また、名刺に富山市の住所を書けるのも魅力だった。

F さんが一番実感した変化は、リタクラブの雰囲気は自分を変えるということだった。その印象は、「常にウェルカム」で、あたたかい感じがして「安全な場所」であること。日常生活の中には、休日に勉強のために東京などに行くと、お休みの日にお金使って何をしているのか、といったことを言われることもある。だが、リタクラブでは、みんなが学ぼうとしているので、そういうことを言われる危険はない。心の安全が守られる場所を借りられただけでもお得だったと感じている。

また、ある寒い日にスタッフの人が車のワイパーを上げておいてくれたこと、そのことが嬉しくてあたたかい気持ちになったと同時に、その時にちらかっている車内を見られたはずだと恥ずかしくなることで、その後、整理することができるようになった。会社員時代はずっと治らなかったことが、北風と太陽の太陽のようなことがきっかけとなって、自分が「変わった」と実感できた。自分自信を許せていないと相手を受け入れられないとよく言われるが、そうした雰囲気がここには整っていると感じている。

人との出会いについては、セミナーの後に参加者とファミリーレストランでお昼の懇親会があり、たまたま名刺交換をしたことから自分の名刺のデザインを依頼する人が見つかったり、ホームページの制作を手伝ってくれる人にも出会ったりということがあった。自分の仕事を加速させる出会いの機会が得られた。

34 歳まで子供を 3 人育て、その後自分のやるべき仕事として接遇の仕事に出会い、7

～8年間取り組んできたFさんにとって、リタクラブのように、学びの場であり、何かをやりようとしてる人に会える場はすごくうれしいという。最近、自分が本当にしたい仕事は、人を元気にするいろいろな種を作ることだと気づいた。ゼロから何かをはじめるとは難しいが、ここでいろいろな人と会うことで、もっとこうしたらいいんじゃないと考えるのはすごく楽しい。そういう機会が、ここにはいっぱいあったと感じている。

#### リタクラブ ケース7 Gさん(40歳代男性) /L-07

Gさんは現在、「名前詩人」として名前の入った詩の書の制作をメインに、メンタルやマーケティングのコンサルタントとしても活躍している。

もともと東京でベンチャー関係の仕事についていたが、39歳で鬱病になり、富山に戻ってきた。3年間ほどの休養ののち、自宅のある魚津の商店街にあった「がやがや」という居場所に通うようになり、社会復帰に向けたリハビリの場になった。そうした居場所で次第に自身の書いた書を展示してもらえるようになるが、それで生計を立てて行くにはどうしたらいいかを模索し始めた頃、さくらカフェのKさんを通じて平木さんを紹介してもらった。平木さんに相談したところ、書家の大蔵さんの活動が参考になるかもしれないと紹介され、ポエシアブランカで開催されていた名前詩のレッスンを受ける。当時はお金がなく2000円くらいの受講料はきつかったが、投資だと思いきった。名前詩のスキルと、もともと持っていたマーケティングのノウハウを活かして、メディアに取り上げられたり、ショッピングセンターでのイベントに参加したり、次第に活躍の場を広げていった。

リタクラブは、Gさんにとって、心を癒す居場所の次のステージであった。今では会員として利用するほか、メンタルやマーケティングの研修を月に2回くらい行っているが、他の会員が開催するコーチングやカウンセリングを受けられたのもよかったという。東京で受けたら2万円くらいするような質の講座を安価で受けることができ、次の「ゾーン」に進むための窓口のような機会になった。

Gさんにとってリタクラブの魅力は、セミナーをさせてもらう会場として、自然に10人～20人くらいの人が集まる場であること。そしてそれ以上に、次のゾーンに行きたい人たちがいる場所である点が魅力になっているようだ。普通の喫茶店みたいな場では、結局悪口を言い合うようなこともある。しかし、リタクラブのメンバーは皆前向きで、鬱病を経て少しずつ自分らしい生き方を見つけてきたNさんにとっては、本当に変わろうとしている人のネットワークは大きく背中を押す力になったようだ。

#### リタクラブ ケース8 Hさん(40歳代男性) /L-08

保険会社で働くHさんがリタクラブの前身であるポエシアブランカを訪れたのは、会社で行くように言われて参加したセミナーがきっかけだった。同時期に別のところで平

木さん出会い、こんなに前向きで知識もある「熱い男」がいるのかと刺激を受けた。自分はそこそこでいいやと思ってるような人間だったが、地域を盛り上げたい、こういう店にしたいという想いを聞き、すばらしいことだと感じ、少しでも関わられたらいいなと思った。

その後、イベントやセミナーに定期的に参加するようになり、そうすると、自然に色々な情報が入ってくるようになった。「ドリブンブランプレゼンテーション」という、自分の過去と未来にやりたいことを映像や音を使って10分間プレゼンテーションする活動に誘われ、スタッフをやるようになる。発表者のサポートをするうち、何がこの人を突き動かしているのかと考えるようになり、そのような考えのない自分が恥ずかしくもなってきた。やはり自分で動かないと変わらないんじゃないか、と思うようになった。

そこから、地元の黒部で婚活イベントの司会をやったり、東京までお金と時間をかけて研修に行ったり、積極的に活動をするようになった。黒部で活動する仲間とは、富山で出会った。黒部でも志の高い人がいることを知り、一緒に活動をするようになった。また、たまたまある友達のお子さんが、保育所でサンタはお父さんだよと言われショックを受けて帰ってきたという話を聞いて、本物のサンタになりきってプレゼントを渡しに行くという活動もした。演出などを凝りに凝ってやったこともあり、すぐに来年も来て欲しいと言われ、そして、ちょうど帰省した短大に通うため名古屋にいる娘が、想いに共感し一緒にやると言ってくれるということもあった。

Hさんは、平木さんやポエシアブランカを通じて出会った人たちを見て、自分は変われるのではないかと、変わりたいって思えた、という。そうでなければ、今後自分は何のために生きていかなきゃいけないのか。そういう想いが芽生えたのはポエシアブランカに参加するようになったことがきっかけだったようである。

#### リタクラブ ケース9 Iさん(40歳代女性) /L-09

40歳を前に、シングルマザーでもあるIさんは、職歴に自信の持てない自分だが、より自分らしい仕事をしたいと悩んでいた。そんな折、コーチングに出会い、それを生涯の仕事にしたいと思うようになる。コーチングの先生が2階にオフィスを借りていた縁で、「リタクラブ」で開催された講座に参加するようになり、そこで起業を後押しされる。セミナーを開くには会員になったほうが割安だということで会員になり、それ以降、折に触れて「リタクラブ」のスタッフと参加者の支援を受けながら、3ヶ月後に独立した。これまで、経営者はものすごい人だと思っていたが、いまは気後れしなくなった。当初は「私なんて来ていいのかしら、すごいなと違和感を感じていたが、ビジネス塾に参加することになり、「リタクラブ」を通じ多くの人に出会い、起業を促されるようになる。やがて、会員になり自分が講師になってセミナーをはじめると、在職中にもかかわらず個人の仕事が増えてきた。失敗を恐れない体質になってきたと変化も感じるようになっ

た。次第に、やりたい仕事にもっと時間を取りたいと意識が変わる。3ヶ月後、会社を辞め、独立した。「リタクラブ」は、何かあれば助けてくれる安心感があり、起業してみると、「リタクラブ」でセミナーを開催しているといえれば知っている人が多く、信頼を得られやすい。「リタクラブ」で得たネットワークのなかで意識が次第に変化し、起業が後押しされてきた様子がわかる。

#### リタクラブ ケース 10 Jさん (30歳代女性) /L-10

販売の仕事のかたわら、キッチンアドバイザーをしている J さんがリタクラブを知ったのは、Facebook の友人を通じてだった。当時、整理収納アドバイザーの資格を取ろうと思っていたが、勉強できるスペースが欲しいと思っていた。図書館だと静かすぎるが、リタクラブは飲食 OK で会員同士の交流もあると知り、何か目標持って過ごしている人と巡り合えればという期待感もあり会員になった。

見学は、面識はなかったが事前に平木さんにメッセージした。すぐにリプライがありウェルカムな雰囲気が良い印象で、実際に会ってみるとさわやかな感じだったという。「どんな方とお知り合いになりたいですか」と聞かれたので、資格の勉強している人や目標を持って仕事以外の分野の勉強をしている人と伝えたと、その後いろいろな人を紹介され、話をするきっかけになったので輪が広がった。取りたいと思っていた資格は取れたが、目標達成後も読書したり自主セミナーのコンテンツを作ったりするのに、気分転換も兼ねてリタクラブの利用は続けている。

資格を取り自分らしい仕事を始めたいと思ったのは、もともと片づけるのが好きだったってことと、それで誰かの役に立てるかもしれないと思ったから。そして、どんな企業にいても保証があるわけではなく、何か手に職をつけておけば安心だと思ったという理由もあった。今はまだ、会社に属しながらフリーランスの仕事をしている。

リタクラブに参加してよかったのは、自分が知らなかった分野を知ることができたということ。例えばコーチング。自分ではこんなことできないと端から思っていたことでも、コーチングのコーチと話をすると、「できるんじゃないのかな」と前向きに思えてくることが多くなった。くよくよしなくなったという感じ。またその関係で、セミナーの講師をする機会も得られるようになった。本業の販売の仕事でも、リタクラブで知り合ったことがきっかけで店舗に来てもらえるなどネットワークが広がった。リタクラブには、自分で起業している人も多いので、どのように仕事を広げてくれるか教えてくれたり、役に立ちそうな情報を教えてもらえる。リタクラブで勉強していなかったら、資格は取れたとしてもどう活用すれば良いかわからなかったのではないかと思うという。

#### リタクラブ ケース 11 Kさん (30歳代男性) /L-11

K さんは証券会社に勤めたのち独立し、証券代理店の立場で証券アドバイザーの仕事

を行うかたわら、リタクラブではコンサルティングのセミナーを行ったり、参加者がセミナーを開くのを手伝ったり、リタクラブの利用者でありつつ、運営全般を見守るような立場で関わっている。平木さんとは、リタクラブの前身のポエシアブランカができる前からの付き合いで、たまたま職場が近隣だったこともあり、場所のオーナーも顔見知りだった。平木さんの印象は、若くて元気よく頑張っている子という感じで、ポエシアブランカのプレオープンパーティの準備から関わって以降、応援する立場となった。その少し前にSさん自身も独立していたため、親近感もあった。

独立後の職場が歩ける距離にあったこともあり、ポエシアブランカでセミナーをやるようになった。もともと証券アドバイザーが仕事で集客できるセミナーを開催するところから顧客を広げていくということはしていたが、独立するときに経営やスキルアップを学んだ経験もあり、それを元に自分でもセミナーやろうと考えた。セミナールームが用意されていたから、コンテンツがなければ協力するという意味もあった。一室千円と安価で、平木さんもメルマガに掲載してくれたこともあり、気軽に始めることができた。セミナーは、月一回だと準備のリズム取れないと考え、毎週開催することになった。結果的に、セミナー講師としてずいぶん練習になった。

2年近く定期的にセミナーを開催することで、徐々にKさんを中心としたお客さんのコミュニティみたいなものができていった。セミナー主催者のポジションだとネットワークの中で覚えもらえやすいし、知り合いが増えると、困ったときの呼びかけなど助けてもらいやすいというメリットを感じられた。また、富山大学の学生など働いていると出会えない人とのつながりも持てるようになった。

リタクラブでの活動は、直接証券代理店の仕事には結びつかない。しかし、リタクラブ若く志のある人々と関わることで、心が磨かれるような、いい人になっていくような効果があったのではないかと感じる。証券マンの仕事はノルマがあり、儲かろうが損しようがとにかく売らなければならないという状況になりやすい。すると「俺は何のために仕事しているのか」という悩むことになる。もしリタクラブがなければ、仕事のための仕事しかやっていなかった可能性もある。せつかく学んだことを人に伝える活動も、場所がなかったら学んだだけで終わっていたかもしれない。今ほどコンサルティングを自信を持ってできていなかったと思う。証券マンとしてより成功するとか売り上げをたてるという軸では成功につながっているとは言えないが、それ以外の幅は広がった。重要でも緊急でもないけれども、そこをいろいろやっている方が人間性は高まるのではないかと、考えるようになったという。

#### ・「津屋崎ランチ」

「津屋崎ランチ」には、移住してきた新住民、地元のまちづくりに関わってきたシニア層やその子供世代など様々な人が関わっている。過疎の漁村の活性化に向けて、移住支援のための

空き家の再利用と小さな起業支援を進めている。地元の方は、若者や移住者と交流する中で、地域の豊かな自然や古民家を資源として再認識し、外から来た人は地域住民に見守られながらコミュニティの良さを実感して暮らしている。こうした交流のなかから、移住者の増加と新しいまちづくりに向けての活気が生まれている。

#### 津屋崎ランチ ケース 1 Aさん（40歳代女性）のケース/T-01

子育てを機に、夫の実家である津屋崎に家を建てたという Aさんは、地元の「おばちゃん」たちにお世話になるうちに、のんびりした津屋崎の雰囲気が好きになった。「津屋崎ランチ」を主宰する山口さんによる「プチ起業塾」に参加したのがきっかけとなり、空き家を改装したカフェを始めることになった。津屋崎はいいところなのにひろがらないという問題を感じていたから、そのためにできることをやっている。自分が楽しくて、たまに人によるこんでもらえて、できるだけがんばる。それをゆるしてくれるまち。津屋崎でなければやっていなかったと感じている。Aさんのこれを振り返ると、予期しない出会いが意識や行動の変化につながっていることがわかる。もともと津屋崎に対する愛着を持ち、地元のおばちゃんたちにお世話になっていた。そんな折、特に起業するつもりはなく参加した「プチ起業塾」だったが、他の参加者と話すうちに自分でもやりたいことがあることが見えてきた。古民家の大家さんと出会ったことがきっかけになって、イベントを行うことになったが、やってみると楽しく、いろいろな経緯があった後、自分が中心になってそこで店をやることになった。そして、自分が店をやることは、好きな津屋崎に対する恩返しでもあるということに振り返って気づくようになり、「手作り市」も実現できるようになった。このように、モデルを通してわかるのは、Aさんのケースは、偶然の出会いによって、自分の実現したいことが次第に明らかになってきた過程だということである。

#### 津屋崎ランチ ケース 2 Bさん（20歳代男性）のケース/T-02

津屋崎生まれの Bさんは、九州大学で歯科医の勉強をしている。津屋崎ランチは、インターネットの情報ですごい活動が始まっているようなことを知っていたが、関わる機会がなかった。大学2年か3年のとき、たまたま津屋崎のお祭りにふらっと行ってみたところ、まちの人が楽しそうに活動していて驚く。そこで話した津屋崎ランチのミツオさんに誘われ、福津トークカフェに参加することになった。

その印象は「すごい不思議な感じ」だったという。町の人がふらっときてしゃべっているだけだろうと思っていたが、地域外の人も多く来ていた。そして、津屋崎のイベントといえば、親同士の寄り合いのなかに誰かの子どもとして自分が混ざるといった形だったが、ここではそうした関係もなく、すごく自由だった。その後、トークカフェやFacebookを通じて流れてくるイベントに参加することになった。また、繋ぎ屋コーヒー

にも出入りするようにある。

こうした場に参加する前は同じ年代の人としか交流がなかったが、急に、「大人の人たち」と知り合えるようになり、知りあいの数も増えた。単なる生きるための手段としての仕事以上の考えがあるのだと気づいたり、自分でいろいろなことについてしっかり考える機会が得られたりした。同世代だけの交流ではどこかで聞きかじったことを話していればよかったが、世代の違う人との会話によって自分の考えが話せるという自身がついたという。

さらに、トークカフェのファシリテーター役にも誘われ、やってみるという機会もあった。ワールドカフェの対話の流れが見えるようになり、面白くはなりました。とても緊張して前日は原稿暗記したりシュミレーションしたりしていたが、やってみてよかった。他にも、よっちゃん祭や福津映画祭のスタッフとしても活躍している。

津屋崎は、どんどん変わってきていることもあり、何か新しいことが起きそうな予感があるという。だから、あわよくば自分もそれに乗かって楽しいことができたらしらうし、希望が持てる。これまでは都会に遊びにでないといけないと思っていたが、地元でこんなに遊べると価値観も変わった。

### 津屋崎ランチ ケース 3 C さん (50 歳代女性) のケース / T-03

津屋崎で民宿を営む C さんは、山口さんたち津屋崎ランチのメンバーが地域に入っていく様子を見守り、地元とのつながりを支援する協力者の一人である。人懐こく冗談好き、世話焼きな「お母さん」という印象。山口さんの最初の印象は、よく笑い、地元のことをよく聞く素直な人間だと好感を持った。そして、ランチのメンバーが移住してきたと聞いて驚き、「絶対応援しよう」と思ったという。以来、よそ者を嫌う年長者や金儲けのためのまちづくりコンサルタントに対する不信感もあるなか、地元の人を紹介したりアドバイスをしたりしている。特に第一回の映画祭のときは、地元の人に警戒されないよう自身でも頭を下げ、自分が責任持つから「みんなも見に来て」と周囲を誘うこともした。自分が儲けるわけでもないし、楽しいことなのだから、誘いやすかったという。

また、子どもを連れて移住先を探しに来たという家族に、地元の食べ物や暮らしの紹介をすることもあった。津屋崎は何もないというと、「何も無いとこがいいところ」と言われ、「そうか」と思ったり、企業もないから仕事の心配をすると、その家族は革製品をネットで売っていると聞き、店舗もいないのかと納得したりということもあった。

C さんがそのようにして若い人たちの活動を応援するのは、自分も津屋崎が大好きだから。いろいろなでまちが変化していくと、みんなが自然に、楽しく明るくなっていくのが一番幸せだと思う。だから、山口さんたちの活動は、とにかく応援したい。もちろんできる範囲で、無理しようとする続かないから。そして、自分が気にかけている若者



たちの世話をあれこれ焼くことで、Cさんも元気になっているようだ。

#### 津屋崎ブランチ ケース 4 Dさん（30歳代男性）のケース/T-04

津屋崎に隣接する古賀市出身のDさんは、東京のアパレル企業で働いていたが、古民家で店を始めたいと移住先を探していた。たまたま津屋崎の活動をネットで知り、海士町の町長さんと宅配の大地の藤原さんの対談をスカイプで中継する企画に参加した。始めの印象は、素敵なところ。西日本新聞や共同通信、福岡市の人など全然出会わないような職業の人が多く新鮮だった。古民家を探しているという、翌日山口さんを紹介され、古民家を見せてもらう。費用面は条件が合わなかったが、津屋崎に移住する気持ちはその場で決っていた。山口さんがいなければ勇気がなかったという。カフェを始めただけではなく、それを通じて地域に貢献したいという想いもあったからである。

初めは、自分の趣味を活かしておしゃれなところを作れば人は来るだろうと考え、部活付きのカフェという構想はなかった。東京からの移住者の一人が畑を借りられることになり、仲間が集まり「畑部」を創立、ブログで情報交換をしていたところに店が始まり、たまり場のように使われたり、別にカブトガニの調査をする集まりができたという流れから、部活動のあるカフェになっていった。活動が生まれると、連絡拠点の機能をカフェが果たすようになった。カフェ自体は、部活や交流の利用だけではなく、場としての強さを持たなければ経営的に続かないという難しさも感じつつ、様々な試行錯誤を重ねている。

Dさん自身は、津屋崎に移住していろいろな変化を感じているという。サラリーマンとして働いている時には考えられないくらい、地元の多くの人に触れる機会があり、その多様性の中で価値観や生活が変わってきた。また、田舎と都会の違いについて、なぜ人が都会に出ていくのか、大家さんとの付き合いや三世代住まなければよそ者という地域社会の現実を体験して、煩わしい人間関係から解放されて、それぞれの人生の目的だけを目指せるのが都会なのだ実感するようになった。野菜を挿し入れてくれるといったことを田舎の人は温かいとただ受け取るのではなく、その背景には、代わりにお祭りなど地域に参加するようという思いがあるのであり、親切を当たり前にはいけない。地元の人と深く付き合うことで、お互い様であることを忘れてはいけないと思うし、そのように接してくれることに嬉しさも感じる。都会と違い、地元の人とは、仕事ではなく生活も共にしている感覚も感じている。

#### 津屋崎ブランチ ケース 5 Eさん（20歳代女性）のケース/T-05

現在Eさんは、小値賀町に移住し観光の仕事に従事している。福岡で新卒で就職して3年、田舎で地域づくりの仕事に就きたいと思いながら会社員をしていたEさんは、たまたま新聞で津屋崎ブランチの連載を読み、興味を惹かれて津屋崎ブランチで月に1回開

催されているトークカフェに参加した。そこはあたたかい雰囲気があり、町の人もよそからきた人も一緒になってわいわいおしゃべりしているのがなんか面白いなあと考えたという。初めてだったが迎え入れてくれ、しかも話しやすい雰囲気で、たくさん自分のことを話し、周りの人の話もたくさん聞けた。それから通うようになった。

ある時、一泊二日でまちづくりのキーパーソンと話す企画に参加して、参加者のなかに自分たちも頑張ろうという雰囲気が生まれ、そこから少し変わり始めた。今まで田舎で働きたい、まちづくりの仕事がしたい思いながら、飛び込む勇気がなかったのだが、仲間がいると思うと、自分にもできるのかもしれないという勇気が得られた。その後も少しずつ対話のイベントを通じて考えを深め、段階的に壁を越えていった。そのなかでの気づきの一つは、自分はこれまで大学進学、新卒で大手企業に入社と王道を歩いていて、脇道にそれるのが怖かったこと。毎月いい給料もらうより、好きなことをしたいなど。少しずつ壁が取り払われていった。

急激な変化が訪れたのは、2012年の2月、津屋崎で小値賀の方が来て話す会に参加したことがきっかけだった。小値賀にUターンしたばかりの自分より若い女性と地域で働き生きてくことを考える会で、小値賀のことを知り感動する。自分なりに何が大切かわかったように感じた。春に小値賀に行く約束をして別れたが、その2週間後、小値賀で人材を募集していることを知る。電話で問い合わせると、津屋崎で出会った人が出て、そこからは履歴書を送り面接を受けて、採用がとんとんと決まった。その後で、1週間悩んで辞表を出した。

福岡では仕事は仕事、趣味は趣味と分かれていたが、移住してからの生活は仕事と暮らしの境目がない。これまでやってみたかったけどできなかった仕事ができ、少し自信が湧いてきた。今は目の前のことに追われていっぱいいっぱいだが、島の人に喜んでもらえると嬉しい。自然体験の仕事をしているが、参加する子どもが「また絶対くるけん！」と泣きながら帰っていくのを見ると、いい仕事だなと思う。今は仕事が楽しいという。

#### 津屋崎ランチ ケース6 Fさん(80歳代女性)のケース/T-06

Fさんは、津屋崎ランチができる前から地元の文化財保存、景観保全などのまちづくり活動の中心人物である。亡くなったご主人が始めた活動を引き継ぎ、地元の女性が中心となっている保存会のリーダーとして、「藍の家」の運営を切り盛りしている。

福津市が合併する前に開催されたまちづくりのワークショップに参加した時に、コーディネーターをしていた山口さんに出会った。眼鏡をかけ、目がキラキラした青年という印象だったという。その時、ワールドカフェという形式での話し合いに出会う。これまでは市民が発言するという機会がなかったため、自分の意見を小さいテーブルでどんどん言えるということに驚いた。そして、例えば「日常」や「美しさ」といったテーマ

で改めて話してみることで、大学生や他の参加者の口から出てくる言葉が想像以上で、自分たちの頭が凝り固まっていたことに気づく。ワークショップから戻り、保存会の仲間とも同じテーマで話してみるというようなことも行なった。山口さんの活動によって、ワークショップという言葉が市民に広がっていったという。

その後、山口さんから津屋崎に住みたいという話を聞いたちょうどそのタイミングで、現在の津屋崎ランチの建物の持ち主から誰かに貸したいという相談を受け、紹介する。以降、保存会の「おばちゃん」たちとともに、ランチの若いメンバーの世話役のような役割で、お金や食べ物の心配などしながら、若者たちの大切にすることが次第にわかり、気持ちの交流ができてきた。

ランチができたことで、保存会の活動は昔からあったが、それに拍車がかかるように、町の人たちのコミュニケーションのあり方が変わったという。もともと人情味の厚い地域だが、港町で閉鎖的なところもある。外から嫁いだSさんも、PTAなどでなかなか地元育ちの親たちの関係に受け入れられていないと感じ苦勞することもあった。今では、移住者も増え、山笠に積極的に参加する人もいて、地元の祭も変わってきているという。

#### 津屋崎ランチ ケース7 Gさん（30歳代男性）のケース/T-07

地元で事業を営む一家の次男として生まれたGさんは、20代半ばまでは、何年か海外で生活するなど気楽に暮らしていたが、長男が事故で亡くなったことから、家業を継ぐ立場になった。家業に入り、結婚して、消防団や商工会に入り、若手としてかわいがられながら町のイベントなど地元の活動を行っていた。

津屋崎ランチは、設立時に改修を手伝ったのが最初のつながりだった。しかし、地元の若手は、よそ者が国からお金をもらって自分たちの町に来て、失敗したらどうせ帰るのだろうと良く思っていなかった。ところが、事業が終わっても、山口さんたちは津屋崎が好きだから残ると言い、これまでのコンサルとは違うのではないかと思いはじめた。山笠や「よっちゃん祭」などにも積極的に参加していて、さらに山口さんが消防に入りたいと言ってきたりもした。そして、一番感銘を受けたのが、山口さんが、地元の人大切にしている波折神社で数十年ぶりの結婚式を挙げたこと。その神社は、地域の氏神様ではあるものの、近年は若者が寄り付くこともなく、ないがしろにしてしまっており、それを大事にしてくれたということで、気付かされたことがあった。自分たち以上に地元の人が大事にしているものを大切にしてくれた、地元のアイデンティティを引き出してくれたのが大きかった。そうしたことが重なり、今では見る目が変わって、お互いに協力し合えるし。お互い利用し合える関係になってきた。この町をよくしようという目的は、方法は違っても同じだということがわかってきた。

ランチを通じて、いろいろな人に出会えるのも刺激になるという。移住者はみんな口を揃えて、人が暖かい、環境がいい、この町が好きだと言ってくれる。津屋崎ラン

チが企画した「暮らしの旅」は、観光名所ではなく自分たちの暮らしそのものを見せる企画だから、素直に受け取れる。逆に自分たちは、外に出たいと思っただけで、親になって地元の良さがわかってきた。

しかし、移住者に対しては地元の人たちは警戒心もあり、移住者だけでコミュニティをつくってしまうのではないかという懸念もあった。そこで、地元の若者と移住者の交流会を企画したところ、相互に打ち解ける良い機会になった。Nさんは、地元のネットワークとランチをブリッジするよう窓口のような役割を担っている。

いろいろな経緯はあったが、津屋崎ランチと接することで、町が楽しくなったという。いろいろな人が来て、触れ合うことができるようになり、津屋崎の風が変わったと感じている。自分たちも、ランチに頼らずもっと自主的な活動を展開していきたいと思っただけで、

#### 津屋崎ランチ ケース 8 Hさん (60歳代男性) のケース/T-08

もともと漁師の家に生まれたHさんだが、父の代で漁師は廃業し、今は叔父の立ち上げた木材会社の常務をしている。生家から新興住宅地区に引っ越した後、近隣住民を山笠に誘ったり、地域の自然保護の活動などをしてきた。7年ほど前、津屋崎ランチができる以前、町の里づくり事業のコーディネイターとして来ていた山口さんに出会う。

その後、若い人を誘致してまちづくりを進めたいと聞いたときは、人口も減り、若者も出て行く状況でもあり驚いたが、実際に津屋崎ランチができると、若い人が県外から移住してくるようになった。ここで仕事をしたい、子づくりをしたいと聞いて、子づくりは田舎で自然に恵まれているからわかるが、通勤するのではなくここに住んで仕事したいといっても、果たして食べていけるのかと心配になった。

驚いたのは、古民家を改築するプロジェクトだった。昔から、間口が狭く日当たりの悪い古い漁師の家に住んでいたため、新しい家の方が快適なのではないかと思っていたが、若い人や大工さんと古い家を改修する仕事をするうちに、古いものを大切にすることは「やっぱりいいことだな」と思うようになった。行政の保全運動ではなく、自分たちでお金を集める方法は思いもよらなかったし、人の交流にもつながり、若い人のエネルギーを感じた。はじめは、ここに住むことのどこがいいのか分からなかったが、若い人が良いところを評価して、伝統を残していくのに触れて、次第に考えが変わってくる。Nさんとしては、そうした若者に専門的な支援をしているが、人が喜んでくれることを労を惜しまずやるというのは人間の「本能」だと思うという。

山口さんが実践を重視する姿勢も、地元で溶け込むために大きかったようだ。自ら汗をかいて取り組むから地域の人も頼りになるし、楽しみにしているのではないか。そして、山笠は、単なる祭だけではなく、町のなかの縦横のつながりが利害関係なくしっかりできる場所であり、それに参加してくれているということも大きい。若い人が遠くか

ら移住してきて、一生懸命やっているのを見たら、自分たちも逃げるわけにいかない。義務でやっているのではなく、自分たちも楽しい。楽しいからやっているのだと思う。様々な活動が起こる中で、次の担い手ができたもと感じている。

若い人たちの発想や活動に触れて、Hさんたちの世代も、主体的に活動しようという機運が生まれた。津屋崎千軒の中心部に消防会館の格納庫があるが、町並みの一部でもあるため、市に負担をかけないような形で自主運営しようというアイデアもあるという。移住者はよそ者だが、ここで生まれて育っていく子どもは、津屋崎の子どもである。子どもたちが将来また町に戻ってこられるような懐かしい思い出をつくるのも、ふるさとづくりの一環。こうしたことを、さらに頑張らないといけないと思っている。

## コードと概念

上記の40人分のインタビューのデータの分析手順は次のとおりである。

まず、インタビュー音源の逐語録を書き起こし、言い間違いや固有名詞の修正などを行い、トランスクリプトを作成した。

続いて、インフォーマントが語った内容の要素ごとに見出しをつけていくコーディング作業（コード化）を行った。コーディングには、理論的前提を全く持たずにグラウンデッドに構造化していくオープンコーディングと、理論的な仮説を準備し、あらかじめ用意されたコードを用いて演繹的に分析するアプローチがあるが、ここでは、完全にグラウンデッドでも完全に演繹的でもなく、理論的な仮説を立てることである程度視点を絞り込む焦点的コーディングを行った。特に注目する視点は、参加者の変化を、意識、関係、行動から見ること、地域の居場所に参加するきっかけから現在の活動までの時間的な流れ、どのような出来事が意識、関係、行動の変化につながったか、などである。

続いて、コードの分類と概念の構築を行なった。数百カ所につけられたコードのうち、同様の内容を示しているものについて統合した上で、複数のコード化されたセグメントを束ねて概念化した。概念は、一つひとつ定義づけを行った。さらに個別の概念のまとめ、大分類の概念を構築した。

コーディングから概念構築までの手順は、単線的に進むのではなく、行きつ戻りつしながら、複数回繰り返して行なった。最初のトランスクリプトからコーディングを始めるが、先に進んでから最初のトランスクリプトの見直しが必要になったり、概念の定義づけを行う中でコードの分類が直されたりという作業を重ねた。一度、最後のトランスクリプトまでのコーディングと概念化を終えた後は、もう一度、そこで構成された概念が妥当かを確認しつつ、最初から全体を通して見直し、修正を行った。

こうした作業を3~4回繰り返すことで、780以上のコード化されたセグメント、11の大分類に分類される合計71種類の概念が抽出された。詳細については、後ほど紹介する。

## 理論的飽和

質的データ分析にあたっては、サンプルを増やしても新しいデータがそれ以上得られなくなるという理論的飽和 (Glaser, Strauss, 1967) が生じているかどうかの判断が重要である。今回は、グラウンデッドセオリーのように、コーディングとサンプリングを交互に並行して行ったのではないため、新しいサンプルから新しい概念がどの程度の割合生まれたか (その率が十分に低くなれば、理論的に飽和したと言える) について明確に示すことはできない。理論的飽和が得られるまでに何人の分析が必要かについては事後的にしか確定できず、またデータの多様性とインフォーマントの多様性のばらつきによってもその適正数は左右されるため、何人以上であれば問題ないという判断はできない。一般的にこうした研究では、インフォーマントの数は10~30人程度であること、そして本論文で行った上記の分析作業を通じて、終盤には新しい概念は出てこなかったという分析過程の結果から、「何度も何度も同様な事例に出会う時、あるカテゴリー (概念) は飽和状態になったという確信を経験的にもつようになる」<sup>32</sup>という状況、すなわち理論的飽和に達していると考えて差し支えないと判断した。

## 5-2 参加者の意識・行動変化の過程

### 抽出された概念

次に、抽出された概念から、参加者の意識・行動の変化の過程を分析するが、まず抽出された個々の概念を明らかにする。大分類で11に分かれる概念は、「参加する前の状況」、「はじめての印象」、「参加のきっかけ」、「関係の変化」、「意識の変化」、「行動の変化」、「行動の結果起きた変化」、「活動のはじめやすい・続けやすい環境」、「活動を続ける動機付け」、「将来のビジョンの明確化」、「その人にとっての意味」である。このうち、関係の変化、意識の変化、行動の変化、活動のはじめやすい・続けやすい環境については、他の概念に比べて概念数が多く、中分類の概念を設定した。全体の概念は、表5-2の通りである。以下、一つひとつの概念の内容を記述する。

---

<sup>32</sup> B.G.グレイザー、A.L.ストラウス『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』後藤隆他訳、新曜社、1996年、86頁。

表 5-2. 参加主体の意識・行動変化：抽出された概念

概念	中分類	小分類	コード数	津屋崎プラント	うちの栗家	リタクラブ	芝の家		
大分類			786						
参加する前の状況		もともと持っていた想い	34	6	7	9	6		
		もともとの性格	4		1	1	2		
		何をやるかよどこでするか	2				2		
		病気や死別がきっかけとなる変化	5		1	1	2		
はじめての印象		キーパーソンの第一印象	18	1	5	8	3		
		何かできそうな場所	15	6		8			
		場に受け入れられた実感	21	3	7	2	4		
		多様な人がいてわくわくする	4		2	1	1		
		場の運営に関する興味	6	1	5				
		はじめての時の場違い感	8	3		3	1		
		再び訪れるきっかけ	8	2	2	1			
					1	3	3	3	
参加のきっかけ		情報から関心が生まれる	11	1		1	1		
		信頼できる人の場だから参加する	3	1		1	1		
		人から紹介されて関わりを持つ	11	2	2	5	1		
		仕事の関係で参加する	5		4				
関係の変化	信じられる人間関係の拡大	強すぎず弱すぎないほどよい関係の仲間	8		3	2	2		
		多様な人々との関係性の増加	46	6	8	10	5		
		知り合いが増えると情報も増える	5		1	2	1		
		価値観を変える出会い	12	1	3	5	2		
		目的をともにする仲間との出会い	12	4	1	3	1		
		自分の認知度が高まる	4			3			
		キーパーソンの紹介	3			2	1		
	家族や近隣との関係変化	移住者と地元の関係変化	生活とともにしている実感	1	4	5	2		
			仲間意識の芽生え	3				1	
			互いの得意分野を尊重し利用しあう	4				2	
			移住者に対する警戒感	3				2	
			地元の大事なものを移住者が大事にしてくれる	3				2	
			文化的なギャップを感じる	3				2	
			地元に着用してくれると嬉しい	3				2	
			新参者に対する評価の見直し	1				1	

意識の変化	キーパーソンへの共感と影響	19	1	7	5				
	交流によって起こる自己の探求	73	9	10	10	6			
		自分のやりたいことの明確化	26	5	4	5	3		
		自己肯定感・新しい自己観の獲得	29	9	5	5	3		
	変化に対する抵抗	それまでの価値観との葛藤	5	1		1	3		
	地域の再発見	地域コミュニティに対する見方の深化	6			2	2		
		地元の価値の再発見	4					4	
		地元の良さを地域外の人から聞く	4					3	
	行動の変化	キーパーソンのそそのかし	23	4	6	3	4		
		活動に向けた試行錯誤	すこくいい感じのプロトタイプ	3					1
受動的な行動が次につながる			6		1	3	2		
意図せぬ参加が生む意図せぬ行動			5	1		1	3		
運営の手伝いなど周辺的な参加			21	5	5	2	4		
日常生活習慣の変化			6	1		3	1		
とんとん拍子で物事が決まる			5	1		2	2		
徐々に覚悟が固まる			3	1	1		1		
実際に起こした行動			8	2	2	2			
起こした行動		関係から生まれる新しい仕事	2		1	1			
		ファシリテーターをとる	3	1	1	1			
		キーパーソンや拠点の応援	5		2	2	1		
		移住者と地元のブリッジ役になる	4					2	
		行動の結果起きた変化	行動することによる達成感と気づき	47	10	7	5	3	
		活動を続ける難しさ	4	2			1		
活動をはじめやすい・続けやすい場		相互関係規範もたらす促進効果	無理なくよい雰囲気	18	3	3	3	3	
			何かあったら助けてくれる仲間がいる	21	2	3	6	3	
	志を語れる安全な場		7		2	3			
	自分らしくいられる		16	8	4	1			
	メンバーがロールモデルになる		7	3		2	1		
	拠点のメリット	場あることで活動がひろがる	15	3	1	5	1		
		オープンでフラットな場	12		3	5			
		拠点の持つ機能	13				6		
	等身大のコンセプト	4	1		2	1			
	活動を続ける動機付け	成長している実感	7	3	1	1	1		
居心地の良さや楽しさが継続につながる		8	4	1		3			
人が喜んでくれると嬉しい		13	2	6	1	3			
お世話になるとしたくなる恩返し		1				1			
地域が好きだから地域のために何かしたい		4		1		3			
地域の変化に対する実感・未来への期待感		9				5			
将来のビジョンの明確化	25	4	4	6	4				
その人にとっての意味	社会につながっていくプロセス	11	3	3	1				

## ・参加する前の状況

参加者は、当然のことだが、地域の居場所に参加する以前からそれぞれの暮らしを営んでいる。この概念は、参加が居場所に会おう前の状況で、居場所への参加後の前提となる事柄である。もともと持っていた想い、もともとの性格、何をするかよりどこですか、病気や死別がきっかけとなる変化という4つの小分類からなる。その内容は様々であり、一定の傾向があるとは言えない。だが、もともと持っていた想いがあるからこそ、居場所へ関心を持ったり、居場所での活動を始めたという変化につながっているのだと考えられる。

もともと持っていた想いとして、仕事に対する願望や転職など職場環境の変化、生き方や関わり方に関する価値観、地域への関心や愛着など、想いや問題意識が語られている。それらは、未だ漠然としたものに留まっている。例えばリタクラブの40歳代の女性は、コーチングに出会う前に自分の価値観にあう仕事を探していたことを以下のように述べている。

「もともと私自分の職歴に自信がなくて、ずっと悩んでいる人生だったんですね、小学



校の教員やったんですけど、全く合わないっていうのが瞬時にわかって（…）ずっとそこから躰きの人生を歩んでいまして、ただずっと人と深く関わる仕事ってないのかなって、探してたんですね。」(L-09：リタクラブのIさん、40歳代女性)

また、人に頼まれて嫌と言ったことがない(T-03)、計画的に物事を進めるというよりその場で思いつく(T-01)といったもともと性格がその後の活動の仕方につながっていたり、もともと地域への貢献意識があった(T-04)ということが居場所に出会う遠因になっていた(何をするかよりどこですか)している。そのなかには、病気や死別がきっかけとなる変化も挙げられる。自分自身の病気がきっかけとなってその後の人生を考え直すこともあれば、津屋崎のGさんのように家族の死が意識の変化につながることもある。

「実は長男でもなく、次男という立場上結構まあ、遊んできたというか（…）ある時、長男が事故で亡くなって、そこから僕…24、5の時かな、それが一つのターニングポイントになって、やっぱりそのあともう家を継ぐのは自分しかいないかなと、というところから少しずつは変わってはきていますね。」(T-07：津屋崎ランチのGさん、30歳代男性)

#### ・はじめの印象

参加する前の状況から、実際に参加して様々な変化が起きる間には、必ず最初の接触の機会がある。地域の居場所は、そこで提供されるサービスや必要としているニーズが初めから明確ではないことが多いため、最初の接触はデリケートである。どんな人がいるのか、そこに受け入れてもらえるのか、自分の期待しているような体験ができそうかどうか、参加しようと一歩踏み出した人でさえ、おそらくいろいろな不安を抱えている。その時の印象によって、ここは自分にふさわしくないと二度と参加しないという人も多いはずである。逆に、これまでの日常と異なる文化や普段では出会わないような人に出会ったり、場違いだと感じてもそれを上回る好奇心や期待感を感じたりできれば、再度この居場所に来てみようと思うはずだ。はじめの印象は、次の行動を左右する。

はじめの印象は、「キーパーソンの第一印象」、「何かできそうな場所」、「場に受け入れられた実感」、「多様な人がいてワクワクする」、「場の運営に関する興味」、「はじめの時の場違い感」、「再び訪れるきっかけ」の7つに分類される。

場の印象の他に、居場所のキーパーソンとの出会いは強い印象として残ることが多い。リタクラブの参加者であり、設立時からの協力者でもあるCさんの、リタクラブの主宰者である平木さんとの初めての出会いはTwitterだったという。その印象を次のように述べている。

やっぱりちょっと変わっていますよね。富山を愛するなんかみたいな、そういうツ

イトなわけですよ。当時の Twitter ユーザーってというのは (… ) ビジネス系的なというか、熱い気持ちをつぶやく人っていなんですよ。(… ) そんな中で、「富山を愛する男、平木柳太郎です」みたいなね。(L-03 : リタクラブの C さん、40 歳代男性)

C さんは平木さんの熱意に共感し、セミナーに参加したことから、リタクラブに関わり、多様な活動を広げていくことになる。他の居場所でも、キーパーソンの思想や人柄に惹かれたと語る参加者は多い。キーパーソンの求心力やカリスマ性とも言える人を惹きつける力が、その居場所に関心をもつ入り口になることは確かである。

居場所の印象については、何かできそうな場所、場に受け入れられた実感、多様な人がいてワクワクする、場の運営に関する興味といった要素があった。いずれも、それまでの日常的で触れている場とは異なる雰囲気を感じ、その先につながる期待感の表れであるといつてよい。会社の仕事とは異なる活動に取り組めるといふ期待を、芝の家の G さんは述べている。

社会福祉士の試験を受けるのに地域福祉論っていう項目があつて、勉強したのが (… ) 自分としてキャリアに、つながらないかなと思つてたのと、(会社でそういう仕事を提案しても) 大体却下になると思つるので、(… ) ここで一つ自分が別にお金儲けとかじゃなくて、自分としてなんかやってみたいのが出せれば、楽しいのかなと (… ) (S-07 : 芝の家の G さん、50 歳代男性)

空間の設えの雰囲気の他に、そこに集まっている人から受ける影響も強い。

いろんな方が来ていらっしゃるっていうことと、それからみなさんやっぱり自分のしたいことを自由に伸び伸びとしていらっしゃるってことと、また本当、お年寄りの方が大勢来ていらっしゃるのが、すごくびっくりしました。(U-02 : うちの実家の B さん、60 歳代女性)

いろんな人がいたんです。西日本新聞の人とか、共同通信の人とか、福岡市の人とか。ちょっと新鮮でしたね。普段やっぱり全然出会わないような職業のひとたちばかりだったので。だから、ここで今日何があるのかなっていうワクワク感はありましたよね。(T-04 : 津屋崎ランチの D さん、30 歳代男性)

普段出会わない人に出会えるということが、その場を意味付ける大きな要因になっている。しかし重要なのは、それにも関わらず、自分がそこにいることが受け入れられている実感が得られるということだ。「初めて来た人に対しても楽々としゃべれる」(U-02)、「初めてでも初めてじゃないって感じ」(U-09)、「一言で言えば常にウェルカムって感じ」(L-06) といった実感

が安心感につながっていると考えられる。面識のない多様な人の集まる場に参加することは緊張感が伴うものだが、にもかかわらず受容された実感を得られたことの心理的な影響は小さくないはずである。

逆に、中には場違い感を感じるという人もいる。

最初の頃は、自分でがんがんビジネスをやっている人が集まる場で、ちょっとまだ入りにくくなって思ったかもしれません。私なんかに来ていいかしらみたい。結構まだそういう所はちょっとあるけど。(L-09：リタクラブのIさん、40歳代女性)

リタクラブのIさんは、自分に合う仕事を探していたところで、起業家や経営者は別世界の人間だと感じていた。しかし、リタクラブでロールモデルとなる人たちと関わることで、フリーランスのコーチとして自信を持って仕事を始めることができた。当初の場違い感を、期待感や意思が上回ったことで、その場に関わり、新しいキャリアを踏み出せたということである。逆に言えば、ここで場違い感を感じたことで、それ以降の参加をやめるケースも考えられる。居場所に出会った後、そこに受け入れられ、関係が広がり、自分の居場所になっていくためには、馴染んでいくための過程が存在する。

最初の訪問のあと、自然に何度も足を運ぶようになる人がいる一方で、再び訪れるきっかけがあったという人もいる。それは、東日本大震災の当日に避難してきたという自然災害による偶然というケースもあれば(S-04)、関係者が誘ってくれたことがきっかけになったという場合(L-01)もある。

地域の居場所は、物理的な空間であり、そこで何か特定の活動をするのできる場でもあるが、その印象や縁を生み出す多くは、そこに根付いている人間関係である。コンセプトやサービスに加えて、キーパーソンの人柄、そこに集まっている人の多様性や関わり方の規範、そして自分がそこに受け入れられると信じられるかどうか、次に積極的な行動に移るかどうかを左右すると考えられる。

#### ・参加のきっかけ

参加するきっかけ、すなわち、どのようにその居場所のことを知り、どのような経緯で参加することになったのかも、様々なパターンがある。本調査の結果からは、大きく4つに分類できる。まず、メディアや口コミで方法を得て参加するケース(情報から関心が生まれる)、そして、キーパーソンともともと知り合いで、その信頼する人が始めた活動だったことがきっかけとなり参加するケース(信頼できる人の場だから参加する)、また、知人から紹介されたり勧められたりして参加するケース(人から紹介されて関わりを持つ)、そして、仕事で参加することになり、以降個人的にも関わるようになったケース(仕事の関係で参加する)である。

情報から関心が生まれるは、新聞の連載を読んで知る(U-02、T-05)もあるが、インターネ

ットサイトや SNS で知る場合 (T-04、T06) も多い。移住や地域福祉など特定の問題に関心があり、共感できる情報に出会うことが行動につながる。次の E さんのようなケースが典型である。

そろそろ田舎に行きたいみたいな思いが沸点に達してきたときに、あちこちに行くようになったんですね、週末に。町づくりの何か話が聞けるようなところがあったら、そういうところに行くようにしてたんですけど、そういうときにたまたま新聞で津屋崎ブランチの連載をされていて、それを見て面白そうだなと思って、近いしと思って、行ってみたのが始まりですね、津屋崎との出会い。(T-05：津屋崎ブランチの E さん、20 歳代女性)

割合としては多くはないが、キーパーソンに対する信頼感が、行動を起こしてみても良いと感じられることにつながるというケースもある。津屋崎ブランチの A さんは、起業を考えてはなかったが、山口さんの誘いならとワークショップに参加して、結果的に自分で店を始めることになった。

起業するつもりもなかったんですけど、山口さんの話をいつも藍の家のお母さんたちから聞いていて、私は実際にあんまり喋ったりとか、見たことがなかったというのが正しいんですけど、ちょっと山口さんが何かされるんだったら、行ってみようかみたいな。(T-01：津屋崎ブランチの A さん、40 歳代女性)

また、自分では関心がない、知らないという場合、知人に紹介してもらってその居場所の活動を知るといったケースも多い。後にうちの実家の運営を支える G さんも、はじめは「地域の友達に誘われて」説明会に参加したのがきっかけだったという。同様に、地元の人に誘われたり (U-03)、先輩に会うために参加したり (S-06) という必ずしも能動的ではない動機での参加がきっかけとなって、その後の進路や活動に大きな影響を及ぼすといことがある。何気ない参加が、大きな違いを生み出すということが起こりうるのが地域の居場所である。また、地域福祉の分野で全国的なモデルケースであるうちの実家では、行政や社会福祉協議会などの職員が業務上の理由で訪れ、その後個人として様々な活動を始めるというケースも多い (U-01、U-03、U-10)。

#### ・関係の変化

関係の変化としてまとめた概念は、この後に説明する意識の変化、行動の変化と同様、地域の居場所の参加者のプロセスの中で最も重要な位置を占める概念である。この 3 概念は他の概念より多くのコードづけられたセグメントを持ち、小分類、中文類を統合した概念になっている。

関係の変化としてまとめられる概念は、「信じられる人間関係の拡大」、「キーパーソンの紹介」、「家族や近隣との関係変化」、「移住者と地元の関係変化」からなる。このうち、信じられる人間関係の拡大という概念は、多様な人々との関係性の増加、目的をともにする仲間との出会いなど 6 つの小分類から構成される。移住者と地元の関係変化は、主に津屋崎ランチの参加者に関連している。津屋崎ランチは、元から住んでいる地域住民と後から移住してきた新住民の接点となるような場であるため、一様に参加者というだけではなく、地元と移住者という大きく二つのカテゴリーに別れたグループの間の変化も起こっている。以下、順に概念を述べる。

信じられる人間関係の拡大としてまとめた概念は、参加者の関係変化の大きな位置を占める。参加によって人間関係の広がりや深まりを感じる人は多いが、重要なのは、単に知人の数が増えるというだけではなく、多様性があり自分のありようや意志を尊重してもらえるような「信じられる」人間関係の広がりである。

参加者の多くは、日常的には出会わないような多様な人々との出会いを体験している。30 人が言及しており、合計 46 のセグメントでコードづけされた。

大学の先生、お医者さん、歯医者さんとか、市会議員とか、普通の私はおばさんですからそういう人たちと接する機会なんて（…）全然関わりないですから。そういう人たちが夜の茶の間に来ますでしょ。そういう人たちとお話を聞いて、いろいろ知らないことが聞けるんですよ。（U-05：うちの実家の E さん、60 歳代女性）

うちの実家では、一主婦としてはなかなか対等に話すことのできない大学教員や医師、議員などとも分け隔てなく話すことができる。また、リタクラブでセミナーを開催している K さんは、多様な人が出入りしている場だからこそ、自分のセミナーを受けて欲しい人に出会えるという。

（リタクラブでは）いろんなセミナーをされているので、普通のサラリーマンとか OL さんなんだけども、何か変えたいとか、なんか成長したいとか思っている方が多いのかな。私が行く（専門的な）セミナーだと、（…）もう独立していて、さらに上を目指す人出るようなものが多いので（…）本当に自分の知り合いたい人ではないんですよ。（…）なので自分の知り合いたい人がいるのはここだなっていう感じがしますね。（L-02：リタクラブの K さん、30 歳代女性）

多様な人々の関係が増えていくと、その関係性を通じて有益な情報もたらされるようになる。うちの実家の A さんは、知り合いが増えるメリットの一つとして、研修会などの仕事上の企画がすぐに生まれるという（U-01）。また、自分だけでネットで探しているのでは見つからな

い有益な情報を知る機会も増えるという。

全然違いますね。自分じゃネットで検索してもなかなか情報にヒットしないんですけど、知っている方が多いし、友達や友達がこんなことしているとかってなると、結構入ってくる情報量も多くなりました。必要な情報が。(L-10：リタクラブのJさん、30歳代女性)

関係性が広がる中で、自分の価値観が変わったり、考え方を揺さぶられたりするような出会いをすることもある。それによって、将来の展望や行動が変わる(価値観を変える出会い)。また、立場や年齢を超えて、目的をともにできる仲間と出会うことも起こる。目的をともにできる仲間の存在は、意外の行動や意識の変化につながる(目的をともにする仲間との出会い)。

芝の家のFさんは、自分と同じ大学を出た後に保育士になったCさんの出会いが、自分の進路に影響を与えたと語る。

大学を出て、専攻では勉強してなかったけど、幼稚園の先生になって、今ああやって活動してるCちゃんに会って、そういう生き方もあるんだなっていうふうに。(S-06：芝の家のFさん、20歳代女性)

参加することで、その後の活動につながる出会いが生じる。津屋崎 brunch のAさんは、古民家の大家さんと出会ったことで、カフェを始めることになった(T-01)。Cさんは、仕事で訪れたうちの实家だったが、そこで同世代の知人と出会うことで、夜の茶の間ネットワークという活動の中心人物になっていった。

同年代の仲間が結構いまして、例えばAさんとか、新発田社協のOさんとかOさんとか、あと最近あんまり来なくなっちゃたんですけど、Oさんとかそういう同年代の人たちがたくさんいる中で、もともと私、幹事とか調整役を勉強会でもやっていたので、その人達が集まる場合の連絡調整とか、そういうのも私がやるようになったんですね。またみんなと会うのも楽しいし。(U-03：うちの实家のCさん、30歳代男性)

こうした出会いは、顕在的なニーズのマッチングというよりは、ある出会いが潜在的な自分の想いを引き出し、行動を一步踏み出す契機になるような偶然の出会いである。参加者にとっては、無意識に求めていたが明らかではなかった出会いであり、それによって何かが変わり始めるような感覚を感じ、相手との関係のなかで自分の役割が定まっていくということが生じる。

一緒に活動する仲間ができたとしても、それは極端に強いつながりではないことが多いようだ。仲間だけで固まらず、ひろがりがあり、ひとつの関係に固定されない流動的な関係を維持

できることを居場所での関係の良さだと感じている人もいる。

当番同士（…）うちの実家の建物を一步出たあと、バイバーイ、お疲れさま、てなるでしょ。次会うまでつながりないもん。（…）だから長続きするのよ。普通ああいう茶の間すると、終わった後にお茶飲んで、ね、当番とか役員の方達だけで、なあなあ主義になっちゃうのよね。だから長続きしないんだわね。（U-05：うちの実家のEさん、60歳代女性）

（一緒にイベントをつくる仲間との関係は）顔見知りよりは強いですよ。でも極端に強すぎるかっていうとそうでもない。そのときに集まってまたふわっと離れていくみたいな、ぐらゐの感じですよ。（…）かといってそうですね、やっぱりそこだけで固まらないから。でも若い人たちで集まっても結局、もっと上の人たちに助けてくださいって助けを求めたりとかもするし、非常にひろがりはあるような、そんな感じもしています。（T-02：津屋崎ランチのBさん、20歳代男性）

こうした証言は、それぞれの居場所のメンバーが全員相互に知り合いで、成員とそうでない人との境界の明確な閉じたコミュニティではないことを示している。物理的空間を共有しながらも、開放性の高いネットワークになっているようだ。そうした緩やかなネットワークの中で、自分の特性を知ってもらえるようになると、自分の情報がネットワークを通じて広がり、認知度が高まる（L-2、L-9、L-11）。フリーランスの活動を進める人にとって信頼できる人の中での認知度が高まるということは大きなインセンティブであると考えられる。

また、自分にとって重要な人を、地域の居場所のキーパーソンが紹介してくれるということもある。リタクラブでは、こうしたことを意図的に行なっており、それがネットワークの広がりを後押ししているようだ。

最初にここに来て、手続きして利用した日に、平木さんが「どんな方とお知り合いになりたいですか」みたいなことを聞いてくださって、私も資格の勉強してる人とか、社会人なんだけど何か目標持って仕事以外の分野の勉強っていうわけじゃないですけど、分野に関わったりしてる人みたいな人に巡り合えたらうれしいかなみたいなことを話して。（…）何回か通っていると（…）「こういう人紹介していいですか」みたいな感じで。実際にいらっしゃる方とお話できるきっかけとか作ってもらえたので、輪が広がりました。（L-10：リタクラブのJさん、30歳代女性）

興味深いのは、こうした関係性が、新しく得られた地域の居場所のネットワーク内だけの変化ではなく、何人もの参加者が、家族や近隣との関係変化も実感しているということである。

芝の家ではなく、居住している集合住宅の近隣の人との付き合いが自然にできるようになったり (S-01)、うちの実家に関わるようになったことで両親と同郷する決断をしたり (U-03) ということも起こる。

津屋崎ランチでは、移住者と地元の関係変化の実感も多くの人が語ってくれた。移住者と地元の関係は多くのそれまででない活動の創発につながっているが、もちろん全てが初めからうまくいったわけではない。もともと地元には、移住者に対する警戒感があり、移住者は、文化的なギャップを感じることも少なくない。そうした葛藤がありつつも、移住者が地元で定着してくれる純粋な嬉しさを感じたり、都会のように役割による人付き合いではなく、生活をともにしている実感を感じられたりという中で徐々に心理的に近づく。なかでも、地元の大事なものを移住者が大事にしてくれるということに気づくことが、仲間意識の芽生えのための大きな契機になった。地元の若手である G さんは、次のように語っている。

感銘を受けたのが、(…) 地の人間が大事にしている神社があるんですね。波折神社っていう。そこで (山口さんに) 結婚式を挙げていただいた、と。実際言うと僕たちが、ほぼ蔑ろしてきたようなこちら辺の氏神様なんですよ。正直言うとさびれてきて、お客さんも参拝にきている方も限られててですね、若い者なんかは特に寄り付きもしないようなところなんです。お年寄りが大事にしてやったり、地の人もなんとなく大事にしている神社なんです。そこを僕たち以上にですね、大事にしてくれたっていうのが、逆に気付かされた部分がありました。「負けとうばい」と。僕らのほうが。地の人間よりもっと村のアイデンティティをもっと引き出していたような感じがしますね。  
(T-07：津屋崎ランチの G さん、30 歳代男性)

地域を同じように大切にしてくれているということが、新参者に対する評価の見直しや仲間意識の芽生えにつながり、互いの得意分野を尊重し利用しあう関係性に発展したようである。

#### ・意識の変化

次に、意識の変化である。これは、「キーパーソンへの共感と影響」、「交流によって起こる自己の探求」、「変化に対する抵抗」、「地域の再発見」から構成される。

キーパーソンへの共感と影響は、キーパーソンからの指導や感化されたことなど直接影響を受けたことである。地域の居場所に集まる人たちとの交流によって生じる変化の他に、そのキーパーソンから直接受ける影響はもちろん無視できない。

平木くんと出会った時も、彼は大人が学ぶ姿を見ると子供も学ぶだろうみたいな話をしたのは、そもそも繋がったんです。そうよね、かっこいい大人世の中に増えたら、子供らももっと生き方変わるよねと思って。お父さんが家帰って「あー疲れた。仕事な



んでロクなもんじゃねえ。ビール、ビール」って飲みながら「お前勉強せんだらロクな仕事就けんぞ」って全然説得力ないですよ。大人が学ぶ場を作りたいっていうのはすごい賛同できましたね。(L-05：リタクラブのEさん、40歳代男性)

リタクラブのEさんは、平木氏より年長だが、その考え方に賛同し、協力したくなったという。また、キーパーソンの生きる姿勢に感化されて、自分も自分の現状や感情に向き合おうという影響もある。うちの実家のDさんは、以下のように、河田氏と付き合うことの影響力を述べている。

河田さんの理念というか河田さんの生き方というかな、そんなのを思うと、やっぱり私もちゃんともっと優しくしようと思うし、当たり前前に優しくして当たり前なんだと思うし、腹も立つこともあるけど、そうしながらまた来ることで、また自分の気持ちのつじつまが合って、やっぱりちゃんとできるというか。(U-04：うちの実家のDさん、60歳代女性)

キーパーソンの思想に共感することでその居場所に参加したり協力したりするだけではなく、その生き方や態度によって、自分に向き合う力を得る。地域の居場所の運営は、仕組みではなくキーパーソンの思想や人柄にも左右される。また、キーパーソンに対する信頼があるからこそ、スタッフがまとまるということもある(U-04)。

交流によって起こる自己の探求は、意識の変化の中でも最もコード数が多かった項目である。居場所の参加者は、交流によって価値観や考え方が変わってくる。それだけにとどまらず他者との対話を通じて自分のやりたいことが明確になっていく。そして、多様な人との関わりが、自己肯定感や新しい実感の獲得に繋がる。

多様な人と関わり合うことによって、これまで当たり前だと思っていた考え方が揺らぎ、新しい価値観が獲得される。

いろんな生き方をしている人たちを見ているうちに、こうすべきとか世の中の常識とか家族の希望とかに沿って生きていくのを優先しなくても、なんかこう自分がやりたいことを頑張れば人生開けてくるんじゃないかなって思うようになって。まあ母からしてみたら「せっかく順調に来てたのに」っていう感じらしいんですけど。(S-06：芝の家のFさん、20歳代女性)

また、地域づくりの活動や地域の資源の価値が再発見されるということもある。津屋崎ブラunchのHさんは、よそ者であり若者である移住者と一緒に古民家の改修プロジェクトを手がけることで、もともと地域にあった伝統的な住居の良さ、それを改修することで得られる価値に

気づき直したという。

古い家を改修する。ああやっぱりいいことやなど。っていうのは自分たちの仕事に結びつくとかって意味じゃなくて、やっぱりそういった空き地、空き家利用に取り組んで、やはり人の交流ですかね。ふれあいというかな。そういったものを繋げさせていただくというのがやっぱり若い人のエネルギーやなって思うね。(T-08：津屋崎ランチのHさん、60歳代男性)

そして、こうした交流を続けていると、興味深いことに、自分の本当にやりたいことが、対話や交流の中から明らかになってくるようだ。津屋崎での対話と出会いが、大手企業を退職し島での仕事への転職につながったFさんは、以下のように振り返っている。

津屋崎でいろんな人たちと会って、自分のことも語っているうちに、あ、わたし、脇道にそれることが怖かったんだなあとか、でもそれは別に怖いことじゃないぞとか。毎月いいお給料もらうことよりも、自分は好きなことがあったなあとか。そういう思い込みみたいなものが少しずつこう、津屋崎でいろんな話を聞いたり、自分の中の思いをしゃべったりすることで、少しずつ壁というか思い込みを取り外していったかなあと今は思いますね。(T-05：津屋崎ランチのFさん、20歳代女性)

信じられる人間関係の中での対話は、自己の探求につながると言える。

また、そうした関係性の中で、自己に対する概念も変化してくるようだ。それは、自分はこれでいいという感覚であり、自分に対する自信である。自己肯定感・自尊感情の芽生えであるといえる。芝の家のCさんは、それまでは、話が合わなかったら嫌なので、価値観や立場の違いそうな人に積極的に声をかけることは躊躇していたが、いまでは、自分が自分の価値観や立場に固執しているからこそ生じていたことだということがわかり、よりニュートラルな関係を築くことができるようになったという。価値観を異にする人とのかかわりによる自尊感情の変化であると言える。

誰彼ともなく声をかけられるようになったみたいなの。(…) どうしようかなって思うハードルみたいなのって、話がつまんなかったら嫌だなとか。通じなかったら嫌だなとか。たぶん自分の価値観、自分の立場をすごく尊重しているから、しているとそれにその期待を裏切るようなことがどうせ起きるから、まあ声かけてもかけなくてもいいか、みたいな感じな気がするんだけど。(…) (インタビュアー：自分が考えてることは良くて、それが伝わんなかったら相手が良くないとか自分がかかりすぎるっていう。だからまあ止めとこうみたいなことか。そういうのがちょっと緩くなってきてるのかね。) うん。そ

うだと思う。(S-03：芝の家のCさん、30歳代女性)

もちろん、こうした価値観や自己認識は、すぐに生じるだけではなく、変化に対する抵抗を生むこともある。それまでの価値観との葛藤である。

でもこう、じゃあ自分もそうやってやっていこうかなって考えたときに、どうしてもやっぱり戦いが起こるんですよ。(戦い?) 何というかせめぎあいが。いや、金なかったらどうするの? というところと、でもちょっとは稼いで楽しくやればいいじゃんっていう二つが割れだして。そこずっとうろろうしてて。(T-02：津屋崎ランチのBさん、20歳代男性)

津屋崎ランチの参加者で学生のBさんは、多様な仕事や生き方をしている大人と出会い、自分が進行を担当するワークショップを行ったり、地元の祭の準備をしたりするようになった。そうした中で多様な価値観を知ることができたが、それゆえ、今後どのような進路を選択するかは迷っている。

他者との交流によって変わるのは、自己の価値観だけではない。地域づくりの文脈で大きな意識変容は、地域の資源が持つ価値の再発見だろう。往々にして、それは移住者など地域外の人が気づかせてくれる。

自分たちがいえないところですよ、ここはどこがいいとね? (ということは) のんびりしているのがいいとか。昨日一昨日か、夕日を見られたと思うんですけど。実際見ればいいけど、常日頃仕事しているからああいう時間とか余裕がない、毎日あるから当たり前って思うとるけど。考えてみれば、やっぱりそういう自然のもの(の価値)をちゃんと若い人たちが分かってきてくれてよるなど。(T-08：津屋崎ランチのHさん、60歳代男性)

地域の居場所に参加することを通じて、多様な人との関わりが生まれる。そこでの交流によって、価値観や考え方が徐々に変わっていく。意識変化は、他者との関わりの中から引き出されるといってよい。

#### ・行動の変化

人間関係が広がり、意識が変わっていくにつれて、行動も変化していく。行動のきっかけは、キーパーソンがつくる場合もある(キーパーソンのそそのかし)が、多くの人本格的な行動に向けた様々な試行的な行為や準備作業を体験している(活動に向けた試行錯誤)。そして、参加者が実際にとった行動には様々なバリエーションがある(起こした行動)。これらの3つの中分類について順に述べていく。

まず、キーパーソンのそそのかしであるが、参加者の悩みや仕事の状況を見てキーパーソンが居場所に来ることやそこでスタッフとして働くことに誘うケース（U-02、U-04、U-05）、キーパーソンが、参加者が行おうとしているイベントや活動などを「いいね」と評価したりアドバイスしたりして進めるケースなどがある。行動の肩を押す役割は、居場所のスタッフが果たすこともある（S-07、T-02）。

平木さんがそのときにポエシアブランカっていうのをやるんですって言って設計図を見せてくださって、ここにセミナールームがあるんで、Bさんもセミナーやってくださいみたいな、お話をいただいて、で、どんなのがあったらいいですかって聞かれて、で、いいですね、是非是非やらせてくださいってみたいな感じで。（L-02：リタクラブのBさん、30歳代女性）

リタクラブのBさんは、平木さんから直接セミナーを開催することを頼まれて、朝活コーチングを始めることになった。子育て中のBさんができる形を相談し、その後のキャリアにつながる活動になると見越して誘ったと考えられる。その後も、毎週金曜日朝7時から平木さんが会場を用意し、朝活コーチングに伴走した。

畑部も作ったし、カブトガニ部も作ろうと。で、カブトガニ部を作ったんです。そしたらちょうど山口さんが、「なんかいろんな部活があって、ほんとなんか部活動みたいで楽しいね」って言ったのを。確かにそうだなと。で、色んな部活を作ってなんか学校みたいにしたら面白いんじゃないかみたいな。そこでいろいろ部活を作ろうみたいな感じになって、結果的に写真とか仏像とかですね、いろいろできたわけですけども。（T-04：津屋崎ランチのDさん、30歳代男性）

津屋崎ランチのDさんのケースは、成り行きでできていた部活動のおもしろさを山口さんが見つけ、評価することで、その後「部活動付きのカフェ」というコンセプトに繋がった。直接的に指導するだけでなく、それとなく活動の意義やおもしろさを確認できる声かけをすることも、活動の促進につながるようだ。

活動に向けた試行錯誤のありようは、様々だ。まず、地域の居場所へ定期的に参加し、交流することで、日常生活習慣が変わるといふことがある。元気になったり、普段の暮らしの変化に関心が高まったりということが生じる（S-01、T-06）。

行動の変化は、急激に起こることもあるが、日常的に関わる中で徐々に覚悟が固まっていくこともある。小さな交流や活動が重なり、知らず知らずのうちに行動に向けた準備が整っていた、という体験である（S-03、U-06）。

また、他の人に誘われたり頼まれたりしたことが、新しいアクションにつながったり（受動

的な行動が次につながる)、必ずしも強い想いがあって自ら行動したのではなく、他人に誘われたり、興味本位で参加したり、偶然立ち寄ったりという行動が、その人にとって後々大きな契機になるということがある(意図せぬ参加が生む意図せぬ行動)。

野次馬的な感じで「私も行く」みたいな、「付いてく！」みたいな感じで。そうこうしているうちに、毎日するのも無理だけど、なんか時々だったらできるんじゃないか、とか、日替わりだったらできるんじゃないかとか、そここの経過は全く覚えてないのですが、いつの間にかそういう話になっていて。で、いつの間にか私も「一日しましょう」という話になっていて…(T-01:津屋崎ランチのAさん、40歳代女性)

次に述べる周辺的な参加にも通じるが、好奇心の赴くまま気軽に様々な活動に試しに参加できる雰囲気、結果的にまさに自分が欲していたような人脉や空間につながるということが起こる。

もっとも多くの人々が体験しているのは、運営の手伝いなどの周辺的な参加である。初めから自分の活動を進めるのではなく、まずは地域の居場所で得た縁を通じて、他の人の活動の手伝いなどで参加する。これは、サービスの受け手や受動的な参加者としてではなく、誰かの役に立つという活動をつくりだす側に立つ行動への変化である。

(夜の茶の間ネットワークの)司会はバトンリレー式になっていて、急に振られるんですね。来月は誰ですとか、(…)前回の人が最後の時に、じゃあ来月はJさん。となると先月から今月の間にまず自分の仕事の調整をしつつ、ここに遅れないように来る算段をすると。(U-10:うちの実家のJさん、30歳代男性)

いろは(まつり)でラジオをやるうって話になっていたところで準備が始まりました。ただその時は、裏方ができればいいと思っていました。ところが喋らされました。(喋ってみたところ)実は褒められてうれしかったというのがありますけども、私のなかでは全然喋れなかったんですね。(S-02:芝の家のBさん、20歳代女性)

会の進行役やラジオ企画の準備の手伝いをするを通じて、場の運営の当事者感が増し、また褒められた嬉しさや、もっと上手に話せそうという経験をすることで、より主体的に活動を継続していくことに繋がる。周辺的な参加は主体的な活動の一つの入り口であり、そうした参加の機会が多く開かれているということが、主体性の獲得に重要な役割を果たしていると考えられる。

逆に、とんとん拍子で物事が決まるということも起こる。人や情報との出会いが良いタイミングで重なることで、活動が一気に展開したり、次のキャリアが開ける。

あんまり小値賀のこととか知らなかったし、行ったこともなかったんですけど。小値賀いいところですね、行ってみます、春になったら、と言ってしまったんですよ。その2週間後くらいに、また別の大学の先輩から、今小値賀で人を募集してるんだけどいい人知らない？みたいな声がかかってきて。あの小値賀ですかみたいな、これはもう運命かもしれないみたいな感じになって、そっからとんとんに行くんですけど。とりあえず電話かけたら、その津屋崎に来てた方が電話をとられて、あのときのEさんですかみたいな感じで、とりあえず履歴書送ってくださいみたいな。面接に来ますか、来てください、面接受けたらEさんになりましたってなって、とんとんとんって決まって。でそんな全部決まった後で、なんかふと我にかえて、あ、辞表出さなきゃみたいな。(T-05：津屋崎ランチのEさん、20歳代女性)

また、試しに行った活動が非常に良い結果となり、その良さを仲間で共有できたことが個々の活動が促進されていく弾みとなることがある（すごくいい感じのプロトタイピング）。

実は僕も刺激受けて、せっかく富山で大きな祭があるから、そこに出店したいと。(…)ポエシアブランカでやった仲間たちでつながれば絶対に面白いことができる、そういう元気な大人たちが富山にはいるんだよってことをみんなに知ってもらいたい。だからなにかやりましょうよ、って企画が立ち上がって、ここで集まった仲間たちと一緒にお祭りにブースを出して、もちろん平木さんもステージで発表してもらったりとか、で僕らはブースで仲間たちをいっぱい集めて。(…)ありがとうを書いてもらって、写真撮って、プリントアウトしてプレゼントするっていうのをやったんですけど。一日100人、200人とか書いてもらって、学生が集まって、僕らも変装して祭を盛り上げるとかっていうのをやったんですけど、それもまさにこの場所があっただけって感じですね。(L-03：リタクラブのCさん、40歳代男性)

こうしたことも、仲間がいて気軽にアクションを起こすことができるという環境があればこそだろう。

実際に起こした行動は、自分なりの活動を始めたり、場の運営を積極的に担うようになったりと、多様である。多くの参加者が、参加前と比較すると何かしら自分らしい活動や関わり方を見つけている。その中には、参加者という立場でありながら、他の人の活動を引き出すファシリテータの役割を果たす人や(L-05、U-03)、キーパーソンや拠点の応援を積極的に行う人(L-08、L-11)、居場所で出会った人と新しい仕事を起こしたり、関係性から新たな職務が生まれたりという場合もある(L-05、U-03)。地元と移住者の橋渡し役となっていくという人(T-03、T-07)もいる。

## ・行動の結果起きた変化

何か行動をすることによって、起こることがある。一步踏み出すことで達成感を感じたり、成長を感じたりする。また、活動を続けていることで、他の人に相談されたり、頼りにされたりという関係変化が実感されるということもある。

(ワールドカフェをやってみて) よかったです、絶対。面白かったですよね、すごく。  
(…) 緊張すごかったです。前日は、原稿暗記して、こう来たらこう返そうみたいに考えたりとか。めっちゃシュミレーションしてました。びびってびびって。(でもやってみたら) こうなるんだっていう。ちゃんと場のようなものができて、ちゃんとみんな話してくれて、安心しましたね、よかったって。(T-02：津屋崎ランチのBさん、20歳代男性)

ご近所にね、お年寄りがいっぱい増えてましてね、私のまわりに。みんな年取ってね、わたしの対応が違うみたいでね、頼ってくるんですよね。(…) 何かしら身に付いてきたんだろうね、自分でもわからないけど、河田さんに言われて直したりとかいろいろしてきて、あるだろうね。EさんEさん！って言うてるんですよね。(U-05：うちの実家のEさん、60歳代女性)

うちの実家のEさんのケースは、活動を継続していく中で、お年寄りに対する対応が身につき、それによって近隣の人に頼られる存在になったということである。地域の居場所に関わるなかで、新しい価値観や振る舞いが身につき、それによって他者との信頼関係や自分の役割が変わっていくということである。

一方、活動を続ける難しさを感じる人もいる。津屋崎でカフェを始めたDさんは、飲食店としての持続的な強い経営力を保つための苦労を語ってくれた(T-04)。小さな活動であっても、続けることには一定程度の大変さが付きまとう。

楽しくない時もいっぱいあるんだけど。楽しくないっていうか、「なんでこんな1人でがんばらなきゃいけないんだろう」って思うことがすごくいっぱいあって。まあそれはたぶんがんばらなきゃいけないんだろうって、誰も頼んでないのにやってるから、がんばらなきゃいけないとか思うこと自体がおかしいんだけど。(S-03：芝の家のCさん、30歳代女性)

それでも続けられるためにはどのような条件が必要なのか。次の概念では、活動の始めやすい、続けやすい環境について整理する。

### ・活動のはじめやすい・続けやすい環境

関心あるテーマでも、実際に活動をはじめするには勇気が必要だ。また好んで始めた活動でも、継続するためには苦労もある。参加者が語る、活動を促進する要因は、大きく3つの要素からなる。相互関係規範もたらす促進効果、すなわち、その居場所に基づくコミュニティの雰囲気や関わり方の規範が、活動を促進する効果を持つという点。次に、拠点のメリットとして、具体的な空間があることによって活動の継続性が保ちやすくなるということ、そして、等身大のコンセプトとして、もともと自分の身の丈にあった活動を行うことが、無理なく続けられるポイントであるということである。

まず、相互関係規範もたらす促進効果については複数の項目にまとめられる。「無理しなくてよい雰囲気」、「何かあったら助けてくれる仲間がいる」、「夢を語れる場」、「自分らしくいられる」、「ロールモデルがいる」、の5分類である。

無理しなくてよい雰囲気は、がんばらなくてもよい、できる範囲でとりくめばよいという雰囲気があることで、小さくとも自信を持って始められるということである。新しい活動が促進される場でありながら、その前提として、大きなことや完成度の高いことは求められず、自分なりのやり方が許されるという安心感があるからこそ、試行錯誤ができるのだと言える。

そのために、何かあったら助けてくれる仲間がいるということも大切な要素だ。孤軍奮闘、孤立無援ではなく、それとなくまわりに仲間がいるという安心感が感じられるからこそ、何かあったら相談できるし、助けてくれるはずだと思える。だからこそ、勇気をもって行動ができるのである。

また、何かはじめようとする人が、志や夢を語ってもよいという雰囲気があることも大切である。どうせできないとか、他人のせいにするといった否定的な場では、本当にやりたいと思っていることを発言できない。前向きな想いが否定されない、「夢を語れる安全な場」であることが、自分に向き合い、出会った人同士が刺激しあえる場をつくる。

ここは空気が違う。自分がどうしたい、ああしたいという話をみんなしているの。そこが心地よさです。平木さん自身もそうじゃないですか。自らどんどんステップアップして行って……。自分は変わらず人を変えたい人たちと、自分も変わろうとしてる人たちがつくりあげるイベントの空気は全然違う。(L-07:リタクラブのGさん、40歳代男性)

こうした雰囲気は、何か活動を目指していなくても、自分の気持ちを出しても否定されていない雰囲気にも通じている。自分の気持ちを受け止めてくれる場であることで、自分らしくいられる。その原点に戻ることができるからこそ、自分らしい価値観や活動につながっていくのではないかと考えられる。



やっぱりほっとできるし、自分の気持ちをさらけ出せるし、聞いてもらえる、ということ。(…)入って聞くだけでも自分にとってはすごいよかったと思っています。本当にいろんなことを聞いてくださって、助かってます。(U-02、うちの実家のBさん、60歳代女性)

参考となるロールモデルに出会えることも、活動を促進する。居場所のキーパーソンがロールモデルになることもあれば、他の参加者のあり方から強い影響を受けるということもある。

Cさんのプロジェクトに入ったのは結構大きいというか、(…)いざ始まってみると1人かけ2人かけという感じの状況になって。なんか最後私とCさんしかいないじゃないかみたいな状況になって、それでも突き進んだ彼女にかなり私は影響を受けまして。自分のプロジェクトは自分でやるという。だから俺もラジオをやるぞみたいな励みというか。(S-07：芝の家のGさん、50歳代男性)

地域の居場所のコミュニティだけではなく、物理的な拠点があることにもメリットがある。セミナーやイベントを試しにはじめたいという場合、拠点があればすぐはじめる。その拠点の知名度が、新しい活動や講座の信用にもなるし、近隣の施設との連携もスムーズに進むということがある。

芝の家っていう(いろんな人に知られている)器があるから、地域のいろんな活動している人たちとの繋がりもすぐできる。すぐ分かってもらえる。たぶんいろいろ説明しなくても、まあ信用してもらえてっていうこともすぐあると思うし。相手もなんか分かったような気になっちゃうというか。(S-03：芝の家のCさん、30歳代女性)

このほか、上下関係がなく、気軽に多様な分野の人たちと関わり合えるということも、物理的に人が出入りできる場のメリットといえる。特に自習室というコンセプトのリタクラブでは、受付が常駐し、宅配便の受け取りや事務作業のサポートをしてくれること、県内を移動しながら仕事をする人にとって気軽に立ち寄りやすい立地であることなど、ニーズにあった機能を持っているという良さが述べられている。

そして、「等身大のコンセプト」については、活動の内容そのものが背伸びせず自分の身丈にあっていることが、活動を無理なく続けていくのに重要であることを示唆している。それはちょっとした気づきであることが多いようだが、継続的な活動によって疲れてしまわないために小さくないポイントであると考えられる。津屋崎ランチのAさんは、以下のように無理せず続く秘訣を述べている。

例えば、ケーキ屋さんで売ってるようなケーキを出そうと思うと、もう無理じゃないですか、自分で作るってなると。だから、コンセプトというほどのものではないんですけど、お母さんが作るおやつみたいなの、そういうイメージで。小さいことですけど、最初「ケーキセット」っていう名前のメニューだったんですけど、それをやめて、ちょっと値段も変えて「おやつセット」っていう名前にしたんですね。(T-01：津屋崎ランチのAさん、40歳代女性)

#### ・活動を続ける動機付け

活動を続ける動機づけについては、複数の要素があるようだ。「成長している実感」、「居心地の良さや楽しさが継続につながる」、「人が喜んでくれると嬉しい」、「お世話になるとしたくなる恩返し」、「地域が好きだから地域のために何かしたい」、「地域の変化に対する実感・未来への期待感」である。

自分が成長できているという実感があるから、さらに続けようと思える。目標があれば、継続の動機付けになる。活動の広がりやスキルが身につくという成長もあれば、人間的な成長につながるという期待感を感じていることもある (S-11)

楽しさや居心地の良さを表明する人も多い。基本的に楽しいから、居心地の良さを感じるからこそ、自然に足が向かい、活動を続けられる。

皆さんに会えるのが一番楽しいっていうところでしょうかね。自分自身も役割のうちの一人とすれば、皆さんの元気な顔を見るために来てるっていう形になるんでしょうかね。本当に仕事が忙しければあれですが、うまく第2金曜日だけあけるように仕事を調整するようにもなりますし。(…)その居場所の心地よさっていうのが、変な話中毒症状じゃないんですけども、何かこう足が向くきっかけにはなっているかな。(U-10：うちの実家のJさん、30歳代男性)

こうした自分にとってのベネフィットの他に、人に喜んでもらえることに喜びを感じたり、意義を感じたりという利他的な動機づけを述べる人もいる。地域の人にお世話になったことを恩に感じ、恩返しのような気持ちを感じるという人もいる (T-01)。

(やってみて良かったと思う瞬間は) やっぱりに喜んでもらった時ですね。それはだいたいGさんがいろんな人を巻き込んでくるんですけど、それで喋ることになった人が楽しんでいるのとか、この間は中野のお祭りに出させてもらったんですけど、その場でリクエスト聞いてパソコンから流すっていうことで、それで「あ、この歌」とかって楽しんでくれる人がいるっていうのも。(S-02：芝の家のBさん、20歳代女性)

まだ若いなと思いながらも、(…) やっぱり社会に役立つのはとかね。ちょっとね、生意気ですけど。何か貢献できるのかなっていうことはね。(…) それで役割分担があるっていうのが、いいんじゃないですかね。(U-09：うちの実家のIさん、60歳代男性)

また、地域が好きだから、ということが大きな原動力になっていることもある。

(津屋崎ランチを応援しているのは) 私も津屋崎大好きやし、やっぱり色々な形で変化していくと、みんなが楽しく明るくさ、自然になっていくのが一番幸せなのかな。みんながね。自然が応援してくれるんやな。私は天然やもん。魚も天然やし。(津屋崎が大好きで、町がもっと良くなったり楽しくなったりというのが) それがええやな。(T-03：津屋崎ランチのCさん、50歳代女性)

そして、特に地域活性化の文脈では、その地域や活動の将来に可能性を感じていることが、参加の動機付けとして大きな影響を持っている。

なんか起きそうな感じはすごくするというか。どうなるんだろうって先行きが気になる感じはあります。どんどん変わってきてるからですかね。そしてあわよくば僕も乗っかってなんか楽しいことができたなら、ぐらいい感じはあります。(T-02：津屋崎ランチのBさん、20歳代男性)

#### ・将来のビジョンの明確化

そして、この先、どのようにしていくか。活動をはじめたことによって明らかになる将来の展望である。参加する前には、さほど明確な活動のイメージがあったわけではないけれども、地域の居場所を通じて、様々な人との関わりや試行錯誤の結果、具体的な活動のビジョンや自分のミッションが明確になっている人が多い。活動や仕事の次のアクションの場合もあれば、地域の将来のビジョンの場合もある。

次年度、居場所ネットっていうのを立ち上げようと思ってまして。河田さんも入ってもらうんですけど、居場所一つにとっても高齢の茶の間、児童でいうと地域子育て支援拠点事業であったり、障害でいうと地域活動支援センターとか、そこらへんのノウハウを共有して、少し一歩上のその居場所づくりっていうのを取り組んでいこうかなっていうところ。(U-01：うちの実家のAさん、30歳代男性)

(移住者の子どもたち) はここで生まれたし、お父さんお母さんは違うかもしれんけど、

子どもはここで育つんやから、ふるさとづくりの一環ですね。よく考えてみたら。だから必ず、鮭、鱒と一緒に帰ってくるんですよ。やっぱり懐かしくてね。そういう懐かしい思い出を作ってもらうためにも頑張らないかとです。(T-08、津屋崎ランチのHさん、60歳代男性)

#### ・その人にとっての意味

地域の居場所の参加者のストーリーは、基本的には新しい出会いを通じて、新しい自分のあり方や活動を見つけていくプロセスだが、その同じ構造でありながら、中には、その人にとっては、病気などによっていったん離れていた社会へ復帰していくプロセスでもある場合がある。このような視点で語ってくれたのは7人だった(S-7、S-9、S-10、U-02、U-06、U-09、L-07)。それぞれ事情は異なるが、鬱病やコミュニケーション上の問題で休職したり失業したり、あるいは家族との離別によって喪失感を抱えたり、脳梗塞で倒れ離婚した上に障害が残ったりと、人生の中でのある困難に直面した時期に、地域の居場所やそのキーパーソンと出会った。こうした参加者にとっても、他者との新しい関係性の構築や日常的に足を運ぶ居場所があること、そしてその中から自分らしさを見出し、役割を見つけていくことが、社会との関わりの快復につながる。一般的に、病気や障害を抱えた人とそうでない人の活動プロセスは別のものと区別されがちだが、地域の居場所では、その過程は重なり合っており、連続しているように見える。

#### ストーリーラインの構築

前節では、各参加者のインタビューのコーディングによって、概念を整理した。この概念は、地域の居場所の参加者が、その居場所やキーパーソンに出会い、他者との関係や自己の意識の変化などを通じて、やがて自分らしい活動を行なっていく中で経験される事柄を整理・分類した要素である。次に、こうした概念間の繋がりを示し、ストーリーを構築する。このストーリーは、ある特定の個人の体験ではなく、また全ての参加者の体験の最大公約数的な要約でもない。多くの人に重なり合う幹となるような体験と、それぞれに特有の個人的な体験の両方を可視化することで、参加者のプロセス一般を全体的に構造化して理解することになる。

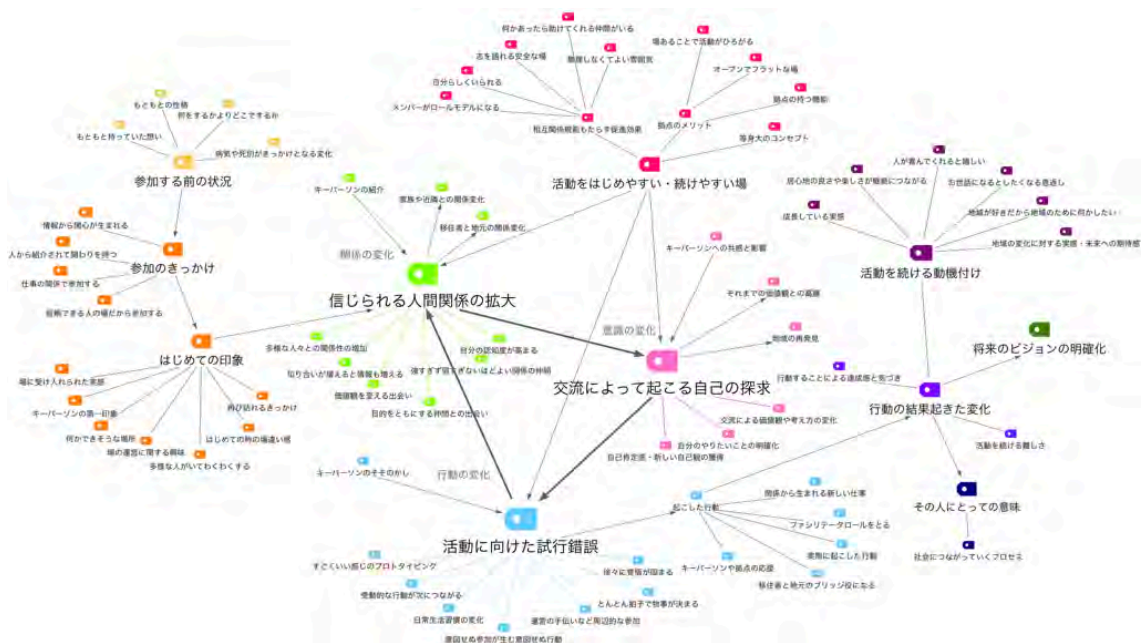


図 5-1. 参加主体の意識・行動変化の概念とストーリーライン

図 5-1 は、概念のつながりを構造化したストーリーラインである。参加の前後の時間的推移、物事の起こる順序や影響関係から関係づけを行なった。

参加する前の状況から、参加のきっかけ、はじめての印象という地域の居場所の接触の段階があり、その後、信じられる人間関係の拡大、交流によって起こる自己の探求、活動に向けた試行錯誤という変化の段階に入る。そこでの関わり合いの拡大や探求、試行錯誤を、活動をはじめやすい・続けやすい場という環境要因が後押ししている。こうした探求の結果、何か行動を起こし、その行動の結果起きた変化を実感する。将来のビジョンが明確になり、その背景には活動が続ける動機付けがある。ある人にとっての意味は、社会につながっていくプロセスである場合がある。

では、11 の概念とその下位の分類のうち、より重要なものはどれだろうか。一つ概念についてすべてのインフォーマントに体験の有無を聞いたわけではないので、概念に含まれるコード化されたセグメント数の比較には意味がないが、4 事例すべてに見られ 15 以上のセグメント数のあるコードのみ抜粋したのが図 5-2 である。

参加する前から参加のきっかけの前段階と、活動をはじめた結果として起きた後段階に挟まれた部分に、プラットフォーム内で起きている主要な事柄が現れている。まずは、多様な人々との関係性の増加によって、信じられる人間関係の拡大が生じ、交流によって起こる自己の探求が起こる。これは、交流による価値観や考え方の変化、自分のやりたいことの明確化、自己肯定感・新しい自己観の獲得が主な要素である。そして、行動変化につながる活動に向けた試行錯誤ができるようになるが、このためには、キーパーソンのおそのかしと運営の手伝いなど周縁的な参加が重要な要素になる。そして、こうした相互作用を促進するのが、何かあったら

助けてくれる仲間がいるという実感であり、無理しなくてよい雰囲気や、場があることで活動がひろがるという要因もこれを後押ししている。

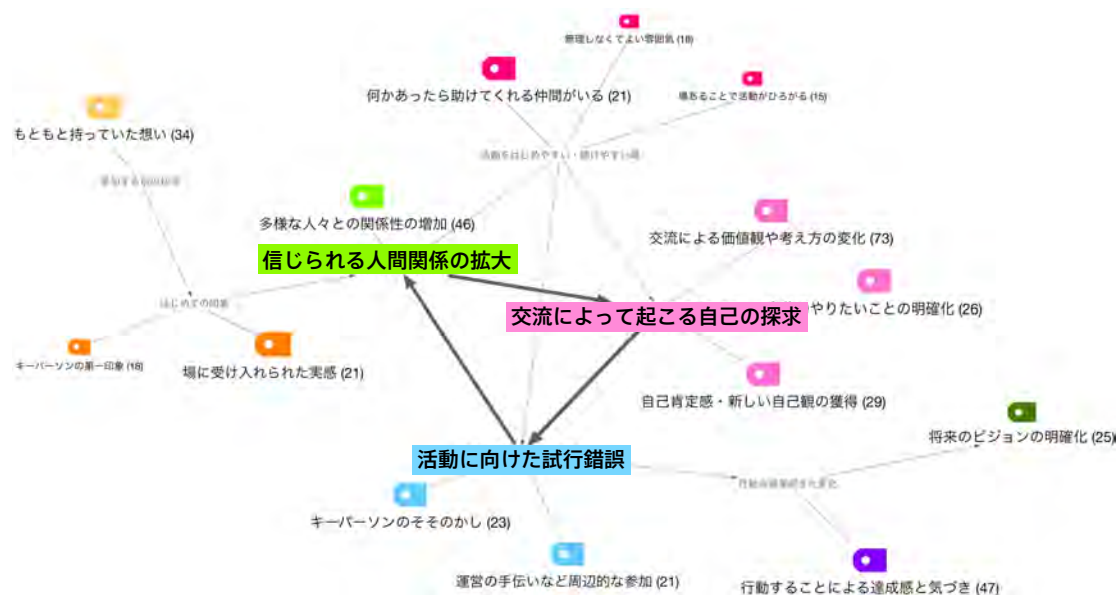


図 5-2. 4 事例を通じて現れる参加主体の意識・行動変化

4 事例すべてに見られ、20 以上（大きなアイコンで表示） / 15 以上のセグメント数のあるコードのみ抜粋した

### 事例ごとの特徴

本研究では、特徴の異なる 4 つの地域の居場所を事例として取り上げた。

興味深いのは、居場所型と活動拠点型では、活動拠点の方が、参加者が地域活動や起業を積極的に行っており、活動の活発性という点で違いがあるのではないかと思われたが、参加者の体験を紐解いていくと、居場所型・活動拠点型ともに、活動の前提となる安心感について語られることが多かったということである。安心感とは、居場所型では、自分の感情や本音を受け止めてもらえるという感覚であり、活動拠点型では、自分の想いを話しても否定されず共感的に聞いてもらえる感覚である。こうした水準で捉えてみると、居場所型も活動拠点型も、コミュニティによる受容が、自分らしくあり、自分らしい活動を行うための基本的な必要なのではないかと考えられる。リタクラブの N さんは、鬱病から快復し、自分で名前詩人として起業していく過程の中で、まずは無料の居場所や断酒会など自助グループから始まり、やがて書道やコーチングの研修を受けられるポエシアブランカやリタクラブに参加するようになった。徐々に次のステージの場やコミュニティに移っていくことで、徐々に自分らしい活動の足場を固めていったのだが、そのステージごとに、質は違ったとしても、そこに集う人々の中に受容的な関係があるということが重要なのである。

類型によって参加者の体験に違いがあると思われたが、調査の結果からは、それほど顕著な違いは出なかった。ここでは類型ごとの傾向の違いを整理する。

テーマコミュニティ重視の居場所（うちの実家、リタクラブ）は、キーパーソンの影響力が強くなるようである。それぞれ、高齢者福祉のための常設型の地域の茶の間、富山を元気にするための大人の自習室と、強い信念を持って新しいコンセプトの場作りを行なっている。それゆえ、その魅力に惹かれて参加する人も多いと考えられる。うちの実家の場合は、高齢者や障害者の主体性を生かしながら分け隔てなく関わられる居場所の運営手法自体への共感もある。また、ここで出会った人同士が新たな企画や事業を立ち上げるということも多い。志を語り合うことができるコミュニティがあり、しかし同じ業界に閉じるのではなく、多様な人に開かれているということが場の価値になっている。一見正反対に見えるこの二つの居場所は、参加者の体験に注目すると共通する点が多い。

地縁コミュニティ重視の居場所である芝の家と津屋崎ブランチは、居場所型と活動拠点型という形式の違いのためか、あまり共通した体験は多くない。地域づくりに関心のある人もない人も参加できる都市型の日常的な寄り合いが中心の芝の家と、地方型で移住者を増やしたり地域を活性化したりすることが中心的な目的として明確な津屋崎ブランチという周辺環境や目的性の違いもある。共通するのは、活動の動機付けになるのは楽しさであるということである。目的が明確であろうとなかろうと、楽しさを感じられるというのが、地域コミュニティの中で人が出入りしやすい場として重要だということがわかる。

次に運営形態の違いとして、居場所型である芝の家とうちの実家は、参加者の体験がよりパーソナルな部分の実感になっている点が共通している。自分らしくいられる、社会につながっていくプロセス、家族や近隣との関係変化といった体験が特徴的である。また、いずれも飲食やコワーキングといった明確なサービスが中心でない運営形態であるため、場の運営に関する興味で参加したという人がいるのも特徴である。

活動拠点型のリタクラブと津屋崎ブランチでは、キーパーソンが活動のファシリテートを行なっていることが居場所型との違いである。芝の家やうちの実家でもキーパーソンの誘いなどがあるが、企画の内容や事業の発展のための意図的な人材のマッチングなどは、活動拠点型の傾向としてあげられる。また、参加者の体験としては、受動的活動が次につながる、とんとん拍子で物事が決まるなど、意図せぬ行動がその後の活動を左右するつながりや結果をもたらしたり、物事が運命的に段取りよく進む驚きなどを体験したりということがある。その何かが起こりそうな予感やスピード感は、場の魅力として大きいと考えられる。

最後に、移住者と地元の関係変化に関する概念が、津屋崎ブランチの特徴としてあげられる。今回は、参加者の変化に焦点を当てるため研究の主な対象とはならないが、地域の居場所が、新旧住民の関わりあう境界領域としての役割を果たすという視点は、他の居場所でも起きうると思われる。

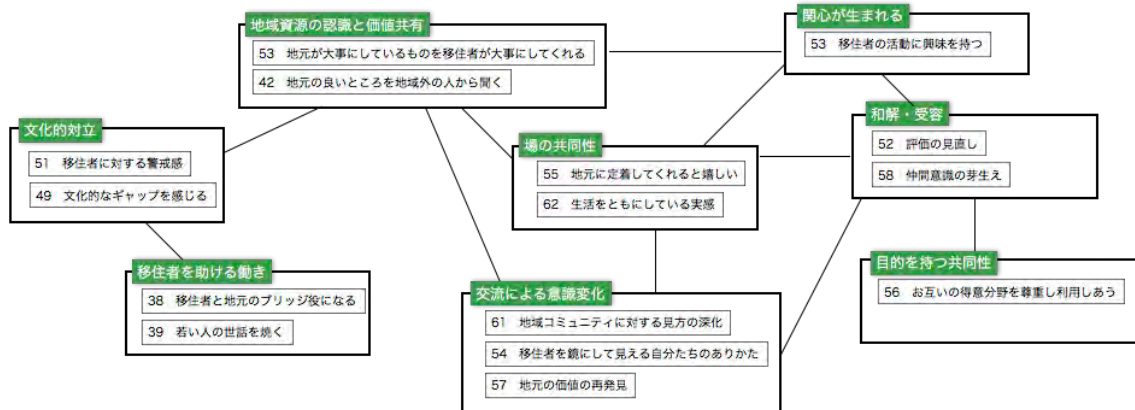


図 5-3. 津屋崎ブランチにおける移住コミュニティに関するカテゴリー

### 5-3 つながりと活動の創出モデル

#### 参加者の変化の鍵となる概念

本研究で検証する仮説分析モデルは、プラットフォーム（地域の居場所）における他者との相互作用により、参加者の他者関係、自己の意識、行動が変化し、新たな活動とつながりが創出されるというものであった（図 2-5）。

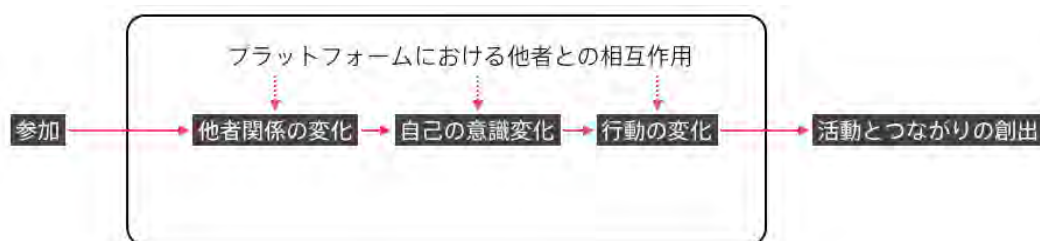


図 2-5. 活動創出までの過程についての仮説分析モデル

インタビューの分析からは、プラットフォームへの参加によって他者関係、自己の意識、行動は確かに変化していることが伺える。前節の図 5-1、5-2 ではストーリーラインを示したが、他者関係、自己の意識、行動の変化に該当する概念として、「信じられる人間関係の拡大」、「交流によって起こる自己の探求」、「活動に向けた試行錯誤」が抽出された。これらが鍵となる概念であり、この3概念は、多くの参加者にとって居場所での体験の大きな位置を占める変化であることから、仮説の基本的な構成要素は支持されたと言ってよい。

だが、仔細に見ていくと、いくつか問題が指摘できる。まずは、信じられる人間関係の拡大、交流によって起こる自己の探求、活動に向けた試行錯誤は、単線的に生じるのではなく、循環しながら徐々に変化が深まっていくという構造担っているという点だ。仮説モデルの構成を修



正することでより参加者の体験に沿ったモデルにすることができると考えられる。また、インプットとアウトプットが、「参加」と「活動とつながりの創出」となっているが、あたかも参加者をプラットフォームに入れることで活動やつながりが外的に生み出されるように見える。本研究の結果からは、プラットフォームへの参加は、それぞれの参加者のある状態からより自分らしい状態への移行のように観察される。参加者の変化を基礎としてモデルを書き直すことが妥当なのではないかと思われる。この二点から仮説モデルを修正しつつ、さらにプラットフォームでの参加者の変化を促す規範について論じる。

### 探求と試行が許される過渡的な場

他者関係が変わり、続いて自己の意識変化が起こり、その結果として行動が変わる。仮説モデルで描かれるプロセスは間違いではないものの、それは順次的に起こっていくというよりも、小さな変化が循環的に繰り返し生じていると表現した方が実態に近い。他者関係と自己意識の変化の結果として行動が変わることで、さらに他者との関係が変化していくという循環があり、そのプロセスが一定程度進むと、自分にとってふさわしい新しい活動が生まれる。そして、その時点では十分にこれまでになかったつながりが得られている、という構造である。したがって、参加者は工場のラインのようにプラットフォームの中を一直線に出口に向かうというより、探求と試行を繰り返すことができる場に入り、機が熟すとそこから活動が生まれていくというモデルの方がふさわしい。

参考になるモデルとして、キムの成功のコアセオリーがある。キムは、組織変革が成功するための理論として、関係の質、思考の質、行動の質、結果の質の変化の循環モデルを提案している (Kim 2001)。このプロセスは、一回で終わるのではなく、様々な変化による結果の質の変化が、さらなる組織変化につながっていくことを説明できる構造となっている。ここでキムは、この変化の最初のステップとなるのは関係の質の変化だとしている。本研究は、組織内の変化ではなく、個人が新たに関係性を広げていくことを通じて、自己意識や行動の変化を誘発させていく過程に注目しているが、メンバーが固定的な組織内でも、思考や行動の変化を促すのは関係性の変化なのである。

地域の居場所というプラットフォームにおける参加者の変化過程も、他者関係、自己意識、活動の変化を循環する過程として捉えることが望ましい。

### 人生の転機としての活動参加

プラットフォームへの参加の結果としてつながりと活動が創出されるのだが、参加者のプラットフォームでの経験という視点で見ると、このプロセスのアウトカムは、参加後の新しい自己であって、参加することによってつながりと活動が外部に生み出されるという視点には違和感がある。もちろん、参加後の自己はそれまでに増して多くのつながりを持ち、新たな活動の主体になっているのだが、活発な活動や十分な人的ネットワークは、参加者自身が保持して

いるものであり、外的に生み出すものではない。

そこで、ここで提案するつながりと活動の創出モデルは、参加者を中心に据え、プラットフォームを参加主体の意識・行動変化が起きる場として捉え直す（図 5-4）。参加者のそれぞれが人間関係、意識、行動スタイルの変化を通じて、なんらかの人生の転機となるような価値観の変化の体験（Bridges 2004）をした結果、参加前に比べて多くのつながりを持ち、活動を行っている。こうした変化の時期を過渡的に過ごす場としてプラットフォームを見ることで、それが特定の人のあらかじめ明確になっているニーズを満たす場ではなく、そこで参加者が他者との関わり合いを通じて変化していく場であるという地域の居場所の本質的な意義を捉えることが可能になる。

ところで、参加後の自己とはどのような自己だろうか。第 7 章で再び取り上げるが、ここでは、より自分らしい、生き生きとしたあり方という状態を仮定する。近年、ポジティブ心理学など人間の幸福感や主観的健康度に関する研究が進んでいるが、こうしたウェルビーイングを構成する要素として、フローリッシュ（Flourish）という概念がある。これは、「生き生きとした状態」を意味する。もともとフローリッシュは、花開くという意味だが、転じて「人間が心身の潜在能力の発揮し、意義を感じ」る状態が実現できているという定義である。これは、「心身のシステムがうまく動いているというだけでなく、個人が周囲の人との間でうまく機能するとともに、それを持続するための心身の特性を持つ」という（Calvo 2014）。他者との関係の中で、自分らしい活動に取り組んでいる参加者の状態を定義する概念としてふさわしい。

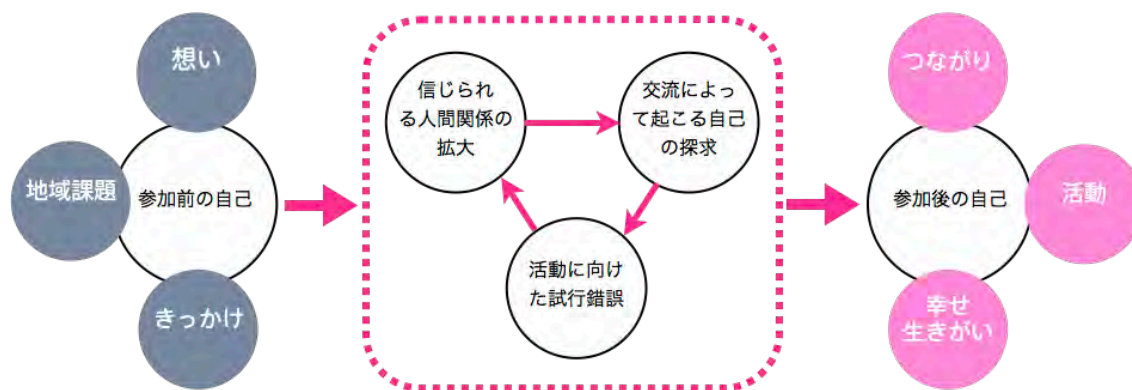


図 5-4. つながりと活動の創出モデル

### 創発を促す場の規範

前節でつながりと活動の創出モデルを提案したが、参加者は多様な他者との関係をひろげ、その関係性の中で自己の探求や試行錯誤を行う。新しい活動をはじめやすい環境を生み出す要因として、「何かあったら助けてくれる仲間がいる」が挙げられているように、この過程を促進するのは、プラットフォームの機能やキーパーソンの働きかけではなく、その場にできていく

コミュニティの中で生じる相互作用である。自分だけではなく、他のメンバーも一人の参加者なのである。そうした一人ひとりが関わりあうことで、それまでにない状況が生まれ、それまでにない活動が生まれるという創発が起こる。

ということは、その場には、他の組織や空間にはない固有の関係の規範があるはずである。職場や家庭、学校などとは異なる人の集まり方があり、その場に固有の関わり方をそれぞれがすることによって、固有の雰囲気が生まれる。関係性の結果として生まれるこの固有の規範が、それぞれの出来事や判断の前提にあり、創発を促すためにより重要である。

この規範は、特定の場を起点にしたコミュニティにおける相互作用秩序（Goffman 1980）であり、参加主体の関わり方や行動に働きかけていくものである。お互いに親切にしようとか、それぞれのやりたいことを実現するために応援しようといった規範は、誰かに指示されるのでも、施設のルールでもなく、自分がそのコミュニティの一員であると感じた時にはすでに身につけていたような振る舞いである。その場の雰囲気として感じ取り、意識するにせよ無意識に適應するにせよ、そうしたあり方を実践することによって、参加者は、それ以前とは異なる自己を獲得する。

とはいえ、その規範は、何をするかについては指示的ではない。そこで何かが得られるかどうかは保証されてはいないのだが、何かが起こることについての期待感を感じ取ることはできる。実際に、少なくない参加者が、そのプラットフォームでは自分の求めていた情報が得られたり、新しいチャンスを得られたり、偶然のつながりが思いもよらない仕事やキャリアにつながったりという体験をしている。克蘭ボルツらは、キャリア形成の要因の8割は偶然であるが、多様な偶然を生じさせやすい行動があるという計画的偶発性理論と呼ばれる理論を提唱している（Mitchell 1999）。そこでは、好奇心、持続性、柔軟性、楽観性、冒険心を持つ人の方が、そうでない人よりもキャリアにつながる偶然ともいえる出会いを得やすい。プラットフォームの参加者が、それまでにない人間関係と行動特性を身につけたことで、それまでにない情報や仕事に出会いやすくなったとしても不思議ではない。このことは、プラットフォームにおける支援は、情報のマッチングや適切なケアという形態ではなく、その人がよりその人らしいあり方を見つけられるような振る舞いができるようになるという援助であるといえる。このように考えると、地域福祉やキャリア支援などプラットフォームのテーマが異なっても、参加者の体験としては驚くほど似ているということも理解できる。

#### 関係性が創発するプラットフォーム設計

では、こうした探求と試行をゆるす規範を持つ関係をどのようにつくることができるだろうか。先に触れたように、プラットフォームの参加者は、特有の規範を持つコミュニティから影響を受けるが、そのコミュニティを形成しているのは自分も含めた参加者であるという自己生成的なプロセスとなっている。この、相互作用の規範が参加者の変化を促進するが、その規範自体を参加者が生み出しているという状況が成立するためには、プラットフォームをどのよう

に設計すればよいのだろうか。飲食店や公共施設の設計・運営とは異なる特有の難しさがあると考えられる。次章では、各地域の居場所のキーパーソンが、プラットフォーム・アーキテクトとしてどのような設計を行っているのか、各事例の現地調査とキーパーソンへのインタビューを通じて分析する。

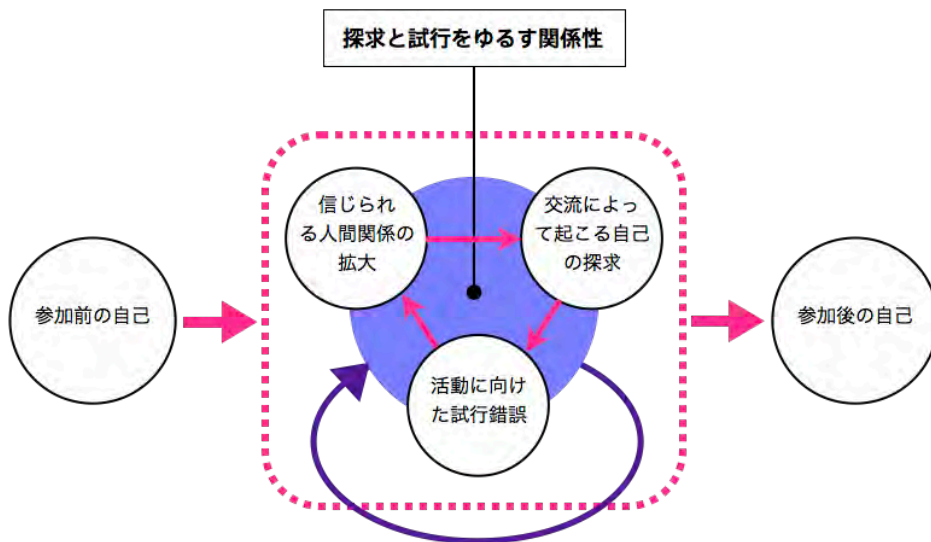


図 5-5. 創発を促す場の規範

## 第6章 調査結果2 : プラットフォームの設計と効果

### 6-1 調査の結果

#### 調査結果のまとめ方

前章では、プラットフォームの参加者が探求と試行に取り組む原動力は、そこに根ざしたコミュニティに特有の規範であることが示された。この規範の中で参加者は新しい経験や活動を行なっていくのだが、そのコミュニティの規範は、そこに参加する人々によって生み出されているという再帰的なプロセスになっている。こうしたコミュニケーションの基盤となるプラットフォームはどのように設計されるだろうか。

本章では、プラットフォーム・アーキテクトである各地域の居場所のキーパーソンが、どのような考えで運営や空間の設計、参加者との関わりを行っているのか、各事例で行なった実地調査とキーパーソンへのインタビューの結果を通じて分析する。

調査に先立って構築した仮説分析モデルは、次の通りであった。

ここでは、國領のプラットフォームの設計変数を援用し、地域の居場所の設計変数として最適化されるよう、内的要因と環境要因、そして内的な要因を前提要因と促進要因に区分し、プラットフォーム創出に影響を与える変数を図 2-6 の 3 領域に整理した。参加者が主体的に行動し相互作用を行う状況を生み出すためには、参加者が集まるための設計変数と、相互作用を促進する変数は異なる可能性が高い。さらに、地域の居場所という物理的に限定されたプラットフォームの中身の設計だけではなく、周辺の地域資源との関係性や、そのプラットフォームが成立するための経緯としての社会的ネットワークなどからも影響を受けるだろう。こうした視点から構築された仮説モデルである。

	前提（一次的）要因 主体を集める要因	促進（二次的）要因 相互作用を促進する要因
内的要因 プラットフォームの設計に直接関わる要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>○コミュニケーション・パターンの設計</li> <li>○役割の設計</li> <li>○信頼形成メカニズムの設計</li> <li>○インセンティブ設計</li> <li>○参加者の内部変化のマネジメント</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○コミュニケーション・パターンの設計</li> <li>○役割の設計</li> <li>○信頼形成メカニズムの設計</li> <li>○インセンティブ設計</li> <li>○参加者の内部変化のマネジメント</li> </ul>
環境要因 プラットフォーム設計以外の周辺環境からの影響要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>○立地条件や周辺環境</li> <li>○実施主体の先行活動や他事業との関連</li> <li>○行政や近隣の社会資源との連携状況など</li> </ul>	

図 2-6. 協働プラットフォーム設計要件抽出のための仮説分析モデル

調査の方法は、まず、現地を訪れ、空間の平面図を作成し、参加者の相互作用を促進すると考えられる物理的工夫について調査を行った。また各居場所のキーパーソン（主宰者）に対して、プラットフォーム・アーキテクトとしてどのように居場所の設計を行なっているかをインタビューした（空間的な工夫についても合わせて確認をした）。インタビュー内容は、どのような居場所にしたいか、参加者の間にどのような関係を作りたいかという理念や思想、調査仮説で用意した環境要因、前提要因と促進要因に分けて、具体的な設計として行なっている点を聞いた。

以下に調査の結果を示す。ただし芝の家については、筆者が実践者としてこれまで配慮してきた点について、質問項目に沿って改めてまとめた。

## 事例1 芝の家

### ・空間設計

芝の家は、周囲に東京タワーや増上寺といった観光名所、再開発によって建てられた高層ビルなどもある港区芝三丁目にある。芝の家のある一角は旧来の木造家屋も多く、細い路地が縦横に走る下町的な雰囲気を残した区画でもある。

芝の家の外観は、周囲の木造店舗と馴染むように古い建具や古材によってリフォームされ、通りに向かって玄関と縁側が開かれている。玄関には、黒板に手書きで「芝の家」、「いつでもどなたでもどうぞ」と書かれている。手入れされた鉢植えも多く置かれている。縁側にはチラシや「ご自由に BOX」と書かれた箱がある。「ご自由に BOX」は、近隣の住民が持ち込んだ食器や雑貨などを自由に持ち帰れるようにした交換の仕組みである。縁側の窓の半分には、チラシやイベントのお知らせが貼ってある。残り半分は、内外が見通せるよう張り紙はしていない。夏や冬など厳しい季節を除いて、縁側の窓は解放されて、気軽に腰をかけ室内の人との交流がしやすいようにしている。

玄関を入ると、壁面にイベントのチラシが設置されている。チラシは封筒に入れ壁に貼るようになっており、その封筒を持ち込んだ人が自由に加工できるようになっている。正面には駄菓子コーナー、左側が給湯室とトイレである。

室内は、ちゃぶ台やソファが置かれ、どこか懐かしい家のような雰囲気である。遊び道具やピアノなどもあり、お茶を飲んだり、けん玉やベーゴマで遊んだり、ソファでくつろいだり、ちゃぶ台でおしゃべりしたりと、自由に過ごすことができる。北側の壁面は棚と移動式の黒板で、遊び道具や文具などを収納することができ、黒板はミーティングに使用したり、子ども達が落書きを楽しんだりできる。駄菓子コーナー脇の喫茶コーナーは、無料で提供される水や麦茶の他、100円で利用であるコーヒーや様々なティーバッグが用意されている

縁側の対面に室内を見守るスタッフが座り、来場者の対応をしたり記録をつけたりしている。また、クリップボードの入室簿もあり、来場した人に名前を書いてもらうようになっている。空間の全体が見渡せるスタッフの居場所があることで、安心できる雰囲気が生まれる。奥まっ

たところに、スタッフ用のパソコンが置かれた作業デスクがある。

家具は移動可能で、来場者によって、イベントの内容によって自由に配置を変えられる。縁側やちゃぶ台を囲む座布団、奥のテーブル席、ソファなどまちまちの座る場所が用意されている。

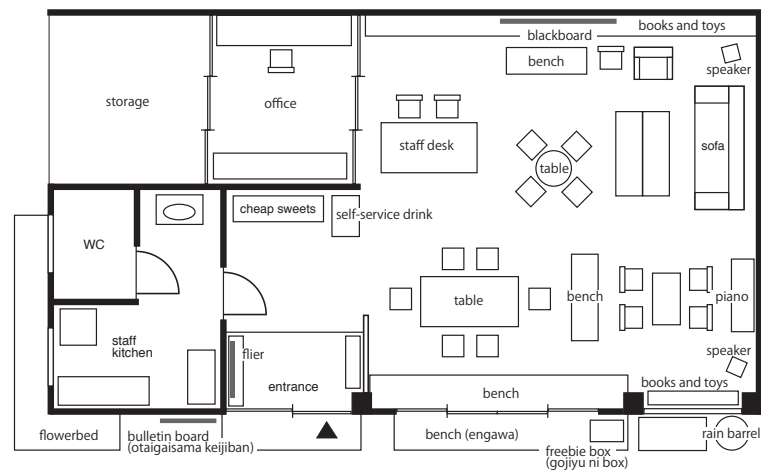


図 6-1. 芝の家の平面図

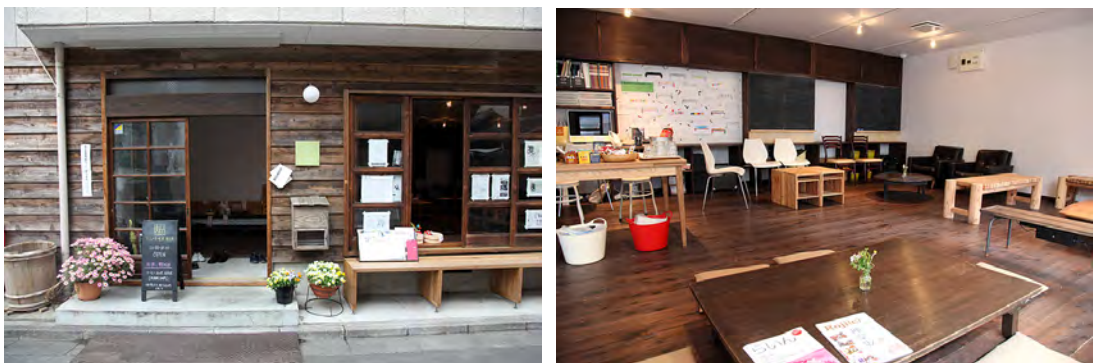


図 6-2. 芝の家の玄関とちゃぶ台 (左)、室内 (右)



図 6-3. 手書きの看板 (左)、玄関のチラシコーナー (右)



図 6-4. 駄菓子コーナー（左）、セルフサービスの喫茶コーナー（右）



図 6-5. 遊び道具（左）、全体を見渡すスタッフ（右）



図 6-6. 窓ガラスのチラシ（左）、ご自由に BOX（右）

#### ・基本的な設計思想

芝の家のコンセプトは、「誰もがいたいようにいられる居場所」である。これは、筆者が芝の家を立ち上げる以前から、グループでの対話を重視したワークショップを行なってきたことも関係する。人間が主体的に行動するためには、まずは安心して自分らしく居られ、他者との援助的な係りをしやすい場が有効だと考えた。

事業（港区芝地区総合支所の「地域をつなぐ！交流の場づくりプロジェクト」）の目的は、かつてあった隣近所のあたたかいつながりが減少していく都心部において、近隣の助け合いや地



域の課題解決につながるような新しい都市型のコミュニティ形成である。しかし、コミュニティは外部からつくることはできず、参加者が主体的に他者と関わったり、活動を始めたりということによってしか生じない。コミュニティが生まれていくためには、自発性を引き出す必要がある。そのため、行政の事業ではあるが、管理された空間ではなく、自分のやりたいことを尊重する雰囲気を重視している。スタッフと参加者の関係も、従業員と客という関係ではなく、自然体で関わること、「〇〇しなければならない」とも、「上手にできたかどうか評価される」とも感じず、互いに尊重しあえるあたたかい関係をまず用意することを心がけている。

通常こうした事業では、コミュニティ活動やまちづくりに興味のある人を集めたり、町内会や老人会などの地縁組織を支援したりというアプローチが一般的である。芝の家は、人口が多く住民の多様性は高いものの、地域への帰属意識が低い都心部では目的を前面に出す拠点は帰って参加者の幅を狭めてしまう恐れがあると考え、あえて特定の関心の対象には絞らないオープンな場づくりが重要だと考えた。

スタッフも、役割としているのではなく、まず自分がこの場に主体的に関われるように、日々のミーティングや研修などを行い、スタッフも成長できる場に行っている。日々の当番でも、来場者を接客するのではなく、出入りする人々や起こることを見守っている。

芝の家という空間は、いろいろの人がいろいろな形で集まれる地域に根ざした場所である。しかし、地域住民だけが利用できるクローズな場ではなく、地域外からの人も立ち寄れるオープンな場である。地域が活性化するためには、地域内にはない知識や人材と交流することが重要であり、知らないこと、知らない人に会えることが重要だ。大学が運営に関わっていることもあり、参加者が自分の学びや成長につながると感じられる運営を心がけている。

#### ・前提要因（主体を集める要因）

芝の家は1日平均40名前後の人が訪れる。特徴的なのは、ほぼ毎日初めて訪れる人がいるということである。常連も多いが同じメンバーだけに固定されない開放的な人の出入りがある。こうした状況を生み出す一つの大きな要素は、通りに面した立地であり、声を掛け合いやすい縁側という空間である。広報やイベントの情報を知ってわざわざ来る人のほか、たまたま通りがかった人や通勤中に見つけた人が立ち寄りたり、近隣に引っ越してきた人が散策の途中に見つけて関係ができたということが起こりやすい。また、もともと知っている人でも前を通る時に気軽に声を掛け合い、関係を維持しやすい。

空間的な要素以外にも、スタッフが行き交う人に挨拶をしたり、初めての人でも安心してられるように声をかけたりと、内輪に閉じない配慮を行なっている。常連だけに親しくしないようにし、初めての人同士を紹介するというところを行い、また使い慣れていない人でも使いやすいよう空間を整えることで、多くの人を歓迎しているという印象が失われないよう気をつけている。

広報面では、イベントのチラシや月ごとに発行しているイベントカレンダーを町内会や港区

の掲示板に貼り、また区内の公共施設に設置している。子ども向けイベントでは近隣の小中学校を通じて配布したり、町内会の全戸配布の回覧板に情報を掲載してもらうこともある。規模の大きなイベントは、港区の広報誌にも情報掲載する。このような周知活動を通じて次第に芝の家を知る人は増え、関心のあるイベントをきっかけに訪れる人も多い。

このほか、大学や専門分野のネットワークがあることで、来場する人の多様性が増している。芝の家についての講演や論文、雑誌記事などによって知る人も多く、大学の授業でフィールドワークの場とすることで大学生が足を運ぶきっかけにもなる。代表者や運営スタッフの人的ネットワークの広がりによって、知人・友人が参加することも多い。こうした活動や人脈があることで、近隣の人だけではない多様な参加者が集まるきっかけになっている。

#### ・促進要因（相互作用を促進する要因）

参加者同士の関係促進が生じる基盤は、自分らしく安心していられる雰囲気づくりである。当番スタッフが場の全体を見守り、孤立している人がいれば声をかけ、一方的に持論を話し続ける人がいれば介入する。玄関に現れた人がいれば挨拶し、初めての人同士を紹介する。さりげなくこうした見守りを行うことで、その場にいる人が相互に他者の存在を感じながら自分らしくいることができるようになる。こうした雰囲気を生み出すために、毎朝のスタッフミーティングも重要な要素である。それぞれの気持ちや体調を分かち合い、体調が優れなかったり、仕事が溜まっていて気持ちが落ち着かなかったりという弱みも語り合い、互いに尊重しあえる関係をオープン前からつくっておくことで、後から芝の家を訪れる来場者も安心感を感じてもらえる。

安心して自分らしくいられる環境を用意するとともに、来場者が関係を構築し、新しい活動を始めるという点についても、スタッフの見守りやサポートが大きな役割を果たしている。関心の重なる人同士を引き合わせ、何かやりたいという想いが実現できるために様々なアシストをしている。想いの実現のアシストは、まずはできるだけその場で実現できるように勇気付けたり、準備が必要な場合は、チラシづくりや企画書づくりを手伝ったり、多様なサポートを行っている。

#### ・環境要因

芝の家の背景には、2006年から慶應義塾大学の教員と学生有志が三田商店街振興組合を協力のもと、同じく三田キャンパス近傍の民家を改装し、様々な人の集まれる学外の学び場として運営していた「三田の家」の活動がある。港区芝地区総合支所からのコミュニティ形成事業の相談が、きっかけとして三田の家を運営していた教員が担当することになった。このため、芝の家の企画や初期のスタッフの多くは三田の家の経験を有しており、近隣の商店街や町内会との関係を持っていた。芝の家が開設された芝三丁目には直接の知人はいなかったが、共通の知り合いは地元が多く、それゆえ信頼関係の構築にも時間がかからなかった。

開設時には、近隣の町会との関係づくりのため10町会以上に挨拶に出向いたり、キックオフイベントを大学で開催し、近隣のキーパーソンを招き、事業の紹介だけではなく、その場で「芝の家」という名前を決めたりという活動も行なった。

芝地区総合支所の事業であるため、直接の担当部署との関係だけではなく、ボランティアセンターや高齢者支援に関する委員会のメンバーとして参加することも多い。それにより、専門職の間でも認知が進んでおり、それがトラブルなどの時にも迅速な対応につながっている。包括支援センター、デイケアセンター、保健所、ふれあい相談員、小中学校、保育園、子育て支援施設などとは折に触れて協力し合う関係がある。

また、大学が運営することで、地域外のつながりもつくりやすい。福祉やアートなど専門的なネットワークを通じて来場する研究者や学生も多い。また、取材などメディアで取り上げられることも多く、見学者や視察に訪れる人も多い。こうした点は、芝の家の活動をより広い人に知ってもらえるというだけではなく、メディアに掲載された記事を読んだり、遠くから見学に来た人と交流し芝の家を説明したりすることが、芝の家への愛着を高めることにつながっていると見える。

## 事例2 うちの実家

### ・空間設計

うちの実家は、新潟駅からJRで一駅、栗山の住宅街の一角にある。平屋建ての住宅は、ブロック塀に囲まれた庭のある平屋で、隣接する駐車場も数台借りている。門には「うちの実家」と看板があり、扉に手書きの案内が貼られている(図6-8右)。そこには、「ちいさなお子さんからお年寄りまで!『誰かと話がしたい』『一緒にお茶のみしたい』『一緒に食事がしたい』そんな時の居場所です」と書かれ、オープンの曜日と時間、利用料が明記されている。時間には、「出入りは自由」との補足もある。引き戸の玄関は、冬でも解放されており、ホワイトボードにメッセージが書けるようになっている(図6-9左)。玄関横のトイレは、利用者からの寄付で設置されたという。玄関には、予定の書かれた黒板が設置され、下駄箱の上には、来場者が記入するノート(大人向けと子供用の2冊)、利用料を入れる箱、チラシや消毒用のアルコールなどが置かれている(図6-9右)。

玄関から続く廊下に面した16畳ほどの座敷が、メインの空間である。このほかに2室と台所がある。2室のうち1室は、事務室として使用されている。

座敷には、座布団やソファ、複数のちゃぶ台があり、人数やプログラムに応じて配置を変えることができる。身体の不自由な人が使いやすいように改造した椅子などもある。廊下側の壁にはお茶コーナーがあり、紙コップとプラスチックのホルダ、ポット、コーヒーメーカーなどが置かれている。来場者は、紙コップに名前を書き、自分で飲みたいときにお茶を入れる。オセロなどのゲーム、子ども向けのぬいぐるみや遊び道具が多くある。また、庭に面した縁側

には、さをり織りの道具が置かれている。

壁面には、これまでの活動の記録や子どもの作成した作品、取材や見学などの予定が貼り出されている（図 6-10 右）。また、廊下には「うちの実家の約束ごと」として、来場者のルールが明記されている（図 6-11 右）。



図 6-7. うちの実家の平面図



図 6-8. うちの実家の玄関（左）、門に掲げられた案内（右）



図 6-9. 玄関（左）、下駄箱の上のノートと予定表（右）



図 6-10. 喫茶コーナー（左）、壁に貼り出された予定表（右）

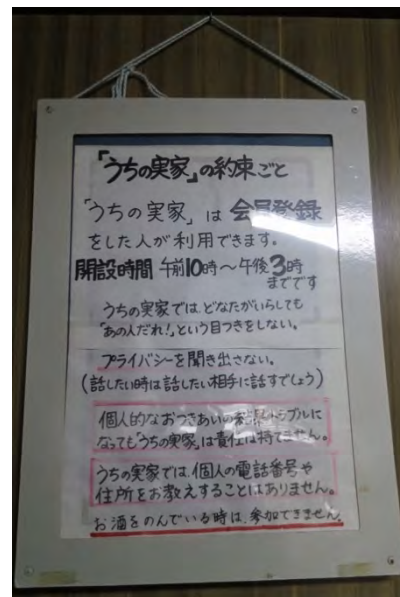


図 6-11. 遊び道具（左）、廊下に掲出されている「約束事」（右）

### ・ 基本的な設計思想

うちの実家は、常設型地域の茶の間であり、「誰でもいつきてもいい、帰ってもいい居場所」というコンセプトで運営されている。「誰かと話したい」と思えば遠慮なく来ることができ、個人的なことを詮索されることなく人と人の談笑の場に身を置くことができる。孤独を感じずに、人と人とのあたたかいつながりに触れられる場所である。

河田氏は、1990年代から両親の介護をしながら、有償の訪問型介護サービス「まごころヘルプ」を立ち上げてきた人物である。お年寄りの「老後」ではなく、誰もが最後まで自分らしく生きられる環境づくりが必要と考え、高齢者福祉の仕事をしてきた。大阪で特別養護老人ホームの寮母をしていた河田氏は、認知症を発症した夫の両親のために新潟に戻り、自身も癌の治療を受けながら介護にあたった。その孤独さから、介護しつつ自分の人生を大切にできるシステムをつくりたいという思いを持ち、いま手助けが必要な人と、いま手助けができる人が会員となって、お互いに有償で助け合うことのできる「まごころヘルプ」を立ち上げた。うちの実

家の根底にも、「気兼ねなく『助けて!』と言える地域づくり」という思想が流れている。

しかし、気兼ねなく助けてと言えるということは、何から何まで世話をするのではない。自分でできることは自分でする、何をするかは自分で決める、他の人にできることは親切にしてあげる、という考え方である。誰でも助けてと言えるが、自分でできることは自分がやる、という姿勢が一貫している。お互いに矩を超えず尊重し合う関係があれば、病気や障害があったとしても人間は次第に元気を取り戻すことができる。専門サービスの他に、自分の気持ちを安心して話し、受け止めてもらえる「茶の間」が大事である。こうした思想に基づいて、来場者がうちの実家でどのように過ごして欲しいかという河田氏の考えは、後述するルールとしてまとめられている。

そして、個人の安心感だけではなく、地域の中での役割についても意識している点が特徴的である。「やさしい思いやりの気持ちを育てる場にしよう、そしていつか地域の宝になろう」という通り、お互いを思いやる気持ちを地域の中に広げ、地域の中で認められてこそ居場所として機能すると考えている。それゆえ、近隣の町内会や小学校との関係も大事にしており、小学生たちの訪問や町内会の会議の利用も受け入れている。

#### ・前提要因（主体を集める工夫）

場をつくるための前提要因と促進要因の2段階の考え方について、河田氏は全面的に同意してくれた。うちの実家では、「サービスの利用者」ではなく「場の利用者」と考えているという。その結果、場を利用してくれる人の化学反応によって、いろいろなことが生まれる。通常の福祉施設では提供されるサービスが決まっており、利用者はそれを享受するだけだが、うちの実家では、うちの実家という場を提供することで、利用者がそれぞれそこでお互いに関わり合うことが主な活動である。通常はサービスを受けに来るが、うちの実家では、主体として活動することが重要である。そのためには、参加者がそのように行動できるよう運営を心がけているという。

まずその入り口として、入りやすい雰囲気づくりを心がけている。例えば孤独を感じたお年寄りが、「誰かと話したい」と思ってうちの実家に足を運んでくれたとしても、実際に戸を開けて中に入るのには勇気がある。仲間同士の集まりによそ者が入りこんでしまった居心地の悪さは誰もが感じることだ。まして、せっかく勇気を出して来場してくれたお年寄りが、仲間に入れない孤独感を感じてしまったとしたら、二度と足を向けてくれることはない。こうした心理を理解しているからこそ、入りやすい雰囲気づくりには心を砕いている。うちの実家では、冬でも玄関は開けっ放しであるが、これはいつでも誰でも歓迎という姿勢を表明することで、玄関を開けなければ入れないというハードルを下げる工夫である。また、うちの実家のルールの一つに、「あの人は誰?」という目でみないというものがあるが、これは、知らない人に対する排他的な雰囲気を出さないようにするための約束事項である。さらにスタッフも、常連さんだけを優遇しないよう気をつけることで、初めての人も歓迎する気持ちを大事にしている。こう

した点は、新潟という他人に迷惑をかけることを嫌う地域の風土への理解でもある。

うちの実家の外でも、講演会などで会った人の中に孤独やさびしさを感じている人がいれば、時々サポートをすることも忘れない。遊びに来るように伝えたり、スタッフに誘ったりという形で見守っている。そういう心遣いによって、新しく参加してみようという人も増える。

特に、夜の茶の間ネットワークは関係者を誘うことによって積極的に関係をつくっている。地域福祉をテーマにした交流会であるから、来て欲しいと思ったり、この人は何か役に立ってくれそうと考えたりしながら誘っているという。

有名な成功事例となっているため、視察や取材も多いが、行政職員や高い役職にある人も一人の人としてみることで、特別扱いしないようにしている。それによって、政治や思想に偏らない場、中立な場にすることに配慮している。立場のある人が来ても、河田氏が態度を変えない、へつらわないという姿勢を見せることが、参加者が安心して過ごせる場を維持するために大切だという。

#### ・促進要因（相互作用を促進する工夫）

先に触れたように、うちの実家では以下の通りルールが明確に示されている。（ここでは便宜的に番号を振っている）

- 1) 玄関では、自分で記帳し、参加費を箱に入れ、おつりも自分でとる。
- 2) どなたが来られても「あの人は誰？」という目つきをしない。
- 3) テーブルや椅子の配置は参加者によって変わる。固定しない。
- 4) 台所以外では、エプロンをしない。役割を固定しない。
- 5) 世話をする人と、される人の関係は固定しない。
- 6) 食事は最後の一人が箸を置くまで、食器を片付けない。
- 7) 仲良しクラブではない。（親しい人だけで固まると他の人が入れない）
- 8) 訊きださない。その場に居ない人の話をしない。
- 9) 紙コップを使う（気を遣わせない。名前を書く。感染予防）
- 10) 決められたプログラムはない。自分の好きなように過ごす。
- 11) 10時から15時までの間は、何時に来て、何時に帰ってもいい。
- 12) 遠慮せずに自分から手助けを頼む。気持ちよく手伝う。助け合う。
- 13) 配膳、下膳、庭掃除、除雪などを含めて、できる人が自発的にやる。

これらのルールは、来場者が主体的に行動し、他者との相互作用を促進する効果がある。2の「どなたが来られても『あの人は誰?』という目つきをしない」というのは、参加者を入りやすくする工夫である。1「玄関では、自分で記帳し、参加費を箱に入れ、おつりも自分でとる」は、来場時の記帳と参加費の支払いのしくみだが、できることは自分でやるということ

実践させることで、自発的な行動のきっかけをつくっている。セルフサービスのお茶コーナーも同様である。4「台所以外では、エプロンをしない。役割を固定しない」、5「世話をすると、される人の関係は固定しない」も、お客さんの態度を生み出さない仕掛けである。どうしてもエプロンをしている人がいると、スタッフと利用者という意識になりやすいし、中には遠慮してしまう参加者も出てくる。誰でも、他の人にできる世話はしても良いという場の規範を明記することで、参加者が他者に親切にしやすい雰囲気づくりをしている。10から13も、何をするかは自分で決める、来る時間や帰る時間も自分で決めて良いというルールである。12「遠慮せずに自分から手助けを頼む。気持ちよく手伝う。助け合う」、13「配膳、下膳、庭掃除、除雪などを含めて、できる人が自発的にやる」は、参加者に行動指針として守らせるのではなく、積極的に助けを求めることや自発的な行動を明確に推奨することで、行動を起こしやすくなると思われる。関連して、見学者や取材の予定は、張り紙に表示している(図6-10右)。こうすることで、取材などがある時には来たくないという人は、事前に予定を調整することができるようになる。

7と8は、参加者同士の関係規範についてのルールである。7「仲良しクラブではない」は、あたたかい関係の場所としては意外に感じられるが、内輪のグループ(仲良しクラブ)をつくってしまうのは人間の習性であり、本人たちも気づかないうちに内向きの排他的な雰囲気を生み出してしまうことがある。8「訊きださない。その場に居ない人の話をしない」は、興味本位で聞かれたくないことを根掘り葉掘り聞かれることが苦痛である人も多く、また、その場にいない人の噂話を聞くことで、自分も他の人にあれこれ言われているのではないか、という不安を持つ人もいる。地域の居場所という参加者同士の関係が近くなりやすい場だからこそ、こうした適度な距離感を持って付き合えるようにする規範を示すことが有効である。

3「テーブルや椅子の配置は参加者によって変わる。固定しない」というのは、その時々状況に応じてフレキシブルに空間を使うということである。日本家屋の座敷であることが、自由な家具の配置を容易にしている。河田氏によれば、空間は、話しやすさをつくる。その人の視界の中にできるだけ後ろ向きに座る人をつくらないこと、かといって正面ではなく、斜めに向き合うような関係が生まれるようテーブルを配置するのがコツだという。また、視野の中に多くの人たちの様子が入っていく方が豊かな関係性が生まれ、逆に目の前にしか関係がない場は貧しいという。こうした工夫をすることで、1日過ごした後で参加者が「今日はいろんな人と会ってきた」と実感できる。

6「食事は最後の一人が箸を置くまで、食器を片付けない」9「紙コップを使う」は、気兼ねなくその場で食事し、お茶を飲めるための気遣いである。人に迷惑をかけたくないというお年寄りや、食べ終わった人から食器が下げられると、早く食べないといけないと思ってしまう。また、お茶碗を使うことだけでも、誰かが後で食器を洗うと考えると遠慮してしまう。こうした気兼ねをなくすために、全員が食べ終わるまで食器は片付けず、使い捨ての紙コップに自分で名前を書いてお茶を飲むというやり方を取っている。



この他、河田氏が気をつけているのは、「その場で一番弱い人だけをケアする」ということである。数十人が過ごすうちの実家で、一度に全員と話すことはできない。その場で一番弱い人、つまり、初めて来て不安そうにしている人、孤立している人、具合の悪そうな人など、場の中で一番ケアが必要という人に寄り添うという。すると、周りの人はそうした河田氏を見て、自分も他の人に親切にしようと行動する。結果的に、やさしい雰囲気の間になるという。そして参加者の話を聞きながら、河田氏は、「この人が得意なことは何か」、「できることは何か」を絶えず考えているという。サービスを受け続けるだけでは、人は幸せにならない。誰かのために何かをやり、役に立つ実感や、感謝の言葉が返ってきたとき、はじめて人は心から生きていてよかったと感じると考えているからだ。

またスタッフに求めることも、シンプルに明記している。「いない人の話しをしていたら注意できる」、「皆に平等に接することができる（目くばり、気くばり、心くばり）」が条件である（図6-11右）。場を見渡して気配りができること、噂話をしていたら注意するということを、まずやって欲しいと伝える。地域の居場所のスタッフは何をすれば良いか迷うことも多い。誰でもはじめから完璧にはできないが、河田は日々の運営のなかで、お当番の人が上の役割を果たせていない局面を見かけると、それとなく注意を促している。また、スタッフにとって誇りが持てること、社会からの注目を得られることも大切だという。うちの実家の意義を感じ、外から注目されることによって、自分で考えて行動したり、うちの実家の説明をできるようになる。マナーにならないように、みんなが学べる場づくりも心がけているという。そして、スタッフや参加者が主体的に動けるようになる理由は、「私は見ているだけ」であることだという。中心は「欠けた人間」がよい。つまり、いろいろなことができない人が中心にいる方が、万能な人がリーダーであるよりも、周囲が助けてあげなきゃと動けるようになるという。

#### ・環境要因

うちの実家が、現在のような形で運営されるようになったのは、それに先行して河田氏が手がけてきた「まごころヘルプ」、山二ツ会館の茶の間から継続する人間関係に負うところが大きい。設立時に資金を提供した夢買人は当然それ以前より関係があった人たちだが、現在の当番スタッフについても、うちの実家ができる前からの河田氏との信頼関係があり、河田氏の思想やまごころヘルプの活動に触れて来たメンバーが多い。うちの実家以前の地道な活動があつてこそ、活動を支えてくれるネットワークがあると言える。

また、河田氏が、全国や県内の研修事業の講師をしたり、全国の福祉関係のネットワークを持っていたりという面も、視察受け入れなどによる関係の拡大に寄与している。これによって、地域の居場所の直接の参加者だけではなく、より広い関係者や広域からの参加が生まれている。当番スタッフの中にも、河田氏が講師を務める講座を受講したことが縁となって参加したという人もいる。

近隣との関係について言えば、前述の通り河田氏は積極的に地域との関係をつくろうと考え

ており、小学校や町内会など周辺地域の社会資源との連携も多く行われている。

また、行政との関係では、夜の茶の間ネットワークが県や市職員、社会福祉協議会や民間の社会福祉法人職員のネットワークの場になっている他、地域包括ケアのコンセプトワークに関わるなど、地域のインフォーマルなネットワークのハブ機能も果たしている。

地域の社会資源と様々な形で繋がることで、うちの実家単体では起こらない様々な出来事が、多様な人のネットワークによる「化学反応」で生じている。

### 事例3 リタクラブ

#### ・空間設計

リタクラブは、富山駅から南に5kmほど離れた二口町という市街地にある。周囲は、住宅もあるが、大通り沿いの商業施設や飲食店が多い地域である。リタクラブの建物は、軽量鉄骨造2階建て、二口町交差点から西に進んだ通り沿いにある。店の前には、「学びたい、あなたのための居場所」と大きな看板が掲げられ、主宰者の平木氏の写真も表示されている。駐車場は約10台止められる。

大きく「Lita Club」と表記された赤いサインの掲示された入り口を入ると、左手に2階に上がる階段とトイレ、右手に飲み物の自動販売機と自立式の黒板が置かれている。もうひとつのドアを開けると、スタッフが常駐しているカウンターが右手にある。その向かいには、コピー機やロッカーが置かれ、簡便な打ち合わせスペースになっている。室内は、中心部にはミーティングができるテーブルが3つ、壁際に沿って個人のワークスペースとなっている。自立式・移動式のホワイトボードやオレンジ色の衝立、観葉植物がいくつかあり、自然に空間を区切るように配置されている。壁面には、会員の写真や自己紹介のカードが貼ってあり、いくつか置かれた本棚には起業関係の様々な本が置かれている。ソファや会員向けの飲み物を冷やした冷蔵庫もある。ピアノもあるが、会員が持ち込んだものとのことだ。奥には、壁で区切られたミーティングスペースと倉庫がある。

2階は、セミナーなども開催できる個室の会議室と、シェアオフィスになっている。

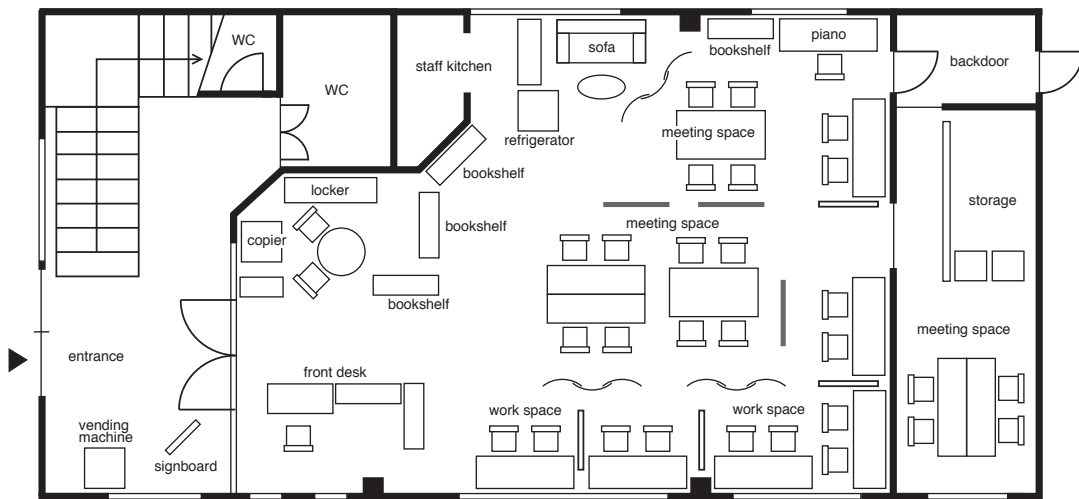


図 6-12. リタクラブの平面図



図 6-13. 通り沿いの看板 (左)、エントランス (右)

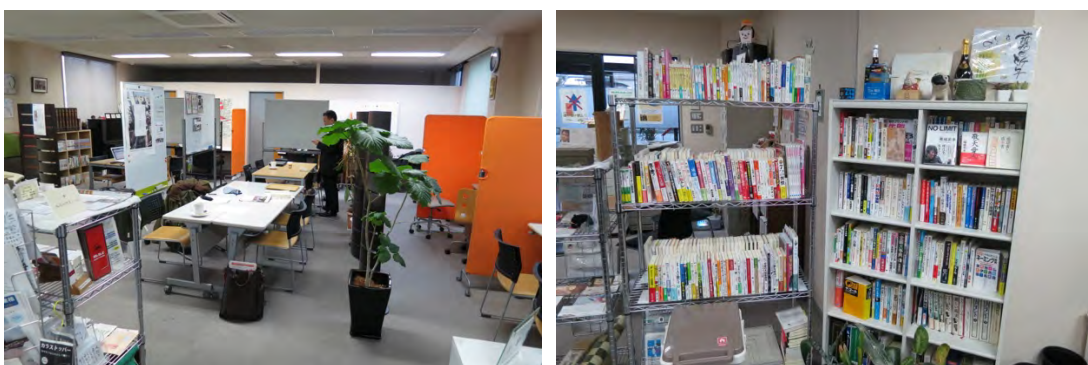


図 6-14. 室内 (左)、本棚 (右)



図 6-15. 本棚とピアノ (左)、ドリンクコーナー (右)



図 6-16. 受付 (左)、会員を紹介するカード (右)



図 6-17. シェアオフィス (2F) (左)、会議室 (2F) (右)

### ・基本的な設計思想

平木氏は、富山生まれ。東京の大学を卒業した後、地元に戻り、人材コンサルティング会社に就職した。大学時代から国際教育を学び、身近な大人の姿が子どもの成長に大きく影響を与えていると気づく。仲間と一緒に「共育ゼミ」という自主ゼミを開催し、誰が先生という関係ではなくて、そこに集まる人たちがそれぞれお互いに学び合いをするという場をつくっていた。大学時代には多くのセミナーにも参加したが、それらは一方通行で、学んだつもりになったり、

学んでいるその環境そのものに満足してしまったりということもある。共に学び共に育てることが、行動につながる。一方的に学ぶだけではなく、学んだら今度は交流会をして講師と仲良くなる場をつくり、さらに講師をするよう促すことが本当の行動につながる学びだと考えている。したがって、リタクラブは、オフィスの賃料や会費の最大化を求めるシェアオフィス事業とも、収益性・集客性の高い学びの機会を提供するセミナー事業とも異なるコミュニティである。

地元に戻ってからは、「富山を愛する男」と名乗り、「富山を元気にしたい！」という思いから、セミナーの主催など様々な活動を行ってきた。地域を元気にするには、子どもが憧れる大人を増やすことが大事と考え、そのための学びのプラットフォームをつくることを思い立つ。2010年、株式会社 LearnPut（ランプット）を設立。ランプットとは、単に学んで終わるインプットではなく、つまり受講者にとどまらずに行動につなげることが大事であるという理念を表している。継続的に継続的に実生活につなげる学びを生み出す場としてまず立ち上げたのが「ポエシアブランカ」である。その1年後、さらに学びたい大人の自習室として、学習や起業を目指す大人のコミュニティの場としてリタクラブを開設した。

平木氏は、とにかく自分が成長することに真剣で、前向きである。リタクラブは、東京から富山に戻って、学びの場がなかったことから、自分が欲しかったものを作ったという感覚もあるという。営業マンとして働いていた経験から、営業の合間に寄れたり会社帰りに寄れたり、そういうフラッと立ち寄れる居場所で、自分の成長につなげられる場所があったらいいのではと考えた。

リタクラブは株式会社で運営されているが、そうすることで事業として成り立たせることを目指し、継続する意志を見せたいという。NPOにするという考えもあったが、県内のNPOを見ていてワクワクしなかった。常にチャレンジしたい、という平木氏の思想が垣間見える。

#### ・前提要因（主体を集める要因）

より多くの人が参加できる環境づくりとして、まず空間面では、わくわくする空間、何かしたくなる空間づくりを心がけているという。見学に訪れた人、セミナーへの参加で訪れた人が、ここで仕事をしたい、ここなら何か新しいことに取り組めると感じられるということが、惹きつける要因になる。明るい色調の家具や植物も置き、セミナーのできるミーティングスペースが配置され、デザイン性の高いオフィス空間のようになっている。また、起業や学びに関する書籍を多く集めた本棚を用意しているのも、参加者のわくわくを刺激する仕掛けの一つである。

また、参加者は富山県内全域から集まることから、ほぼ全ての参加者が自家用車で来場する。そのため、駐車場を十分に用意し、県内から気軽に立ち寄れるよう配慮している。都市部で近隣の利用が多い地域の居場所とは異なる、立地と圏域の違いがもたらす工夫である。

情報を多くの人に届けることも重要である。とはいえ、広告費を使えるわけではないから、何かしたい人を核にして新しい企画をつくり、マスコミへの紹介や、メルマガやブログ作成の

支援などを積極的に行い、できるだけ露出を増やすようにしている。県内を中心に、学びや起業に関心のある人がなんどもリタクラブの名前に触れることで浸透し、次第に求心力が高まる。

新しい参加者層を拡大するという仕掛けも行なっている。例えば、スイーツ交流会や主婦向けの女子会など、必ずしも学びや起業に直接繋がっていない企画でも、新しい利用者層の参加のきっかけづくりとして開催している。

このほかにも、リタクラブの会員やポエシアブランカの頃からの協力者が口コミで誘い、会員になったりイベントに参加したりということも多く、平木氏やスタッフだけでなく、リタクラブのコミュニティが少しずつ参加者の輪を広げている。

#### ・促進要因（相互作用を促進する要因）

リタクラブは、参加者が学び、新しい活動を行なっていく舞台だが、平木氏は、人が変わるためにはロールモデルが必要だと考えている。リタクラブのような地域の居場所では、中心になる人がいて、その人のあり方や行動が参加者に大きな影響を与える。そのため、当初は、平木氏自身が自らセミナーを開催し、そして、思いついたことをすぐに実行する姿を見せるようにしていたという。自身が、リタクラブの参加者にとってほしい行動のロールモデルになることを意識しているということである。

また、ポエシアブランカを立ち上げ当初は、平木氏自身もマスコミに積極的に露出することを意図的に行なっていた。男子スイーツ会などを企画し新聞などマスコミにリリースし記事にしてもらっていた。今では、参加者の活動支援として、参加者の企画している新しい企画について、その情報を平木氏がマスコミに売り込みにいく。取材されていた時のネットワークを活用して、参加者の活動のサポートを行なっている。

空間的な面の工夫としては、自習室的な場所は、一人で集中して勉強したり作業したりする空間が必要だが、完全に個人に閉じてしまうと、他の参加者との出会いの生まれる機会を阻害してしまう。リタクラブの空間は、一人で集中できる空間も確保しつつ、完全に個室にするのではなく、自立式・可動式のパーティションによってゆるやかに区切っている。ちょっとした休憩時間に見かけた人と立ち話をしたり、ミーティングスペースの声がそれとなく聞こえてきたりすることで、新しい交流が生まれやすくなる。そのほかにも、セミナーのできる環境を用意することで、何かを学んだ人が講師になって他の人に教えるということをし始められるようにしている。

参加者の声を聞いて気軽に運営や空間に取り入れるということも行なっている。例えば、リタクラブにはピアノが置いてあるが、それは参加者の発案が元になっているという。こうした要望や提案を可能な限り取り入れた柔軟な運営をすることの結果として、スタッフも自発的に運営を考えるようになった。

参加者同士が知り合えるような機会もつくっている。会員になる人とは面接をして、どんなことをしたいのかという目的、リタクラブを知った経緯、使い方、要望などを聞き、その情報

をもとに、相互に助け合えるような人を紹介している。また交流会やイベントを開催することで、すでに知り合った人だけに閉じることなく、新しい人を呼び込み新しいネットワークが生まれるように「関係をかき混ぜる」ことが大事だという。

#### ・環境要因

平木氏は20代であり、地域活動や市民活動に長年取り組んでいたということはない。リタクラブの直接の母体として、ポエシアブランカがあり、その頃からの人脈がリタクラブの設立後も大きな役割を果たしている。

東京から戻り、24歳で独立・起業した平木氏が設立したこれまでにない形のコミュニティスペースということで、リタクラブ以前から地元で有名な活動となる。富山に戻った頃の平木氏は、月2回くらい研修を行い、ポエシアブランカ設立前には年間800枚くらいの名刺を配布するなど、ネットワークを広げる努力を行っていた。TwitterやFacebookを活用し自分の考えを広げるという活動も、当時としては斬新だった。開催するイベントはマスコミに積極的に情報提供することで、自身の知名度を上げることに役立った。結果、県内外の様々な分野のネットワークを構築することができた。現在は県議会議員をつとめ、さらに人脈と信頼をひろげている。リタクラブを取り巻く人的ネットワークは、平木氏の数年にわたる活動によって生まれた信頼関係のある関係性であるといえる。

富山県内外に、リタクラブと同じ事業スキームのスペースが展開されている。平木氏が経営するのではないが、一つのアイデアを独占するのではなく、共鳴すること大事であるという考えからである。コワーキングスペースやセミナー会場としては競合する場となるが、こうした場が増えたほうが、まち全体がよくなると考えている。取材した時点で、徳島、金沢、小矢部に提携したスペースがある。

### 事例4 津屋崎ランチ

#### ・空間設計

津屋崎ランチは、津屋崎千軒の中心地の一軒家である。見た目はごく普通の民家だが、玄関脇に水色の看板がかけられている。引き戸を開けて室内に入ると、広めの土間のある玄関になっている。一見ごく普通だが、開設時に改修し、土間部分を1mほど広げたという。広い土間があることで、相談やおしゃべりなど人が滞留しやすい空間になり、地域の人が訪ねて来やす区なることを意識している。細かな工夫として、上下に3枚に分かれている玄関の引き戸のガラスの真ん中だけ、曇りガラスではなく透明になっているが、そうすることで、室内で座っている人の目線で通りが見えるようになっている。誰か訪ねて来た時にすぐ気づきやすくする工夫である。

玄関の右手には、津屋崎ランチのスタッフが働くワークスペースがある。和室で落ち着いた

て仕事のできる空間になっており、玄関脇にあることで、来客にもすぐ対応できるようになっている。

奥のリビングルームには、無垢の天板を用いた大きなダイニングテーブルが置かれ、窓の下には活動に参考になりそうな書籍やフライヤーが置かれた本棚がある。壁面は、模造紙を貼り付けたりできるよう広く空間が取られている。このリビングルームは、「未来会議室」と名付けられ、その三か条、未来を語る、人を褒める、断定しないと書かれたオレンジの看板が置かれている。来客との打ち合わせやトークイベント、様々な会議に使われる。奥に広いキッチンもあり、飲食を伴うイベントも多く開催されている。

津屋崎ランチの活動の特徴は、拠点となる津屋崎ランチの建物だけではなく、地域全体が参加者の活動のプラットフォームになっていることである。活動開始当初はランチがイベントの主な会場であったが、他にも公共施設である「福津市まちおこしセンター津屋崎千軒なごみ」、山口氏らが地域の人たちと協力してつくった「ゲストハウス河野邸」、プチ起業塾という講座がきっかけとなって生まれた「Cafe and Gallery 古小径」、北海道から移住して来た芸術家の運営する「みんなの木工房 テノ森」など複数の拠点が開かれ、そうした空間を生かした様々な交流の機会が生まれている。津屋崎ランチという空間が核となって、地域全体が多様な人の相互作用の起こるプラットフォームになっているといえる。



図 6-18. 津屋崎ランチの平面図



図 6-19. エントランス (左)、未来会議室 (右)



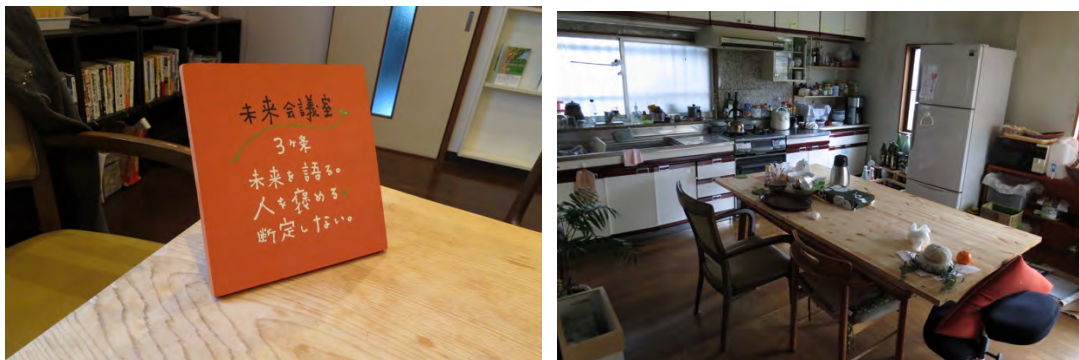


図 6-20. 未来会議室の看板（左）、キッチン（右）

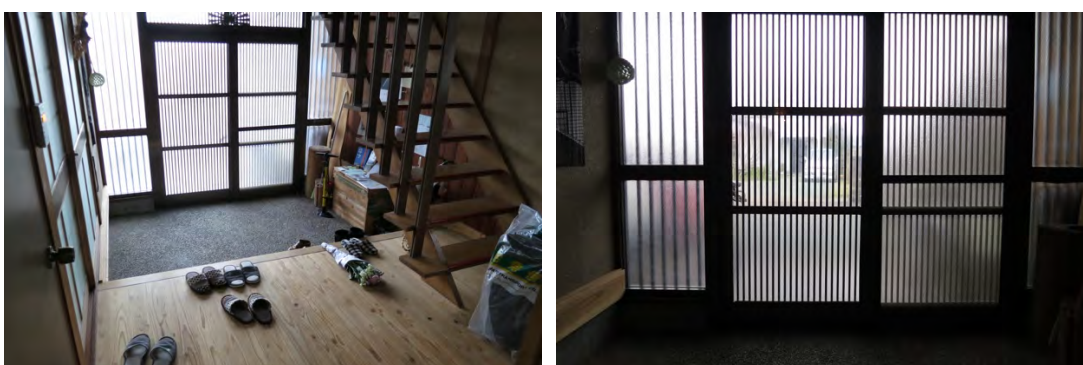


図 6-21. 玄関の土間（左）、引き戸（右）



図 6-22. 通り側から見た玄関（左）、オフィススペース（右）

### ・基本的な設計思想

山口氏が津屋崎ブランチを立ち上げた背景には、コンサルとして外部から地域に関わるのではなく、内側から地域を変えたいという強い想いがあった。長年ゼネコンで働き、東京一極集中の状況や地方の自然資源の乱開発、地域外の専門家が指導して進める活性化などに疑問を持っていた。そのため、津屋崎に関わるのであれば自分自身が引っ越して、地域の住民という内部の立場から変えていきたいという意識でいた。したがって、当初は箱物をつくるイメージは

なく、自分が住みながら活動していくつもりだった。津屋崎ランチという拠点が今の形になったのは、地元の人に紹介された家が想像以上に大きかったからであった。その家を見て、「人のたまり場」になりそうだと思います、そのような使い方ができるよう改装を行なった。

山口氏が津屋崎のまちづくりを進めるコンセプトと考えていたのは、「新しい暮らし方をつくる」、「新しい働き方をつくる」、「新しい人とのつながりをつくる」という3項目であった。都会の価値観とは異なる新しい暮らし方をつくりたい。しかし、田舎に住みたくても仕事がないという問題がある。だから、小さな経済を町中に生み出すことがとても大事で、まちを支える職業や店をひとつずつ置き換えることでまち全体が変わっていくのではないかと考えた。だが、一般的にまちづくりはボランティアだという固定観念も根強く、「人手が足りないから手伝って」と協力を仰いで人を集めるという発想に留まっている。そこから脱却するためには、まずやりたいことが先にあって、それが社会と結び付くことによって多くの人に認められ、多少の小遣い稼ぎにもなり、結果としてまちづくりにつながっている、という循環の仕組みをつくりたいと思ったという。そのためには、活動は課題解決型ではなく、価値創造型でなければならない。そういう仲間ときっかけをつくるのがランチの役割だと考えている。

#### ・前提要因（主体を集める要因）

前述のような経緯から、津屋崎ランチを人の集まる場にしようと考え、土間の改装やリビングを未来会議室として開放した。

開設当初は、津屋崎内外の人がそこに出入りするきっかけとなるプログラムとして「サタデーランチ」を月1、2回開催した。これは、まちづくりの真面目な集まりではなく、面白いことは何でもやる、思いついたことは何でもやるというコンセプトを伝えるものであった。課題解決型思考ではなく、楽しいからやる、わくわくするからやる結果的に地域の課題を解決していくという姿勢を示すため、潜在的に関心を持っているようなテーマを探し、ユーモアを盛り込んだ企画にすることで、地域内外からそのおもしろさがわかる人たちが集まるようになった。イベントテーマによる選択的な集客である。

そのおもしろさを伝えるためには、デザインも重要である。チラシやウェブサイトのセンスが良いことが大切だと考え、津屋崎ランチのスタッフはイラストレーターを使って自分でウェブサイトの情報更新を行うようにしている。また、4人が月一回ずつ企画を行うことで、毎週活発な活動が行われている印象も生まれる。スタッフはその他、イベントに集まった人の想いを引き出し、話しやすい雰囲気をつくるファシリテーションも学んでいる。

また、プチ起業塾という、自分のやりたいことを活かして月3~5万円の小さな仕事をつくりだす講座も、多くの参加者の集まる入口となった。これは、30代40代の主婦たちの力を地域に結び付けることが大きな力になるだろうと考えてのことで、結果として地域で主体的に活動する人が多く集まった。

津屋崎ランチの活動が地元で浸透してきた近年は、通常活動を休んでいるお盆や正月に開

けるという試みをしている。津屋崎の出身者だが普段は都会で生活していたり海外に行っていたりする人がいると考えての試みだ。結果として、香港やフランスなど海外在住の津屋崎出身者とのネットワークが生まれ、将来的には地元に戻りゲストハウスを始めたいなど、様々な未来を語り合う「会議」の場になっている。

このような共感を呼ぶ参加の入り口を設け、関わる人を広げる活動のほか、山口氏は、行政や地元の個人や団体との付き合いも積極的に行なっている。津屋崎ランチの改装や空き家活用のプロジェクトである旧河野邸のリノベーション工事には地元の工務店に依頼し、地域の昔ながらの旅館や酒蔵をイベント会場にするといった活動によって、参加する人を増やしている。当初は歓迎されなかった消防団や漁師などとの地道な付き合いによって、今では移住者ネットワークと地元の地縁組織の間をつなぐ存在になっている。こうした個人的な人脈の広がりも、地域内外から人を呼び寄せ、つなぐことにつながっている。

#### ・促進要因（相互作用を促進する要因）

津屋崎ランチの「未来会議室」は、開設後 1 年くらい経たころ、前向きな対話のためのルールづくりの必要性を感じて命名された。人が集まっても、不満や否定的な意見ばかりでは創造的なことはおこらない。津屋崎ランチのイメージも左右される。そこで、三箇条「未来を語る」「人を褒める」「断定しない」をつくり、小さな看板に書き込んだ。過去を語り、人を貶し、断定するという態度とは逆の、前向きな気持ちを共有する仕組みである。スタッフ同士で行う月一回の「ランチミーティング」では、山口氏が実行計画を決めるのではなく、スタッフ全員の意見を聞き、民主的に決めていく。これによって、スタッフの活動意欲の促進にもなる。

津屋崎ランチは、プチ起業塾始め、普通の住民が何かまちに関わる活動を進めることを支援している。それゆえ、活動を進めていくための悩みや難しさを感じる人も多い。山口氏は、そうした人を支援するためには、「大丈夫、大丈夫」という人が大事だという。またそれぞれの活動を「おもしろい」ということも大切だという。活動の価値を客観的に認め、承認をする役割があることで、勇気付けられ、活動を進めていくことができるようになる。専門家や指導者的な立場ではなく、活動を進める人たちの姿を、「補助輪をとって後ろから見ている感じ」と、自転車を練習する子どもを見守る大人を例えに説明する。見守っていて、よろっとなったら助ける。人間関係がうまくいかなかった場合は、修復的に介入する。という役割を山口氏が引き受けている。

ささいな感情のすれ違いなど人間関係のヒビを修復するために、関係者に頭を下げていくのを厭わない山口氏は、まちで起こっていくことのすべてがドラマだと考えている。カフェ&ギャラリー古小径も 4 年間の間に様々な危機があり、それを乗り越えてきたが、そのストーリー自体がまちづくりだという。よりうまくやることや完成させるのではなく、プロセスそのものが暮らしだという価値観である。だからこそ、大変なことが起こっても「しめしめ」と思え

る。様々な人の織りなす過程を見守る姿勢ができるのである。

津屋崎ブランチが地域に定着してきた現在では、何かを始めたい人の信用を担保する機能を果たすようにもなっている。津屋崎ブランチの活動なら、山口氏がサポートしているのであれば、安心して家を貸してくれる人が増えるなど、さらに津屋崎が主体的に活動しやすいまちになっている。

#### ・環境要因

津屋崎ブランチの活動のユニークな点は、山口氏を含めた4人のスタッフが、全員地域外から引っ越し、住民として活動を始めたという点である。初めの2年間は緊急雇用対策事業の予算で人件費が賄われたが、その後は自分たちで仕事をつくらなければならなかった。行政からの補助金がなくなった現在でも、4人は自分らしい仕事を創出して津屋崎で暮らしている。住民として関わることで地元のコミュニティとの関係が深まるだけでなく、彼らの存在そのものが、地域の新しい暮らしと仕事をつくるという山口氏の理念を体現するロールモデルとなっている。

東京のゼネコンで働いた後、まちづくりのファシリテータをしていた山口氏は、引っ越してくる前から福津市のまちづくりに関わっていたのだが、特に、以前から津屋崎の街並み保存運動の中心となってきた「藍の家」保存会のメンバーとの信頼関係は、津屋崎ブランチの活動の大きな助けになっている。借家の斡旋や地元の人との関係の相談、若いスタッフの生活のサポートなど、藍の家の支援は、津屋崎ブランチの活動の深まりに影響を与えている。

また、空間的な広がりも津屋崎ブランチの特徴の一つである。旧河野邸や玉乃井旅館、カフェ&ギャラリー古小路、みんなの木工房テノ森など、津屋崎千軒全体がひとつの多様な人が出合い、活動を始めるためのプラットフォームとなっている。山口氏の手がける対話の場や講座は、津屋崎ブランチという拠点だけではなく、また行政のまちおこしセンターだけでなく、個人が運営する開かれた多様な空間を利用している。

ネットワークの面では、津屋崎ブランチが藍の家や地元の協力者の力を借りて、移住者コミュニティと地元コミュニティ、地域内外、世代間のブリッジングする機能を果たしている。同時に、山口氏が手がけている周辺自治体の研修やマスタープラン作成の仕事、全国の様々な地域でのワークショップのファシリテーション業務を通じて、津屋崎の魅力を発信し、人的なネットワークが広がっている。拠点の外での活動が、新しい人が集まる要因になっている。

## 6-2 地域の居場所のプラットフォーム設計要件

仮説分析モデルに沿って各事例を調査した結果、4事例すべてにおいて、プラットフォーム設計の5変数の視点から空間や運営の工夫がなされていることがわかった。本研究で仮説的に構築した、参加者を集める段階と相互作用を促進させる段階別の工夫や、内部環境だけではな

く外部との関係性構築にも配慮されていることが明らかになり、プラットフォーム設計の仮説モデルが適応できるということが示された。ただし、通常のビジネスプラットフォームと異なる地域の居場所ならではの特徴も同時に明らかになった。それは、キーパーソンの哲学の重要性と内部変化のマネジメントの意味合いである。本節では、このような流れで順を追って調査結果を分析していく。

## プラットフォーム設計の5変数

まず、プラットフォーム設計の5変数の視点から、調査対象で行っている設計上の工夫として、表6-1のようにまとめられる。インタビューによって得られた設計要素を、プラットフォーム設計の5変数に合わせて、分類した表である。この表から、4事例とも、すべての項目の設計が行われていることがわかる。

表6-1. プラットフォームの5変数

設計の変数	芝の家	うちの実家	リタクラブ	津屋崎ランチ
コミュニケーションパターン設計	<ul style="list-style-type: none"> <li>○コンセプトは、誰もがいたいようにいられる場</li> <li>○PA、スタッフの働きかけ（挨拶、声かけ、紹介）</li> <li>○通りに面した立地と緑側</li> <li>○喫茶・駄菓子コーナー</li> <li>○まちまちの座る場所</li> <li>○柔軟な家具の配置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○コンセプトは、常設型の地域の茶の間</li> <li>○利用者ルールの提示</li> <li>○プログラムを用意しない</li> <li>○PAの働きかけ（一番弱い人のケア、常連だけを優遇しない、立場のある人が来てても態度を変えない）</li> <li>○手書きの案内板</li> <li>○開けっ放しの玄関</li> <li>○取材予定など張り紙</li> <li>○自分でする受付</li> <li>○柔軟な家具の配置</li> <li>○セルフサービスのお茶コーナー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○コンセプトは、学びたい大人の自習室</li> <li>○スタッフの常駐</li> <li>○PAの働きかけ（誘いかけ、マスコミへの露出）</li> <li>○新しい利用者向けのイベント</li> <li>○SNSやマスコミの利用</li> <li>○わくわくする空間</li> <li>○起業や学びに関する書籍を集めた本棚</li> <li>○駐車場の確保</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○コンセプトは、新しい暮らし、仕事、つながり</li> <li>○スタッフの移住</li> <li>○PAの働きかけ（移住、ファッションリテーション）</li> <li>○未来会議室のルール</li> <li>○まち全体がプラットフォーム</li> <li>○サタデーランチ</li> <li>○ウェブサイトやチラシのデザイン</li> <li>○広い土間</li> <li>○玄関に面したワークスペース</li> <li>○ポストイットや模造紙</li> </ul>
役割設計	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PA、スタッフの働きかけ（活動の価値を認める、イベントや運営準備への参加の誘い、企画のアシスト）</li> <li>○朝晩のスタッフミーティング</li> <li>○多様な関わり方を用意</li> <li>○遊び道具やピアノ</li> <li>○自分でつくるチラシケース</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの働きかけ（得意そうなことに誘う）</li> <li>○ルールの提示（役割や世話する人とされる人は固定しない、助け合いの推奨）</li> <li>○お当番の役割の明記、署名、指導</li> <li>○PAの不完全さ</li> <li>○さをり織道具や遊び道具間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの働きかけ（研修主催の誘いかけ、自らロールモデルになり実践）</li> <li>○起業を目指すスタッフ</li> <li>○参加者の声を取り入れた運営</li> <li>○セミナーの行いやすい空間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの働きかけ（活動の価値を認める、アイデア提供）</li> <li>○プチ起業塾</li> <li>○ファシリテーションのできるスタッフ</li> <li>○ランチミーティングによるスタッフの主体化</li> </ul>
信頼形成メカニズム	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PA、スタッフの働きかけ（参加者同士の紹介、介入）</li> <li>○PAの働きかけ（ゲートキーピング）</li> <li>○入室簿</li> <li>○お互いさま掲示板</li> <li>○自由にBOX</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの働きかけ（参加者同士の紹介、ゲートキーピング）</li> <li>○ルールの提示（仲良しクラブをつくらない、その場に居ない人の話をしない）</li> <li>○夜の茶の間ネットワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの働きかけ（参加者同士を紹介、ゲートキーピング）</li> <li>○スイーツ交流会など交流イベント</li> <li>○メンバー紹介カード</li> <li>○ゆるやかに区切られた交流スペース</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの働きかけ（参加者同士を紹介、住民同士の橋渡し、自ら引っ越し）</li> <li>○ランチが信用担保</li> <li>○ウェブサイトでの活動・人紹介</li> </ul>
インセンティブ設計	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人のネットワーク</li> <li>○PA、スタッフの魅力</li> <li>○成長できる場</li> <li>○自分らしくいられる</li> <li>○立ち寄りやすい環境・雰囲気</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人のネットワーク</li> <li>○PA魅力</li> <li>○社会的意義や注目など誇りが持てる場</li> <li>○成長できる場</li> <li>○PAの働きかけ（感謝の気持ちを伝える）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人のネットワーク</li> <li>○PA魅力</li> <li>○元気になる場</li> <li>○成長できる場</li> <li>○使いやすい空間、設備、サービス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人のネットワーク</li> <li>○PA魅力</li> <li>○課題解決ではなく、価値創造の魅力</li> <li>○ユーモアのある企画による選択的集客</li> </ul>
参加者の内部変化のマネジメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PA、スタッフの見守り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの見守り</li> <li>○PAの働きかけ（悩み相談、「大丈夫!」と励ます）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの見守り</li> <li>○参加希望者との面接</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの見守り</li> <li>○PAの働きかけ（修復的介入、「大丈夫!」と励ます）</li> </ul>

○運営要素 ○空間要素

コミュニケーションパターンの設計は、その居場所の思想や価値観を参加者に伝え、行動を促す要素である。うちの実家の利用者のルールや津屋崎ランチの未来会議室のルールは明確に行動規範を指示しているが、それ以外にも、参加者の思考や行動をさりげなく方向付ける仕組みが多く工夫されている。これらは、キーパーソンが直接的に参加者に働きかけるもの（声

かけ、一番弱い人をケアするなど)のほか、運営の仕組みや空間的な配慮によって促すものがある。

役割の設計は、参加者が自発的な活動や運営の手伝いなど役割行動を取りやすくする工夫である。主体的な行動を促す働きかけで、キーパーソンの呼びかけや価値の承認、アイデアや具体的なアシストが大きな力を発揮する。また、スタッフが主体的・積極的に居場所の運営に関われるような組織づくり、参加者が行動したくなるような道具や空間といった要素も含まれ、自発的な役割行動を取りやすくする環境を生み出している。

信頼形成メカニズムは、参加者同士の関係の調整である。これも、キーパーソンやスタッフの働きかけが大きい。参加者同士を紹介したり、関係が悪くなりそうであれば介入したり、という人為的な調整が安心して関わり合える関係性をつくり出している。また、参加者同士の情報交換の仕組みや、交流を目的としたプログラムが行われている場合もある。そのほか、問題行動を起こす者の来場を断るといったゲートキーパーの役割が、キーパーソンに求められることがある。プラットフォーム内にいる人は信頼でき、何かあってもサポートしてもらえるという安心感が大切なようである。

インセンティブの設計は、その居場所に来たくなる、活動をしたくなる誘因の設計だが、その場所に関わり続けるインセンティブとして全ての事例に共通するのは、人のネットワークである。その場を縁に形成された「居場所のコミュニティ」には、安心感や楽しさ、自己実現のための助けなど様々なベネフィットが受けられ、大きな動機付けになると言えそうである。コミュニティを直接生み出すことができないが、コミュニケーションパターン、役割、信頼形成という設計をして人が集まり、相互作用が起きた結果として生み出される。他に、キーパーソンの魅力も大きな要素だと言えるだろう。また、その居場所に関わることで新しいことが知れたり、できるが増えるなど自分の成長につながるという実感や、立ち寄りやすかったり使いやすいサービスがあるといった機能面も、動機付けに繋がっていると考えられる。

そして、参加者が初めて来場してから様々な交流や活動をしていく中で経験していく継続的な内部変化のマネジメントについては、キーパーソンの見守りが重要である。場合によっては介入したり、悩みを聞いたり、価値を認めてあげたりという働きかけをすることで、参加者は変化を恐れずに取り組めるようになる。内部変化のマネジメントは、地域の居場所に特徴的な変数であると考えられるため、後で詳述する。

キーパーソンの直接的な関わりを含めた運営的・人為的要素と空間的要素とを分けてみると、空間的要素は、コミュニケーションパターンの形成と信頼形成のメカニズムに力を発揮するといえる。居場所のコミュニケーションパターンを作るのは、開放的な縁側や家具の配置など空間的要素のほか、関わり方の規範となるルールや交流のきっかけになるプログラムといった運営要素である。関係性が生まれ、役割配分が起きていったり、信頼形成が進んだりするためには、相互の関心を知り合うツールなどのほか、参加者同士を紹介したり、活動に誘ったりというキーパーソンの直接的な働きかけの要素が大きい。

## 物理的要素と運営要素

表 6-1 の要素には、キーパーソンの直接的な働きかけのほかに、物理的要素と運営的な要素という、ハードとソフト両面の要素が含まれている。

地域の居場所という、空間的なしつらえが前提となるが、そうしたハード面だけではなく、ソフト的な要素も設計上の工夫であるといえる。居場所のキーパーソンは、両方の要素を使うことによって独自の居場所を成立させている。

一方、一般的な施設設計と施設運営という見方に立つと、まず設計段階で空間を作り、それを運営段階で使いこなすという段階的な手順として捉えてしまい、参加者同士の関わり合いを調整する、すなわち居場所に特有の関係規範を醸成する要因は運営面だけだと考えてしまうが、空間的な条件も参加者の関係性に大きく影響する。地域の居場所のような小さい空間では、家具の配置や小物の使い方など、空間的配慮が関係性の質を左右する。そうした細やかな調整も、居場所に独特の価値を生み出す重要な要件である。しかしその場合も、どのような関わり合いを創出したいのか、というキーパーソンの理念がまずあり、その下で、具体的に何をどのように調整すればそれが実現するかという設計が決まる。その空間を所与のものとするのではなく、そこで生じさせたいコミュニケーションに合わせて最適化・調整するという考え方が大切である。

さらに言えば、空間と運営の仕組みをまずキーパーソンが用意し、それを参加者が利用するという一般的な施設の形態とも異なる。提供する空間や運営は固定されているものではなく、参加者との双方向的な作用によって柔軟に変わっていくと言える。絶えず、参加者の状況に合わせて居場所側も変化し続け、そうした関係性の中でその居場所ならではのつながりや活動が創発するということができる。

## 前提要因と促進要因

本研究では、参加者を集める段階と相互作用を促進させる段階を分けてプラットフォーム設計が行われているのではないかという予備的仮定を前提に調査を行ったが、4事例とも、二つの段階を切り分けて考えられることがわかった。参加のきっかけづくりや溶け込みやすいような工夫と、それぞれの参加者を知り適切に声をかけたり紹介したりするという相互作用の促進の支援は連続的ではあるが、コミュニティの外から内への移動とコミュニティ内での関係性の変化という異なるフェーズのマネジメントである。

参加者を集める仕組みについては、地域の居場所以外の施設であっても取り組んでいる要素だと言えるが、特徴的なのは、より細やかに、玄関の戸を開けている、手書きの看板でメッセージを伝える、縁側から声をかけるなど、個人の気持ちに寄り添うような小さな工夫が行われているという点である。提供されるサービスが明確な公共施設や店舗とは違い、人との関わりが大きな要素を占める地域の居場所では、最初に参加するときの緊張感が高いと考えられ、キ

キーパーソンはそうした点にも配慮した運営を行っている。空間的な工夫として、芝の家の縁側や津屋崎ブランチの土間など、内と外との中間的な領域も有効である。

より重要なのは、参加者の相互作用を促進する部分である。通常の施設では行き届かない部分であると言って良い。本研究で取り上げた事例はどれも、参加者同士の関係をつくることで参加者それぞれが何らかの価値を得るという考えに立って運営されている点が共通している。芝の家は、あたたかい近所づきあいを通じた地域活動の促進を目的とし、うちの実家は、気兼ねなく頼り合い、主体的に親切にしあうことで元気に生きていける地域をつくる。リタクラブは、お互いに学び合うことで活動につなげ、地域を元気にしていくことを目指し、津屋崎ブランチは、対話を通じて新たな暮らしと仕事の創造を通じて地域の魅力を生み出している。形は違うが、参加者をサービスの受け手として扱うのではなく、活動の主体として後押ししようとしている点は共通している。そのために行なっていることとしては、まずは人から人への直接的な働きかけが重要であるといえる。また、キーパーソンの関わり方が、運営スタッフやコミュニティで再現されるような組織化が起こっている。

参加者同士の関係や変化を促進するプラットフォーム設計としては促進要因のほうが主であり、5つの変数に分けて分析することが有用であると考えられる。前提要因は、地域の居場所という特殊な形態の場において、重要な要因である。一般的な公共施設や商業施設であれば、広報や広告といった形で周知され、サービスを必要とする人が集まるという形になるが、地域の居場所の場合は、参加者自体が、居場所がどのような場なのかわからないまま参加することも多い。たまたま通りかかって立ち話をするうちに参加するようになったり、移住先を探すために役立つかもしれないという思いでイベントに参加したりと、偶然に左右されることも多く、また逆にキーパーソンが誘ったり友人に紹介されたりというネットワークを通じて参加することもある。このように、地域の居場所のプラットフォーム設計では、5つの変数に先立つ導入部分の設計が、広報・広告とは異なる形で重要になる。



表 6-2. 前提要因／促進要因の段階別プラットフォームの 5 変数

設計の変数	前提要因	促進要因
コミュニケーション パターンの設計	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PA、スタッフの働きかけ（挨拶、声かけ、常連だけを優遇しない、誘いかけ、マスコミへの露出）</li> <li>○スタッフの常駐</li> <li>○新しい利用者向けのイベント（サタデーランチなど）</li> <li>○SNSやマスコミの利用、ウェブサイトやチラシのデザインの工夫</li> <li>○入りやすい空間の工夫（通りに面した立地と緑側、広い土間、玄関に面したワークスペース、手書きの案内板、開けっ放しの玄関、喫茶・駄菓子コーナー、わくわくする空間、駐車場の確保）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PA、スタッフの働きかけ（一番弱い人のケア、紹介、移住、ファシリテーション）</li> <li>○利用者ルールの掲示（プログラムを用意しない、未来会議室のルールなど）</li> <li>○コミュニケーションを促進する空間の工夫（まちまちの座る場所、柔軟な家具の配置、自分でする受付、セルフサービスのお茶コーナー、起業や学びに関する書籍を集めた本棚、ポストイットや模造紙）</li> </ul>
役割の設計	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの働きかけ（興味のある人を探る）</li> <li>○参加を誘発する道具や空間（セミナーの行いやすい空間）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PA、スタッフの働きかけ（活動の価値を認める、得意そうなことに誘う、イベントや運営準備への参加の誘い、企画のアシスト、研修主催の誘いかけ、自らロールモデルになり実践）</li> <li>○多様な関わり方を用意、参加者の声を取り入れた運営、ルールの提示（役割や世話する人とされる人は固定しない、助け合いの推奨）</li> <li>○スタッフの主体化（朝晩のスタッフミーティング、お当番の役割の明記・署名・指導、ファシリテーションのできるスタッフを育てる、起業を目指すスタッフを集める）</li> <li>○行動を誘発する道具や空間（遊び道具やピアノ、自分でつくるチラシケース、さをり織道具）</li> </ul>
信頼形成メカニズム	<ul style="list-style-type: none"> <li>○参加機会の創出（夜の茶の間ネットワーク、スイーツ交流会）</li> <li>○ウェブサイトでの活動・人紹介</li> <li>○入室簿</li> <li>○交換を促す空間の仕組み（お互いさま掲示板、ご自由にBOX）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAの働きかけ（参加者同士を紹介、ゲートキーピング、介入、住民同士の橋渡し、PA自ら引っ越し）</li> <li>○ルールの提示（仲良しクラブをつくらない、その場に居ない人の話をしない）</li> <li>○交流機会の創出（夜の茶の間ネットワーク、スイーツ交流会）</li> <li>○信頼を形成する空間の工夫（メンバー紹介カード、ゆるやかに区切られた交流スペース）</li> </ul>
インセンティブの設計	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人のネットワーク</li> <li>○PA、スタッフの魅力</li> <li>○成長できる場としての期待感</li> <li>○ユーモアのある企画による選択的集客</li> <li>○立ち寄りやすい環境・雰囲気、使いやすい空間、設備、サービス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人のネットワーク</li> <li>○PA、スタッフの魅力</li> <li>○PAの働きかけ（感謝の気持ちを伝える）</li> <li>○自分らしくいられる場、元気になる場</li> <li>○社会的意義や注目など誇りが持てる場、課題解決ではなく、価値創造の魅力</li> </ul>
参加者の内部変化の マネジメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PAによる働きかけ、悩み相談</li> <li>○参加希望者との面接</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○PA、スタッフによる見守り</li> <li>○PAの働きかけ（悩み相談、修復的介入、「大丈夫！」と励ます）</li> </ul>

環境要因：先行的ネットワークと外部資源のコーディネート

仮説モデルの 2 点目として、本研究ではプラットフォーム内部の設計だけではなく、プラットフォーム外との影響関係にも着目して調査を行った。その結果、地域の居場所では、開設以前のネットワークの影響を受けていること、開設後も外部の多様な関係性を活用して運営されているということが明らかになった。

先行的ネットワークについては、今回取り上げた事例にはすべて、場をひらき参加者を集める以前に、様々な形の前史があった。芝の家には三田の家という活動が、うちの実家にはまごころネットが、リタクラブにはポエシアブランカが、そして津屋崎ランチには山口氏のそれ以前の地域づくりのコンサルタントとしての活動があった。居場所が開設された時点から始まるのではなく、それを準備するまでのプロセスを通じてコミュニティができ始めているといえる。さらに言えば、そこに至るキーパーソンの様々な活動や思想によって生まれた人間関係があるからこそ、その地域の居場所が独自の価値を持つ空間になるということも可能だろう。先行的ネットワークの存在が、プラットフォームに固有の人の集まり方を生み出す大きな要因になっているのである。もちろん、場が開設されてから生まれる関係も多様であるが、何もないところからではなく、核となるような小さなコミュニティが先行してあり、それが場を通じて増幅していくように見える。

また、場の運営だけではなく、ネットワークの広がり、場で起こることを左右している。キーパーソンは、意図的に人間関係を広げている。拠点を運営していると、参加者数を増やすために集客をしようとしてしまうが、それだけではなく、自分や居場所の人脈を広げていくこと、潜在的な参加者に情報を届け、関心を持ってもらえるようなアクションをすることが大事なのである。単に参加者を増加させるだけではなく、多様なネットワークのハブになっているような場では、必要としている人に会いやすく、偶然の出会いや出来事が起きやすくなる。人と人が会いやすい条件を整えるという視点から、人的ネットワークとしての環境要因は重要である。プラットフォームの内部設計だけではなく、外部資源のコーディネートも、プラットフォーム内で生じる相互作用を決定する要因になっている。

### キーパーソンの哲学

調査の結果明らかになったことは、地域の居場所には、プラットフォーム設計の変数に先立ち、キーパーソンがどのような想いで取り組んでいるか、その居場所をどのような場所にしたいか、あるいは居場所を通じて参加者にどのように生きて欲しいのかといったキーパーソンの思想や価値観があり、それが場の規範に強く反映されているという点である。その理由は、ビジネスのプラットフォームの場合は、そこに集まる参加者のあいだで目的が共有されやすい（たとえば売り上げや新事業開発）が、地域コミュニティの場合は、どのようなコミュニティを良しとするのか、コミュニティの目指す方向はどちらなのかという前提があらかじめ決まっているわけではないからだと考えられる。良いコミュニティという指標が一義的に決まらないなかで、キーパーソンによってその居場所が大切にされる価値観が明確に示されることで、そこにコミュニティが醸成されるきっかけが生まれる。このキーパーソンの哲学の影響力は、地域コミュニティにおけるプラットフォームの大きな特徴であるといえる。

こうして醸成されたその居場所に特有の規範が、人を惹きつけ、参加者の意識や行動に影響を与えているのだが、インタビューを通じて場づくりの様々な工夫を聞くと、規範の醸成は、偶然や成り行きに任せるのではなく、キーパーソンが意図を持って行っているということがわかる。むしろプラットフォーム設計は、キーパーソンの哲学をコミュニティの規範として実現するための具体的なツールであるといえる。さらに言えば、居場所という仕組み自体が、キーパーソンの理念を地域の中で実現していくためのツールであるというように見ることもできる。

逆に、うまく機能していない地域の居場所では、キーパーソンの思想や理念を反映させるためのツール整備が的確になされていない可能性が高い。理想を思い描くだけではなく、自分の考えたようなコミュニティが具体的に生じるために、何をどうすれば良いかという具体的な手段を設計・実施することを通じて、居場所という現象が生み出されていく。

また、居場所を構築していくための手立てとしては、前述したように物理的要素と運営的な要素があるが、運営要素のなかでもキーパーソンによる直接的な働きかけは無視できない変数である。キーパーソンの人柄が参加者を惹きつけ、その理念を直接伝えていくだけでなく、キ

キーパーソンのあり方そのものが参加者のロールモデルとしても機能している。一般的に、地域の居場所の運営者はカリスマ性がある人だからできる、と言われることがあるが、そのカリスマ性とは、実際に起こった状況に対してその人がどのように対応するか、どのように励ましたりアドバイスをしたりするかという具体的なアクションを通じて構築されるものに他ならない。コミュニティの規範を左右するアクションとして、キーパーソンのあり方は大きい。

### 見守り：参加者の内部変化のマネジメント

キーパーソンの哲学や直接的な働きかけの影響に加えて、参加者の変化をモニタリングし、適切なタイミングで相談に乗ったり他の参加者を紹介したりというキーパーソンの見守りの働きも（場合によってはスタッフがその役割を担うこともある）、参加者が変化し場の規範が醸成されていくプロセスに大きな役割を果たしていると考えられる。

河田氏は、うちの実家をつくるのは参加者であり、サービスの利用者ではなく場の利用者の活動がうちの実家を生み出していると話すが、自分が参加者に言うのは「大丈夫、大丈夫」ということだけだという。参加者が困った時、落ち込んだ時には「大丈夫！」と声をかけ、やったことのないことに取り組む際にも「大丈夫！」と励ます。特に指示的な働きかけをすることはないという意味だが、参加者の家族関係や健康状況などをそれとなく把握し、その人の潜在的な特技や願望を常を感じ取ることで、適切なタイミングで適切な声かけをしている。それゆえ参加者は、お当番の手伝いや交流会の司会進行など、自分の出番と心得て主体的に取り組むことができる。山口氏のスタンスも基本的には同じだ。あれこれ指示するのではなく、何かあったときに「修復的介入」をすることを心がけているという。地域の若者が何かの行き違いで地元の有力者を怒らせていると聞けば、すぐに駆けつけ事情を聞き、謝る。そうした安心感が、多くの参加者の活動に向けた勇気を支えている。山口氏が地域づくりのなかで日々起こるトラブルを治めることができるのは、当事者として地域に関わり信頼を得ているからであり、何かあったときにすぐ対応できるためには、参加者それぞれの動きを常に適度な距離感で見守っていることも必要だろう。平木氏は、学ぶだけではなく主体的に行動できるような環境づくりを行っていることから、より積極的にメディアにつなげたり、関心ある人同士を紹介したりという支援を行っている。この前提には、それぞれの参加者がどんなことに興味を持っているのか、いまどのようなネットワークを必要としているのかを知っている必要がある。適切な介入をするためには、一人一人を気にかけるという気持ちが不可欠であるといっていいたいだろう。

筆者の経験からも、参加者がどのような経緯で居場所に出会い、そこでどのような変化を体験し、その先どのような人生を模索しているのかという視点で、参加者の現在の状態を見守ることが必要だと実感している。筆者の場合は、スタッフ希望者とは面談を行い、その人の前後3年くらいの人生の時間のなかでどのように変化しているのかという視点でそれとなく見守るようにしていた。通常は、あるサービスの利用者は内面的に変化することを前提していない。また、その場で発揮できるその人の立場や技能にしか目がいかない。しかし、地域の居場所では、

その人の生活全体の関係性や多様な人間性、人生のどのような流れのなかでいまこの居場所に関わっているのかといった、多面的で広い視点で向き合うことが大切だと感じていた。そうした参加者の内部変化を見守る姿勢が、適切な関係性を築く基盤となる。

このように見ると、地域の居場所では、プラットフォーム設計の 5 変数のうち内部変化のマネジメントの重要性が高いといえる。さらに、内部変化のマネジメントという変数は、少なくとも地域の居場所においては、他の 4 つの変数と並列ではなく、他の設計変数を生かすための基盤となるものと位置付けることができるだろう。コミュニケーションパターン、信頼関係、役割配分、インセンティブなど、参加者を集め、相互作用を進めていくための具体的な方策をどのように実施していくかを左右する重要な要因である。

そして、この内部変化のマネジメントは、極めてシステム化しにくい変数である。上述したように、キーパーソンの属人性に左右されやすい。地域社会全般との関係性や参加者との関係性など時間をかけて育まれてきた蓄積、人柄や思想なども含めたキーパーソンの人格があるからこそ、かける言葉に力が宿るのであって、誰でも「大丈夫、大丈夫」という言葉をかければ、同じように参加者が安心したり勇気付けられたりするということではないのである。

#### プラットフォーム設計変数の拡張

ここまで、プラットフォーム設計の 5 変数に基づき、協働プラットフォームとしての地域の居場所の設計上の工夫を探ってきた。この結果、調査対象においてはプラットフォーム設計の 5 変数について設計上の要素となっており、地域の居場所にも適応できることが明らかになった。また、地域の居場所の特徴にあわせて構築した仮説分析モデルについても、段階的設計と外部資源のコーディネートという要素が確かめられた。これらに加えて、地域の居場所では、ビジネスプラットフォームと異なりコミュニティの指針となるキーパーソンの哲学が大事であり、キーパーソンやスタッフによる参加者の見守りという形で内部変化のマネジメントの比重が高いという特徴がある。

これらの調査結果より、プラットフォーム設計の仮説分析モデルを、図 6-23 のように拡張した。参加者の探求と試行をゆるす関係性を生み出すためには、5 つの設計変数に加えて、キーパーソンの哲学が大きな要素なる。コミュニティが生成する場では、キーパーソンの価値観や理念といった思想が設計に与える影響を無視することはできない。地域の居場所には、汎用性のある設計手法があるのではなく、まずキーパーソンの哲学があって、それを実現するための設計が決まるのである。したがって、キーパーソンの思想や理念も設計の変数として加味しなければならないのである。そして、参加者の入り口という前提要因と関係を促進する段階を区分して設計する、参加者の変化を前提とする地域の居場所の設計の特徴であり、このとき内部変化のマネジメントが相対的に重要性を増す。また環境要因としては、居場所の設立に先立つ先行的ネットワークと外部資源のコーディネーションという要素が不可欠であると考えられる。これにも二つの段階があり、プラットフォームを立ち上げる段階では先行的ネットワークの力

が発揮され、その後、活動が促進されるためには、外部資源のコーディネーションを行うことが重要になる。

地域の居場所では、キーパーソンの哲学に基づいた、コミュニケーションパターンや役割の設計、一人ひとりの変化のマネジメントを通じて、そのプラットフォームらしい固有の関わり合い方や人間関係が生まれている。プラットフォーム設計は、そうした相互関係秩序を生み出していく自己組織化の過程（伊丹 2005）のマネジメントであるといつてよい。

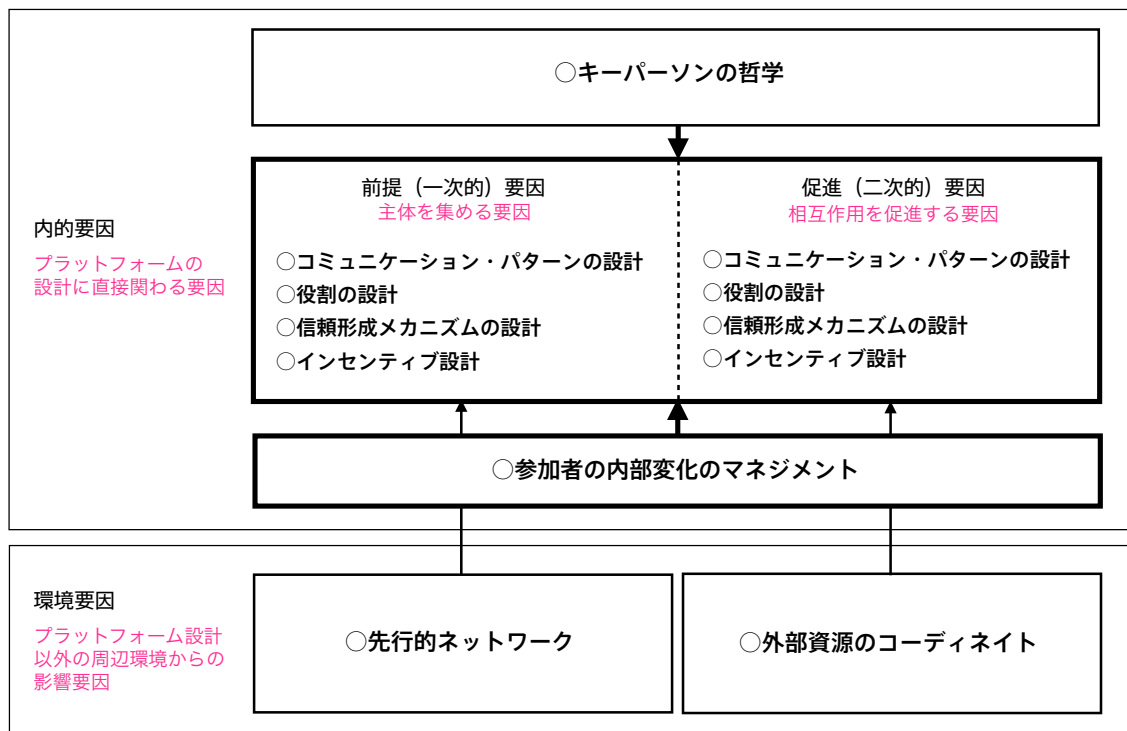


図 6-23. 地域の居場所のプラットフォーム設計要件



## 第7章 考察 : 居場所の創発とそのマネジメント

第5章および第6章では、以下の調査課題についての調査と分析を行った。改めて冒頭で述べた研究課題を提示する。

### 研究課題1 地域の居場所における参加者の「つながり」と「活動」の生成過程

参加者は、地域の居場所に参加することで、どのように意識や行動を変化させていくのか。主体的な活動をはじめると、他者とのどのような出会いがあり、それによって自己概念や思考がどのように変化したのか、地域の居場所における他者との社会的相互作用に注目して分析する。

### 研究課題2 つながりと活動を創出するためのプラットフォームの設計要件

参加者が安心して他の参加者と関わり、信頼関係をひろげ、新たな活動を起こす場をどのようにつくることができるか。地域協働の場づくりは、キーパーソンの暗黙知に頼ることが多い。プラットフォーム設計の視点から、キーパーソンの思想や無意識的なふるまいを含めた設計要件を抽出する。

第5章では、このうち研究課題1についての調査と分析を行い、全国4カ所の地域の居場所の参加者合計40名について、他者との関係変化、意識変化、行動変化に注目したインタビューを実施し、そこから得られた質的データを分析することで、参加者の経験を明らかにした。参加者は、他者との相互作用によって関係、意識、行動の変化を体験していることが確認され、このプロセスを11のカテゴリーとストーリーラインによって構造化することができた。

ここから明らかになったことは、参加者は居場所への参加を通じて自身の変化を経験しているが、その過程のなかで、信じられる人間関係の拡大、交流によって生じる自己の探求、活動に向けた試行錯誤という要素が重要であるということである。参加者の体験に注目すると、地域の居場所は参加者の変容を促す場であるといえるのだが、地域の居場所がこうした変容の場になるためには、(もちろんキーパーソンの影響力も大きいのだが、それ以上に)そこに参加し続け、活動を始める動機付けをもたらす居場所を介して関わりあう参加者のネットワークが果たす役割が大きい。こうしたそれぞれの居場所があることによって生まれた関係性を「居場所のコミュニティ」と呼ぶなら、その規範が、参加者の探求や試行をゆるすのである。このことは、必ずしもキーパーソンとの個人的関係や空間的な要素だけではなく、そこで得られる情報やサービスが重要でもないということを示している。

では、こうした規範を持つ居場所のコミュニティを醸成するために、プラットフォームはどのように設計されているのだろうか。





されるのかを解明すべく調査を行ってきたが、そこで暗黙に前提としていたのは、居場所のキーパーソンが効果的に機能する居場所をつくり（研究課題 2）、その居場所という空間が参加者同士のつながりを生み、活動を促す（研究課題 1）という構図であった。これは、A が B をつくり、B が C に働きかけるという（たとえば、店主が喫茶店をつくり、利用者が価値を得るといった）機能モデルなのだが、本研究で得られたのは、関係性の規範を生み出す場所としての地域の居場所という視点である。ここには、単純な機能モデルでは捉えきれない過程があるのではないだろうか。

二つの調査から明らかになったのは次のようなプロセスである。すなわち、キーパーソンは、参加者の力をうまく生かしながら、つながりと活動を引き出している（居場所という空間をつくっているのではなく、関係性をマネジメントしている）。そして、参加者はそのなかで試行錯誤をすることで居場所のコミュニティの一部となり、十全に自分らしく活動できるようになる（居場所を利用しているだけではなく、自らも変化し、居場所のコミュニティの一部になっていく）、ということである。そして、こうした現象を駆動するのに、キーパーソンの持つ思想が重要な役割を果たし、それが連綿と続く関係性であるがゆえに、その居場所を立ち上げる以前からの活動や関係性にも影響され、また居場所だけではなくそれをとりまく環境との関わりのマネジメントが必要となっている。我々が居場所として体験し認識しているのは、物理的な空間ではなく、こうした現象そのものではないだろうか。こうした点から、地域の居場所の生成過程を見直さなければならない。

本章では、ライフストーリー研究を通じた参加者の相互作用の体験と、キーパーソンが行なっているプラットフォーム設計論をさらに一歩進めて、居場所と参加者が相互につくりあう創発的な現象として居場所生成の過程を捉え直し、考察する。

## 7-1 創発的な現象としての居場所

### 参加者とプラットフォームがともにつくりあう現象としての居場所

参加者同士の相互作用によって参加者の関係や意識、行動が変化し、それに応じて居場所が生まれる。居場所という仕組みが参加者を動かすのでもなく、また逆に、活動的な人たちを集めて居場所を成立させるのでもなく、参加者同士の相互作用が居場所という状況を生み出すのである。こうしたダイナミックな現象を把握するには、参加者も居場所も、どちらも固定的なものではなく動的な動きとして見る視点をもたなければならない。

社会学者の桜井洋は、こうした個の相互作用を通じて社会秩序が創発する過程を理論的に整理している（桜井 2017）。本研究は、マクロの社会秩序形成については扱わないが、居場所の参加者同士の関わりがどのようにして居場所という秩序を生み出しているか、すなわちミクロの要素の相互作用がメゾレベルの現象を生み出す過程を考察するのだが、こうした創発を分析

するために桜井の議論は有用であると考えられる。

桜井は、従来の理論社会学は、ミクロマクロリンクといわれるように方法論的個人主義もしくは方法論的集団主義のどちらかから社会秩序の形成を論じてきたが、そのどちらも個人と社会システムの両方を静的なものとして捉えてしまっているところに問題があるという。そのため、「個人の心的秩序と社会秩序を静的な『もの』としてではなく、運動あるいは生成として理解する理論」が必要だとしている<sup>33</sup>。個人や社会システムをダイナミズムと捉える視点の転換は、近年の関係性の社会学などでも進んでいるが、たとえば、ガーゲンらの社会構成主義的立場であっても、他動詞的な言語（典型的には英語）では、個人を個体的な同一性を持つ主体として、社会システムを所与の固定的な秩序として記述するために、「する」論理に陥ってしまうことがある。それゆえ、複雑性科学の概念を社会学に応用して、「無数のミクロの要素の相互作用からマクロな秩序が創発する過程」<sup>34</sup>を、「なる」ことの論理を整理することが必要だと主張している。

「する」論理によって論理的な矛盾が生じる分かりやすい例は、台風のラグランジュ記述であるという。台風○号が、福岡や大阪を移動し、雨や風もたらすという地図上の表現は一般的にみられるが、これこそ、台風というひとつの普遍的な主体が存在し、それが自己の同一性を保ちながら地図上を移動し、雨を降らせ風を吹かせるという働きを「する」と見るモデルである。実際には「台風」という主体が雨を降らせるというのは論理的に矛盾しており、気圧や湿度などの分布や変動しつづける結果として風雨をもたらしているのである。この、雨風がもたらされているという状況を、結果的にわれわれは台風と呼んでいるにすぎない。

本論が扱う居場所という現象についても、居場所というある種の社会秩序を固定的なものとし、参加者を意志する主体として扱うことが一般的である。しかし、桜井の「なる」論理を参照するならば、参加者個人のレベルと居場所という現象のレベルのどちらもが連続的に変化しているダイナミズムであり、個々の参加者同士やキーパーソンとの相互作用によって居場所というプラットフォームが創発されるという視点が得られる。地域の居場所をこうした「創発されるプラットフォーム」として、動的な視点から分析したほうが、本論で見えてきた様々なデータをうまく説明できるのではないだろうか。

桜井の議論も踏まえつつ、居場所が創発されていくという現象について、考察を進めよう。

二つの調査の結果から指摘できるのは、地域の居場所は、参加者同士の相互作用によって創発されるプラットフォームだということである。参加者は、あらかじめ用意された物理的な空間や設備、サービスや情報というプラットフォームを利用しているだけではなく、参加者の行動や関わり自体が、プラットフォームの価値を生み出し、参加者の活動を促進している。こうした状況を生み出すために、プラットフォーム（のアーキテクト）は参加者に応じて関係変化をマネジメントし、やがて参加者自身がプラットフォームを担うコミュニティの一部になって

---

<sup>33</sup> 桜井洋『社会秩序の起源 「なる」ことの論理』、新曜社、2017年、8頁。

<sup>34</sup> 桜井、前掲書、12頁。

いく。参加者の力を生かすことで、居場所が生まれているのである。

すなわち、参加者に何らかの情報やインセンティブを与え、その結果これまでと異なる行動が生じる（例えば、ある刺激を与えるといつも同じ反応が返ってくる、といったような）という行動主義的な見方（図 7-2）で地域の居場所を捉えることはできない。

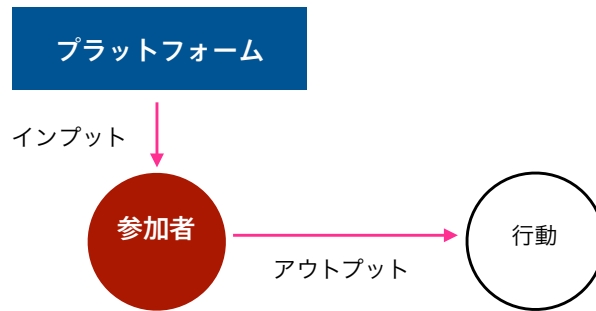


図 7-2. 行動主義的なモデル

参加者と居場所の関係は生態学的な相互作用の関係にあり、居場所が参加者に影響を与える一方で参加者の存在や行動が居場所のあり方に影響を及ぼしている。初期段階のプラットフォームに参加者が集まりはじめ、相互作用が生じる。そこから様々なつながりが生まれ、当初は存在していなかった活動が生まれる。参加者の出入りや活動が循環的に続く状態が生まれ、それが地域の居場所という現象になっていく。地域の居場所は参加者同士の相互作用によって創発されるプラットフォームなのである（図 7-3）。この相互の影響関係が生み出す状態が地域の居場所の本質であり、そうした関係になるには、固体としての参加者と環境としての居場所のあいだで相互のフィードバックが繰り返されることが必要である。これが、協働プラットフォームとしての地域の居場所に不可欠な段階的なマネジメントの正体であるといつてよい。

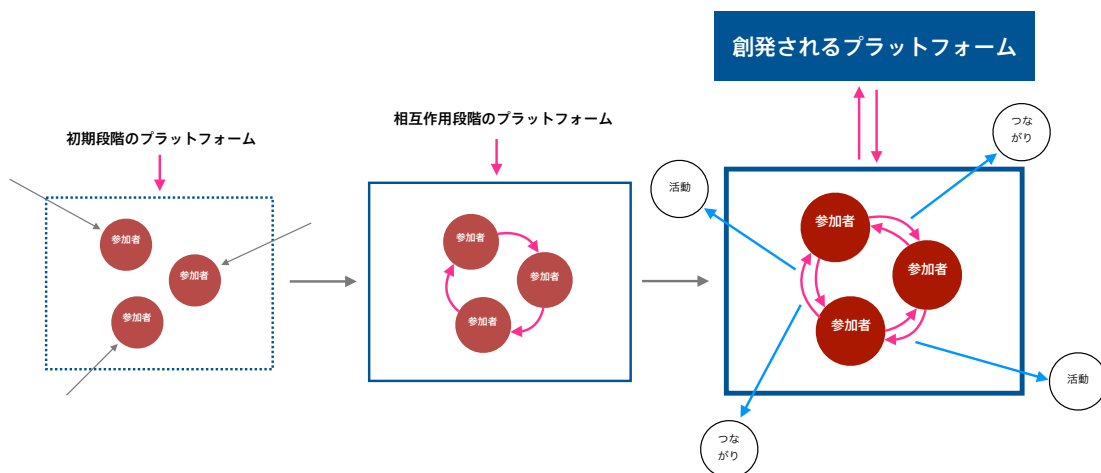


図 7-3. 創発されるプラットフォームの概念図

こうした参加者の相互作用によってその環境（プラットフォーム）自体が生まれていくダイナミックな生態学的システムは、参加者の主観的体験かプラットフォームの設計論かのどちらか一方に焦点を合わせるだけでは見えづらい。二つの観点からの調査によって見えてくる構造である。

もちろん、これは厳密に言えば、地域の居場所という協働プラットフォームに限ったことではない。桜井の指摘するマクロな社会秩序だけではなく、インターネット上のプラットフォームや様々な相互作用の生じる組織や団体といったメゾレベルの社会活動についても、同様のことが言えるだろう。厳密に言えば、株式会社や学校といった活動についても、建物や定款といった実態だけが存在するのではなく、関わる個々人に共有された観念的な社会的活動の認識と具体的な仕組みの双方が組み合わさって、株式会社や学校といった現象をつくり合っていると言ってよい。しかし、地域の居場所は、企業や教育機関のように制度的にも空間的にも定式化されておらず、社会的に構造化された通念がない。言葉を変えれば、地域の居場所が、飲食店や図書館のように、利用する者の振る舞いやサービスに期待する内容についての相互の了解が成立していないということでもある。それゆえ、喫茶店や図書館などのように、ある形のサービスを提供すればどこでも同じような結果を再現できるということはない。それゆえ、居場所のキーパーソンは、参加者の様子確かめながら関係変化のマネジメントを調整し、参加者は居場所の状況に合わせて自身の行動を適応させていくような、お互いにつくり合う関係とプロセスが顕著に見られる。

そうした意味で、個々の地域の居場所はそれぞれが一回性の現象だと言えるのだが、調査によって示されたデータからは、各事例は独自の工夫とプロセスを経て地域の居場所として成立しているにもかかわらず、そこには共通する参加者同士の関係性の構造や設計要素が見られる。重要なのは、いずれの事例においても、参加者の立場から見ても、居場所の運営者の立場からしても、不確定要素が非常に多い状況の中、それぞれの居場所に特有のコミュニティが形成されていく仕組みを持っているという点である。

居場所という「もの」がつながりと活動を生んでいるのではなく、つながりと活動が生まれ続ける状態の場を居場所というほうが、より実態に相応しい理解の仕方であると言ってよい。

### 成長のためのプラットフォーム

二つの調査からもう一点指摘できることは、参加者の多くは自身の成長に対する期待を持っており、それが地域の居場所の成立の大きな要素になっているということである。参加者が動的であるというのは、単に人間は誰も変化し続けているという一般的な見解に加えて、変化に対する期待を意識的・無意識的に持っているということでもある。もちろん、個人をまったく固定的に捉えるほうが本来不自然であり、地域の中で暮らす個人は誰も変化し続ける存在であるのだが、知人に誘われて特に目的も持たずに参加したり、最初に参加した時には場違い

だと感じたりしながらも、その後も継続的に参加したという経験を語る人が多かった。このことは、当人でも明確には説明できないならかの未知のものに対する予感や自身の可能性の予兆を感じた行動だということができないだろうか。

それは不確定要素の多い状況であるが、にもかかわらず、参加者は地域の居場所に集まり、様々な人との交流を通じて様々な活動を行なうようになる。第5章で見たように、多くの参加者ははじめから活動内容を決めていたのではなく、地域の居場所というプラットフォームでの出会いを通じて、当初は考えていなかったような活動を行なうようになっていた。結果が不確定であるにもかかわらず、そこにコミットしてくという行動の背景にはどのような動機付けがあるのだろうか。例えば、特定の人同士の情報交換サイトや地域福祉の専門職のネットワークなど一般的なプラットフォームであれば、あらかじめ明確な目的やベネフィットがなければ参加しない。また、例えば住民参加の地域づくり事業などでは、参加者の地域貢献活動への参加を積極的に誘導するというような場合も考えられるが、少なくとも本研究で取り上げた事例には、そうした誘導的な活動促進は見られなかった。

参加者が、明確な目的がないにもかかわらず参加し、積極的な活動をするようになる動因として、参加者自身の変化や成長に対する期待が考えられる。参加者が、より自分らしい活動が可能になる、新しい働き方や仕事を得られる、また、これまでとは異なる人と出会えたり、他者へのより適切なケアができるようになったりするなど、多くの参加者にはこれまでとは違う自分への期待が共通しているといえよう。このように見ると、キーパーソンが居場所を通じて生み出したコミュニティは、参加者の変化に対する期待を内包しているし、参加者側から見れば、そこに新しい自分に対する可能性を感じることになる。うちの実家の河田氏が実現しているのは、自分にできることは自分で行い、できないことは助けを求められるあたたかい助け合いのコミュニティであり、平木氏は、学びたい大人のためのともに成長しあえるコミュニティをつくっている。山口氏も、住民の立場で様々な活動を行うことが新しいまちづくりの形であると考え、プチ起業塾などを実践し、津屋崎の様々な人々の新たなチャレンジを応援している。地域の居場所は、参加者が将来の自分に期待したくなるような場であることで、内的動機付けを引き出しているということがいえるだろう。そして参加者の力をうまく引き出すことで、キーパーソンは地域の居場所をつくっているのである。

プラットフォーム設計の視点からは、この参加者の変化や成長を前提して運用されている点は、一般的なビジネスプラットフォームにはあまりない特徴であると言えるだろう。プラットフォームは、「多様な主体が協働する際に、協働を促進するコミュニケーションの基盤となる道具や仕組み」であり、協働の結果として変化が起こるはずである。國領も、プラットフォームによって参加者に「何かしらの変化が生じることを考慮しなくてはならない」し、「各参加者の内部変化をマネジメントしておかなければ、プラットフォーム運営がうまくいなくなるのが

多い」と指摘している<sup>35</sup>。しかし通常のサービスやビジネスのプラットフォームでは、参加者の変化は予測不可能であるからしっかりモニタリングしておかなければならない、という消極的な捉え方が一般的である。こうした点で、ユーザーの変化をあらかじめ計算に入れ、しかもその力を用いてつくられる地域の居場所は、非常に独特なプラットフォームであるといつてよい。

## 7-2 プラットフォーム創発の〈マネジメント〉

地域の居場所は、参加者の相互作用によって創発される現象であり、そこでは、参加者の変化に応じてプラットフォームのあり方が変化し、その相互作用を通じてプラットフォームが次第に立ち現れる。参加者の経験からは、参加者自身の変化だけではなく参加によってその環境が生まれていくという自己組織的な形成過程があり、プラットフォーム設計論としては、参加者の変化や成長を織り込み、それを生かすことでプラットフォームを生成していくという独特の設計が行われている場である。すなわち、参加者とプラットフォームはそれぞれ変化しつづけており、居場所のキーパーソンは、その両者の変化を見守りつつ適切に介入するという「マネジメント」を行っているといえる。個人の変化を見守ることを通じて居場所全体をつくりだし、居場所全体の変化をみながら個人への適切な働きかけを行っているのである。

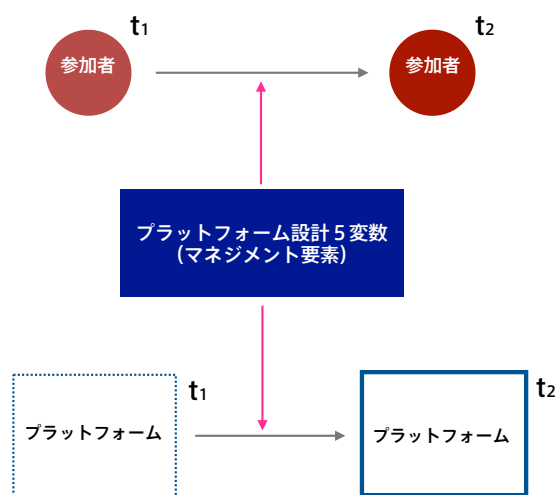


図 7-5. 個人の変化とプラットフォーム生成の「マネジメント」

第 6 章では、地域の居場所のプラットフォームとしての設計は、参加者を集める段階と相互

<sup>35</sup> 國領二郎『創発経営のプラットフォーム 協働の情報基盤づくり』、32 頁。

作用を促進する段階の二段階に分けて考えるのが妥当ではないかという仮説から調査を行い、実際にそのように運営されていることが確かめられた。この段階的マネジメントを、上に述べた参加者の変化とプラットフォーム生成の両方を見据えたマネジメントとして捉えると、居場所のキーパーソンが行っているプラットフォーム設計の5つの変数は、参加者個人がコミュニケーションや役割を変化させていくことが、居場所全体の生成につながっていくというような、よりきめ細やかなマネジメントとして分析することが可能になる。

ここでは、5変数それぞれについて、参加者の変化とプラットフォームの生成の両面から、主観的体験とプラットフォーム設計の工夫の両面で明らかになったデータを元に、再度考察する。プラットフォーム設計変数が参加者のどのような変化を促進しているのかを考察することで、参加者の相互作用と設計要因の関連についての理解を深めることが狙いである。それぞれの地域の居場所に独特な規範を持つコミュニティは、この過程の結果として醸成されると考えることができる。

表 7-1. プラットフォーム創発の「マネジメント」

	参加者の変化	プラットフォームの生成
コミュニケーションパターンの設計	ネットワーク構造の変化による可能性の増大： それまでの閉鎖系から新しいネットワークへの移行によって、必要な資源や情報、安心感を得やすくなる。cf. Granovetter 1973、Burt 1992	多様で動的なネットワーク形成： 新しい参加者を招き入れ、参加者同士を適切に結びつけることで多様なネットワークを形成し、特有のコミュニケーションパターンを形成する。
役割の設計	新しい役割取得による成長： キーパーソンからの期待を感じ、試行錯誤することを通じて、新しい役割が得られ、新しいアイデンティティが自覚できるようになる。cf. Mead	役割配分による活動促進： 参加者がより本来の振る舞いをできるように新しい役割を促し、居場所の多様な活動を生み出したリ、運営の担い手を発掘したりしている。
信頼形成メカニズム	支援されることで生じる信頼関係： 新しい関係性のなかで受容され、援助的に関わられることで、協調的互恵的な関係が生まれ、信頼関係が形成される。cf. Blau	無償の支援による互酬性の規範形成： 参加者に対して援助的に関わることで、居場所に互恵的な規範が生まれ、信頼関係や助け合いによって活動促進やネットワークの継続性が生まれる。
インセンティブ設計	コミュニティの自己生成による動機付け： 参加することによってコミュニティが生まれる。コミュニティの当事者になり、主体的な参加が生じる。	コミュニティ形成による求心力： メンバーの出入りや関係変化を見守ることで居場所の規範を体現するコミュニティを形成する。
参加者の内部変化のマネジメント	キーパーソンの見守りによる個人の成長とプラットフォームの生成： 参加者の様々な変化と居場所全体をモニタリングし、適切なタイミングで声かけや情報提供などを行うことで、参加者が安心して試行錯誤できる状況と理想とする居場所を生み出している。	

#### コミュニケーションパターンの設計：ネットワーク構造の変化による可能性の増大

参加者が地域の居場所に参加し、信じられる人間関係を広げていく過程は、その参加者にとってのネットワーク構造の変化であると言える。はじめて訪れた居場所では、これまで関わったことのない人との出会いに戸惑いながらも、次第に受け入れられ、そのコミュニティが自分の居場所になっていくという経験が、多くの参加者から語られた。この過程で居場所のキーパーソンやスタッフは、潜在的な参加者が集まるきっかけを用意し、はじめての人を受け入れる

というメンバーが集まる仕組みづくりの段階（前提要因）から、他の参加者を紹介し、具体的な協働につなげていく段階（促進要因）まで、緩やかに連続する二つの段階に応じて、居場所のマネジメントを行なっていた。

この変化を、ネットワーク構造の変化として考えると、どのようなことが言えるだろうか。居場所への参加を通じて得られるソーシャルキャピタルは、参加者の行為を促し目標を達成するための生産的な関係性（Coleman 1988）であるといつてよい。しかし、こうした状況は、参加前にはなかったはずである。居場所に参加する前の段階では、参加者は元の生活のネットワークの中にいる。それが、居場所への参加が契機となり新しいネットワークを得る。もともとあった閉鎖系ネットワークから、新しい関係性への移行である。この弱連結のネットワーク（Granovetter 1973）によって、参加者にこれまでにない情報がもたらされ、これまでにない思考や行動のきっかけとなるのだといえよう。この時、構造的空隙（Burt 1992）を埋め、新しい関係性を参加者にもたらす大きな役割を果たすのがキーパーソンである。そして、居場所での交流や活動を重ねていくうちに、クラスター状のネットワークが形成されていき、参加者にとって新しい閉鎖系ネットワークが生まれる。こうした移行を通じて参加者は、安心でき、必要な資源や情報を得やすい、すなわちイノベーションの起こりやすい新しいネットワークを得ることになる。参加者は、居場所へ参加することでネットワーク構造の変化を体験し、それによる情報や支援の関係変化から、新しい行動や価値観を得ていく。

このようなネットワークの変化の中で、参加者は変化・成長を遂げていく。もちろんキーパーソンが人的なハブになるとともに、参加者同士が相互に知り合えるような仕組みが用意されていることもある。また、潜在的な参加者にきっかけを提供するイベントや SNS の運営、偶然訪れることを可能にする空間的な工夫も用意することによって、プラットフォームの持続的な関係変化のプロセスを生み出している。

居場所の創発という視点からは、居場所に基礎に置くネットワークに新しい参加者が参入し、そのなかで他の参加者との新たな関係を獲得し、行動を変化させていくこと通じて、居場所のネットワークの一部になっていくという過程である。個々の参加者のレベルでのネットワークの変化が、居場所というプラットフォームレベルの創発としてみとめられるということである。それぞれの居場所には、メンバーが固定化しないよう絶えず新しい参加者に開かれるような工夫が見受けられた。キーパーソンはこの時、ゲートキーパーの役割を果たしており、新たな参加者を誘い入れたり、メンバー同士を紹介したりしている。また、全国にもネットワークを持っていることから、より遠くの専門的な人脈や情報との接触をもたらす構造的空隙を埋める立場に位置付けられる。ネットワークの組み替えを通じて、居場所という状況を生み出すマネジメントを行っているといえる。

#### 役割の設計：新たな役割取得による参加者の成長

参加者は、キーパーソンや他の参加者との交流を通じて、自己のあり方や働き方についての



探求を深めていた。そこには、自分の本質的な欲求についての気づきや自己に対する新しい概念の発見など、様々な個人の変容があったと考えられるのだが、ここではそれを新しい役割の獲得という視点で考察してみたい。

ミードは、子どもの社会的自我の獲得のプロセスについて、母親などの重要な他者（significant others）からの期待を受けることによって自他の分離が起り、自分の役割を自覚しアイデンティティを形成していくという。地域の居場所では、キーパーソンの思想がその居場所のコミュニティの規範形成に大きな影響を持つことを第 5 章で示した。参加者にとってキーパーソンは重要な人物であり、その居場所のコミュニティで活動する際には多かれ少なかれ、キーパーソンの人柄や価値観を意識せざるを得ない。新たにアイデンティティを獲得していく過程で、キーパーソンとの関係が形成され、その中で参加者が期待を受け取ることが、その参加者に影響を与える。例えば富山の I さん（T-09）はインタビューのなかで、直接言葉はかけられてはいないものの、起業した自分に対する平木氏からの期待を感じるという趣旨の発言をしている。また、新潟の河田氏のように夜の茶の間ネットワークの進行役を参加者に依頼するというようなこともある。単なる作業分担ではなく、その背後には居場所のなかで自覚的に行動したり、他の参加者との関わり方を深めたり、といった期待があるといえるだろう。それゆえ参加者は、その役割の意味を考え、自分自身で内省することができるようになる。参加者の変化は、キーパーソンからの期待を想定することによって生じる役割の獲得と考えることができる。コミュニティ内で適切な役割が配分されていくだけ留まらず、新しい考え方に触れ、その中で自分がどのように考え、他者と関わり、行動したら良いのかという試行錯誤を通じて、新しい役割獲得が起り、新しいアイデンティティが自覚できるようになると考えることが可能である。キーパーソンは、伴走者であるとともに、自己の探求が進むための期待を仮構する存在なのである。そして、他の信頼できる参加者は一般的な他者（generalized others）として、参加者が新たに獲得した役割を認知できる鏡であるということも可能であろう。

地域の居場所で起こる変化は、他者関係の変化であり自己の探求であるが、それは主我と客我の間関係調整であるとも言える。その場にふさわしい行動を選択するかどうかは参加者の意思に任されているのだが、内的な動機として成長や変化に対する自分自身の期待がなければ、この相互作用は成立しない。成長したい、変化したいという内的な思いと、キーパーソンが持つ人間観、コミュニティ観が共振するときに、大きな変化が生まれると言える。

居場所の創発という視点では、それぞれが新しい役割を獲得し、新しい行動にトライすること、こうした変容の持続が、居場所を職場や家庭とは異なる規範の場としている。プラットフォームを固定的な構造と考えるなら、役割はあらかじめ決められており、そのなかで参加者がその役割を演じるという役割分担となる。しかし、それらを動的な構造だと考えると、参加者が新しい役割を獲得し、他の参加者との関係性のなかでそのよう行動しはじめるのだが、その行為自体が、居場所というプラットフォームを生じさせているのであり、居場所の実現のために参加者自身が役割を果たしていることになる。キーパーソンの思想や期待という緩やかな

価値観の共有のなかで、組織とは異なるようなかたちで役割配分が生じ、化学反応が起こっているといえるだろう。

また、一般に地域の居場所にはキーパーソンのカリスマ性が必要だと言われるが、こうした現象についても役割獲得の視点から捉えることで、補助線的な説明が可能となる。地域の居場所は、そこに触れた全員が大きな変化を体験するわけではない。場合によっては、自分には向かない、合わないということも生じる。こうしたことが起こる原因について、それぞれの居場所には多かれ少なかれ独特の規範があり、それがキーパーソン（及びコミュニティ全体）からの期待に基づくと考えると、それに共鳴する人は積極的に参加するが、そうでない人は自然に回避することになる。これは、役割距離（Goffman）として説明できる。こうした磁力の引き合いや反発がつくる場と考えるなら、多くの人を惹きつける場は、空間や予算といった外的な要因ではなく、キーパーソンのカリスマ性が重要だということも理解できるのではないだろうか。

#### 信頼形成メカニズム：支援されることで生じる信頼関係

地域の居場所における関係性は、既存の地縁・血縁型の関係性ではなく、それまでにはなかった橋渡し型の関係性が主である。そのため、そこでの協調的な相互作用が働くためには、基本的な信頼関係の形成が必要である。信頼は、知り合いだから安心できるという関係性とは異なり、相手との関係における不確定な要素があることを前提として、能動的に関わり方を判断することである<sup>36</sup>。地域の居場所での信頼形成には、どのような過程があるのだろうか。

参加者の体験をみると、多くの参加者は初対面の人たちの集まる場に参加することに緊張感を感じながらも、そこに受け入れられたことを実感し、安心を感じるようになっていった。そして、「自分の話を聞いてくれる」体験をし、様々な援助的な関係を実感していくことになるのだが、信頼は、こうした受け入れられ、助けてくれるような関係のなかから生まれているといっていよう。そして、その居場所のコミュニティに対する信頼が基盤となって、新入の参加者も次第に援助的な行動をとるようになっていく。

このような過程は、信頼が形成される社会過程の古典的な理論である交換理論とも重なる（Blau）。すなわち、先行者からの助言や援助を受けることによって信頼が生まれ、受け取った行為につりあう行動を返そうとする動機付けが生じるという原理である。プラットフォームの段階的設計の視点で見ると、キーパーソンや他の参加者からの援助的関わりから新入参加者の信頼が生じ、それを返そうとする行動が参加者のなかに生まれる。これが、コミュニティの互酬性の規範を生み出し、その規範が、さらに新しく参加する者が信頼を形成する土壌になっている。

交換理論ではこうしたプロセスから権力関係も発生するということだが、確かにこの相互作用のなかから、キーパーソンの求心力はより高められているといえる。しかし、プラットフォ

---

<sup>36</sup> 山岸俊男『信頼の構造：こころと社会の進化ゲーム』、東京大学出版会、1998年、33頁以下。

ーム設計と参加者の相互関係を主題とする本論にとってより重要なのは、キーパーソンから無償で与えられる支援が、結果としてその居場所のコミュニティにどのような規範をもたらしているかであるといえる。リタクラブやうちの実家は利用料が発生するが、キーパーソンからの親切や援助はその対価として提供されているわけではない。また、キーパーソンと一人ひとりの参加者という放射状の関係性だけではなく、参加者同士の網目状の関係性が生じている。ここに来ると河田氏が話を聴いてくれるという実感や、朝活コーチングに毎週 7 時から伴走してくれる平木氏の姿勢は、地域の居場所における参加者の信頼を形成する原動力であり、そうした体験をした参加者同士が互酬性を発揮しやすい雰囲気を生み出している。こうした規範の創出に、キーパーソンの無償の支援が大きな影響を持っていることは間違い無いだろう。

居場所の創発の視点では、互酬性の連鎖こそ、持続的な運営に欠かせない。キーパーソンのみが無償の支援を行い、キーパーソンを中心とした放射状の関係性にとどまるならば、多様な人が相互にかかわりあう居場所とはならない。信頼を形成する互助的な関わり方が伝播していくことによって、いつのまにか、そうしたちょっとした助け合いやあたたかい感情のやりとり、情報や活動の支援といった相互の支え合いが当たり前前の状況が生み出される。キーパーソンのあり方や行為が発端になったとしても、参加者同士の支援が共鳴し増幅することによって、その居場所らしい規範を創発していると考えられる。

#### インセンティブ設計：コミュニティの自己生成による動機付け

居場所のコミュニティの自己生成によるインセンティブの発生は、まさに参加者同士の相互作用による居場所の創発である。

居場所が活気ある場所であり続けるには、参加者が継続的に居場所を訪れ、積極的に活動に参加することが必要である。飲食店や図書館などとは異なり、地域の居場所には特定のサービスがない。そこを訪れるのは、イベントへの参加やコワーキングスペースの利用という目的もあるが、個人でサービスを利用するだけでなく、他の参加者と会い、交流できるという部分が、インセンティブになっている。つまり、特定のコンテンツではなく、そこに自分の所属しているコミュニティがあることが大きな来場動機になっている。この点が、地域の居場所の特徴である。

しかし、はじめから居場所のコミュニティが参加のインセンティブにはなり得ない。見知らぬ人に会うために何度も足を運ぶとは考えにくいからである。最初は、特定のサービスやキーパーソンからの誘いがあったはずである。また、津屋崎ランチのように参加しやすいイベントや講座を用意したり、芝の家のように行き交う人に声かけしたりと、参加のきっかけを広げる工夫も見られる。それに加えて、前節で指摘したように、参加者側には何かしらかの成長や変化への期待があり、それが未知の場に参加しようという後押しになっている。その結果、何度か足を運ぶことになり、やがて顔見知りができ、自分にとっての居場所感が増していく。そこで、自分らしさを実感し、自己実現のための活動を始めるといったことが可能になるのだが、

この段階になると、参加の動機は、居場所のコミュニティの存在になる。参加者が生き生きと活動できるのは、参加者自身がそのコミュニティの関係性に支えられているからである。

重要なのは、参加者自身もまた居場所のコミュニティの一部であるという点である。参加者は、サービスの利用者ではなく、その地域の居場所に参加し、それを構成する一員となる。周辺的な参加から、次第にそのコミュニティの中核としての役割を担うようになるということである。すべてのインタビューからそのような実感が聞かれたわけではないが、このような形で当事者となっていくことが、活動をつづけるインセンティブになると考えられる。

さらに、このことは、参加者自身が後から参加した人のインセンティブにもなっているということである。すなわち、自らの参加が、自分と他者のインセンティブを生み出すという自己生成的なプロセスとなっているのである。場の利用者が、次第に場の資源になっていくということである。居場所の設計は、その場に特有の規範をもつコミュニティを醸成していく関係性のデザインであるといえるのだが、それは、参加者同士が生み出す規範が次の参加者の変化や動機付けを生むという自己参照的な過程でもある。地域の居場所で生まれるつながりと活動は、居場所運営のアウトプットであるというより、それらが持続的に生じる有機的な状況を維持することによって次々と化学反応が起こっていくような形で続いていくといえる。

#### 内部変化のマネジメント：キーパーソンの見守りによる個人の成長とプラットフォーム生成

ここまで、コミュニケーションパターン、役割、信頼関係、インセンティブについて、参加者の体験とプラットフォーム設計という二つの視点から、それらの醸成されていくプロセスを考察してきた。はじめて参加した段階から、次第にネットワーク構造や役割意識が変化することで、その地域の居場所への所属感や参加者同士の関係規範が生まれていた。この変化を推し進めるために重要だと考えられるのが、内部変化のマネジメントである。調査事例全てで、参加者の見守りがキーパーソンの重要な役割であるという証言が聞かれた。

内部変化のマネジメント以外の4つの設計変数は、参加者の関係や意識の変化の機会を提供することで生じる要素であったが、内部変化のマネジメントは、そうした参加者の様々な変化をモニタリングし、適切なタイミングで声かけや情報提供などを行う伴走型の支援である。そして、重要なのは参加者個人だけを見るのではなく、同時に居場所がどのように創発していくかという全体を把握しながら調整していくという視点である。前章で述べたように、地域の居場所では、この要素の重要性が、他のタイプのプラットフォームよりも高い。なぜなら、居場所が創出されるためには一人ひとりの参加者の行動や関係性が変わっていくことが不可欠であり、その前提として地域の居場所に参加する人の潜在的な変化への期待をすくい上げることが重要だと考えられるからである。それゆえ、内部変化のマネジメントはなくてはならない要素なのである。

その変化のマネジメントは、キーパーソンだけではなく、居場所のコミュニティの相互作用のなかで相互に作用する場合もある。コミュニティの成長に応じて、参加者同士がお互いの個

人的な変化を感じあい、刺激しあって、適切な手助けや情報提供を行うということも生じる。芝の家では、新しい活動をはじめのきっかけとして他の参加者の誘いやそそのかしが大きな影響力を持っており、リタクラブでも参加者が他の参加者の活動を行うようコーディネートするといったことが起こっていた。

敷衍すれば、地域の居場所とは、自身の探求や挑戦、価値観の変容を数ヶ月から数年の期間にわたって見守ってくれる場である。そして、その変容の過程自体が居場所というプラットフォームを創発する。組織や関係性の流動性が高く人々が社会的に孤立した「アトム化」社会では、人と人とのかかわりは断片化され、家族や特定の親密な友人以外に自分の変化の後先を見届けてくれる人間関係を構築することは難しい。さらに、親や配偶者といった身近な人物に、そうした変化が受け入れられるとは限らない。こうした状況のなか、地域の居場所では、キーパーソンが見守るなか、そこで出会った他の参加者との関係性のなかで、自身の探求や挑戦が可能となる。相互に見守りあい、支え合える成長のプラットフォームになっていくのである。キーパーソンとしての居場所のキーパーソンは、参加者の潜在的な力を引き出し、相互に関わりあえる環境をつくることで、居場所という独特な場を創発しているのである。

### 7-3 ビジネスプラットフォームと地域の居場所の違い

#### 地域の居場所に特有の難しさ

地域の居場所を協働プラットフォームとして考察することで、従来は明確でなかった居場所づくりの設計の工夫やそこでの来場者同士の相互作用の実態が明らかになった。また、プラットフォーム設計の変数は地域の居場所にも適用できることが示された。しかし、プラットフォーム概念がもともとビジネスプラットフォームのマネジメントを前提としていることから、地域の居場所に適応した際に、どうしても完全には当てはまらない点が出てくる。地域の居場所のキーパーソンが行っている工夫は、プラットフォーム設計の要素に合致していると言えるのだが、そこにはビジネスプラットフォームにはないきめ細やかな参加者の見守りや居場所全体への気配りがあり、その部分にこそ、日常生活に根ざした地域コミュニティを基盤として形成される居場所づくりのポイントがある。つまり、地域の居場所づくりには、ビジネスプラットフォームの設計の想定しているマネジメントを超える「マネジメント」があるといえるのではないだろうか。この部分こそ、言語化されにくい地域の居場所づくりの秘訣であり、地域のなかでの参加者の主体的活動の本質的動機付けを理解する点で重要であると考えられる。本研究の調査結果から、少なくとも以下に示す4つの点で、地域の居場所をマネジメントしていくための特有の難しさが挙げられる。これらは、協働プラットフォームの設計についてユーザー一人ひとりの経験やキーパーソンの思いや工夫を詳細に分析することで明らかになった違いであり、ビジネスのプラットフォームを構築する際には問題にならないが、地域のプラットフォー

ムを創出するためには留意しなければならない事柄として示唆的である。

#### ・ゴールの不明確性とうつろいやすさ

生活を基盤とした地域コミュニティや各自の人生には、ビジネスプラットフォームと比べて明確な目的や目標がない。何を達成すればよいかという目標が自明ではなく、それゆえ、居場所の参加者同士の関係性についてもどのようなあり方が望ましいかという規範も共有されにくいのである。このため、キーパーソンがどのような思想でその場をつくっているかという哲学が重要になる。そして、明確な目標がないため、達成されれば終了するという合意形成が自然に生じることはなく、逆に仮にうまく成立したように見える状況でも、企業のような成長の動因を持たないために、そのまま成長を続けるとは限らない。逆に言えば、参加する人がいなくなれば解散してしまっても構わないのである。各個人も同様に、その人にとって居場所に参加する意味がなくなれば、別の活動をはじめてもよい。地域に暮らす個人が何にアイデンティティや生きがいを感じるかは自由であり、それが公共的な活動の担い手である必要はない。

#### ・多様な個人の生み出す複雑な関係性

地域の居場所は、それぞれの人生を生きる多様な個人が集まるため、思いもよらない創造的な出会いが起きる反面、衝突も起きる。ビジネスにおいては、組織として参加する場合もあれば個人としての参加もあるが、個人参加の場合であってもビジネス上の役割を持って参加することが前提される。参加動機は、個人的な都合ではなくビジネスが目的であり、参加者とそれ以外の境界のコントロールも用意である。そのため、合理的なルール設計やインセンティブ整形が効果的な協働のために有効である。これに対して、地域の居場所は、個人が個人として出会う場であり、メンバーの範囲を厳密に定義することも難しい。そのため、性格や価値観の違いから、ぶつかり合うことも起き得る。それでも関係性が続くこともあれば、そこで離散してしまうということもある。必ずしも目的や想いを共有していない異質な者同士が同じ地域に暮らし、相互に支え合う関係をつくりあげ、維持していくという点が地域コミュニティの特徴だが、このような状況における関係性のマネジメントは、ルールに沿った合理的な判断だけではすまない。

#### ・動的に変化する人と場のマネジメントの難しさ

地域の居場所は、参加者も変化し、場も変化するという流動性が、ビジネスプラットフォームよりも高い。場合によっては主宰者自身も変化することが考えられる。こうした不確定性は、ビジネスでは生じにくい。ビジネスの場合は目的を共有しメンバーを決め、それぞれが役割を持って協働する。その場合、参加主体の変化をマネジメントすることは必要だが、その幅は大きくはなく、変化への対応はリスクマネジメントに近い考え方である。地域の居場所の場合は、参加者の変化そのものが居場所づくりの大きな要因になっており、そうした人も場も変化しや

すく有機的に関係している状況のなかで、その両者の変化を適切にマネジメントする手法は確立しているとは言えない。一見目立たないが、非常に高度なマネジメントがもとめられており、それゆえ誰でもできるというわけではなく、ある種カリスマ的な人望のある人物だけができると一般的に捉えられているのは、こうした理由があると考えられる。

#### ・キーパーソンの代替不可能性

高度なマネジメントが求められる故に、地域の居場所では、キーパーソンの人柄に惹かれて集まる参加者も多くなり、キーパーソンの見守りによって安心できる場になっているなど、キーパーソンの存在が鍵となるコミュニティになりやすい。そのため、一般的に主宰者の継承は難しいといえる。本研究で示された結果からは、そのキーパーソン自体も地域の居場所という生態系のなかの重要なピースになっているという見方ができる。このようにして捉え直すと、ビジネスの場合と異なり、リーダーの権限移譲やネットワークの引き継ぎといった一般的な事業継承とは異なり、居場所を承継するためには、プラットフォームの動的な生態学的なシステムを、もう一度新しいキーパーソンを軸にしてつくりだしていく必要があるということがわかる。

#### 芝の家にみる不確定性とキーパーソンの継承

こうした地域の居場所に特有の不確定性は、芝の家のその後の変遷を見ても明らかだ。本調査でインタビューを行った芝の家の参加者 10 名は、その後それぞれ相当異なった歩みを見せている。順調に活動を続ける者もいれば、中心的なスタッフとなってさらなるリーダーシップを発揮する者もいる。逆に、職業上の理由や体調面から芝の家を離れた人もいる。大学を卒業したり、別の仕事を始めたりすることで、それまでとは異なる関わり方になる人もいる。離れる人がいる一方、新しい参加者が参入することで、顔ぶれは徐々に入れ替わっていく。中心メンバーが変わることで、子どもや高齢者の来場者の雰囲気は少しずつ変化したり、新たな活動が始まったりすることもある。そうした細やかな変化がありながらも、芝の家らしいコミュニティはしっかりと維持されている。地域の居場所の実態は、芝の家のその後が示すように不定形で予測不可能な、動的な個人の関係性の集合である。そこで一人ひとりが体験している主観的な世界は、他の参加者とはまったく別のものだと考えられるが、それらが集まり関わり合うことで、芝の家という現象が持続している。

また、キーパーソンの代替不可能性については、芝の家でもリーダー交代に苦心した。何人かが現場の代表を代わる代わる務めたが、長くは定着できないという状態が続いた。本研究のインタビューが行われた 1 年ほど後、ようやく新しい運営体制が確立したのだが、それからさらに約 5 年が経過した現在、ようやく安定した運営がされるようになった。一般に地域の居場所はキーパーソンの交代が難しいと言われ、本研究の結果はその事実を支持するものであるが、芝の家のリーダー継承は成功事例として今後さらに詳しく検証する必要がある。本研究のなか

では十分に議論することはできないが、リーダーの継承が実現した要因としては、もともと他の参加者との信頼関係があったことだけではなく、時間をかけて新しい運営体制を再構築したというプロセスが挙げられる。それは、本来芝の家が大切にしてきた理念や、どのような経緯でいまの運営形態になっているのかといった原点を確かめる作業、関わる運営スタッフ一人ひとりの想いを聞き合うことなどを目的としたワークショップなどである。丁寧にそうした前提を継承したことによって、新しいリーダーを軸にした関係性がもう一度組み立て直された。そこには、リーダー本人の「芝の家がこうあってほしい」という想いもあり、それが強い求心力につながったのではないかと考えられる。とはいえ、その過程には軋轢もあり、痛みの伴うプロセスでもあった。しかし、新たなキーパーソンを軸に、その人の考え方や人柄にあわせて丁寧にプラットフォーム設計の再構築、すなわち新たな関係性を組み直していく動的なプロセスを行ったことが、継承につながったのではないだろうか。これは時間と労力のかかるプロセスであり、ビジネスプラットフォームには必要のない個人同士の信頼関係や納得感なども含む繊細な関係の再構築過程である。

#### 一般的なマネジメントの捉え方では見えにくい居場所コミュニティの形成ポイント

変化し続けていて、終わりが無い。極めて常識的な視点だが、地域の居場所を協働プラットフォームとして分析することで逆説的に明らかになることは、地域の人の暮らしや地域コミュニティの不確定性を認識することの重要性ではないだろうか。それは完全にコントロールすることはできない個人や地域の流動性に根ざしており、そうした状況でどうにかこうにか「創発」を「マネジメント」する。こうした不定形なマネジメントを、地域の居場所のキーパーソンは、プラットフォームの設計変数をさまざまに駆使して行っているといえる。個々の人生を歩んでいる個人が、自分の想いを発揮することを妨げられず、そして本来は出会わなかったかもしれない他者と出会える場に参加した時、予期せぬ創発が起きる。地域の視点から公共の担い手としての期待の範囲だけで見るのではなく、個人の多様な地域参加への動機付けを受け入れ、多様な人が共存できる寛容性を確保することが必要である。こうした点で、地域の居場所では、画一的なマネジメントではカバーしきれない参加者個人個人を生かした運営が必要となる。こうした点が、一般的にビジネスを前提としているプラットフォームにおけるマネジメントの視点からは、見落としてしまう地域の居場所ならではのポイントである。

#### 7-4 つながりと活動の創出過程の捉え直し

##### 個人のライフストーリーと地域活性化

地域の居場所の考察を通じて提示されるのは、個人も地域も動的なプロセスなのであり、一人ひとりの相互作用を通じて、地域の現実が立ち現れるということであった。居場所が個人の



つながりをつくり活動をさせるのではなく、また参加者を集めて居場所をつくるのではなく、参加者の相互作用が居場所を創発し、つながりと活動が持続的に生み出される状態ができる。この状態にある場を私たちは居場所と呼んでおり、しかもそれは、メンバーシップや目的を特定しやすいビジネスやサービスとは異なり、範囲も達成目標も切り取ることのできない地域生活の現場に根ざしている。

このことは、地域の居場所における個人の主観的体験と、それらが生じさせる居場所を地域の文脈で事後的に評価することとは、根本的に異なる視点であるということを示している。参加者は、つながりや活動を生み出すことを目的として行動しているわけではなく、それぞれの人生を一日一日生きている。その結果として地域の居場所という現象が現れ、ここでは参加者同士のつながりと新しい活動が日々生まれていくのだが、そうした結果的に生じた価値をプラットフォームの成果と位置づけ回収してしまうことは、内的な動機付けの所在がどこにあったのかを見過ごしてしまう結果を招く。

協働プラットフォームとして地域の居場所を分析することで、参加者の相互作用や設計要件についての考察が可能になったが、一方で、それを協働プラットフォームという結果として現れる事象（モノ）としてみてしまうことは、地域に生きる主体の相互作用が地域の居場所の実態なのだという視点を曇らせてしまう。本論の出発点においては、地域活性化の文脈から地域の居場所を、社会関係資本を醸成する有効な手段としてみてきたが、こうした見方をすることで参加者の相互作用の結果を事後的・俯瞰的に意味づけてしまうことになる。もちろん、地域活性化という視点からは、地域の居場所を通じて社会関係資本が蓄積され、住民同士の地域課題に向けた活動が増えていると理解することは誤りではないのだが、地域の居場所というプラットフォームが創発されること、そのメカニズムを捉えるためには、そのなかで生きている一人一人の参加者の主観的体験を見ていく必要がある。そして、それを生み出すためには、地域の居場所というモノをつくるのではなく、参加するそれぞれの人のコミュニケーションや信頼関係の変化、気持ちの変化を見守ることが不可欠なのである。

本章の最後では、こうした二つの方向からの視点を前提に、地域の居場所が、個人と地域の双方から見て、どのように異なる意味を持つのかについて考察する。こうした位相の違いを明確にすることで、参加者の力を引き出し、それらの相互作用を通じて居場所を生み出していくプラットフォーム創発の「マネジメント」を、より広い周辺の地域の活力向上に的確に接続することが可能になると考えられる。そして、地域の居場所の生成だけではなく、新しい地域を生み出すアクティビティの設計全般に援用できる知見にもつながるのではないだろうか。

#### 個人的経験としての居場所：トランジションの場

多様な人が集まり交流することを通じて様々な活動が生み出されている地域の居場所を、参加者同士の相互作用の過程とプラットフォーム設計の視点から分析してきたが、参加者にとっての地域の居場所での体験はいかなるものであろうか。

一人の人生の視点から見れば、より多くの収入や地域への貢献といった成果の面ばかりではなく、地域社会や居場所のコミュニティのなかで自分の能力を発揮し、幸せな暮らしを実現するといった、普遍的な生活の充実があるように思われる。地域の居場所は、より本質的な自己になっていくための変容や深化のための場ともいえるだろう。

ブリッジスは、こうした人生における価値観の変化を「トランジション」と呼んでいる（Bridges 1994）。トランジションは単に職業や家族構成、居住地や健康状態といった外的な変化ではなく、「人生のそうした変化に対処するために必要な、内面の再方向づけや自分自身の再定義をすること」であり、「心理的に変わること」であるという<sup>37</sup>。地域の居場所で生じている出来事を機能的側面から見ると、社会関係資本の醸成や地域課題の解決につながる新しい活動の創出として見えるし、その主体は地域の担い手であるといえる。しかし、参加者の人生の視点からは、別の見方ができる。地域に暮らす人々の思いは動的であり、人生は変化の連続である。転居や転職は、それまでの人生を構成していたものの終わりであり、新しいものの始まりである。こうした小さな終わり始まりが繰り返されている。その時、外的な変化と同時に、これまでとこれからの人生の意味や自分の役割を考え直すという心理的な変化も生じる。

地域の居場所では、こうしたトランジションを体験している参加者は少なくないだろう。インタビューでは、失業や転職、起業、病気の治療や介護、死別や離婚、子育て、移住など様々なライフイベントとの関わりで居場所の体験が語られていたが、それは、それぞれの人生の足取りに根ざした活動であることを示している。

ブリッジスによればトランジションには、混乱や苦悩をとまなう探求の期間が存在するという。地域の居場所で参加者は、ネットワークや役割の変化を経験しているが、それは人生の転機の経験ともいえる。こうした変化を通じて出合う地域や居場所のコミュニティが、新たなアイデンティティの獲得につながる。そして、そうした個人の思いの集合的な相互作用によって居場所という現象が現れる。個人的な変化とともに、社会的な場への参加を果たしているといえる。このように見ると地域の居場所とは、そのコミュニティとの関わりあいを通じて、新たな人生の意味や価値観を獲得していくための移行の場であるといえるだろう。新たな人生を生きる主体となっていくということにほかならない。

#### 地域における居場所：地域主体の培養器としての居場所とその課題

一般的に地域の居場所は、社会関係資本の醸成や地域課題の解決につながる活動が生まれるという役割が期待されている。地域の課題解決や地域社会の改善という視点からの評価である。一方、参加者一人ひとりの体験を通して見えてくるのは、地域活動に関心があるとなかろうと、地域の居場所に参加することで、その参加者の生きる意味が充実していくという個人的な深まりである。

---

<sup>37</sup> W.ブリッジス『トランジション』倉光修、小林哲郎訳、パンローリング、2014年、5頁。

従来の地域づくりの議論では、内発的発展論という立場から、外から要請される地域開発ではなく、地域内部から住民の意思をもとに地域づくりを進めていく必要が指摘されてきた（鶴見 1996 他）。とはいえ、発展の主導者が外から内へ主体が変わったとしても、どのように発展させていくかという検討の対象は変わらず地域である。個人生活と地域開発は別の水準の議論と考えられてきたといってよい。

地域の居場所の参加者の体験からは、その場での様々な関わりが、より自分らしい人生をその地域で実現するための契機となっていることがわかる。個人的な動機付けからはじまった行為が、個人の便益だけにとどまらず、地域のなかで役割を担い、貢献につながり、新たな水準で自分らしい生き方を実現している。行政や企業が地域の発展を支えてきたこれまでの社会とは異なり、今後の地域はフォーマルな組織だけではなく、インフォーマルな関係性のなかでより多くの人々の地域参加が必要となるとすれば、こうした地域の関わりを増やしていくことが、地域の活力を高めるという点からも極めて重要になるといえる。

地域づくりは、担い手不足とその発掘が大きな問題とされている。担い手を調達するという考え方には、地域のリーダーや解決に向けた意欲のある人が必要だという暗黙の前提がある。もともと意思のある人や、必要な知識・能力を持っている人を求めるという考え方である。しかし、地域の居場所の参加者の研究からは、その前提と異なる実態があると考えられる。すなわち、あるスキルを持った人がもともと素材として、地域を支えているのではなく、様々な思いを持つ人々が様々な形で出会い、関わりあうことを通じて、意識や行動が変化し、やがておのおのがその人らしく活躍しはじめる。地域の視点に立てば、多様な人々が地域に関わり、行動や関係を変化させていくことを通じて、活気ある地域が創発されるとともに、結果的に関わる人々が地域の担い手になっていくという道筋である。

現代社会は、生まれ育った地域がアイデンティティであるという人は多くない。居住する地域や出身地に愛着を感じ、地域づくりに参加する人の多くは、子育てや移住などがきっかけとなり、人生の途中から事後的に地域との関わりが重要な位置を占めるようになる。このような視点からも、地域に再着地するきっかけとして、地域の居場所は重要な意味を持っているといえる。

すなわち地域の居場所は、地域の担い手が活動する拠点である以前に、地域の主体が生まれる触媒であり培養器であるといえるのだ。そして、その培養器自体はそこに人々が参加し相互作用を続けることによって創発される。地域の居場所は、多様な人生を生きて来た人々が地域を支える人に「なる」場である。

公的サービスとして見た場合の難しさは、こうしたニーズの潜在性にあると考えられる。すなわち、トランジションの場としての地域の居場所は、顕在化したニーズを満たすサービスではなく、それぞれの参加者がまだわからない新しい人生感や活動を模索する場であり、参加する段階ではどのような結果をもたらすのか不透明であるということである。それゆえ、すべての地域住民がすぐに対象となることはなく、病気や障害のように対象となる人が明確になら

ず、どのような属性の住民が対象になるのかを捉えることが難しい。さらに、そうした人生の節目を迎えるタイミングは人それぞれである。しかし、だからこそ多くの潜在的に必要となる人に触れる機会を広げる必要がある。多くの人に開かれている必要はあるが、しかしその対象は限定的・潜在的であるというマーケティングの不可能性をどのように乗り越え、公的サービスとして生かせるかが政策的な課題とってよいだろう。

山下<sup>38</sup>は、パーソンズ的な構造に閉じないプラグマティックな相互作用論を前提に、都市の創発的な可能性を論じており、ワースの都市論を個人レベルの創発、フィッシャーによるそれをシステムレベルの創発性と区別した上で、かつてないほど多くの人々が繋がりあい、かつ個別に分断された現代の社会状況のなかでは、改めて共同性レベルの創発を言説化する必要性を唱えている<sup>39</sup>。「個人と社会の大きな隔たりの感覚の中で、事実としての共同性をうまくつかまえ、認識としての共同性を再建し、個人を社会に連れ戻すこと」が、人間の認識や反省の能力を生かし「偶然の左右する創発的世界」から「理性による創造的世界」へ社会を転回させるために必要だという。地域社会は、制度的・構造的に規定されるだけでなく、また個々の主体が個別に動くだけでなく、個人同士の関わりによって創発する。そこから生じる様々なエネルギーによって新しい地域社会が形成され、新しい地域の活力につながっていく。そのような時代に向けて、主体と主体が出会い、それぞれに影響を受け合い、新しい人生と地域を切り開いていくような具体的な場が決定的に重要になる。そのような視点から、地域の居場所が論じられるべきであろう。

重要なのは、それぞれの主体は地域のために参加しているのではなく、その力が地域の活力になるのはあくまで結果としてであるということだ。地域の居場所における自発的な活動は、そこが自己実現の可能性に開かれている場だからこそ生じているのであり、いつ誰が担い手となるかも予測できない。そうした個人の相互作用の結果を事後的・俯瞰的に捉えると地域への主体的な参加として意味づけられる。地域の居場所は、こうした形で一人一人の人生と地域の橋渡しをしているといえるのだが、こうした仕組みを広く社会実装していくためには、ビジネスプラットフォームと異なる地域コミュニティにおける独特な関係性や属人性をうまく織り込みながら創発の過程をマネジメントしていくことが必要になるだろう。

---

<sup>38</sup> 山下祐介「都市の創発性—都市的共同性のゆくえ—」、金子勇編著『都市化とコミュニティの社会学』、ミネルヴァ書房、2001年

<sup>39</sup> 前掲書 66頁。

## 第8章 結論

### 8-1 研究の結果

地域を支えるコミュニティを形成するためには、市民の自発的・主体的な地域参加が不可欠だが、どうしたらより多くの人参加動機を高めることができるのかについては、これまで十分に研究されてはこなかった。近年全国に増加している地域の居場所では、多様な人が自由に出入りし交流するなかから様々なつながりと活発な活動が生まれており、そこには地域参加の動機付けが生まれるメカニズムが存在すると考えられる。居場所で参加者が自発的に行動をはじめめる過程とその効果的な設計手法と解明されることで、多様な人の参加による地域づくりが可能となるのではないだろうか。

こうした問題を背景に、本研究では、地域の居場所を協働プラットフォームとして捉え、そこで参加者同士の相互作用の中で参加者がどのような経験をしているか、プラットフォームアーキテクトであるキーパーソンがどのような設計の工夫をしているか、という二つの視点から、全国4カ所の地域の居場所、芝の家（東京都港区）、津屋崎ランチ（福岡県福津市）、うちの実家（新潟市）、リタクラブ（富山市）を事例に、合計40名の参加者とキーパーソンに対する聞き取り調査、参与観察などの質的調査を行った。その結果、参加者の相互作用を通じて居場所が形成され、つながりと活動が創出される過程を明らかにすることができた。

調査結果は次のとおりである。参加者の変化については、信じられる人間関係の拡大、交流によって生じる自己の探求、活動に向けた試行錯誤の3要素が重要であり、その居場所に形成された探求や試行をゆるし相互に助け合う規範を持つコミュニティが参加と活動継続の動機付けになる。また、協働プラットフォームの設計要件は地域の居場所にも適応できることが確かめられたが、ビジネスプラットフォームに対して地域の居場所ではキーパーソンの哲学が不可欠であり、それをデザインとして具体化することが重要であること、そして参加者コミュニティを見守り成長に伴走する内部変化や関係性のマネジメントが重要であることがわかった。

二つの研究課題の結果から、地域の居場所において参加者とプラットフォームはどちらも動的であり、参加者の相互作用によってプラットフォームが創発されるという視点を得ることができた。こうした過程は個人にとってより自分らしい状態に変化していくための移行であり、その変化と相互作用の結果としてより望ましい地域が生成するという新しい地域活性の見方である。

地域の居場所における参加過程の分析から明らかになるのは、それぞれの主体は地域のために参加しているのではなく、それぞれの個人的動機に基づいているのであり、その力が地域の活力となるのは、その結果を事後的に俯瞰して意味付けているということである。こうしたプラットフォームを広く社会実装していくためには、ビジネスプラットフォームと異なる地域コ

コミュニティにおける独特な関係性や属人性をうまく織り込みながら創発の過程をマネジメントしていくことが必要になる。

## 8-2 本研究の成果

本研究で明らかになったことの学術的、実務的成果は次の通りである。

まず学術的な位置付けであるが、本研究は、協働プラットフォームの設計に関する研究であった。プラットフォーム設計については多様な分野での理論構築や事例研究が進んでいるが、本研究では、協働プラットフォームの概念を地域コミュニティの交流拠点に応用し、ユーザーへの詳細なインタビューや拠点設計の工夫についての調査によって設計要件を実証的に検証した。この結果、協働プラットフォーム概念が地域の居場所の設計論に応用することができることが明らかになり、さらにそれがどのように機能しているかについて有効な考察が可能になった。さらに、段階的なマネジメントの必要やキーパーソンの役割といった、ビジネスプラットフォームとは異なる地域コミュニティの現状に適したフレームワークを提示することができた。こうした進展により、ビジネスプラットフォームだけではない多様な個人の協働における創発の分析とプラットフォーム設計についての知見をさらに発展させる足がかりが構築できたと考えられる。

また実務的な貢献としては、地域の居場所は、つながりと活動を生み出す装置としての期待や認知は広まり、実態調査は進んでいるものの、それが実際にどのようなメカニズムで機能しているのかはあいまいな印象論にとどまっている。また、地域の居場所を効果的に運営するためにはどのような点に配慮すべきなのかについても、実践者の体験談や個人的ノウハウが語られることが多い。こうした現状のなか、参加者とキーパーソンに対する詳細な調査にもとづき、協働プラットフォームという概念を用いてその成立過程を分析することで、実務的な現場にも適用可能な知見を生み出すことが可能となった。個別事例の成功要因や個々の具体的ティップスではなく、抽象度の高いフレームワークを提示することで、より多くの事例に援用できるようになると考えられる。

そして、地域の居場所における参加者の主体的・自発的活動に関して、外部からの事後的評価としての地域活性化の活動ではなく、個人が他者と出会い地域とのつながりを取り戻すことを通じて、その人がよりその人らしい生き方を実現していくトランジションの過程として捉えることで、地域の居場所が、個人が社会へ再び関わるための橋渡しを担っているという視座を得ることができた。地域での様々な協働が求められる社会において、多様な事業や制度を設計する上で重要な視点になると考えられる。

### 8-3 本研究の限界と今後の展望

本研究は、全国に数多く存在する地域の居場所のうち、特に多様な参加者が集まり新しい活動が起こっている拠点 4 事例を取り上げた研究である。実際の地域にはこのほかにも、地域自治の拠点となる施設、高齢者や障害者の地域ケアの現場としての施設など、限定的な参加者が主に利用する拠点も多い。成功を収めている拠点もあれば、そうでない事例もある。多様な参加者に開かれた創発的な場所ばかりではなく、地域のつながりの維持のために役立っている空間は無数に存在している。それゆえ、本研究で示された参加者同士の相互作用のあり方は限定的な事例であり、本研究の成果が普遍的な一般理論だとはいえない。それゆえ、今後はさらに、多くの多様な事例を取り上げ、協働プラットフォーム設計のフレームワークを洗練させていくことが必要である。

また、地域の居場所の生成原理とその実現に向けて有用な設計のフレームワークを示すことはできたが、個々の地域で具体的に居場所づくりに取り組む際にどのようにそれが展開可能なのか、どの程度有用なのかという実証には至っていない。一般的に地域の居場所は、設立したキーパーソンから他の運営者に交替することで活動が停滞したり、運営の質が変容したりと、継承が難しいとされている。筆者が運営する芝の家は、筆者が現場運営の責任者を退いた後も、問題なく継続することができているが、この要因をプラットフォーム設計の要件から考えると、具体的な運営手法や空間設計ではなく、キーパーソンの哲学がどのように具体的な設計に反映されているのかという関連性を含めて継承が行われ、運営者が変わることに応じて、もともと行われていた運営手法をそのまま持続するのではなく、その時のコアスタッフが行いやすいような形で修正していくということが行われていた。その有効性について本研究のなかで実証することはできなかったが、プラットフォーム設計という点から具体的な運営手法を検討することの可能性を示す事例といてよい。今後、こうした設計要件と事例との情報が蓄積されれば、さらに多様な事例に応用することが可能であろう。

地域の居場所をどのようにつくるかという設計論の問題は、本研究で示されたように、まずは地域に暮らす一人ひとりが他者や地域との関わりを得ることを通じて、その人らしい人生を実現していくという個人の主観的な人生があり、そこでの参加者同士の相互作用によって生まれるコミュニティや規範を通じて創発されるのが地域の居場所という動的な構造として理解することが有効である。ある働きかけをすることでそれに対応する行動が生じるという行動主義的な視点ではなく、生態学的な構造に基づいて地域の担い手と活動の創出される過程を生み出すアプローチは、おそらく今後の地域づくりのなかで益々有用性を持つと考えられる。本研究では、精緻な理論的なフレームについて十分に議論をし尽くすことはできなかったが、少なくとも、地域の居場所が、制度的につくられるフォーマルな空間とは異なる生成原理を持つこと、ビジネスプラットフォームとは異なる点に留意しながら運営する必要があることについては示すことができた。このことは、逆に地域の居場所を単純に規格化して大量生産することの困難さを明らかにするのだが、地域における創発のマネジメントの難しさをしっかりと正面から取

り上げ、それを踏まえた上で人々の協働の現場をつくることが、本当に生き生きとした市民参加社会の実現のために重要であるといつてよいだろう。一人ひとりの市民の経験に耳を傾けることで明らかになったのは、異なる関係性と規範を持つ場では、人はそれまでの日常的な生活場面と異なる行動をとるということである。そうした一つひとつの小さな場での試みが、やがて地域を大きく変え、新しい社会を創造していくに違い無い。そのために、本研究の成果が少しでも貢献できれば幸いである。





## 主な参考文献

- 秋元律郎『都市社会学の源流 シカゴ・ソシオロジーの復権』有斐閣、1989年
- Allport, G.W. (1942) *The use of personal documents in psychological science*, Social Science Research Council. (G.W. オールポート『心理学における個人的記録の利用法』大場安則訳、培風館、1970年)
- Anderson, B. (1983, original), (1991, Revised and Expanded edition) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. (B.アンダーソン『定本想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』白石隆、白石さや訳、書籍工房早山：図書新聞、2007年)
- 青木秀男『場所をあける! 寄せ場/ホームレスの社会学』松籟社、1999年
- 荒木昭次郎『参加と協働 新しい市民=行政関係の創造』ぎょうせい、1990年
- 荒山正彦編『空間から場所へ 地理学的想像力の探求』古今書院、1998年
- Barnard, C.I. (1938) *Functions of the executive*, Harvard University Press. (C.I.バーナード『経営者の役割』山本安次郎他訳、ダイヤモンド社、1980年)
- Bauman, Z. (2000) *Liquid modernity*, Polity Press. (Z.バウマン『リキッド・モダニティ 液状化する社会』森田典正訳、大月書店、2001年)
- Bauman, Z. (2001) *Community : seeking safety in an insecure world*, Polity Press. (Z.バウマン『コミュニティ 安全と自由の戦場』奥井智之訳、筑摩書房、2008年)
- Berger, P.L., Luckmann, T. (1967) *The social construction of reality*, Anchor. (P.L.バーガー、T.ルックマン『日常世界の構成 アイデンティティと社会の弁証法』、山口節郎訳、新曜社、1977年)
- Bertaux, D. (1997) *Les récits de vie*, Nathan. (D.ベルトール『ライフストーリー エスノ社会学的パースペクティブ』小林多寿子訳、ミネルヴァ書房、2003年)
- Blau, P.M. (1964) *Exchange and power in social life*, J. Wiley. (P.M.ブラウ『交換と権力 社会過程の弁証法社会学』間場寿一他訳、新曜社、1974年)
- Blumer, H. (1969) *Symbolic interactionism: perspective and method*, Prentice-Hall. (H.ブルーマー『シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法』、後藤将之訳、勁草書房、1991年)
- Bollnow, O.F. (1971) *Mensch und Raum*, W. Kohlhammer. (O.F.ボルノー『人間と空間』大塚恵一、池川健司、中村浩平訳、せりか書房、1978年)
- Bollnow, O.F. (1972) *Das Verhältnis zur Zeit: Ein Beitrag zur pädagogischen Anthropologie*, Quelle & Meyer Verlag Heidelberg. (O.F.ボルノー『時へのかかわり 時間の人間学的考察』森田孝訳、川島書店、1975年)
- Bourdieu, P. (1979) *La distinction : critique sociale du jugement*, Éditions de Minuit. (P.ブルデュー『ディスタシオン 社会的判断力批判』石井洋二郎訳、藤原書店、1990年)
- Bourdieu, P. (1980) *Le sens pratique*, Éditions de Minuit. (P.ブルデュー『実践感覚』今村仁司他訳、みすず書房、1988-1990年)
- Bourdieu, P., Wacquant, L.J.D. (1992) *Réponses : pour une anthropologie reflexive*, Seuil. (P.ブルデュー、L.J.D.ヴァカン『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』水島和則訳、藤原書店、2007年)

- Bridges, W. (2004) *Transitions : Making Sense Of Life's Changes*, Da Capo Press. (W.ブリッジス『トランジション 人生の転機を活かすために』倉光修、小林哲郎訳、パンローリング、2014年)
- Bronfenbrenner, U.(1979) *The Ecology of Human Development: Experiments by Nature and Design*, Harvard University Press. (U.ブロンフェンレンナー『人間発達の生態学 発達心理学への挑戦』磯貝芳郎、福富護訳、川島書店、1996年)
- Burt, R.S. (1992) *Structural holes : the social structure of competition*, Harvard University Press. (R.S.バート『競争の社会的構造 構造的空隙の理論』安田雪訳、新曜社、2006年)
- Calvo, R. A., Peters, D.(2014) *Positive computing : technology for wellbeing and human potential*, The MIT Press (R.A.カルヴォ、D.ピーターズ『ウェルビーイングの設計論 人がよりよく生きるための情報技術』木村千里他訳、ビー・エヌ・エヌ新社、2017年)
- Campbell, D.T., Stanley, J.C. (1963) 'Experimental and quasi-experimental designs for research on teaching', in Gage, N.L. (Ed.), *Handbook of research on teaching*, pp.171–246, Rand McNally.
- Casey, E.S. (1997) *The fate of place : a philosophical history*, University of California Press. (E.ケーシー『場所の運命 哲学における隠された歴史』江川隆男訳、新曜社、2008年)
- Charmaz, K. (2006) *Constructing grounded theory: a practical guide through qualitative analysis*, SAGE. (K.シャーマズ『グラウンデッド・セオリーの構築 社会構成主義からの挑戦』抱井尚子、末田清子監訳、ナカニシヤ出版、2008年)
- Chesters, G., Welsh, I. (2006) *Complexity and Social Movements : Multitudes at the Edge of Chaos*, Taylor & Francis Group.
- Choo, C.W., Bontis, N. (2002) *The strategic management of intellectual capital and organizational knowledge*, Oxford University Press.
- Christakis, N.A., Fowler, J.H. (2009) *Connected : How Your Friends' Friends' Friends Affect Everything You Feel, Think, and Do*, Little Brown & Company. (N.A.クリスタキス、J.H.ファウラー『つながり 社会的ネットワークの驚くべき力』講談社、2010年)
- Clifford, J., Marcus, G.E. (1986) *Writing culture : the poetics and politics of ethnography : a School of American Research advanced seminar*, University of California Press. (J.クリフォード、G.マーカス『文化を書く』春日直樹訳、紀伊國屋書店、1996年)
- Clifford, J. (1988) *The predicament of culture : twentieth-century ethnography, literature, and art*, Harvard University Press. (J.クリフォード『文化の窮状 二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信訳、人文書院、2003年)
- Cicourel, A.V., Knorr-Cetina, K. (1981) *Advances in Social Theory and Methodology: Towards an Integration of Micro- and Macro-sociologies*, Routledge.
- Cilliers, P. (1998) *Complexity and Postmodernism : Understanding Complex Systems*, Taylor & Francis Group.
- Cohen, A.P. (1985) *The symbolic construction of community*, Tavistock Publications. (A.P.コーエン『コミュニティは創られる』吉瀬雄一訳、八千代出版、2005年)

- Cooley, C.H. (1929) *Social Organization: a study of the larger mind*, Scribner. (C.H.クーリー『社会組織論 拡大する意識の研究』大橋幸、菊池美代志訳、青木書店、1970年)
- Cresswell, T. (2014) *Place : An Introduction* (2nd Edition), John Wiley & Sons Incorporated.
- Creswell, J.W., Plano Clark, V.L. (2007) *Designing & Conducting Mixed Methods Research*, Sage. (J.W.クレスウェル、V.L.プラノクラーク『人間科学のための混合研究法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房、2010年)
- Crossley, N. (1996) *Intersubjectivity : The Fabric of Social Becoming*, SAGE Publications. (N.クロスリー『間主観性と公共性 社会生成の現場』、西原和久訳、新泉社、2003年)
- Csikszentmihalyi, M. (1990) *Flow : the psychology of optimal experience*, Harper & Row. (M.チクセントミハイ『フロー体験 喜びの現象学』今村浩明訳、世界思想社、1996年)
- Csikszentmihalyi, M. (1997) *Creativity : flow and the psychology of discovery and invention*, Harper Perennial.
- 大坊郁夫編『社会心理学パースペクティブ』誠信書房、1989-1990年
- de Certeau, M. (1980) *L'Invention du Quotidien. Vol. 1, Arts de Faire*, Union générale d'éditions. (M.ド・セルトール『日常実践のポイエティック』山田登世子訳、国文社、1987年)
- de Certeau, M., Rendall, S.F. (2011) *The Practice of Everyday Life*, University of California Press.
- Delanty, G. (2003) *Community*, Routledge. (G.デランティ『コミュニティ : グローバル化と社会理論の変容』山之内靖、伊藤茂訳、NTT出版、2006年)
- Dépelteau, F. (2015) 'Relational sociology, pragmatism, transactions and social fields', *International Review of Sociology*, Vol.25(1), pp.45-64.
- Denzin, N.K., Lincoln, Y.S. (2000) *Handbook of qualitative research. 2nd ed.*, Sage. (N.K.デンジン、Y.S.リンカン『質的研究ハンドブック』、北大路書房、2006年)
- Drucker, P.F. (1990) *Managing the nonprofit organization*, Harper Collins. (P.F.ドラッカー『非営利組織の経営』上田惇生訳、ダイヤモンド社、2007年)
- Durkheim, É. (1926) *De la division du travail social*, F. Alcan. (E.デュルケム『社会分業論』井伊玄太郎訳、講談社、1989年)
- Dweck, C.S. (2008) *Mindset : the new psychology of success*, Ballantine Books.
- Easthope, G. (1974) *History of Social Research*, Prentice Hall Press. (G.イーストホープ『社会調査方法史』、阿久津昌三訳、慶応通信、1982年)
- 江上渉「コミュニティ問題と施策」、倉沢進『コミュニティ論』放送大学教育振興会、2002年
- Eisenhardt, K.M. (1989) 'Building Theories from Case Study Research', *The Academy of Management Review*, Vol.14 (4), pp.532-550.
- Eliade, M. (1957) *Das Heilige und das Profane: vom Wesen des Religiösen*, Rowohlt. (M.エリアーデ『聖と俗 宗教的なるものの本質について』風間敏夫訳、法政大学出版局、1969年)
- M.エリアーデ『エリアーデ著作集 5 鍛冶師と錬金術師』大室幹雄訳、せりか書房、1986年
- Elias, N., Scotson, J.L. (1965) *The established and the outsiders : a sociological enquiry into community problems*,

- Frank Cass. (N.エリアス、J.L.スコットソン『定着者と部外者 コミュニティの社会学』大平章訳、法政大学出版局、2009年)
- Ellis, A. (1956) *The Penny Universities : A History of the Coffee House*, Secker & Warburg.
- Emerson R.M., Fretz, R.I., Shaw, L.L. (1995) *Writing ethnographic fieldnotes*, University of Chicago Press. (R.エマーソン、R.フレッツ、L.ショウ『方法としてのフィールドノート 現地取材から物語作成まで』佐藤郁哉、好井裕明、山田富秋訳、新曜社、1998年)
- Emirbayer, M. (1997) 'Manifesto for a Relational Sociology', *American Journal of Sociology*, Vol.103(2), pp.281-317.
- エンパブリック、日本希望製作所編『まちの起業がどんどん生まれるコミュニティ ソンミサン・マウルの実践から学ぶ』日本希望製作所、2012年
- 延藤安弘「縁が輪をなすコミュニティづくりー『まちの縁側』は『新しい小さな公共空間』、『月刊福祉』 vol. 91 (2)、62-67頁、2008年
- Engeström, Y. (1987) *Learning by expanding: An Activity-Theoretical Approach to Developmental Research*, Orienta-Konsultit Oy. (Y.エンゲストローム『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』山住勝広訳、新曜社、1999年)
- Engeström, Y. (2008) *From teams to knots: Activity-Theoretical Studies of Collaboration and Learning at Work*, Cambridge University Press. (Y.エンゲストローム『ノットワークする活動理論 チームから結び目へ』山住勝広、山住勝利、蓮見二郎訳、新曜社、2013年)
- 柄本三代子、小村由香他『〈つながる/つながらない〉の社会学-個人化する時代のコミュニティのかたち』弘文堂、2014年
- Esposito, R. (2008) *Termini della politica*, Mimesis. (R.エスポジト『近代政治の脱構築 共同体・免疫・生政治』岡田温司訳、講談社、2009年)
- Etzioni, A. (2001) *Next : the road to the good society*, Basic Books. (A.エツィオーニ『ネクスト 善き社会への道』公共哲学センター訳、麗澤大学出版会、2005年)
- Flick, U. (2007) *An introduction to qualitative research*, SAGE. (U.フリック『質的研究入門 (人間の科学) のための方法論』春秋社、2011年)
- Fischer, C.S. (1982) *To dwell among friends: personal networks in town and city*, University of Chicago Press. (C.S.フィッシャー『友人のあいだで暮らす 北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』松本康、前田尚子訳、未来社、2002年)
- Florida, R. (2005) *The flight of the creative class: the new global competition for talent*, Harper Business. (R.フロリダ『クリエイティブ・クラスの世紀 新時代の国、都市、人材の条件』井口典夫訳、ダイヤモンド社、2007年)
- Florida, R. (2005) *Cities and the Creative Class*, Routledge. (R.フロリダ『クリエイティブ都市経済論 地域活性化の条件』小長谷一之訳、日本評論社、2010年)
- S.フロイト『フロイト全集 12 トーテムとタブー』新宮一成他編訳、岩波書店、2006年
- Gehl, J. (2010) *Cities for people*, Island Press. (Y.ゲール『人間の街 公共空間のデザイン』北原理雄訳、鹿島出版会、2014年)

- Garfinkel, H. (1967) *Studies in ethnomethodology*, Prentice-Hall. (H.ガーフィンケル『エスノメソドロロジー 社会科学の思考の解体』山田富秋他編訳、せりか書房、1987年)
- Gergen, K.J. (1994) *Realities and relationships: soundings in social construction*, Harvard University Press. (K.J.ガーゲン『社会構成主義の理論と実践 関係性が現実をつくる』永田素彦、深尾誠訳、ナカニシヤ出版、2004年)
- Gergen, K.J. (1999) *An invitation to social construction*, Sage. (K.J.ガーゲン『あなたへの社会構成主義』東村知子訳、ナカニシヤ出版、2004年)
- Geertz, C. (1973) *The interpretation of cultures*, Basic Books. (C.ギアーツ『文化の解釈学』吉田禎吾訳、岩波書店、1987年)
- Geertz, C. (1983) *Local knowledge: further essays in interpretive anthropology*, Basic Books. (C.ギアーツ『ローカル・ノレッジ 解釈人類学論集』梶原景昭訳、岩波書店、1999年)
- Geertz, C. (1988) *Works and lives: the anthropologist as author*, Stanford University Press. (C.ギアーツ『文化の読み方／書き方』森泉弘次訳、岩波書店、1996年)
- Giddens, A. (1990) *The consequences of modernity*, Polity Press in association with Basil Blackwell. (A.ギデンズ『近代とはいかなる時代か? モダニティの帰結』松尾精文、小幡正敏訳、而立書房、1993年)
- Giddens, A. (1998) *The third way: the renewal of social democracy*, Polity Press. (A.ギデンズ『第三の道 効率と公正の新たな同盟』佐和隆光訳、日本経済新聞社、1999年)
- 端信行、高島博編著『ボランティア経済とコミュニティ』白桃書房、2000年
- Glaser, B.G., Strauss, A. (1967) *Discovery of Grounded Theory. Strategies for Qualitative Research*, Aldine Publishing Company. (B.G.グレイザー、A.L.ストラウス『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』後藤隆、水野節夫、大出春江訳、新曜社、1996年)
- Goffman, E. (1959) *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company. (E.ゴッフマン『ゴッフマンの社会学1 行為と演技 日常生活における自己呈示』石黒毅訳、誠信書房、1974年)
- Goffman, E. (1961) *Encounters: two studies in the sociology of interaction*, The Bobbs-Merrill Company. (E.ゴッフマン『ゴッフマンの社会学2 出会い 相互行為の社会学』佐藤毅、折橋徹彦訳、誠信書房、1985年)
- Goffman, E. (1963) *Behavior in public places: notes on the social organization of gatherings*, Free Press of Glencoe. (E.ゴッフマン『ゴッフマンの社会学4 集まりの構造 新しい日常行動論を求めて』丸木恵祐、本名信行訳、誠信書房、1980年)
- Goffman, E. (1967) *Interaction ritual: essays on face-to-face behavior*, Pantheon Books. (E.ゴッフマン『儀礼としての相互行為 対面行動の社会学』広瀬英彦、安江孝司訳、法政大学出版局、1986年)
- 後藤俊夫編著『ファミリービジネス 知られざる実力と可能性』白桃書房、2012年
- Greenwood, D.J., Levin, M. (2006) *Introduction to Action Research: Social Research for Social Change*, SAGE Publications.
- Habermas, J. (1962) *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Luchterhand. (J.ハーバーマス『公共性の構造転換』細谷貞雄訳、未来社、1973年)
- Habermas, J. (1981) *Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp. (J.ハーバーマス『コミュニケーション的行動

- 為の理論』河上倫逸、M.フーブリヒト、平井俊彦訳、未來社、1985-1987年)
- 花田達朗『公共圏という名の社会空間 公共圏、メディア、市民社会』木鐸社、1996年
- 原岡一馬『人間の社会的形成と変容』ナカニシヤ出版、1993年
- Harvey, D. (1989) *The condition of postmodernity: an enquiry into the origins of cultural change*, Mass. (D.ハーヴェイ『ポストモダニティの条件』吉原直樹監訳、青木書店、1999年)
- 蓮見音彦、似田貝香門、矢澤澄子編『現代都市と地域形成 転換期とその社会形態』東京大学出版会、1997年
- Hatry, H.P. (1999) *Performance measurement: getting results*, Urban Institute Press. (H.P.ハトリー『政策評価入門 結果重視の業績測定』上野宏、上野真城子訳、東洋経済新報社、2004年)
- Healey, P. (2010) *Making Better Places: The Planning Project in the Twenty-First Century*, Palgrave Macmillan. (P.ヒーリー『メイキング・ベター・プレイス 場所の質を問う』村上佳代訳、鹿島出版会、2015年)
- 東島誠『<つながり>の精神史』講談社、2012年
- Hillery, G.A. (1955) 'Definitions of Community', *Rural Sociology*, Vol.20(2), pp.111-124.
- 平松闊他『社会ネットワークの研究・メソッド 「つながり」を調査する』ミネルヴァ書房、2010年
- 平竹耕三『コモンズとしての地域空間 共用の住まいづくりをめざして』コモンズ、2002年
- 広原盛明『日本型コミュニティ政策』晃洋書房、2011年
- 広井良典他編『コミュニティ 公共性・コモンズ・コミュニティアニズム』勁草書房、2010年
- 広井良典『協同で仕事をおこす 社会を変える生き方・働き方』コモンズ、2011年
- 久田邦明『子どもと若者の居場所』萌文社、2000年
- 久田邦明『生涯学習論 大人のための教育入門』現代書館、2010年
- 久繁哲之助『日本版スローシティ 地域固有の文化・風土を活かすまちづくり』学陽書房、2008年
- Hobbs, T. (1651) *Leviathan*. (T.ホブズ『リヴァイアサン』永井道雄、上田邦義訳、中央公論新社、2009年)
- Hochschild, A.R. (1983) *The managed heart: commercialization of human feeling*, University of California Press. (A.R.ホックシールド『管理される心 感情が商品になるとき』石川准、室伏垂希訳、世界思想社、2000年)
- 堀洋道監修『心理測定尺度集』サイエンス社、2001年
- 細野助博『コミュニティの政策デザイン 人口減少時代の再生ソリューション』中央大学出版部、2010年
- 細谷裕二「ジェイコブズの都市論 インノベーションは都市で生み出される」、『産業立地』2008年11月号、33-40頁、2008年
- 堀田力『「共助」のちから』実務教育出版、2014年
- Huxham, C., Vangen, S. (2005) *Managing to collaborate: the theory and practice of collaborative advantage*, Routledge.
- Ignatieff, M. (1984) *The needs of strangers*, Penguin Books. (M.イグナティエフ『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』添谷育志・金田耕一訳、風行社、1999年)
- 飯田美樹『caféから時代は創られる』いなほ書房、2009年
- 今村晴彦、園田紫乃、金子郁容『コミュニティのちから "遠慮がちな"ソーシャル・キャピタルの発見』慶應義塾大学出版会、2010年

- 乾亨、延藤安弘、藤田忍『活き活きとした人生』を創出する高齢者のための居場所づくり—イタリアの『社会センター』と日本の『まちの縁側』の比較研究』、『住宅総合研究財団研究論文集』 (33)、289-300 頁、2006 年
- Isaacs, W. (1999) *Dialogue: The Art Of Thinking Together*, Crown Business.
- 飯盛義徳『社会イノベータ』慶應義塾大学出版会、2009 年
- 飯盛義徳「地域づくりにおける効果的なプラットフォーム設計」、『日本情報経営学会誌』日本情報経営学会、Vol.34/3、3-10 頁、2014 年
- 飯盛義徳『地域づくりのプラットフォーム つながりをつくり、創発をうむ仕組みづくり』学芸出版社、2015 年
- 伊丹敬之『場のマネジメント：経営の新パラダイム』NTT 出版、1999 年
- 伊丹敬之『場の論理とマネジメント』東洋経済新報社、2005 年
- 伊藤義美編著『ヒューマニスティック・グループ・アプローチ』ナカニシヤ出版、2002 年
- 伊藤勇、徳川直人『相互行為の社会心理学』北樹出版、2002 年
- 伊藤禎浩他「小規模多機能施設の複合形態からみた居場所の形成に関する研究」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』E-1 分冊、209-210 頁、日本建築学会、2009 年
- 伊藤滋、林泰義『新時代の都市計画 2 市民社会とまちづくり』ぎょうせい、2000 年
- Jacobs, J. (1961) *The Death and Life of Great American Cities*, Random House. (J.ジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』、黒川紀章訳、鹿島出版会、1977 年)
- Jacobs, J. (1969) *The Economy of Cities*, Random House. (J.ジェイコブズ『都市の原理』中江利忠、加賀谷洋一訳、鹿島出版会、2011 年)
- C.ジャーメイン他著『エコロジカル・ソーシャルワーク カレル・ジャーメイン名論文集』小島蓉子編訳、学苑社、1992 年
- 金井壽宏『企業者ネットワークの世界 MIT とボストン近辺の企業者コミュニティの探求』白桃書房、1994 年
- 金子郁容『ボランティア経済の誕生 自発する経済とコミュニティ』実業之日本社、1998 年
- 金子郁容、鈴木寛、渋谷恭子『コミュニティ・スクール構想 学校を変革するために』岩波書店、2000 年
- 金子郁容『コミュニティ・ソリューション ボランティアな問題解決にむけて』岩波書店、2002 年
- 金子郁容、國領二郎、巖網林編『社会イノベータへの招待 「変化をつくる」人になる』慶應義塾大学出版会、2010 年
- 金光淳『社会ネットワーク分析の基礎 社会的関係資本論にむけて』勁草書房、2003 年
- 荻谷剛彦編『創造的コミュニティのデザイン 教育と文化の公共空間』有斐閣、2004 年
- Kawachi, I., Subramanian, S.V., Kim, D. (2008) *Social Capital and Health*, Springer. (I.カワチ、S.V.スブラマニアン、D.キム編『ソーシャル・キャピタルと健康』藤澤由和、高尾総司、濱野強監訳、日本評論社、2008 年)
- Kawachi, I., Takao, S., Subramanian, S.V. (2013) *Global perspectives on social capital and health*, Springer. (I.カワチ、高尾総司、S.V.スブラマニアン編『ソーシャル・キャピタルと健康政策 地域で活用するために』近藤克則、白井こころ、近藤尚己監訳、日本評論社、2013 年)
- 川上光彦『地方都市の再生戦略』学芸出版社、2013 年
- 川野健治、圓岡偉男、余語琢磨編『間主観性人間科学 他者・行為・物・環境の言説再構にむけて』言叢社、1999 年
- Kegan, R., Lahey, L.L. (2009) *Immunity to Change: How to Overcome It and Unlock the Potential in Yourself and*



- Your Organization*, Harvard Business Review Press. (R.キーガン、L.L.レイヒー『なぜ人と組織は変わらないのか ハーバード流自己変革の理論と実践』池村千秋訳、英治出版、2013年)
- 菊池理夫『現代のコミュニタリアニズムと「第三の道」』、風行社、2004年
- 菊盛英夫『芸芸サロン その多彩なヒロインたち』中央公論社、1979年
- Kim, D.H., Anderson, V. (1998) *Systems Archetype Basics: From Story to Structure*, Pegasus Communications. (D.キム、V.アンダーソン『システム・シンキングトレーニングブック 持続的成長を可能にする組織変革のための8つの問題解決思考法』宮川雅明、川瀬誠訳、日本能率協会マネジメントセンター、2002年)
- Kim, D.H. (2001) *Organizing for Learning: Strategies for Knowledge Creation and Enduring Change*, Pegasus Communications.
- 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂、2003年
- 岸政彦、石岡丈昇、丸山里美『質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学』有斐閣、2016年
- 小林多寿子編著『ライフストーリー・ガイドブック ひとがひとに会うために』嵯峨野書院、2010年
- 小林章夫『コーヒー・ハウス 18世紀ロンドン、都市の生活史』講談社、2000年。
- 小林康夫『身体と空間』筑摩書房、1995年
- 子どもの参画情報センター編『居場所づくりと社会つながり』萌文社、2004年
- 国民生活審議会調査部会編「コミュニティ生活の場における人間性の回復―」、1969年
- 國領二郎『創発経営のプラットフォーム 協働の情報基盤づくり』日本経済新聞出版社、2011年
- 小松尚他「地域住民の居場所となる交流の場の空間・運営・支援体制の状況 地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究 その1」、『日本建築学会計画系論文集』611号、67-74頁、日本建築学会、2007年
- 小谷良子他「地域社会活動団体における中枢活動層の地域感情と地域参画への主体要件」、『コミュニティ政策 2』、149-171頁、コミュニティ政策学会、2004年
- 久保紘章、副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル：心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店、2005年
- 釘原直樹『グループ・ダイナミクス 集団と群集の心理学』有斐閣、2011年
- 國上佳代他「多摩ニュータウン諏訪永山地区における高齢者の居場所の利用実態」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-1分冊、1495-1498頁、日本建築学会、2010年
- 倉持香苗「地域の居場所づくりにおけるネットワーク構築の可能性 大分県別府市におけるコミュニティカフェ実践から」、『コミュニティソーシャルワーク』第6号、54-59頁、日本地域福祉研究所、2010年
- 倉持香苗『コミュニティカフェと地域社会 支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践』明石書店、2014年
- 倉沢進「社会目標としてのコミュニティ」、『コミュニティ政策 6』、2008年
- Landry, C. (2000) *The creative city: a toolkit for urban innovators*, Earthscan. (C.ランドリー『創造的都市 都市再生のための道具箱』後藤和子監訳、日本評論社、2003年)
- Lave, J. (1988) *Cognition in practice : mind, mathematics, and culture in everyday life*, Cambridge University Press. (J.レイヴ『日常生活の認知行動 ひとは日常生活でどう計算し、実践するか』無藤隆他訳、新曜社、1995年)
- Lefebvre, H. (1974) *La Production de L'espace*, Anthropos. (H.ルフェーヴル『空間の生産』斎藤日出治訳、青木書店、

- 2000年)
- Lemaire, G. (1997) *les Cafés littéraires*, la Différence.
- Levinson, D.J. (1978) *The seasons of a man's life*, Ballantine Books. (D.レビンソン『ライフサイクルの心理学』、講談社、1992年)
- Lewin, K. (1935) *A dynamic theory of personality*, McGraw-Hill. (K.レヴィン『パーソナリティの力学説』相良守次、小川隆訳、岩波書店、1957年)
- Lewin, K. (1947) 'Frontiers in Group Dynamics', *Human Relations*, Vo.11, p.5-41.
- Lewin, K. (1947) 'Group Decision and Social Change', *Readings in Social Psychology*, Henry Holt and Company.
- Lewin, K. (1948) *Resolving social conflicts: selected papers on group dynamics*, Harper & Brothers. (K.レヴィン『社会的葛藤の解決 グループ・ダイナミクス論文集』末永俊郎訳、創元社、1954年)
- Lewin, K. (1952) *Field theory in social science: selected theoretical papers*, Harper. (K.レヴィン『社会科学における場の理論』猪股佐登留訳、誠信書房、1979年)
- Lin, N. (2001) *Social capital: a theory of social structure and action*, Cambridge University Press. (N.リン『ソーシャル・キャピタル 社会構造と行為の理論』筒井淳也訳、ミネルヴァ書房、2008年)
- Luhmann, N. (1984) *Soziale Systeme: Grundriss einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp. (N.ルーマン『社会システム理論』佐藤勉監訳、恒星社厚生閣、1993-1995年)
- Lyotard, J.F. (1979) *La condition postmoderne: rapport sur le savoir*, Éditions de Minuit. (J.F.リオタール『ポスト・モダンの条件 知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳、書肆風の薔薇、1986年)
- MacIver, R.M. (1924) *Community: a sociological study: being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life*, 3rd ed., Macmillan. (R.M.マッキーバー『コミュニティ 社会学的研究社会生活の性質と基本法則に関する一試論』、中久郎訳、ミネルヴァ書房、1981年)
- Malaterre, C. (2010) *Les origines de la vie: Emergence ou explication réductive ?*, Editions Hermann. (C.マラテール『生命起源論の科学哲学 創発か、還元的説明か』、佐藤直樹訳、みすず書房、2013年)
- Malinowski, B. (1948) *Magic, Science And Religion And Other Essays*, Beacon Press. (Malinowski, B. "Baloma; the Spirits of the Dead in the Trobriand Islands", *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, Volume 46, 1916.)
- 眞鍋貞樹『コミュニティ幻想を超えて 「善き居場所」の創造』、一藝社、2011年
- Marcus, G.E., Fischer, M.M.J. (1986) *Anthropology as cultural critique*, University of Chicago Press. (G.E.マーカス、M.M.J.フィッシャー『文化批判としての人類学 人間科学における実験的試み』永淵康之訳、紀伊国屋書店、1989年)
- 丸田一、國領二郎、公文俊平編著『地域情報化認識と設計』NTT出版、2006年
- Maslow, A.H. (1954) *Religions, values, and peak-experiences*, Kappa delta. (A.H.マズロー『創造的人間 宗教・価値・至高・経験』佐藤三郎、佐藤全弘訳、誠信書房、1972年)
- Maslow, A.H. (1954) *Motivation and personality*, Harper. (A.H.マズロー『人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ』小口忠彦訳、産業能率大学出版部、1987年)

- Maslow, A.H. (1998) *Maslow on Management*, John Wiley & Sons. (A.H.マズロー『完全なる経営』金井壽宏、大川修二訳、日本経済新聞社、2001年)
- 松原治郎『コミュニティの社会学』東京大学出版会、1978年
- 松野弘『地域社会形成の思想と論理 参加・協働・自治』ミネルヴァ書房、2004年
- Matthew, B., Miles, A., Huberman, M., Saldaña, J. (2014) *Qualitative data analysis: a methods sourcebook*, SAGE Publications.
- McNiff, J., Whitehead, A.J. (2009) *Doing and Writing Action Research*, SAGE Publications.
- Mead, G.H. (1934) *Mind, self & society from the standpoint of a social behaviorist*, University of Chicago Press. (G.H.ミード『精神・自我・社会』稲葉三千男訳、青木書店、1973年)
- Mill, J.S. (1859) *On liberty*, J.W. Parker and Son. (J.S.ミル『自由論』塩尻公明、木村健康訳、岩波書店、1971年)
- Mills, C.W. (1959) *The Sociological Imagination*, Oxford University Press. (C.W.ミルズ『社会学的想像力』鈴木広訳、紀伊國屋書店、1995年)
- Mitchell, K. E., Al Levin, S., Krumboltz, J. D. (1999) Planned happenstance: Constructing unexpected career opportunities, *Journal of counseling & Development*, 77(2), 115-124.
- 宮垣元『ヒューマンサービスと信頼 福祉NPOの理論と実証』慶應義塾大学出版会、2003年
- Moles, A.A., Rohmer-Mols, E. (1972) *Psychologie de l'espace*, Casterman. (A.A.モル、E.ロメル『空間の心理学』渡辺淳訳、法政大学出版局、1983年)
- 村上泰亮『文明としてのイエ社会』中央公論社、1979年
- 中道實、小谷良子『地域再生の担い手たち—地域住民・自治体職員・地方議会議員の実証分析』ナカニシヤ出版、2013年
- 中村久美「地域コミュニティとしての『ふれあい・いきいきサロン』の評価」、『日本家政学会誌』第60巻1号、25-37頁、2009年
- 中根千枝『タテ社会の力学』講談社、2009年
- 中野正大、宝月誠『シカゴ学派の社会学』世界思想社、2003年
- 中山康雄『共同性の現代哲学 心から社会へ』勁草書房、2004年
- 名和田是彦「コミュニティとコミュニティ・プラットフォーム」、『地方自治』(732)2-15頁、2008年
- 日本建築学会編『まちの居場所 まちの居場所をみつける／つくる』、東洋書店、2010年
- 日本都市センター『近隣自治の仕組みと近隣政府 多様で主体的なコミュニティの形成をめざして』、2004年
- 日本公民館学会『公民館・コミュニティ施設ハンドブック』エイデル研究所、2006年
- 新川達郎「地域活性化政策に関する市町村計画行政の課題と展望—東北地方の現状から—」同志社政策科学研究、Vol.3, No.1、1-13頁、2002年
- 新川達郎編『政策学入門 私たちの政策を考える』法律文化社、2013年
- 新川達郎編『京都の地域力再生と協働の実践』法律文化社、2013年
- 西田幾多郎『場所』(初版1926)、『西田幾多郎哲学論集』、岩波書店、1987-1989年
- 野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房、2006年

- 納富信留、溝口孝司編『空間へのパースペクティブ 九州大学「空間」プロジェクト』九州大学出版会、1999年
- Nisbet, R.A. (1953) *The quest for community: a study in the ethics of order and freedom*, Oxford University Press.  
(R.A.ニスベット『共同体の探究 自由と秩序の行方』安江孝司他訳、梓出版社、1986年)
- 似田貝香門『社会と疎外』世界書院、1984年
- 似田貝香門「現代社会の地域集団」、青井和夫監修『地域社会学』、サイエンス社、2005年
- NPO 法人東京シューレ『フリースクールとはなにか 子どもが創る・子どもと創る』教育史料出版会、2000年
- 大橋寿美子、志村結美「居住地域におけるもうひとつの居場所の形成 自宅開放事例にみる運営・使われ方実態調査から」、『湘北紀要』 vol. 34、223-230頁、2013年
- 大分大学福祉科学研究センター『コミュニティカフェの実態に関する調査結果』、2011年
- 岡田真美子編『地域をはぐくむネットワーク 歴史を活かす<縁>・未来を創る<絆>』昭和堂、2006年
- 奥田道大『都市コミュニティの理論』東京大学出版会、1983年
- 奥田道大『都市型社会のコミュニティ』勁草書房、1993年
- Oldenburg, R. (1999) *The great good place : cafés, coffee shops, bookstores, bars, hair salons, and other hangouts at the heart of a community*, Marlowe. (R.オルデンバーグ『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳、みすず書房、2013年)
- 長田政一、田所承己『〈つながる／つながらない〉の社会学』弘文堂、2014年
- Ostrom, V. and Bish, F.P. (1977) *Comparing urban service delivery systems: structure and performance*, Sage Publications.
- 大杉覚「大都市における都市内分権と地域機関」、『都市社会研究』Vol.1、2009年
- 大杉覚「人口減少時代における地方創生と『都市と地方』」、『都市社会研究』Vol.8、2016年
- 小滝敏之『市民社会と近隣自治 小さな自治から大きな未来へ』公人社、2007年
- 大塚久雄『共同体の基礎理論』岩波書店、2000年
- Park, R.E, Burgess, E.W., McKenzie, R.D (1925) *The city*, The University of Chicago Press. (R.E.パーク、E.W.パーゼス、R.D.マッケンジー『都市 人間生態学とコミュニティ論』大道安次郎、倉田和四生共訳、鹿島出版会、1972年)
- Parsons, T. (1937) *The structure of social action: a study in social theory with special reference to a group of recent European writers*, McGraw-Hill. (T.パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅、厚東洋輔訳、木鐸社、1974年)
- Perry, C.A. (1929) 'The Neighborhood Unit in Regional Survey of New York and Its Environs', *Neighborhood and Community Planning*, Vol.7-1. (C.A.ペリー『近隣住区論 新しいコミュニティ計画のために』倉田和四生訳、鹿島出版会、1975年)
- Plath, D.W. (1980) *Long engagements, maturity in modern Japan*, Stanford University Press. (D.W.ブラス『日本人の生き方 現代における成熟のドラマ』井上俊、杉野目康子訳、岩波書店、1985年)
- Polanyi, M. (1983) *The tacit dimension*, Peter Smith. (M.ポランニー『暗黙知の次元』高橋勇夫訳、筑摩書房、2003年)
- Popper, K.R. (1984) *Auf der Suche nach einer besseren Welt: Vorträge und Aufsätze aus dreissig Jahren*, Piper. (K.R.

- ポパー『よりよき世界を求めて』小河原誠、蔭山泰之訳、未来社、1995年)
- Poulet, G. (1949-1968) *Études sur le temps humain*, Plon. (G.プーレ『人間的時間の研究』井上究一郎他訳、筑摩書房、1969-1977年)
- Powell, C., Dépelteau, F. (2013) *Conceptualizing Relational Sociology: Ontological and Theoretical Issues*, Palgrave Macmillan.
- Prandini, R. (2015) 'Relational sociology: a well-defined sociological paradigm or a challenging 'relational turn' in sociology?', *International Review of Sociology*, Vol25(1), pp.1-14.
- Putnam, R.D. (1993) *Making democracy work: civic traditions in modern Italy*, Princeton University Press. (R.D. パットナム『哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造』河田潤一訳、NTT出版、2001年)
- Rawls, J. (1999) *A theory of justice, Rev. ed.* Belknap Press of Harvard University Press. (J.ロールズ『正義論』川本隆史、福間聡、神島裕子訳、紀伊國屋書店、2010年)
- Reason, P., Bradbury-Huang, H. (2007) *The SAGE Handbook of Action Research: Participative Inquiry and Practice*, SAGE Publications.
- Reeb, R.N. (2006) *Community Action Research: Benefits to Community Members and Service Providers*, Taylor and Francis.
- Relph, E. (1976) *Place and Placelessness*, Pion. (E.レルフ『場所の現象学 没場所性を越えて』高野岳彦、阿部隆、石山美也子訳、筑摩書房、1991年)
- Riesman, D. (1950) *The lonely crowd: a study of the changing American character*, Yale University Press. (D.リースマン『孤独な群衆』加藤秀俊、みすず書房、1965年)
- Rosaldo, R. (1989) *Culture and truth: the remaking of social analysis*, Beacon. (R.ロサルド『文化と真実 社会分析の再構築』、椎名美智訳、日本エディタースクール出版部、1998年)
- 佐伯啓思、柴山桂太編『現代社会論のキーワード 冷戦後世界を読み解く』ナカニシヤ出版、2009年
- 西條剛央『ライブ講義質的研究とは何か』新曜社、2007-2008年
- 戈木クレイグヒル滋子『実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ 現象をとらえる』新曜社、2008年
- 齋藤純『公共性』岩波書店、2000年
- 酒井直樹編『ナショナルリティの脱構築』柏書房、1996年
- 坂倉杏介「地域の居場所からのコミュニティづくり 芝の家の『中間的』で『小さい』グループ生成を事例に」、『慶應義塾大学日吉紀要社会科学』第21号、63-78頁、2011年
- 坂倉杏介「地域の居場所の成立過程に関する一考察 港区『芝の家』の取り組みを事例に」『地域福祉実践研究』第4号、55-70頁、2013年
- 坂倉杏介、保井俊之、白坂成功、前野隆司『『共同行為における自己実現の段階モデル』による『地域の居場所』の来場者の行動分析 東京都港区「芝の家」を事例に』『地域活性研究』Vol.4、23-30頁、2012年
- 坂倉杏介、保井俊之、白坂成功、前野隆司『『共同行為における自己実現の段階モデル』を用いた協創型地域づくり拠点の参加者の意識と行動変化の分析』、『地域活性研究』Vol.6、2015年
- 桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方、せりか書房、2002年

- 桜井洋『社会秩序の起源 「なる」ことの論理』、新曜社、2017年
- Sandel, M.J. (1984) 'The procedural republic and the unencumbered self', *Political Theory*, Vol.12 (1), pp.81-96.
- 佐藤郁哉『質的データ分析法 原理・方法・実践質的分析』新曜社、2008年
- 佐藤郁哉『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社、2002年
- 佐藤郁哉、山田真茂留『制度と文化 組織を動かす見えない力』日本経済新聞社、2004年
- 佐藤公俊『『組織化』の政策過程 住民自治組織が自治体政策過程に参画するシステムの形成に関する事例の比較分析』  
『地域政策研究』第11巻第1号、41-55頁、2008年
- サトウタツヤ、南博文『社会と場所の経験』東京大学出版会、2008年
- 佐藤友美子、土井勉、平塚伸治『つながりのコミュニティ 人と地域が「生きる」かたち』岩波書店、2011年
- 世古一穂『協働のデザイン パートナシップを拓く仕組みづくり、人づくり』学芸出版社、2001年
- Seligman, M.E.P. (2011) *Flourish: A New Understanding of Happiness, Well-being and How to Achieve Them*, Nicholas Brealey Publishing. (M.セリグマン『ポジティブ心理学の挑戦 “幸福”から“持続的幸福”へ』宇野カオリ訳、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2014年)
- Senge, P.M. (2006) *The fifth discipline: the art and practice of the learning organization*, Doubleday/Currency. (P.M.センゲ『学習する組織 システム思考で未来を創造する』枝廣淳子、小田理一郎、中小路佳代子訳、英治出版、2011年)
- 敷田麻実、森重昌之、中村壯一郎「中間システムの役割を持つ地域プラットフォームの必要性とその構造分析」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』(14)、23-42頁、2012年
- 清水博『生命知としての場の論理 柳生新陰流に見る共創の理』中央公論社、1996年
- 清水博、三輪敬之、久米是志、三宅美博『場と共創』NTT出版、2000年
- Simmel, G. (1908) *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot. (G.ジンメル『社会学 社会化の諸形式についての研究』居安正訳、白水社、1994年)
- Soja, E.W. (1989) *Postmodern geographies: the reassertion of space in critical social theory*, Verso. (E.W.ソジャ『ポストモダン地理学 批判的社会理論における空間の位相』加藤政洋他訳、青土社、2003年)
- Soja, E.W. (1996) *Thirdspace: Journeys to Los Angeles and Other Real-and-imagined Places*, Blackwell. (E.W.ソジャ『第三空間 ポストモダンの空間的転回』加藤政洋訳、青土社、2005年)
- Stoller, P., Olkes, C. (1987) *In sorcery's shadow: a memoir of apprenticeship among the Songhay of Niger*, University of Chicago Press.
- Stoller,P., Olkes,C. (1987) 'The ethnographic sensibility of the 1920s and the dualism of the anthropological tradition', *Romantic motives: Essays on anthropological sensibility*, University of Wisconsin Press.
- Ståhlbröst, A., Holst, M. (2012) *the Living Lab Methodology Handbook*, LuleGrafiska.
- Strauss, A.L. (1959) *Mirrors and masks : the search for identity*, The Free Press. (A.L.ストラウス『鏡と仮面 アイデンティティの社会心理学』片桐雅隆監訳、世界思想社、2001年)
- Stringer, E.T. (2014) *Action Research fourth edition*, SAGE Publications. (E.T.ストリンガー『アクション・リサーチ』目黒輝美、磯部卓三監訳、フィリア、2012年)

- 杉万俊夫『コミュニティのグループ・ダイナミックス』京都大学学術出版会、2006年
- 橘弘志「人と環境の関係をとらえ直す五つの視点」、『建築雑誌』120(1533)、16-17頁、一般社団法人日本建築学会、2005年
- 田島信元『共同行為としての学習・発達 社会文化的アプローチの視座』金子書房、2003年
- 高橋伸夫編『超企業・組織論 企業を超える組織のダイナミズム』有斐閣、2000年
- 武川正吾「戦後日本における地域社会計画の展開」蓮見音彦、似田貝香門、矢澤澄子編『現代都市と地域形成』東京大学出版会、187-215頁、1997年
- 竹井隆人『集合住宅と日本人 新たな「共同性」を求めて』平凡社、2007年
- 田村明『まちづくりの実践』岩波書店、1999年
- 田村正勝編著『ボランティア論 共生の理念と実践』ミネルヴァ書房、2009年
- 田中治彦、萩原建次郎『若者の居場所と参加 ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版社、2012年
- 田中重好『地域から生まれる公共性 公共性と共同性の交点』ミネルヴァ書房、2010年
- 田中康裕、鈴木毅、松原茂樹、奥俊信、木多道宏「コミュニティ・カフェにおける『開かれ』に関する考察 主（あるじ）の発言の分析を通して」、『日本建築学会計画系論文集』（614）、113-120頁、2007年
- 谷口隆一郎『コミュニティ政策研究の課題』三恵社、2010年
- 谷亮治「地域住民自治組織を活性化させる要件 上京区春日学区のケーススタディ」『立命館産業社会論集』第41巻第4号、2006年
- Taylor, C. (1994) 'The Politics of Recognition', *Multiculturalism*, Princeton University Press. (C.テイラー「承認をめぐる政治」、『マルチカルチュラリズム』岩波書店、1996年)
- Taylor, C. (2004) *Modern social imaginaries*, Duke University Press. (C.テイラー『近代 想像された社会の系譜』上野成利訳、岩波書店、2011年)
- 寺中作雄『公民館の建設 新しい町村の文化施設』社会教育連合会、1946年
- Tocqueville, A. (1835-1840) *De la démocratie en Amérique*, C. Gosselin. (A.トクヴィル『アメリカのデモクラシー』松本礼二訳、岩波書店、2005-2008年)
- 東京都公民館資料作成委員会編「新しい公民館像をめざして」、福尾武彦、千野陽一編『公民館入門』、日本図書センター、2001年
- Tönnies, F. (1887) *Gemeinschaft und Gesellschaft: Abhandlung des Communismus und des Socialismus als empirischer Culturformen*, Fues. (F.テンニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 純粋社会学の基本概念』杉之原寿一訳、岩波書店、1957年)
- Toulmin, S. (1990) *Cosmopolis: the hidden agenda of modernity*, Free Press. (S.トゥールミン『近代とは何か その隠されたアジェンダ』、藤村龍雄、新井浩子訳、法政大学出版局、2001年)
- Touraine, A. (1978) *La voix et le regard*, Seuil. (A.トゥレーヌ『声とまなざし 社会運動の社会学』梶田孝道訳、新泉社、2011年)
- 遠山亮子、野中郁次郎『『よい場』と革新的リーダーシップ 組織的知識創造についての試論』、『一橋ビジネスレビュー』48 夏秋号、1-13頁、2000年

- 外山義『自宅でない在宅 高齢者の生活空間論』医学書院、2003年
- 東洋大学福祉社会開発研究センター編集『地域におけるつながり・見守りのかたち 福祉社会の形成に向けて』中央法規出版、2011年
- 辻竜平、佐藤嘉倫編『ソーシャル・キャピタルと格差社会 幸福の計量社会学』東京大学出版会、2014年
- 鶴見和子『内発的発展論の展開』、筑摩書房、1996年
- Tuan, Y. (1974) *Topophilia: A study of Environmental Perception, Attitudes and Values*, Prentice-Hall. (Y.トゥアン『トポフィリア 人間と環境』小野有五、阿部一訳、せりか書房、1992年)
- Tuan, Y. (1977) *Space and place: the perspective of experience*, University of Minnesota Press. (Y.トゥアン『空間の経験 身体から都市へ』山本浩訳、筑摩書房、1988年)
- Tuan, Y. (1989) *Morality and Imagination: Paradoxes of Progress*, University of Wisconsin Press. (Y.トゥアン『モラルリティと想像力の文化史 進歩のパラドクス』山本浩訳、筑摩書房、1991年)
- Turner, V.W. (1969) *The ritual process: structure and anti-structure*, Routledge & K. Paul. (V.W.ターナー『儀礼の過程』富倉光雄訳、新思索社、1996年)
- Turner, V.W. (1974) *Dramas, fields, and metaphors: symbolic action in human society*, Cornell University Press. (V.W.ターナー『象徴と社会』梶原景昭訳、紀伊国屋書店 1981年)
- Turner, V.W., Bruner, E.M. (1986) *The Anthropology of experience*, University of Illinois Press.
- 内山研一『現場の学としてのアクションリサーチ：ソフトシステム方法論の日本的再構築』白桃書房、2007年
- 内山節『共同体の基礎理論』農山漁村文化協会、2015年
- 上野千鶴子「選べる縁・選べない縁」栗田靖之編『日本人の人間関係』、ドメス出版、1987年
- 上野千鶴子『「女縁」を生きた女たち』岩波書店、2008年
- 海野進『地域を経営するーガバメント,ガバナンスからマネジメントへ』同友館、2009年
- Urry, J. (1995) *Consuming places*, Routledge. (J.アーリー『場所を消費する』武田篤志他訳、法政大学出版、2003年)
- Vaitkus, S. (1991) *How is society possible?: intersubjectivity and the fiduciary attitude as problems of the social group in Mead, Gurwitsch, and Schutz*, Kluwer Academic Publishers. (S.ヴァイトクス『「間主観性」の社会学 ミード・グルヴィッチ・シュッツの現象学』西原和久他訳、新泉社、1996年)
- Vico, G. (1744) *Principj di scienza nuova di Giambattista Vico d'intorno alla comune natura delle nazioni*, Stamperia Muziana. (G.ヴィーコ『新しい学』上村忠男訳、法政大学出版局、2007-2008年)
- 和田崇、松波龍他『創発まちづくり 動く・繋がる・生まれる』学芸出版社、2005年
- Weber, M. (1922) *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der verstehenden Soziologie*, J.C.B. Mohr. (M.ヴェーバー『社会学の根本概念』清水幾太郎訳、岩波書店、1972年)
- Weber, M. (1920) *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Mohr Siebeck. (M.ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄、岩波書店、1989年)
- Weick, K.E. (1979) *The social psychology of organizing, 2d ed.*, Addison-Wesley. (K.E.ワイク『組織化の社会心理学』遠田雄志訳、文眞堂、1997年)
- Weick, K.E. (1995) *Sensemaking in organizations*, Sage Publications. (K.E.ワイク『センスメーカーイングインオーガニ



- ゼーションズ』遠田雄志、西本直人訳、文眞堂、2001年)
- Weisberg, R.W. (1986) *Creativity: genius and other myths*, W.H. Freeman. (R.ワイスバーグ『創造性の研究 つくられた天才神話』大浜幾久子訳、リクルート出版、1991年)
- Wenger, E., McDermott, R.A., Snyder, W. (2002) *Cultivating communities of practice: a guide to managing knowledge*, Harvard Business School Press. (E.ウエンガー、R.マクダーモット、W.スナイダー『コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』櫻井祐子訳、翔泳社、2002年)
- Whitehead, A.J., McNiff, J. (2008) *Action Research: Living Theory*, SAGE Publications.
- Whyte, W.F. (1943) *Street corner society: the social structure of an Italian slum*, University of Chicago Press. (W.F.ホホワイト『ストリート・コーナー・ソサエティ』奥田道大、有里典三訳、有斐閣、2000年)
- 山田晴義『地域コミュニティの支援戦略』ぎょうせい、2007年
- 山田富秋『日常性批判 シュッツ・ガーフィンケル・フォーコー』せりか書房、2000年
- 山倉健嗣『組織間関係 企業間ネットワークの変革に向けて』有斐閣、1993年
- 山下祐介「都市の創発性 都市的共同性のゆくえ」、金子勇編著『都市化とコミュニティの社会学』、ミネルヴァ書房、2001年
- 山浦晴男、『住民・行政・NPO 協働で進める 最新地域再生マニュアル』朝日新聞出版、2010年
- 山崎丈夫『地域コミュニティ論 地域分権への協働の構図』、自治体研究社、2009年
- 矢守克也『アクションリサーチ 実践する人間科学』新曜社、2010年
- 矢野智司『自己変容という物語 生成・贈与・教育』金子書房、2000年
- 保井俊之『「日本」の売り方 協創力が市場を制す』角川書店、2012年
- Yin, R.K. (2009) *Case Study Research: Design and Methods*, SAGE Publications.
- 吉田道雄『人間理解のグループ・ダイナミックス』ナカニシヤ出版、2001年
- 吉原直樹『都市空間の社会学理論 ニュー・アーバン・ソシオロジーの射程』東京大学出版会、1994年
- 吉原直樹『都市とモダニティの理論』東京大学出版会、2002年
- 吉原直樹『コミュニティ・スタディーズ 災害と復興、無縁化、ポスト成長の中で、新たな共生社会を展望する』作品社、2011年
- 吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー 東京・盛り場の社会学』弘文堂、1987年
- 湯浅魁男『コミュニティと文明 自発性・共同知・共同性の統合の論理』新評論、2000年
- 全国社会福祉協議会「ふれあい・いきいきサロン」のすすめ、2000年
- Znaniecki, F. (1934) *The Method of Sociology*. (F.ズナニエツキ『社会学の方法』、下田直春訳、新泉社、1971年)

## 謝辞

博士論文に取り組む決心をしたのは、2011年の秋。2008年に手探りで立ち上げた芝の家がようやく軌道に乗り、全国的にも様々な「居場所」に注目が集まりはじめた頃でした。また、東日本大震災を境にして、地域コミュニティの重要性が社会的に共有されつつあったこともあり、芝の家を企画し運営するなかで得られた経験を、それを必要としているかもしれない多くの人々に届けなければという使命感も後押しになりました。

塾の様々な先生方に相談し、翌年の秋に意を決して政策・メディア研究科に入学。しかし勤務しながらの研究は思い通りに捗ることはなく、結局論文を仕上げるまでに6年以上の月日が経過してしまいました。その間に、幸いにも東京都市大学に常勤の職を得るご縁をいただきましたが、その分さらに日々の業務に追われ、論文を書き進める時間がなくなってしまうという悪循環。ようやく論文の完成にこぎつけたいま、社会的な責任やお世話になった方からの期待で重くなってしまった宿題を、ようやく提出できたような安堵の気持ちを感じています。

本論文の執筆にあたっては、多くの方のご助力を賜りました。心からお礼申し上げます。

主査としてご指導いただいた飯盛義徳先生は、遅々として作業の進まない私をあたたく見守り、いつもの確なアドバイスをいただきました。博士論文のみならず、多くの教育や発表機会をいただけたことも含めて、心から感謝いたします。

そして、副査をご担当くださった國領二郎先生、金子郁容先生、宮垣元先生。厳しくもあり、しかし本研究の意義を深くご理解いただいた先生方のご指導には、いつも励まされました。この論文に、多少なりとも深みと社会的含意があるとすれば、主査・副査の先生方のアドバイスの賜物です。本当にありがとうございました。ご助言いただいたように、提出後は一般の方に届けられる書籍につなげていきたいと思えます。

また、本論文につながる研究、実践をご一緒いただき、その都度かけがえのないご支援をいただいた前野隆司先生、保井俊之先生、武山政直先生にも改めて感謝申し上げます。振り返ってみれば、慶應義塾で多くの先生方と様々な授業や研究プロジェクトをご一緒させていただいたことが、私の研究者としての重要な基盤になっています。ここにお名前を挙げられなかった先生方にも、心から感謝申し上げます。

実際の調査にあたっては、河田圭子さん、平木柳太郎さん、山口覚さんに多大なるご協力をいただきました。インタビューに応じてくださった参加者のみなさんには、大切なご経験をお話いただき、本当に感謝しています。本来ならばもう少し早く書き上げ、ご報告にうかがえればよかったのですが、みなさんの実践のエッセンスを少しでも言葉にできていたら幸いです。

ごお力添えいただき、改めて心から御礼申し上げます。

芝の家の場づくりをともにしてきたみなさんにも、心からお礼申し上げます。みなさんと一緒に作りあげてきた芝の家について論じ、みなさんのかけがえのない経験を研究者の立場で言語化していくことは重荷でもありましたが、ここでまとめた成果が、私たちがこれからつくっていく未来にもつながっていくことを楽しみにしています。本当にありがとうございました。

そして、両親・坂倉海彦さん、歳子さんには、40歳代になっても相変わらず心配をかける頼りない息子ですが、それでも辛抱強く見守ってくださり、ありがとうございました。執筆の間、両親以上に気をかけてくださり、様々な面で支えてくださった叔母と叔父・中川美代子さん、坂倉敏さんにも、深く感謝いたします。

最後に、妻・亮子には、どれだけ感謝してもしきれません。彼女の存在なしには、論文を書き始めることも、書き上げることはできませんでした。まだ北鎌倉に住んでいた頃でしたが、博士課程に進みたいという想いを打ち明けた時、即座に力強く、応援すると言ってくれました。その言葉に、どれだけ勇気付けられたかわかりません。その後6年間、年末年始とゴールデンウィークとお盆のたびに机にかじりつく私をあたたく見守ってくれたこと、本当に感謝しています。これまで支えてくれて、本当にありがとう。

2019年1月

坂倉杏介

